

弓塚さつきの奮闘記

第三帝国

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「さっちゃんとか、どう見ても死亡フラグです。本当にありがとうございました。」

『弓塚さつき』として暮らしていた憑依者は全てを思い出した時思わずこう呟いた。

型月名物幸運Eな不幸キャラとして生きていた憑依者は死亡フラグ満載な月姫世界をどう生き残るか？

訪れるであろう運命にどう立ち向かうか!?

真祖の吸血鬼、代行者、混血がひしめく街に彼女は一体どのようなバタフライエフェクトを与えるだろうか!!

お楽しみに!!

目次

第1話「始まり」	1	第1話「参戦と再会」	141
第2話「運命へ」	15	第2話「現在と過去」	158
第3話「運命の始まり」	31	第3話「過去と未来」	179
第4話「それぞれの行動」	47	第4話「対峙」	194
第5話「遭遇と再会」	61	第5話「対峙Ⅱ」	207
第6話「回想と後悔」	75	第6話「吸血鬼」	219
第7話「それぞれの思惑」	87	第7話「吸血鬼Ⅱ」	235
第8話「それぞれの思惑Ⅱ」	102	第8話「直死の魔眼」	248
第9話「それぞれの思惑Ⅲ」	115	第9話「ロア」	262
第10話「それぞれの思惑Ⅳ」	127	第20話「終幕」	272
		第21話「可能性未来」(完結)	286
		外伝「奮闘記的アーネンエルベの一日」	

Y B L O O D 編	弓塚さつきの奮闘記〜M E L T	425
午後12:30	弓塚さつきの奮闘記〜M E L T Y B L	411
午後12:15		399
正午12:00		386
午前11:25		371
午前10:53		360
午前10:30		349
午前10:05		337
午前9:23		326
午前9:03		313

A C T.	1 「胎動」	567
A C T.	1 2 「雑話」	558
A C T.	1 1 「会話」	545
A C T.	1 0 「憂鬱」	536
A C T.	9 「対立」	526
A C T.	8 「夜明け」	514
A C T.	7 「敗北」	503
A C T.	6 「シオン」	494
A C T.	5 「原因」	482
A C T.	4 「休息」	470
A C T.	3 「闘争」	457
A C T.	2 「見敵」	442
A C T.	1 「冬の噂」	431

A C T. 1 4 「蹂躪」

A C T. 1 5 「昔話」

令月余話

乾有彦ノ章

598

582 573

第1話「始まり」

諸君、私はウェブ小説が好きだ。

諸君、私はウェブ小説が大好きだ。

諸君、私はウェブ小説を愛している。

な〇うが好きだ 理想郷が好きだ はてな〇ンテナが好きだ

ハー〇ルンが好きだ シル〇エニアが好きだ にじファンが好きだ

裏道〇道が好きだ S S速報が好きだ 帝国諜報局が好きだ

自宅で 通勤途中で

勤め先で 学校で

病院で 駅で

車で 飛行機で

飲食店で 電車で

この地上で行われる ありとあらゆる場所で読むウェブ小説が大好きだ
もしもの展開で新たに始まる物語が好きだ

原作では救われなかったキャラが救われた時など心がおどる

アンチキャラを撃破するのが好きだ

悲鳴を上げて 許しを請い、

オリ主もDANZAIでなぎ倒した時など胸がすくような気持ちだった

チートオリ主が原作の世界を蹂躪するのが好きだ

恐慌状態の原作ファンが既に自分だけの世界に浸っている作者を何度も何度も罵倒している様など感動すら覚える

世界観設定の甘さを吊るし上げていく様などはもうたまらない

泣き叫ぶ作者が 読者の情けない突っ込みとともに

金切り声を上げる言葉のシユマイザーにSSをばたばたと辞めるのも最高だ

哀れな作者が 稚拙なSSながらも健気にも連載していたのを

ひたすらアンチし作者の心を木端微塵に粉碎すさまなど絶頂すら覚える

アンチに感想覧を滅茶苦茶にされるのが好きだ

必死に書いたSSが蹂躪され 心が犯され殺されていく様は とてもとても悲しいものだ

世界観に押し潰されて殲滅されるのが好きだ

信者に追いまわされ 害虫の様に地べたを這い回るのは屈辱の極みだ

諸君 私はウェブ小説を 万人が納得できるSSを望んでいる

諸君 私に付き従うウェブ作家諸君

君達は一体 何を望んでいる？

更なるSSを望むか？

情け容赦のない 糞の様なウェブ小説を望むか？

鉄風雷火の限りを尽くし 三千世界の鴉を萌え殺す嵐の様な小説を望むか？

「SS!! SS!! SS!!」

よろしい、ならばSSだ

我々は満身の力をこめて今まさに振り下ろさんとする握り拳だ

だがこの暗い闇の底で幾年もの間 堪え続けてきた我々に ただのSSでは、ウェブ

小説ではもはや足りない!!

ウェブ小説を!! 一心不乱のSSを!!

我らはラノベ作者にもなれない半端なもの。凡庸なオタクにすぎない

だが諸君は一騎当千の古強者だと私は信仰している

ならば我らは諸君と私で総兵力100万と1人の紳士集団となる

我々を忘却の彼方へと追いやり眠りこけている連中を叩き起こそう

髪の毛をつかんで引きずり降ろしパソコンを開けさせ思い出させよう

連中に恐怖の味を思い出させてやる

連中に我々のSSを思い出させてやる

現実と電子世界のはざまには

奴らの哲学では思いもよらない小説があることを思い出させてやる
ネットに漂う名もなきオタクの紳士集団で世界を萌え尽くしてやる

「上級紳士より全紳士へ」

—— 状況を開始せよ、征くぞ諸君

「などとそんな風に言える状況であったならば。どれほどよかっただろうか」

朝日が差し込む廊下の窓際で思わずため息をつく。

こんな行為などごくごく当たり前の動作に過ぎないが、

窓に映った姿が否応なく変わってしまったのを自覚せざるを得ない。

ツインテールでまとめた茶色っぽい髪。

憂鬱そうな表情をしているが、可愛らしい顔であることに間違いない少女。
服装は青いリボンを首元に締め、黄色いセーターを羽織っており。

どう見ても型月名物幸運Eのランサー兄貴とならぶアンラックキャラ、弓塚さつきであつた。

「はあ…」

どうしてこうなつたかは未だわからない。

よくこうした憑依転生系では転生トラックに自称KAMIやらの悪戯がデフォだが。生憎そのような展開はなく、徐々に思い出す形で気付いたらこうなつていた。

完全に思い出したときのボクの反応は『ひゃつはー！！憑依だあー！！』とはならず。

「さっちんとか、どう見ても死亡フラグです。本当にありがとうございました。」

と頭を抱えて一晩ほど悩んだが、

フラグが立たないように原作開始時には外出を控えればいいこと気付き。

以後、なぜか中学から同じクラスの遠野志貴、志貴とダラダラとつるみつつ今日にいたるのだが。

「おや、こちらにいましたか。おはようございます弓塚さん。」

「おはようございます『シエル先輩』」

黒髪的眼鏡をかけた『先輩』に挨拶する。

今まで留学生などいなかったはずだが、不思議なことに違和感を感じない。

始め『先輩』と挨拶した時に思わず「なんで青髪じゃないんですか？」と聞きそうになつたが。

よくよく考えてみれば自分のやや茶髪な髪はともかく、

青髪や桃色の髪など二次元的表現の一つにすぎないことに遅まきながら気付かされた。

だがそれより問題は『シエル』という名前は間違はなく本編の開始というわけであり。

最近「体内の血を抜かれた殺人事件」がニュースで流れていたので用心して、

夜外に歩かないようにしていたが、どうやら前世の記憶通りであり死亡フラグ回避的に成功しているようだ。

「遠野君はまだかな？」

「たぶんもうすぐですよ、志貴はいつも遅いですからね。」

「そうですね……。」

中学のころ男女の体格差があつたにも関わらず、

高校と比べれば体力がまだまだなかつたせいかしよつちゆう倒れ。

当時自分が保険委員長であったためよく、彼を背負って保健室に放り込んだものである。

そのため、彼との間に『名前を呼ぶ』というフラグが立ったが今の所恋愛フラグない、
というか立つはずがない。

たあまあーにドキツとされるがニコほなどTS系ヒロインには効かない・・・はずだ。
「やっぱ早く来すぎましたねー」

と、シエル先輩が言いつつ窓から顔を出す。

体をひねるさい胸が強調するように突き出て、

つい凝視してしまうのは女性の身になってもやむえないはずだ。

「どうしましたか?」

「いえ、なんでもありません。」

あやうく「バストサイズはいくつですか?」と聞きそうになった。

しかし、フランス人だからやっぱり胸が大きいのだろうか?

「それより志貴が来ましたよ。」

「あ、そうですね。チャオー。」

なにか放っておけない後輩に対して嬉しそうに手を振る。

志貴も不思議そうに首をかしげつつも挨拶代りに軽く手を振った。

「じゃ、先輩。そろそろお先に失礼します。」

「お疲れ様、お昼にまた会いましょう。」

「はい！」

『また』昼に会う約束をして軽く頭を下げ、教室へ向かう。

今日も『いつも通りに』有彦と志貴を加えて4人で一緒に食堂で食べる事になった。

それにしてもあるはずのない植えられた記憶と知ってはいるが、

実に奇妙なものだなど回想しつつボクは教室へと急いだ。

「ここまでは、原作通りか。」

時間は飛び、夕暮れの街中を歩きながらぼつりと呟く。

あの後しばらくして教室で志貴が貧血で倒れ、早退していった

もし忠実に原作通りなら三咲自然公園でアルクウエイドを17分割しているだろう。

だが、この時間帯はすでに遅いのでたぶん今頃遠野邸に回収されたか公園で気絶した

ままかもしれない。

「君子危うきに近寄らず、買い物を済ませたし、手早く帰りますか。」

買い物袋をガサガサと揺らしながら帰路へ急ぐ。

付近に小さいころよく行った例の公園があり、興味をそえられることは確かなのだが無視する。

ここで何か介入するのが憑依者の特権なのだが、生憎ボクはその気はない。

ぶつちやけ言うと自分はチキンですし、火中の栗を拾う勇気なんてないので悪しからず。

あれ？

「きゃっ!!」

「あた!!」

少しばかり考えこんでいたせいで人にぶつかってしまった。

こちらはどうとことはないのだが相手は派手に転び悲鳴を上げた。

頭思いつきりぶつけたけど……大丈夫かな。

「あ、す、すみま……」

慰謝料や賠償金という単語がぐるぐる頭の中で回転しつつも

まず先に「すみません」と言おうとしたが、言い終える前に絶句してしまった。

まるで黄金のような髪、

意識がないためうつすら半眼になっていても分る、人外の証であるどこまでも深い紅の瞳。

そして外見、正面から彼女を見ているわけでもないにもかかわらず、理想的な美女であることが分かり、存在の全てにおいて完結にして完璧で「人であつて人でない」人物。

アルクエイド・ブリュンスタッドがそこにいたからだ。

いやなんで……。いやそもそも前方から来たから分かるはずなのに。

予想外にも程がある事態に思わずパニックに陥る。

前々から疑問に感じてはいたが無意識に認識障害の術でも使っていたのだろうか？

冷静によく周囲を見れば十人中十人は思わず振り向いてしまいそうなくらい美人さんにも関わらず周りの人間はまるでこちらの存在に気ついていない。

おまけに志貴に分割されたせいで随分弱っているようで肝心な彼女はうんともすんとも反応がなさそうだ。

放置していくわけには……。……。いかないだろうね。

「なんでかい」

ふと、某主夫の口癖をのたまつてしまふ。

交番に預けようにも見える範囲内にはないので、

ひとまず公園に連れていけばいいのかな、さすがに家は遠いし。

「よう、」

相変わらずぐつたりしているが肩を担ぎ、引きずるように運ぶ。

買い物の荷物と合わせて運んでいるせいで運べないことはないが、ややきつい。

でも一つだけ役得な点はある。

おつきい、さすが88のオパーイ

時々重心を変更するために持ち方を変えるのだが、その際に好きなだけその胸部装甲を堪能できた。

直接手で触れているわけでないが、今は同性だろうがこつそり堪能させていただく。

というよりこのくらいの報酬はあつて欲しい、主にボクのに。

「うーん、ハイハイ。」

「あの、起きましたか?」

あれから約10分、ベンチで寝かしているお姫様がようやく起きたみたいだ。

ボクはというと、傍で暗くなりつつある景色を内心びくびくしながら待機していたけ

ど、

思ったよりはやく目覚めてくれて正直助かりましたよ、ええ。

時々こつちによつて来る猫やカラスが全て教授の使い魔かもしれないと思い、さつさと逃げればいいのにと考えてはいたが、つつい律儀に目覚めるの待つてしまひ今に至る。

「すみません、ちよつとぼんやりしていたものですからぶつかつてしまい。」

「え？あ、あれね。いーの、いーの。私も少しぼーつとしていたし。」

あははは、とあつげらかに笑う。

彼女程の絶世の美人がこうもフレンドリーに話されると何か、こう色々魂がぶつ飛んでしまう。

同性でも思わずクラリと来てしまいそうだ。

「ちよつとバラバラにされちゃったから調子が悪くつて。」

「はあ…」

何気に「バラバラにされた」と不穏な事をのたまっているが無視だ、無視。

「でも、貴女も気も付けてね、最近ぶつそうだし。」

「いや貴方みたいにバラバラにされる要素はないですから。」

「それもそうね」

このまま会話をしてみたいという欲望にかられるが、時間を見れば既に6時を回っていた。

夜間外出はボクにとって死亡フラグなので急いで帰らせてもらおうとする。「すみません、そろそろ帰るので。」

「あつそう、一般人は危険だし早く帰った方がいいから。」

笑顔で答えるが志貴にやられた傷が痛むのか脇腹を押えている。

後、紅の瞳が暗くなるにつれ動物のように光っており、何だが怖い。

「バイバイ」

それでも、わざわざ手まで振って見送ってくれた。

知っているとはいえ、まさかあれが吸血鬼だなんて何だが信じられない。

だが、今後の展開によっては恐らく二度と会えないだろう。

そしてこの貴重な出会いもいつかは忘れてしまうかもしれない。

けど・・・

「もう一度会えたら面白そうだな。」

かつて遠野志貴と『原作キャラ』としてでなく、『この世界に生きる者』として友達になれたように。

彼女と話し合える日が来たらどんなに素晴らしいことだろうか。

そう思いつつ、既に暗くなりつつある公園を振り返り正直な感想を呟いた。

第2話「運命へ」

あれから一晩が経過した。

あの後大人しく自宅に帰ったおかげかいつもの日常を無事に過ごせた。

夜7時のニュースと新聞では現代の吸血鬼事件がにぎわせていたのが、

まだ死亡フラグが健在であることを証明し、表向き親と最近物騒だねーなどと人ごとのように話していたけど。

チキンハートな自分として内心はビビっていました。

しかし、ニュースや新聞を読んだ所生存フラグへの希望をボクはついに見つけた。

報道によると事件の発生現場は大抵繁華街の路地に裏道といった場所であり、今住んでいる住宅街では一件も発生していない。

考えて見れば型月世界の神秘の秘匿とは『別に一般人を殺してもいいよ、でも限度は守ってね。それ以外は基本表に出さなきゃおK』

な感じで聖堂教会を例外に魔術師的外道を積極的に討伐しているとはいいいがたく。

実に一般人にとって優しくない仕様であるが、逆にここまで報道されてしまえば神秘秘匿のために容赦なく殲滅することに躊躇しない。

よって、ここまでしでかしたロアが少しでも理性的なら生存のために身を隠す必要があり。

吸血行為も第四次聖杯戦争でキャスターたちが家に押し入ってまでする真似はせず、繁華街でゲリラ的にするにとどまるはずだ。

以上からボクの死亡フラグ回避の道は

『夕方の中に帰る』

『繁華街に寄らない』

『夜は出かけない』

これらを守るだけで十分だ。

いやーよかったよかった、これで一安心。

それに長年の懸念が晴れたせいも、身体が軽い…気分は初めてだ。もう、何も怖くない。

…む、曲がり角にいるあの後ろ姿は志貴か。

ちょうどいい、この清々しい気分を挨拶と共に彼に表現しよう。

「おはよう!!志…」

「う、うわあああああ——!!!」

「え、ええええ!?!」

元気よく朝の挨拶をしたとたん、

志貴はなぜか悲鳴を上げて鞆すら持たずに学校の方向へと走り去った。

解せぬ。

む、というか道の角からこちら側に出て来たあの金髪の人って。

「むー、余計な手間を取らせてー。あ、貴女は。」

「……どうも、お早うございます。」

やつほー、と手を振って来たのでこちらも挨拶する。

どうやら志貴といい、乾といい。自分は運が悪いのか良いのか良く分からないが、

原作キャラとの邂逅フラグが立ちやすく、今度は真祖の姫様と邂逅フラグが立ってし

まったようだ。

「ねえ、あなた。あの殺人鬼の知り合い？」

しかも開口一口目に原作イベントについて聞かれた。

整いすぎた顔から表現された表情は『好奇心』といった所だろうか、こちらの顔を覗きこむ。

「えーと、少なくとも志貴とはただの友人で殺人鬼なんてぶっそんな人物ではないですけど」

「……ふーん、へー、そうなんだー」

起こるであろう真実を話すわけにいかず当たり障りのない事実を述べたが、吸血鬼は朱色の瞳をスツと半眼にし、じろじろとボクを品定めするがごとく見つめる。

志貴によつて得た感情で表現されるのは『猜疑』といったところだろうか。

アレ、これは：：もしかして地雷を踏み抜いた？

こつちが『嘘は言つてないが事実を言つてない』なマーボー神父な発言だと見破られた？

まさか本当の事を言つてないから好感度低下、真祖による死亡フラグが成立・・・な、わけないよね、ね？

「ま、いいわ。それよりこれ、忘れて行ったから渡しておいてね。」

こちらの不安を余所にそう言いパツと離れると、

はい、と鞆をこちらに渡しさっさとその場から立ち去ろうとした。

・・・よかった、死亡フラグは立たなかったようだ。

後日、ルート分岐でここの好感フラグがなかったせいでタイガー道場行きにならないと言えないが。

「あ、あと。」

くるりとこちらに振り向き。

紫色のスカートが花のように広がり、収まる。

見返る美人というべきか、一瞬二次嫁が三次になってもこんなに素晴らしいのかと感動したが、相手は向日葵のような笑顔で。

「私を殺した責任とつてもらうんだからね、つて伝えておいてね。」

などと物騒極まりないことをのたまった。

そんな感じで登校中に原作キャラと遭遇し、

彼女との約束を守るべく学校についてからさっそく志貴の元に向かった。

彼女と話し込んだせいで学校についての話がギリギリだったが、

志貴は授業のために教室に待機しており、却って手間が省けたかもしれない。

「……………」

問題があるとすれば、恐らく。

と、いうよりどう考えても真祖の姫に遭遇したせいで、

なんだが話しにくい空気を纏っており、どのように話を始めるべきか分らない。

いや、漢は度胸だ。

あ、今はぴちぴちのJKだがここは度胸だ。

うむ、空気を読まずに話しかけてみよう。

「志貴……」

「うわああああ!!」

「うお!!?」

こっちの予想に反して随分と反応してきた。

いきなり叫ばれたので思わずびっくりしてしまった。

まあ、それより、

「志貴、鞆。道端に落ちていたから拾っておいた。」

「あ、あああ……」

顔が青ざめたままおそるおそると鞆を受け取る。

「ところで、志貴」

「なんだ弓塚?」

「金髪赤眼の女性が『責任とってもらうんだからね』とか言ってたけどあれはなんだ?」

志貴は聞いた瞬間さらに顔が真っ青になった。

貧血で倒れることもあるから慣れているとはいえ、リアルで血の気が引く顔は見てて面白くない。

はあ、そうだな。

これ以上朝からシリアスなのは嫌なので…。

「まさか・・・金髪巨乳ヒロインをゲットしたのか？」

「なんでさ!!」

軽ーい、冗談を言ったおかげか先ほどまでの憂鬱な空気が取り払われた。

でも傍で聞き耳を立てていた奴、なんだかんだと中学以来の付き合いがある乾有彦にはばつちり聞こえたようである。

「おい遠野！今のどーいう事だ！説明しやがれこの〜。」

「まて有彦、説明って…!?!」

このこの、と志貴の首をじゃれあうように軽く締め付け。

それに志貴が反論するなどいつものごとく、二人仲良くわいわいと騒いでいる。

うむ、志貴が先ほどまで纏っていた暗い空気は取れたようでよかった、よかった。

『あー、そこのお前ら3人。仲がいいのはいいが授業を始めるぞー』

などと2人を観察していたがここで第三者の介入。

担任のやる気のない声がホームルームの始まりを告げた。

むう、もうそんな時間か。

では何時もの日常に戻るとしよう。

午前の授業が終わり、

がやがやと騒がしくなった教室を後にし。

さっそく『いつも通り』シエル先輩と食堂で昼食を食べに行く。

その間有彦が先輩に積極的にアプローチし、

先輩が軽く流すなどこれまた『何時もの日常』が演出された。

「シエル先輩、カレーが好きなのですね。」

「ええ、それはもう。」

「先輩、ささ、どうぞ。こちらっすよ。」

ボケつと窓の外を見る志貴と、予め有彦が確保してくれた席へ座る。

隣の席にシエル先輩を誘導させるのは無駄に抜け目ない行動と言える。

「なあ、二人ともこの先輩と知り合いなのか？」

「はあ、おいおい、遠野。朝といい今日は貧血が一段と酷いな。」

「酷いです!!遠野君はもしかして私のこと忘れちゃったんですか?」

あれ?なんて首を傾げる志貴を横目で見ながら手早く蕎麦を啜る。

シエル先輩はガタリ、と立ち上がりウルウルとした瞳で志貴の眼を上目で覗きこむ。

女性にまじかに見つめられてややたじろぎ。

「すみません、どうも自分は忘れっぽくて」

「もう、しかたがないですね」

今度は忘れないでくださいね、と言い再度食事に戻った。

一連の動きは全く特別な意味のある動作でなかったが、こっそり注視していたボクは。

先輩の眼が一瞬だけ光ったような気がした。これもまた原作通りと言うべきか、今は志貴に偽の記憶を埋め込んだのだろう。

そして、次に起こるであろう原作のイベントは、

『ニュースです。本日明朝——河原で一連の連続殺人事件と思われる死体が発見されました——』

テレビから流れた音声にボクらだけでなく食堂にいた全員が注目する。

それによるとまたもや全身から血が抜かれたらしく、食堂はヒソヒソとその話題について交わされる。

また視線を正面のシエル先輩にずらすと、顔は普通だが眼がなんとなく鋭い輝きを放っている。

一方、志貴は『殺人』の言葉に反応し、椅子から立ち上がり嫌な汗が出ていた。

「おい、遠野またどうした？ま、それよりぶっそうだなおい、夜遊びできねーじゃないか。」

一人空気を読まずに呑気にのたまう人物がいるが、ある意味これも普通の反応かもしれない。

「なあ、弓塚」

「なんだ？」

志貴の不安交じりの問いに蕎麦を食べ終え、お冷やしを軽く含んでからに答える。

「弓塚が見たのは金髪赤目の女性だったんだよな？」

念入りに、自分が殺人を犯した揚句。

相手が復活した現実を確認したいのか朝の件について聞いてきた。

否定したい気持ちは分るが、というか自分がもし志貴だったら同じことをするだろう。

が、事実は事実ゆえに。

それにここで否定した所で意味はないので事実を述べた。

「そうだけど？それがどうした。」

「いや、なんでもない……悪い、俺は先に戻ってくる。」

殺してしまった人が生きている可能性に相当シヨックを受けたみたいで、

そう言うなり頭を押さえ、ふらつきながら教室へ行つてしまった。

「大丈夫か、アイツ？」

何時もの事だけどよー、とぼやきつつ志貴を見送る。

シエル先輩は……あれ、なんかボクに対して妙に怖い顔をしていたような。

「シエル先輩？」

「へ？あ、な、何でもないですよ。」

それより弓塚さんが見た女性とは金髪赤眼の方なんですよね？

その方と、弓塚さんはどういう風に会ったのか聞かせてもらえませんか？」

『先輩らしい』口調で朝の出会いについて聞かれる。

が、表情こそ『噂に興味津々な』女学生らしいが内容が内容だけにやっぱり眼が笑つ

ていない。

「なんだか、朝といいまた妙なフラグが立ったのでなく地雷な意味で踏み抜いた気分だ。」

「ええ、志貴が通学途中鞆を落としたらしく、

それを拾った女性がボクに自分の代わりに渡すように頼まれたのです」

「そうですか・・・ありがとうございます、弓塚さん」

先輩はボクの発言を聞いて、表面上納得したようだが納得していないようだ。

まあ、あらかじめ知っている自分は兎も角。

真祖の姫は基本ガイアの戦闘マシーンゆえに感情的な行動などない。

と、というのが裏の業界の常識ゆえにだろう。

「先輩、それよりも昼休みも終わりそうですし。はやく出ましょう」

「おっと、もうこんな時間ですか。ええ、そうしましょう」

これ幸いとばかりに切り上げを催促し、今日は解散となった。

後、有彦が性懲りなく先輩にアピールしていたが、またまた先輩に流され玉砕した。

「いや、まだまだだ。俺は諦めない、俺は何度でも蘇るのさ!!」

「いや、諦めろよ」

などなどと時間は経過し放課後となった。

中学こそガチの運動部に所属していたが、高校は運動系でも同好会程度のものに所属しているのと。

早期帰宅を学校側が強く推奨したため、早めに帰宅できる喜びと共に校門へと歩いていたら昼食時にさき抜けした志貴を見つけ。

志貴が有明家から遠野家へ引つ越したため、家の方角が同じなので。

一緒に帰ることを提案したら志貴はあっさり承諾した。

…もしもの護衛という実に情けない下心が良心を著しく傷つけたが。

そこで有彦が「ラブラブだなく」などと煽ってきたので、

笑顔で今まで告白してフラれた相手の女性の経歴、その様子を淡々と述べたら。

「ちくしょー!!何故知ってるんだあー!？」と、泣きながら帰って行った。

元男ゆえに、どうしても女子同士の友人関係における習慣に馴染めず。

志貴や有彦のような男子との付き合いが深く、女子同士とあまり深い友達付き合いができてない自分だが。

これくらいの情報は聞けるのさ、有彦君。

というか、おまえが有名すぎるのがいけない。

女子の間では意外と好感度が高いけど、ネタ扱いされているぞ。

次はどんな風にナンパして来るのか、どんな風に告白してくるか楽しんでいたし。

「——でき、門限は7時なんだよね、これが」

「ん、おおう。そりや大変だね」

つと…：いかんいかん、話している最中なのに回想に嵌ってしまった。

「じゃあ、その秋葉さんに交渉とかしてみたのか？」

「いやーそれが、秋葉の奴全然話を聞いてくれなくて…」

話の内容は『久しぶりに会った家族とその生活』についてだ。

意外と遊び人気質な志貴があまりに厳格に決まった生活に愚痴を零し、それをボクが

聞くという形で。

そんな感じで、ただ何気ない会話を楽しみながら暗くなりつつある街の中を歩く。

日々変わらぬ日常、変わらぬ日々、どれもボクにとって満足するもの。

だが、そんな至福の時間も終わりには告げられる。

帰る方向は同じでも場所は違うので分れなければいけない。

「じゃあな、また明日。」

「ん、また明日。」

分かれ道でさよならの挨拶を交わす。

お互いこうして挨拶を交わすことは日常の一部となっているが、今夜からボクの行動しだいで夢幻として終わってしまうかもしれない。

いや、それだけでない。

ゲームでさえも選択肢しだいで簡単に死んでしまう。

まして今あるのは確かな現実、ゆえにボクが無事でも彼が選択肢を誤ればこうして会えることはなくなってしまう。

「ごめんな。ボクは何もできないけど死ぬなよ、志貴」

ボクは志貴の未来の可能性を知っている。

でも、だからと言って彼に教えること助けることはしない。

これ以上ボクの行動で蝶の羽ばたきが何を起こすかわからないことも確かだが。

第一にボクは巻き込まれて死にたくない、これが我が身可愛さで批難されて当然であることは承知している。

承知した上でボクはもし志貴が死んでしまったならば。

わが身の可愛さのあまりにボクが志貴を見捨てたという事実だけは絶対忘れない。

絶対のだ。

「さよなら、志貴。また明日」

遠くに去りある彼の背中をボクは最後まで見届け。

それからボクは冬の速い夜のせいであつたらと月が出つつある中、
帰路を急ぐ。
ふと、見上げたお月さまは三日月。

満月とは程遠かつたが、

——その形がこれからの運命を嘲笑う口に見えた気がした。

第3話「運命の始まり」

時刻は10時を過ぎた。

記憶があいまいで分らないがたぶん志貴と教授でバトっているかもしれない。

転生あるいは憑依系主人公はこのようなイベントに即座に介入するだろう。

そして原作キャラが異性ならばここで恋愛フラグとハーレムフラグを立てるのが常道であり、

王道であり、物語を盛り上げる大きな転換点となるのだが——だが、断る。前も行った通り自分はただの女子高生。

オリ主のような特殊能力も何もない本当にただ憑依しただけ。

介入した所で足手まといどころか、原作通り旧吸血鬼化した挙句被害を拡大させ。

志貴にとどめを刺され、この世から消え去るだけだろう。

もしかしたら、運が良ければ再び別の世界に転生するかもしれないが。

人様に迷惑を蒙らせること前提なので正直お断りだ。

と、そんなわけで、

ボクは大人しく自宅でごろごろと横になりながら漫画を読んでいるわけだ。

やっぱ小林原文の作品はいいねー。

この劇画調な絵が堪らないね特に「黒騎士物語」とか。

まあ、こんな趣味だから志貴とか男子と話ができてても女子とあまり仲良くできないの
だろうな。

そういうえば、戦車と言えば前世で見た「ガールズ&パンツァー」を全部目にしてない
な。

というか、全部見る前に転生してしまったから丁度00年代のこの世界で再び目にする
まで最低12年は掛るのか。

くそ、なんてことだ。

12年なんてとても待てないぞ。

それ以前に西尾維新がどうもこの世界にいないように、

紳士フミカネがいなかったらそもそも作品自体生まれない可能性が・・・。

「さつきー、牛乳ないから買ってきなさいー」

などと悶々と悩んでいた時。

特大級の嫌なフラグを下の階にいる母親が立てた。

く、よりによって身内から死亡フラグを立てられるとは。

「もう10時過ぎているよ、お母さん」

「最近物騒だけど、コンビニまで自転車で行けばすぐでしょ」

弁解を試みたが即座に正論を以て返された。

うーむ、普段もこうしてこの時間帯に買い出しに行くこともあるから反論しにくい。でも死亡フラグ的あまり外に出たくないのだが・・・コンビニぐらいならいいか。それに、自転車だし。

へタに変な所に行かなければ大丈夫、かな？

「はい、はい今行きますよー」

そうと決まれば早めに行くのが吉だ。

手早く済ませて手早く帰って寝て明日という日常を迎えてしまおう。

つと、さすがにTシャツジャージは中ならともかく外じゃ無理があるな。

さてさて、外行き用の服は・・・やば、さつき洗濯したばかりか。

残っているのは明日の制服一式ぐらいしかない。

・・・ま、制服でもいいか。

どうせすぐ帰ってくるし学校のシャツの上から適当に上着を羽織って。

下はこれまた学校のスカートに寒いから黒のストッキングを穿いておこう。

髪留めも面倒だからストレートでいいや。

思わぬ場所と思わぬ人物から購入した正真正銘の守りの魔術品だけいいや。

ブラは……面倒臭いけど寒いし一応つけておくか。

別に形が悪くなるとか、シエル先輩の胸部装甲の厚さとか。

巨乳防御できそうな胸を持つ真祖の姫とかに出会ったから気にしているとかないから。

まったく気にしてない、ないっただらない。

「あ、お姉ちゃん牛乳買ってくるの？」

「だつたら、ついでに105円のプリン買ってきて。」

下に降りると、

妹が牛乳を入れていただろう空のコップを片づけていた。

風呂上がりのせいとか髪が濡れ、顔が少し赤らめ、艶めかしい。

にしてもなるほど、最近妙に牛乳の減り具合が早いと思っていたけどコイツのせい
か。

さて、ここで妹という単語に疑問を抱いた諸君らに解説しよう。

知つての通り原作における弓塚さつきの家族構成は、予算と時間の都合上ヒロインに
なり損ねたがゆえにあまり詳しくない。

月姫の漫画版、アニメ版でかろうじて両親の名前がわかっている程度である。

が、あくまで公式が設定したわけでないらしく、それぞれ名前が違うというオマケつ

きで。

まあ、それ以前に両者の月姫ではそもそも吸血鬼化による裏ボスルートすらないせいでロクな出番がなく。

スピントフ的なメルブラでやつと活躍できるかと思いきや、ネタ枠でしか活動できないのは悲劇というか喜劇というか。

あーくそ。

元々さつちんルートはあつたというなら、

魔法使いの夜よりもさつさと月姫改訂版を出せばいいのに。

仕事の遅いのはもう慣れてるけど、いい加減にしてくれないかな。

だいたい運命の夜系列で食いつなぐのもそろそろ止めてだな・・・いや、今の自分にはもう関係ないか。

話をもどそう。

そんなわけで家族設定が不明確ゆえに想像に任せるほかないのだが。

どうも、この弓塚家の家族構成はアニメ基準らしく。

父親はマサハルと読み、母親はユウと呼ばれさらには憶測でしか語れなかった家族が実はもう一人おり。

「はいはい、買ってくるから。」

「いつてらっしや〜い」

この世界では、ボクの妹として存在している。

弓塚さつきに妹がいる事実には初めはかなり混乱したが、今はそういうものだと割り切っている。

性格はよく言えば天然、悪く言えばアホの子。

過去に体育倉庫から遠野先輩に助けられ、それが元で現在『遠野先輩』に片思い中だとかで。

今度先輩が家に遊びに来たらフルーツサンドウィッチを食べさせようと計画しており。

やっている事が、まんま原作の弓塚さつきで吹いたのが懐かしい。

んで、こうして一生懸命牛乳を飲んでいるとということとは・・・はあ、乙女だね。

「ああ、そうそう」

「何？お姉ちゃん」

不思議そうに首を斜めに傾け、

ポニーテイルがそれにつられぴよこりと動く。

人のことはあまり言えないが、

こんな風に少し無防備なのが萌えポイントだが。

さあ、我が妹よ現実にとえられるか？

「貧乳はステータスだ、希少価値があるから安心しろ。」

姉の経験から正直牛乳を幾ら飲んでも成長しないし、別に無理しなくとも志貴は……。」

「うるさい、うるさい!! さっさと行って来て!!」

妹の気持ちを知っておきながら、先輩を独占する馬鹿姉なんて吸血鬼に血を吸われてしまえ!!」

「はいはい、行ってきますよ」

ボクと志貴との関係が単に友達付き合い合いでしかないのを、

『独占する』と表現するとは青春しているねえ。

「まったくもう、まったくもう。」

先輩の具合が悪いからって膝枕してあげたり、

プールに遊びに行ったりほんとこの姉は妹の邪魔しか考えていないよ!!」

何か妙な誤解を抱いている妹の罵声を聞き流しつつ、自転車の鍵を片手に玄関に向かう。

「さて、早くかえりませうかな。」

買った物は家から出てものも10分で終えた。

コンビニは物騒なニュースとは裏腹に実に平和であり。

教授がいきなり突っこんで来ることや、殺人鬼が惨殺しに来ることもなく。

実に、実に平和な時間が流れていた。

残る作業は再び全速で自転車を漕いで帰るだけである。

こうなると、死亡フラグにビクビクしていた自分が馬鹿みたいだ。

よくよく考えて見れば。

原作、月姫でも弓塚さつきが吸血鬼化しない可能性だつてそもそも存在する。

そして、今なら某死亡フラグなセリフを大声で言つてやりたい。

もう、何も怖くない。

にやゝ

「うん？」

などと考えていた時、猫の鳴き声が聞こえた。

視線を横に向けると、狭い路地裏に両眼を光らせた黒猫がいた。

まさか、また原作キャラで今度は黒レンなのか？

本当にエンカウント率高い・・・いや確かに街灯にうつすらと映る姿は黒猫だが。黒レンかと思ったがリボンがないから違うか。

にしても自分から寄ってくるとはずいぶんと人懐っこい猫だな。

夜食に購入したフライドチキンの香りにでも誘われたのだろうか。

よし、いいだろう。

チキンを餌に、貴様をもふもふの刑を下そう。

「少しぐらいなら分けてもいいよ、ほら。」

チキンを片手にこっちおいでと手招きするが少しもよって――。

「なっ?!」

来ないと思ったらチキンごと啜えて持って行きやがったよあの猫!!

そして、そのまま路地裏。といっても家と家との間にある隙間に走り去ったし。

「くそ、待ちやがれ」

買い物袋を手にしたまま路地裏に入る。

一軒家と一軒家の間にある僅かな隙間の間を走る。

動物は人間と比べて俊敏で、ボクが追いかけても追いつかないはずだが。

街灯が予想以上に明るく、前方10メートル先までよく見え。

さらには、逃げる道が一本の道しかないせいかな猫の後を追跡できる。

待て・・・可笑しいぞ。

なんで『猫の後を追えるんだ』

鳩にしろ犬にしろ、何にしろ人間が真正面から追いかけて追いつくなどあり得ない。

——
ドクン

心臓が跳ねる。

——
ドクン

嫌な予感がする。

——
ドクン

なのに引きずられるみたいに歩むのを止めない。

——ドクン

『引きずられる』つまり猫は使い魔で凶。おびき出された——!?

——ドクン

やめろ

——ドクン

いやだ

——ドクン

死にたくない

前方から強い光が路地裏を照らす。

「はいはいはっ。」

路地裏を抜け、住宅街の中にある小さな公園へ出た。

それも4メートル四方程しかない小さなもので公園と呼ぶには目前の器具がなければ分からなかったと思う。

周囲を見渡しても猫はどこにもいない。

いや、いた。目の前に。

「手間を掛けやがって……」

哀れなフライドチキンはすっかり猫の胃袋に収まったようで、残りカスで十七分割な状態。

再度周囲を見渡すが、猫とボク以外誰もおらず。

さつきまで緊張していた自分がまるで道化みたいだ。

はあ、一体全体何しに来ただか。

猫に夜食が食われたしいい加減帰るか。

「野良だか何だか知らないけど、それはボクの奢りだ。ありがたく思えよ」

今度こそ帰ろうと視線を猫から外し、元から来た道に振り向くが。

「いや、その必要はない」

視界の隅で、

「使い魔が世話になったようだな」

黒髪長髪の男が、

「お礼に貴様の血を頂こう」

薄きみ悪く半裸Yシャツの男が嗤った。

「へ？」

前世でゲームキャラの声として、

聞き覚えのある声に思考が停止した直後。

ぐしゃり、と首筋から音が出た。

何が起こったのか全く理解できなかつたが首の痛みが強制的に現実を認識させた。

「あ……があああああ!!!」

痛い痛い痛い痛い!!!

なんで、なんでこいつが……こいつが居るんだよ……!!?

「きゅ……吸、血鬼」

どうしてだ、どうしてこうなった。

首に噛みついた奴の顔をつかむが全く効果はない。

ああくそ、まるで万力で固定されているようだ、

しかも、い、意識が遠い。

抵抗をするがそれもむなしく徐々に力が抜けてゆく。

血が抜ける

魂が抜ける

意識が抜ける

代わりに別の何かが侵入する。

体温が低下してゆく

ヤスリが体を削る感覚

——痛い

——イタイ

——イ・・・タ・・・い

ごとり、と音がした。

「あ・・・」

ああ、なんだ違う。

自分が倒れただけか。

にしても、前から倒れたはずなのに痛くないな。

買い物は大丈夫だな。

中身が散乱したらしいがどれも生ものじゃないし。

けど、それも遠くに感じる。

力、入らないな。

地面の香りも分らなくなってきたし。

色の認識も白黒でしか分らないよ。

たぶん、これが死という感覚。

ボクはここで死ぬ。

でもできれば死にたくないなあ……

薄れゆく意識の中。

ただこれだけを願い——眠るように眼を閉じた。

第4話 「それぞれの行動」

「ん……ぐ……？」

ずきずきと痛む頭を抑えつつ眼を覚ます。

前後の記憶が定かでなく自分の状況が分らない。

しかし、上着を貫通する冷気。

頬についた砂と先ほどまで嗅いでいた地面の臭い。

少なくとも自室のふかふかのベットではなく外であるのは確かだ。

錆びついた工作機械が周囲に鎮座し、

古びたトタン屋根が上を覆っているここは廃工場地帯の一角のようで。

ここは、不良のたまり場として最適な場所であるが何故自分がいるのか思いだせない。

ふと、上を見上げると。

トタン屋根の間に空いた穴から夕日が差し込み、さらにうつすらと月が昇っている。

夕日の光は乏しいが、視界はハッキリと工場の隅まで捉えた。

……まで、なんで「見える」のだ？

「夕日の光だけで」なんで百メートル先の隅までよく見えるんだ？

「あ、う……」

途端、ズキズキと頭痛が襲う。

そして、一斉に流れ込む記録としての記憶。

買物からの帰り。

黒猫に誘われて公園に辿り付く。

後ろから掛けられた男の声を聞いた途端首に痛みが走り――。

「あ……」

窓ガラスに映るかぎり、

服装は上着はなくなり下に羽織っていた制服だけ。

身体、特になし、

首筋にうつすら残る歯痕、赤い瞳と長い犬歯を除けば……。

「……はは、ははは。」

鏡に映る姿に乾いた笑いが空しく響いた。

思いついた言葉はなんてこった、こんなはずじゃなかったのに、という単語がぐるぐると頭を駆け巡る。

「いや落ち着け、これは夢。」

そう、夢に違いない、こうもあつさりと吸血鬼になるなんてありえない。」
そもそも真祖に噛まれたならともかく、

吸血鬼に噛まれて吸血鬼になるにはリビングゲッド、グールと段階を踏み永い年月を必要とする。

例外としてポテンシャルが高い人間だとその段階を一気に飛ばし吸血鬼になるが、それこそが原作の弓塚さつきである。

「だいたい弓塚さつきであり、さつきでない自分がそんな事など……。
「あちっ!?!」

だから試しに指先を夕日に当ててみたが指先を火傷した。

痛みが指に走ると同時に即座に傷が修復されて行った。

くそつ、本気で夢じゃないみたいだ。

冗談じゃない、自分は平凡な人生を望んでいたのになんでこんな事に？

確かに折角こういう世界であることを知っていたから興味はあったけど——。
「うっ!!」

胸が、痛い。

まるで心臓を直接握られているみたいだ。

秋にも関わらず体は発汗し、汗が地面に落ちる。

吐く息は荒く、心臓の鼓動が早まる。

口に手を当てれば犬歯が伸び、

それだけでなく喉がひりひりと乾きを覚える。

人でなく化物、吸血鬼としての本能が体に必要な血を求めている。

血

ヤメロ

血をよこせ

五月蠅い

血血血血血血血血血血血血血血血血血血——。

吸血鬼に成ったばかりの体だろうか、ギチギチと身体が痛む。

喉が水とは別の乾きを訴え、頭が可笑しくなりそうだ。

「……これが吸血衝動か」

頭痛と身体の痛みのダブルコンボ。

風邪よりも辛い、耐えられないものではない。

【原作知識】として本当の吸血衝動はこれよりも酷いことを知っているからだ。

だからこそ、踏み止まれる。

いや、踏み止まらなければいけない。

踏み外せば大惨事になることと思えば耐えられる。

ゆるりと立ち上がり、

顔に張り付いた土を払いながらより日陰へフラフラと歩む。

今の自分に必要なのは、落ち着くまで寝ること。

というより未だ太陽が出ている以上それ以外やることがない。

念のためシーツを体に被せ、忌々しい太陽を睨む。

幸い今はまだ『人』としての意識があるので何とかかなりそうだ。

それでも、血を補給せねばそれこそ無差別に襲いかねないので何とかせねばならぬ。
い。

「お休み、にしても新聞紙や工用のシートがこんなに温かいとは……。」

瞼が下がり、再び視界が暗く染まる。

寝てる間にシエル先輩に襲われないように祈りつつ意識が遠のいた。

『臨時ニュースです、弓塚さつきさんの物と思われる——』

昼食の時間、弓塚さつきを除く3人で昼食をとっていたが、

テレビから流れたニュースに遠野志貴ならびに、3人は凍りついた。

たしかに今朝から見当たらないと思つてはいたが、まさかこんなことになるなんて——

「……おい、遠野。お前昨日一緒に帰つたんだろ。なんかしらねーのか？」

遠野志貴にとって小学校以来の腐れ縁の有彦が急かすように問いただす。

しかし、あの坂で別れてからは昨日はまったく彼女には接点がないので答えようがなかった。

「……いや俺はまったく。」

「そうか……。」

そう言うなりしんみりと黙つてしまった。

あまり他人に関わり合わない人間であるがやはり弓塚のことが心配なのだろう。

そういうえば朝から「この学校の生徒が行方不明になった」という噂が流れていたが、

関係ない噂と思つていたけど、まさか——志貴はふと昨日の事が思い出させる。

『じゃあな、また明日』

そう彼女は夕日と共に別れた。

志貴にとって弓塚とは、中学以来からの付き合いのある友人だ。

彼女は今でこそ、女学生という身分に馴染んでいるが、

同じクラスメイトとして会った時は今以上に自らクラスメイトと壁を作っていた。

性同一障害とよばれる症状がある。

肉体と精神が一致しない症状で、原因はよくわかっていない。

たしかに言えることは、精神と肉体が一致しないことだ。

『弓塚は性同一障害なんだ、みんな気にせず仲良くするように』

中学の始まり、

不機嫌そうに教師の隣に立つ少女について教師が言った。

当時の教師の発言は弓塚のために言ったつもりであったが。

集団とはしばし、異分子を排除、排斥する傾向がある。

しかし、人は知性と精神の成長と共にそうした行為を【悪い事】として抑えるように

なる。

が、ついこの間までランドセルを背負っていた子供にそれを期待するのは無理な話で。

男子からも女子からも疎外されクラスで孤立していた。

そんな彼女と性別を超えた友情？を結んだのは。

恐らく、遠野家から追い出されて以来。

自分と言う存在が先生に諭されたとはいえ不安定で、どこか他人事でなかったからかもしれない。

たしかに有間の家は自分を家族として迎え入れた。

でも、どこかで自分は他人と感じていたし。

自分は遠野から捨てられたという事実をずっと気にしていた。

ゆえに同病憐れむ、というわけではない。

傷口を舐め合うという意味でもなく。

ただ、一人くらい彼女の隣に居てやりたいと思ったからだ。

「遠野君、弓塚さんのことが気になるのですか？」

「ええ、友達ですから。」

何気なくシエル先輩の質問に答える。

「……恋人とかではなかったのですか？」

「ぶっ!!!」

突拍子のない言葉に志貴はお冷を吐き出し、

対面にいた赤毛の親友に掛ったが、非常に些細なことである。

「先輩、正直ありえませんか。あの弓塚に限って。」

あいつはそうした恋沙汰の話に興味こそあっても自分がそうした関係になることをかなり嫌ってますし」

なにせ、昔バレンタインデイは製菓会社の陰謀、

撲滅すべきと言って俺たち3人で馬鹿やっていたくらいだしな、と志貴は内心で呟く。

「まあ、遠野君がそう言うならば。そういうことにしておきましょう」

「いや、そういうことって・・・誤解ですって先輩」

によによ、と擬音がついてそうな笑顔で志貴を見る眼鏡の先輩。

どこぞの行きつけの病院のお姉さんと同じく可愛い年下を温かく見守るような表情をしている。

こうなったら、経験則からしていくら弁解しても無駄だ。

むしろ、弁解すればするほど生温かい視線で見守られ、おちよくられるだけである。

その点、あの吸血鬼は単純だったな。

と、志貴は思った。

「ねえ、お姉さん」

「はい？」

ネオンの光で満ちている街中と違い。

住宅街は街灯以外の光はなく、道に人がいないことも合わさって静かな空気が流れていた。

が、そんな空気を壊すようにボクはできるだけさりげなく。

まさに偶然後ろに居たかのように女性に呼びかける。

相手は一瞬驚いたが、同性と知ったのか。

無防備にもこちらをまったく警戒していない。

だから、すまない。

自分の生存のために犯罪者になってくれ。

「ボクの言うことヲ聞イテ」

「え、あ、」

言葉に獲物……いや違う。

相手にしてもらいたい願いを込めて

今の所血の欲しさに人を無差別に襲う可能性はない。

しかし、吸血鬼に血が必要なのは変わらぬ事実。

いずれ、限界が来て無差別大量殺人を起こすか。

あるいは、ヘタに動き回ってシエル先輩に殺されるのかの未来が訪れるだろう。

だからこそ夕方から吸血鬼特有の驚異的な視力で遠くから病院を監視する。

街中、ということもありすぐに病院関係者と思わしき人物に暗示をかけず、

その後を住宅街まで追跡、

いかにも偶然あつたかのように相對し、

吸血鬼の能力である暗示で病院関係者に輸血パックを盗りにいかせることにした。

これなら自分の身を晒すこともなく、

なおかつ大量殺人を行う必要もなくなり万々歳なのだが、

相手は頭を抑え倒れ込んだにもかかわらず。

罪悪感を感じないどころかもはや【餌】としか認識していない自分がいやになる。

そして10秒ほどだろうか。

やがて被害者はスツと立ち上がった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

暗示を受けた女性はじっとこちらの命令を待っている。

その瞳はうつろいで表情にも生氣を感じられなくない。

「病院から輸血パックをとってきてきてくれないかな。」

「ハイ、ワカリマシタ。」

暗示は成功、頼りない足どりだが病院へと歩き出す。

これでなんとかなりそうだ。

「コレデス。」

待つこと一時間。

念のため視界共有をしていたが、やはりと言うべきか。

夜勤の同僚に輸血パックを持ち出すのを発見されそうになったので、

遠隔操作に切り替え、四苦八苦しながらも無事輸血パックを持って来てくれた。

3リットル分の輸血パックが入った保冷ボックス。

今の自分にとって同じ重さの純金よりも貴重で価値のあるものだ。

「ありがとう。家に帰ったら元に戻っていいよ、後今日の事は忘れてね。」

「ワカリマシタ。」

操られた女性は命令を聞き、進む方角を変えすたと歩く。

帰りは行きよりも確かに駅の方角へ進んでいった。

さて問題は

「取りに行かせたはいいけど果たして飲んで良いものか……。」

今更ながら思うのだが『血を飲むとかえって暴走するのでは?』という疑問だ。

へたれTS系ヒロインに『奇跡的な精神力で克服する』なんて根性はなく、情けないが怖氣ついてしまう。

まして、奇跡とはめったに起こらないからこそ奇跡であって自分にそんな運があると安易に信じたくない。

自慢だが、幸運E気質などとしても……。

「つつ!!」

ドクリ、と体の中の何かが騒ぐ。

そして、体の内から破壊と殺りくの黒い衝動があふれ出る。

「ひ、あ、ああああああああ。」

体が痛む、反転して自分でない何かが表に出そうだ。

生きるためには血が必要であるのは理解している、でも人としての抵抗感がそれを拒んできた。

でも、今はとにかく血が欲しいという衝動に駆られ、無意識に輸血パックに手を伸ばす。

そして、赤い液体が詰まった袋のキャップを外し、誘われるように噛みつきゆつくりと吸い上げた。

水よりも粘着質が高い赤い液体はさながら泥のようだ。

が、別に味が悪いという意味ではない。

むしろ力が沸く。

上を見上げれば、満月ではないがスモッグまみれの都会の中月がはつきり映し出される。

皮肉なことに人であったころはよく見えず理解できなかったが

今夜はこんなにも――

「月が奇麗だな――」。

路地裏から見上げる月は前世も合わせた中で一番綺麗に輝いていた。

第5話 「遭遇と再会」

「まさか、な……。」

点を突かれたネロ・カオスがどこか悟ったように呟く。

「おまえが私の死か……。」

吸血鬼は灰となり夜空へ塵となり散っていった。

その男にとつて最初にして最後に体感する絶対的な死にも関わらず、ネロの表情は穏やかであった。

そしてこれはこの狂った日常に終止符とまではいかないが、

ようやく終わった、という満足感と虚脱感が肉体と精神を襲い身体から力が抜けてゆく。

「つか……れたな。」

地べたにでもあることも気にせず仰向けに倒れる。

外気の冷たさもあるが、あちこち貫通した傷が体内の熱を奪い指先から冷え、寒くて、眠い。

今寝たらいつ起きれるか分らないが本当に今すぐ寝てしまい——。

「えいー」

「ぶふお!?」

などと思っていた所、

遠慮とか配慮といった単語が辞書にない馬鹿女に傷口を無造作に手を差し込まれた。そして、睡魔は脳髓から痺れるような痛みで一瞬で弾けた。

「この馬鹿女!なにしゃがる!!」

「あーもう、その傷じゃ治療しても助からないから私が治しておいたわ。」

それから怒鳴ることないじゃないの、としおらしく言う。

うぐ、そう言われるとアルクエイドは正しい。

まったくそうなら先に言っただけいい・いや、さて。

「どうやって治療したんだ、まさかガムテープじゃないよな?」

まさか俺にバラバラにされたさいに『うまく繋がらない』

という理由でガムテープでバラバラになった肉体を繋げたような女だ、ありうる。

「ちがうわよ!ネロの残骸を利用して治療したのよ。」

ネロの肉体は方向性のない命の種だから寄生させる形で志貴の欠けた肉体を修復したのよ」

なるほど、ネロ・カオスの死骸を利用したのか。

これなら傷口を触つてみると血糊こそあれども傷口が綺麗にふさがっているのも納得……。

「おい、待てその馬鹿女。副作用とかないよな？」

貧血で貧弱な身で身体が健全になるのならいいけど、まさか吸血鬼にならないよな？」

「なるわけないでしょ、

ネロの残骸を志貴の肉体に合わせただけよ。

それより、志貴。何時まで寝ているつもり？ さつさと起きなさい」
なら安心だ。

いくら貧弱なこの肉体でも人間を辞めるつもりは今のところない。

そして、いい加減肉体も精神ももう限界だ。

アルクエイドが揺さぶるが再度襲ってきた睡魔の方が優勢で、

瞼は重く、意識が希薄になりつつある。

ああ、それにしても。

弓塚を今日は探せなかったな——。

意識を手放し本当に寝てしまう刹那。

濃厚な殺意と人ならざる者の気配を感じると同時に肉を砕く生々しい音が公園に響

いた。

「なおい?」

意識は一瞬で冴え、

本能的に横に転がると先ほどまで寝ていた場所に何かが降って来た。

降って来たそれは慣性を殺せずそのまま俺に派手に衝突し一緒に転がる。

そしてほしい10メートルぐらい一緒にそれと転がり、停止した。

俺は体中を砂ぼこりに塗れながら衝撃を緩和するため、

反射的に抱きしめて一緒に転がったその正体を見て、心臓が掴まれたような衝撃を受けた。

「先輩……」

丁度自分の胸元からシエル先輩の表情が伺える。

いつも笑みを絶やさない彼女の顔は苦痛に苦しみ、蒼白であった。

それだけでなく身体から大量の血が吹き出ているようで、生温かい血液が制服をさらに穢してゆく。

何故先輩がこんな目に遭わなければいけないのか。

どうして先輩がここにいるのか。

目の前から与えられた衝撃で思考の回線がパンクし、何も考えられなくなる。

「嘘……」

そんなふうには呆然としていたら、

アルクエイドの言葉に釣られて彼女の顔を見上げる。

彼女もまた衝撃を受けた驚きと、

理解できず、信じたくないような顔を以て呆然と僅かな明かりの先を見つめていた。

「あれは……」

ネロ・カオスとの戦闘で周囲の公園の明かりは破壊され、

辛うじて残っているものも明かりは不安定に灯される程度であったが、

明かりに照らされた人物は自分が良く知り、探していた人物であった。

「ふふ、先輩。今なら見逃してもよくなってよ。」

瞳を金色に輝かせ、血が付着した指をなめる仕草は艶美で。

自らの勝利を確信し、高らかに歌うように述べる姿はまさに噂の吸血鬼としての印象を与えていた。

でもそれ以上に俺はあの顔に見覚えがある。

忘れはしない、中学からの付き合いがあるあの顔を。

「弓、塚」

ふらふらと朦朧する意識のまま三咲自然公園内を歩く。

人が密集する地域を通過するので危険極まりない行為だが、

こうでもしないと一人路地裏にいますと時折意識が遠くなり、自分が人間である意識が希薄になってしまふからだ。

あれからまた一晚、また暗示で輸血パックを手にいれ血を飲みほした。

最初は初めて飲んだビールのように不味くて仕方がなかったが二度目は嫌な事に味がよく分かった。

例えば、脂肪分が多い者や塩分の濃度、鉄分の配分など。

ますます人というカテゴリーから離れつつあることに絶望しつつも

これもすべては生きるためと言い聞かせて正気を保とうとする。

だが、血を補充したが補充すればするほど体が量と生の血をよこせと騒ぐ。

今晩は7時くらいに一度血を飲んだにも関わらず、体が血を要求する。

「はあつ、はあつ、はあつ……」

当然輸血パックだけでは足りず、禁断症状の様に手が震える。

ドス黒い『何か』が体から出ようとし、本能が危険を知らせる。けつして出してはいけない、と。

夜12時を回る暗闇の中、嫌なくらいに視力と聴覚が研ぎ澄まされる。

遠くから爆音や獣の叫び声、肉をすり潰す音がよく聞こえた。

ああ、これはもしかすると教授と志貴の戦闘なのかもしれない。

だとすると真祖の姫だけでなく先輩もここに――。

「!!」

五感が危機を告げ、咄嗟に横に跳ぶ。

直後感じたヒユウつと風切り音。

「っ・・・!!?」

横一文字に斬られた頬から血が出る。

頭が一気に冷め、思考がクリアになる。

こんなことをするのはあの人しかない。

「くんばんは、弓塚さん。」

法衣を纏ったシエル先輩が暗闇から姿を表す。

学校と同じような笑顔をしているが眼は鋭くこちらを見据える。

その手に持つのは代行者たちが使用する黒鍵が指の合間に挟まっていた。

「まさか貴女が死徒になるとは思いませんでした。」

「せ……」

先輩、そうこちらが口を開く前に、一切の前触れもなくシエル先輩。

いや、代行者シエルの姿は掻き消えていた。

一体どこに、と思う暇もなく。

ボクの腹部に衝撃が走った。

!!?

次に認識できたのは身体をのけぞらせて宙に舞っている状態。

打撃の衝撃で胃の中身を吐きだしそうになっただが、それより先に回転する視線の一瞬にシエル先輩が黒鍵を構えているのを捉えた。

恐らく、さっきの攻撃が避けられたから、

回避できない空中に浮かせて串刺しにする算段なのだろう。

くそ、これじゃあ、いいマトじゃないか!?

「い、のお……」

空中でありながら強引に身体を捻る。

人間の時のならばこんな芸当は到底できないだろうが、

吸血鬼の強化された身体は驚くほどスムーズに動き、強化された視力が黒鍵の投擲軌

道を確かに捉え。

一本、二本とかわしてゆく。

かわしきれなかった黒鍵は剣の腹を叩き、

それでもなお直撃するものは急所以外の場所に当たるようにして、着地。

次の行動に移るべく身体を動かすが、さらに黒鍵が数本迫る。

着地したばかりで重心はブレブレでうまく避けきれない。

「い!？」

何本かは辛うじて避けるが、一本だけ足に深く掠る。

激しい痛みと力が抜けるような脱力感、キリスト教徒でもないのにこの威力、まずい。

しかも再び先輩は近接戦に持ち込むべく地を駆けている。

冗談じゃない、真正面からこの人とやりあう気はない。

ここは逃げるしか――。

「逃がすと思いますか?」

先輩の声が聞こえた直後、

「ふん!」

「がっ!!」

あえなく顎を打ち抜かれ脳が揺さぶられた。

そのままさらに公園の広場に転がるように突き飛ばされゴロゴロと転がる。起きようとするが足が言うことを聞かずそのまま――。

「!!――うあああああああ。」

胸、肩、腹、足に計6本の剣が刺さり標本のようになった。

痛い、いたい、イタイ!!

「ここまでですね。」

コツリ、コツリとブーツを鳴らしながら傍による。

ボクはとうとうとぐったりと倒れ意識が遠のき、指一つも動かせない。

突き刺さった黒鍵が体を蝕み、その痛さのあまり気絶することも許されない。

「さて、弓塚さん。何か遺言はありますか?」

こちらに抵抗する力はないと見たのか目と鼻の先まで来た。

「ボクは……死にたくない……血だつて輸血パックで我慢しているのに!!」

「ええ、そのようですね。暗示をかけていたようですし。」

暗示をかけていたようですし、

つまりこの人からすれば全てお見通しだったというわけか。

ああ、くそ。

視界がぼやけて来た、意識が遠のく――。

「ですが、吸血鬼という存在自体が罪なのです。」

受け入れなさい

「あなたは間違いなく被害者でしょう。が、次はあなたが加害者になるのです。」

今何か妙な声が聞こえた気がした。

ああ、幻聴まで聞こえるとなるともう駄目なのかもしれない。

じゃあ死にたいの？

・・・誰だ？

今のは幻聴なんかじゃない。

明らかに第三者が問いかけて来た。

答えて

死にたくないに決まっている。

二度目の人生でも、いやだからこそ最後まで生きたい。

けど、君は誰だ？

「おっと、話しすぎましたね。灰は灰に塵は塵に……。」

ワタシはボク、ボクはワタシ。

ワタシは貴方の陰、いるはずだった魂の欠片。

貴方が死にたくないというならば力を貸しましょう。

それは一体——。

「さようなら、弓塚さん」

ゆつくりと剣が振り下ろされた刹那。

腕を貫通し地面まで突き刺さった黒鍵の痛みを無視して、

右腕を無理やり横一文字に斬るように振り、真空の刃を走らせた。

「え」

気が抜けた驚愕の音声。

が、流石というべきか身体の方は反射的に後ろへと跳躍したが、

真空の刃はそれよりも早くシエル先輩の片足を切断させた。

「ぐ、ぐううううううう!!?これは一体……?」

舞い上がる鮮血。

片足をなくしたシエル先輩は地面に転がり、苦悶と驚愕の表情を浮かべつつこちらを凝視する。

イメージでは両足ごと切断させるつもりだったけどどうまくいったね。でも、いいや。さっさと邪魔な黒鍵を壊しましょうか。

「そんな……。」

黒鍵を先ほどの刃で左腕、胸、腹、足に突き刺さつたのを破壊する。

力が抜けた身体に力を入れて立ち上がり、失った分のエネルギーを補給すべく、眼前に転がっているフライドチキンこと先輩の片足を拾い上げ噛みついた。

「ふはぁ」

魔術師の血を飲むのは初めてだが、身体の内から力が沸く。

それだけでない、今まで我慢していた輸血パックが安酒ならこちらは高級ワインのごとく味もいい。

おっと忘れていた、

こんばんはワタシ、そしておやすみなさい、ボク。

「反転、それに先ほどのはまるで……。」

代行者は地べたに張り付き絶句と呆然が混ざった顔をしている。うん、おかえしに苛めたくなっちゃいそうなくらいに。

「シエル先輩どうかしましたか？痛いのかしら？」

だから先輩を蹴り上げた。

サッカーボールをけるように思いつき蹴り上げた。

肉を砕き、骨を潰す感触。

素晴らしい、嗜虐心と吸血鬼としての征服欲を満たされる。

一方、先輩はというと放物線状に飛んでゆき、地面に激突した。

少しばかり反撃を期待していたのだが期待外れ……。

ん……あれは？

ああ、志貴君と姫様か。

こつちを見ているけどそんなのは気にならない。

それより今は先輩をどうするか専念しよう。

「ふふ、先輩。今なら見逃してもよくなってよ。」

指に付いた血を嘗めながら自然と口がにやりと嗤った。

第6話 「回想と後悔」

「………… あれ？」

眼がさめる。

ここはアルクエイドのマンションでもホテルでもなく、どうやら自分の部屋のようにだ。

やや眩しさを覚え、外を見れば既に太陽が斜めに上り朝日の光が部屋を射していた。しかし、まだ頭はぼんやりとしており。

昨日のことがよくよく思いだせない。

「おはようございます志貴さま。」

「うわあ!!」

横から突然の乱入者。

声の主は誰かと思ひ振り返れば翡翠がいた。

何時もと変わらぬ表情で……いや表情が微妙に違う。

なんというか、やんちゃをしたことに対して責めるような眼をしており、ついでに不機嫌そうだ。

「なあ、翡翠。もしかして俺なんか変な事をした？」

「それは志貴さま自身の身がご存じのはずです。」

特に秋葉さまがここ2日のことをお聞きしたいのでテコを使ってでも連れて来るように、との事です。」

……は、はははは。

しまった、そういえば2日も学校を休んだあげく音信不通だった。

ただでさえ秋葉の奴は門限にうるさいにも関わらずこの始末とくれば。

「……もしかして、秋葉のやつ怒っている？」

「さあ、それはどうでしょうか。それは志貴さま自身が確かめてください。」

藁にも縋る思いで翡翠に秋葉の様子を尋ねたがその返事はいつも以上に素っ気なかった。

「た、頼む翡翠!!」

怒った秋葉を俺一人で対応することなんてできない。

助けてくれ翡翠、この通り出来ることならなんでもするから!!」

朝っぱらから手を合わせて拝むようにメイドに頼る主人がここにいた。

とうか俺だった。

そして主人に頼られたメイドこと翡翠は俺が見た所、

なんでもする、という言葉に一瞬だけ瞳に光が灯り期待感を抱かせたが、

「お断りします。」

翡翠は無表情でなおかつきつぱりと切り捨てた。

「それに志貴さま、失礼ながら申し上げますと、

一度志貴さまは秋葉さまにとことん絞られるべきだと思います、私の分も含めて」

ジト目で痛いところを突かれた。

どんな理由があれ彼女たちを心配させたのは紛れもない事実。

いい加減逃げずに潔く秋葉に怒られるとしよう。

「ああ、そうだな。わかったよ、

今すぐ行くから秋葉にはできるだけ落ち着くよう言ってくれないか？」

「分りました秋葉さまに伝えます、では失礼いたします」

ペコリと一礼して翡翠は去って行った。

はあ、せいぜい秋葉が冷静になるように祈るしかないか。

「・・・？」

ふと妙な臭いを感じたが、薬品の匂いが体から出ていた。

視線を下に向けて両腕に巻かれた包帯を見てようやく昨夜の出来事を思い出す。

「弓塚・・・。」

あの時――。

※※※

「ふふ、先輩。今なら見逃してもよくつてよ。」

悠然と俺たちに向かって歩いてくる弓塚。

足を切られた先輩と俺たちを見下すように彼女は嗤っていた。

普段の冷静だがどこか抜けた雰囲気はなく、彼女からは禍々しさしか感じさせなかった。

公園の広場の周囲は先ほど倒したネコの残骸、

さらに俺や先輩から出ている血の匂いが立ち込めている。

普通なら思わず吐き気をもよおす光景だが、不思議と何も感じず。

俺自身が無意識に行ったあの殺人技巧といい、俺は異常な人間なのかもしれない。

だがそれ以上に異常なのは弓塚だ。

昔から女性的な趣味、行為を苦手としていたが今は違う。

血に染まった指を舐める仕草と言い、まるで男を誑かす毒婦のようだ。

そして彼女の瞳孔は猫のように縦に割れ、瞳を金色に輝かせており——吸血鬼になつてしまった事を証明していた。

「ふうん？だんまりなんだあ」

弓塚はニヤニヤと笑いつつ先輩を嘲る。

胸元にいる先輩は俺が知っている先輩とは違い弓塚を殺意と敵意を込めて睨んでいる。

「化け物、が」

「化け物？ふふ、滑稽ね！貴女がそれを言う資格があつてエレイシア!!」

「つ、なぜそれを!!」

エレイシア？先輩の苗字なのか？

それにしてもなぜあんなにも自分を責めるような顔をしているんだ。

「親を殺し、友達を殺し、街を死都に変えた揚句。

死神に嫌われた貴女は結局ワタシと大差ないバケモノよ。ほうら、もう再生しているし。」

嘲笑うがごとく指をさす、先輩が化け物？

いったい全体どうなんだこの展開は、まったく分からない。

俺はなんと云えばいいかも分らずただじつと状況を見守っていたが。

「……だまれ、だまれ吸血鬼!!!」

刹那先輩は爆発した。

別に先輩がどこぞのポケットなモンスターのごとく自爆したのではなく、以前アルクエイドが語っていた魔力が放出されたのだろう。

先輩を掴んでいた俺は思わず先輩を手放してしまう。

手を伸ばすが既に届かずそれより先に第三者が俺を掴んだ。

「志貴、逃げるわよ」

アルクエイドが焦り気味に言い、俺を——まで。

「ちよつと待ってくれ、これって……」

「何よ、お姫様だっこってやつだけど今は関係ないでしょ」

アルクエイドは不思議そうに首をかしげるが、おんぶ、膝枕に並ぶ男子の一生の夢、お姫様抱っこ。

貧血で倒れて弓塚におんぶされて以来、女の子にされることはないと思っていたが心が折れてしまいそうだ。

いや、今はそれどころではない。

流星のごとく飛び出した先輩は弓塚と殺し合いを始めた。

金属音の反響と時折公園を照らす火花が何よりも雄弁に語っている。

「2人を止められないのか？」

「……………」

険しい顔つきで暫く間を開けてから重苦しく口を開く。

「……………正直今の私じゃあ厳しいわ

それが例えばシエルやさつちんと一人ずつ相手をするとしても」

「なっ————。」

馬鹿な、たしかに今のアルクエイドは俺のせいで弱っている。

それでも最初にネロと戦っていた時には俺がいてよかったのかと疑うくらい圧倒的な強さを見せつけたが、

中学以来の付き合いがある弓塚、さらには何時も笑顔が絶えないシエル先輩はそれ以上の力を持っているというのか。

「ガァー……!!?」

肉が破壊される音が鈍く響くと同時に、

先ほどまで眼にも止まらぬ速さで死闘を演じていた先輩が眼前に転がる。

地面を転がり土埃塗れになった先輩は再度立ち上がろうとするが、

恐らく内臓がやられてしまったのだろうか、血を吐きだしのたうち回る。

「確かに先輩の体術は素晴らしいものだけど、

【銃弾を視認して避ける】吸血鬼の力が十全に發揮された今じゃ黒鍵だけの装備では勝てないわ」

苦しむ先輩とは裏腹に弓塚は女王のごとく悠然と先輩に向かって歩む。

「やるとしたら、それこそ聖典クラスの武装を準備するのをオススメするわ。」

もつとも、ワタシは自衛を除いて積極的に先輩を傷つけるつもりはないけどね」

「ほざけ・・・!!」

一閃、鈍く銀色に輝く剣が投擲されたが横の払いで弾かれる。

「あぶない、あぶない。ほんと油断も隙もないわね」

いや、払ったのではなく掴んだようだ。

指の間には先輩が投擲した刀身が掴まれている。

「お返ししなくちゃ、えい」

そして、彼女は親しい友人と遊ぶベースボールのような感覚で剣を投げた。

対して先輩は避けることも叶わず——直後、一輪の血の花が咲いた。

腹の半分が吹き飛び、内臓が湯気を立ててこぼれおち、

苦痛に耐える声と流れる血肉の音がBGMとして生々しく響く。

吐き気がする。

血の香りが嗅覚を刺激しているせいもあるが、

遠野志貴にとって日常の象徴であつた彼女が魔に堕ちた光景が耐えられない。

「あれーもう壊れちゃつたの？」

しょうがないなーしばらく寝ていてくださいね、先輩」

弓塚は先輩に近づくと大きく足を振りかぶり顎を打ち抜く。

顎を打ち抜かれた先輩は脳を揺さぶられたのか、倒れて動かなくなつてしまった。

弓塚、おまえは――。

「あゝ久しぶり志貴君、それに姫様も。」

今や完全に吸血鬼となつた弓塚が、

興味の対象が動かなくなつた先輩から俺達に移る。

黄金に輝く瞳が自分たちを獲物として見ている。

俺は気づいたら、ナイフを手にしていた。

ネロ・カオスとの戦いをえて碌に動かない身体にも関わらずだ。

自分でも意識できない程あまりにも自然な動作に驚きで心臓がとまりそうになつた。

あの日、アルクエイドを殺したように。

俺はまた、殺したいのか、俺は弓塚を、コロシタイのか。

「気にしなくいいのよ、志貴。」

志貴が今の彼女を見て「[そうしてしまいたい]」と思うのは仕方がないことよ
アルクエイドは呆然とする俺を言い聞かせるように強く抱きしめる。

「・・・まさかたつた1日そこから死徒になるなんて、

古の死徒27祖並みの才能ね、それにそれは反転した人格かしら異邦人さん？

初めて会ったときから一般人であることに変わりがない、

けどどこか違う人のような違和感を感じていたけど今になってようやく分つたわ」

「あは、さすがアルクエイドさん！なんでも分かっちゃうんだね。」

片や子どもがはしゃぐように、片や冷たくあしらうように二人は対峙する。

俺は・・・ついに肉体の限界が精神の忍耐を超えてただぼんやりとすることしかできない。
ない。

くそつ、こんな時にこのポンコツな肉体が恨めしい。

意識が朦朧として来て頭が回らない。

「で、私たちを殺すのかしら？」

真祖を討つたという功績と志貴のような異能力者を取り込むのは新たな27祖の旗
揚げとして悪くないものね。」

「とんでもない！ワタシもボクも基本殺人や弱い者いじめは嫌だから。あ、でも。」

でも、と間を開けてから続けた。

「ワタシは親であるあの蛇を殺すつもりなのだけど、協力しない？」
それは提案だった。

この吸血鬼騒動で協力してくれるのはありがたいが、
ついさつき先輩に重傷を負わせ、今や彼女自身が吸血鬼である。

ありがたさよりも疑問と疑惑の感情が先立つ。

それに、蛇と言う単語が気になってしかたがない。

ああ、耳が遠い。

視界はより暗く、頭脳は徐々に停止してゆく。

まるで深海へと落ちてゆくようだ。

頭で寝てはだめだと言いつつも聞かせるが、限界を超えた肉体を制御できない。

「まあ、そうだよ。普通は断るよね。

でもワタシはいつでも歓迎している、そのことをよく覚えてくださいね。

志貴も——あれ？なんか意識が遠いっぽいけどじゃあね、志貴君。」

最後にそう聞こえ意識が——。

※※※

「くそつたれ」

—— 何もできなかつた。

後悔の念がただ心を搔きまわす。

弓塚に何もしてやれなかつた自分がどうしようもなく腹立たしい。

「俺は……。」

いったい何が出来るのだろうかと自問する。

「………わからない」

だが、まだ一日が始まったばかりだ。

夜までに考えよう、俺がすべきことを。

第7話「それぞれの思惑」

ここはどこだろうか？

ここは何だろうか？

そう疑問を感じたがわからない。

そもそも光を感じる事ができない。

五感はややふやで、意識がハッキリとしない。

ただどこか深みへと沈んでゆく感触だけは確かで、

さながら深海へ沈んでゆく沈没船のようだ。

やがて五感も遠くなり何も感じられなくなる。

自然と意識は薄まりまどろみに身を任せてそのまま眠る。

どれほどの時が過ぎたのだろうか？

いったい自分はこの前に何をしたのだろうか？

そう疑問を覚えた時、声が聞こえた。

——起きなさい

誰かが語りかける、

性別は判断できないがどこかで聞いたことのある声だ。

—— 起きなさい

先ほどよりもハッキリと語りかけてきた。

どうやら若い女性の声らしいが、誰かは思いだせない。
そして、

—— 起きなさい○○○○

誰も知るはずのない前世の名前で呼ばれた。

「!!」

刹那、ボクは意識を完全に覚醒させた。

飛び上がるように起き上がると、ほんの眼と鼻の先にいた誰かがひよいと避けた。

「君は……?」

そこに居たのは茶色のツインテールに通っている学校の制服を着た、

可愛げがあればクラスのアイドルになれたと友人の一人に嘆かされた愛らしい少女。

その少女の名は、弓塚さつきといい。

「こんにちはボク。」

今の自分であった、

まるで鏡に映ったような自分が実在していた。

「こうして会うのははじめてだね、○○○○」

「あ、ああ」

女言葉で目の前の自分が挨拶する。

いろいろあつた数日のせいでごちゃごちゃと考えがブレて冷静になりきれない。

彼女は何者か？

なぜ自分を知っているのか？

あれからどうなったのか？

聞きたいことが山ほどある。

「そうね、質問に答えましょう。」

私は本来弓塚さつきと呼ばれる少女であつたはずの人物の魂あるいは人格、その残骸
「よ。」

「あつたはずの人物の残骸、まさか……。」

前世からの趣味で数多くの二次創作を読んできかずと前から疑問に思っていた。

憑依した人物の本来の魂や人格はどこへ消えてしまうのだろうか——と。

その検証は前世においては非生産的な思考であつたが、

今世でその思考実験を体現することとなり、色々試したが結局結論は出なかった。得られたのは若さも相まって厨二的黒歴史の大量生産だけであった。

だが眼の前の彼女は言う「あつたはずの人物」と、つまり。

「うん、私のモデルは貴方のイメージする弓塚さつきになるはずだった魂よ」

つまり眼の前の自分は本来の弓塚さつきであった。

どう反応すべきか、オリジナルが目の前にいるという事実。

今日まで考えて来たが日常を謳歌し、彼女の本来の居場所を奪ったことにちっぽけな良心に痛みが走る。

自ら意図したわけではないが彼女からすれば自分はカツコウの託卵のようなもの。

一体どんな顔をすればいいのだろうか、なんて言えればいいのか分らない。

「そう身構えなくてもいいわ、別に積極的に貴方にとって変わろうとする気はないし」
身構える自分に対して彼女は苦笑する。

「元々何らかの原因で平行世界、

いいえ、もはや異世界と表現してよい世界からこの肉体に転生した結果。

貴方が言う「原作知識」で四季やシエル先輩がロアのように対象の魂と融合し、寄生先の人格を潰した」

そして、自分はそのロアによって吸血鬼となった。

実に皮肉である。

「ここで注意するのは、貴方がしたことはロアのやり方とは違う。

なぜならロアは対象に自我が宿った後にロアの自我が現れるけど、

貴方の場合「弓塚さつきという自我が成立する前に貴方という強い自我によって上書きされた」ため、

どこぞの殺人衝動持ちの神様のように二重人格で苦しむこともなく、せいぜい肉体と精神のギャップに苦しむ程度に済んだ」

なるほど、人格が育つ前に人格の上書きをするか。

憑依先の人物の行方といった長年の疑問がようやく解消された。

だが、それでもなおいくつか疑問を覚える。

例えば「自我がないなら何故今こうして復活、いや誕生したか」である。とはいえず測はだいたいつく。

公園でシエル先輩と対峙した際に血を吸う鬼として振舞った反転衝動。

彼女はそこで初めて現れた、さらには彼女は自分のことを最初「人格の残骸」と称した。

つまり――。

「貴方という人格に押しつぶされた結果。」

ワタシという人格は貴方を主導とする人格で統一された。

もっともそれは女性趣味、思考といった形でしか影響を与えない程度だけど。

けど、吸血鬼ロアの人格が表に出ると対象は吸血鬼ロアの人格に変化してしまうように、

弓塚さつきが吸血鬼化した結果本来あつたはずの魂、本来の人格が反転した人格として復活、いえ新生した。」

つまり、自分の立ち位置はロアと同じだ。

違いがあるとすれば対象の人格が成長するのを待つてから人格を乗っ取るのがロア。対して待たずにそのまま乗っつたのが自分であり、

吸血鬼になつたから寄生した人格が復活したのでなく宿主の人格が復活した。

しかし、こうなると。

固有結界「枯渴庭園」が使えないのは確かだ。

今さらながら周囲を見渡すところは上下左右ひたすら白い空間が広がっている。彼女とこうして話せる事を考えるとここが心象世界の類なのは間違いない。

しかし、枯渴した庭園でないことを思うと自分には固有結界は扱えないだろう。

「代わりに空想具現化が使えるわ」

空想具現化か、たしか真祖の能力だったけ。

自然物に干渉することで自らの空想を世界に干渉する能力……わつと？

「空想具現化よ」

いや、まてまてまて。

空想具現化つてそんな馬鹿な。

たしかに、たしかに、小学校時代に童心に帰つて、

マールブル・ファンタズムごっこかしたけどそれが原因なのか!?

納得いかないぞ、原因究明を断固として求める。

「少しは自分で考えなさい。

はあ、幸運値といい頭の具合も天然でアホの子疑惑の弓塚さつきに似ることもないのに。

冷静に見えて意外と頭が緩いのね、あるいは元からそういう要素があつたからこそ貴方は弓塚さつきに慣れた、いえ成れたと言うべきか」

……なにやらかなり失礼なことを言われた。

だが、説明してもらわねばこちらが困る。

これは原因を知っている者がしなければいけない義務だ。

「いいわ、じゃあまず貴方はこの世界へどうやって来たのと考えているの?」

もう一人の自分の意外な問いに戸惑う。

一体今の話と一体全体どう繋がるのか分らなかつたからだ。

それは当然平行世界の移動、

正しくは魂のみが移動して別の人間の肉体に憑依した、そんなところだろう。

「そう、それは常識的思考ね。」

でも他にも仮説があるでしょ？

——そう、根源を通過して辿りついた可能性を」

ありえない。

そんな、可能性はありえない。

第一に根源に触れて明確な自我が保てるとは思えない。

しかし、だ。

それを【間違っていると証明することはできない】

なぜなら、それならば元から特異ゆえに人間の肉体から解放されて特殊な能力が備わつたと説得力を持つ。

もつとも、そもそもどうやってこの世界に辿りついたのか観測できてないので彼女の説も【仮説にすぎない】

「そうね、貴方の言うとおりこれは仮説にすぎない。

単に魂が違うから固有結界の代わりに空想具現化が使えるだけかもしれない」

結局こうして話し合ってもお互い何も分らないことばかりだ。

そして、空想具現化が使える代わりになんらかの制約があるの难道？

「正解、空想具現化なんて代物が死徒スミレのように素面じゃないと使えないのと同じでそう気軽に使えるものではないわ。」

使えば吸血衝動の暴走が強まって大量殺戮を起こすし、グラウンドに大穴をあけることができて先輩に狙われている現状じゃあまりおススメできないわ」

つまり、今後空想具現化は使わないほうがいいという認識でいいんだな。

やっかいだな、折角の火力を生かすどころかこれではどの勢力からも目の敵にされる確率が高い。

立ち回り方も慎重にしなければ即座に知得瑠先生の教室へ入室を余儀なくされるだろう。

まったくもって最悪だ、一体全体どうしてこうなった。

まるで世界の悪意でも働いているかのような展開だ。

「あら、そろそろ時間ね」

そう彼女が呟くと光が空間に満ち溢れる。

眠気と気だるさが降りかかり瞼が重い。

「さあ、戻りなさい。貴方にとって今の現実に。」

意識が薄れてゆく。

もう一人の自分が徐々に光と共に消えてゆき、ボクも消えゆく。

またこうして会える日が来るのだろうかと考えつつ意識は雪のように溶けていった。

※※※

例のニュースがこの街をにぎわせているが、道行く人々の表情に変わりはない。

いつもと変わらない朝、変わらない風景。

ひよつとして昨日の出来事は夢か幻ではないだろうか。

そんなふうを考えてしまったフラリと校門の影から出て来た人物の姿を見た時思わず足を止めてしまった。

「おはようございます、遠野君」

シエル先輩だ。

五体満足な先輩が待ち構えていた。

何気ない挨拶だがその眼光はまるで獲物を狙う狙撃兵のようだ。

「先輩……昨日……」

「そうですね、

まだ朝の授業まで時間がありますし一緒に来てくれませんか？
お互い色々と話し合う必要があるようですし」

「……………」

昨日のことはよく覚えている。

足を切られたにもかかわらず即座に回復する肉体。

さながら創作物に登場するエクソシストのような体術。

遠野志貴にとつてこの先輩には謎が多い。

だが確かに言えることは、

今この街を騒がせている吸血鬼についてこの人は知っていることだ。

「…わかった、俺も先輩に聞きたいことがある」

※※※

俺達は「茶道部」と書かれた部屋に移動した。

部員は先輩一人だけのようでは誰もいなかった。

「さて、遠野君お体のほうはどうですか？」

「先輩の気遣いありがたいけど。」

それより先輩、先輩は何者のですか？それに弓塚はいつたい……」

先輩がのろりとはぐらかす様な口ぶりだったので、

先手を打つように一気に疑問を投げかける。

「せっかちですね、遠野君は。」

「はぐらさないでください先輩!!」

ダン！と畳を叩きつける。

俺はお抹茶を手にして微笑む先輩を睨む。

うやむやにされる前に最低限これだけは聞きたい。

「……どうして、も。ですか？」

「ああ、たとえ無理矢理にでも聞き出す覚悟は今の俺にはある」

何時もと違い淡々と述べ、眼光に力が入った先輩を負けじと睨み返す。

ポケットに入れたナイフには既に手にしておりいつでも突きだせる。

本音を言えばあまりしたくはないが、こうでも聞き出さないときつと後悔するはずだ。

「……はあ、わかりましたよ、いいでしょう、話しましょう。」

しばらく睨みあっていたが先に折れたのは先輩だった。

観念したように大きく溜息をついてからシエル先輩は語り始めた。

「私は教会の代行者、映画とかに出るいわゆるエクソシストという奴です。

この街に来たのはこの街を騒がせている吸血鬼の殲滅。そして弓塚さんは私の標的の1人という訳になります」

「な、弓塚が標的!!?」

まさか、弓塚が最近騒ぎの元凶である吸血鬼だというのか!?

そんなはずがない、なぜなら吸血鬼事件は少し前からあったものだ。

「そうですね、弓塚さんは元凶ではありません。」

正しくいうならば元凶の吸血鬼によって生まれた子です」

「子って、でもアルクエイドは吸血鬼にかまれたら意思を持たない死者になるって……」

「ええ、その通りです。」

本来ならばそうして時間をかけて吸血鬼になるはずですが、

驚くべきことに彼女は僅か一日そこらですでに吸血鬼として独立しています。

これは古の27祖に匹敵する恐るべき才能です、代行者として元凶ともども処罰せねばなりません」

目から穏やかな光が消え、

表情は冷たく、淡々と事務的な口調で話す先輩に苛立ちを覚える。

「納得できませんか? ええ確かに被害者でしょう。」

ですが、彼女はもはや人に害をなす強力な魔です、遠野君も昨日見たはずですが、それは、そうだ。

否定できる要素なんてない。

昨晚で弓塚は文字通り血を吸う鬼と化した。

でも——。

「でも、俺は弓塚を助けたいんだ。あいつならきつと——っ!」

刹那ゾクリ、と濃厚な殺意が襲う。

「貴方に彼女の何が分かるのですか」

ギリ、と歯を噛む音が聞こえる。

いまにも殺しに来る殺意が混じった口調で言う。

「遠野君、貴方は一体何なのですか？」

真祖と協力するだけで留まらず弓塚さつきを救うとでも言うのですか？

貴方は何者ですか？日常を犠牲にして貴方はなぜそうも死に急ぐのですか？

何故そこまで彼女達にこだわるのですか？それをよくよく考えてください、さもなければ——」

「

次は少々手荒に対応せざるを得ません。

そう言い残し先輩は部屋を後にした。

そんな先輩を俺はただ呆然と見送るしかなかった。

俺にとって弓塚は何なのか？

俺にとってアルクエイドとは何なのか？

中学からの友人だから？

殺した責任を取るためか？

同じクラスメイトで親友だからか？

吸血鬼退治の仲間だからか？

それとも――。

「…分からない、俺には分からないよ先輩」

第8話「それぞれの思惑Ⅱ」

「
」
繁華街の裏、暗く入り組んだ路地裏を男は走る。

背広や靴に埃やゴミがつくが男はそれに気にかけない。

というよりも、男は既に人として死んでいるようなもので気にかける意識自体なかった。

しかし、それでも男は生存本能に従い走る。

後ろから迫ってくるより人でない存在から逃れるために。

「
」
ちっつ、意外に早い」

10代半ばの少女であった。

華麗や美人というよりも可愛らしい顔つきをして彼女は、

学園のアイドルまではいかないがクラスのアイドルになれる逸材であろう。

が、そんな彼女は今現在地面に足を付けず、

アクション映画か何かのように風を切るがごとく壁を跳躍し男に迫って来ている。

女学生の平均的な身体にも関わらず人を超越した動きは異質さを強調していた。

やがて猫と裏の住民を除き、

誰も来ることもない路地裏の奥の奥まで行き、ついに行き止まりに辿りついた。

「……………」

男は生気がこもってない瞳で辺りを見渡すがどこも逃げ道はない。

先ほどから追って来る自分より強力な人外を感知して真後ろを振り向く。

「——同情はする、同じ被害者だから」

オリンピック選手並みの速度で移動したにも関わらず息切れの一つもせず彼女は
呟く。

男よりも身長は年相応程度しかないが、その身体から発せられる圧倒的な力に男はた
じろぐ。

思考に意識は死者には存在しないが、

身体に刻みこまれた生存本能が彼女の危険性に警鐘を鳴らしている。

本能が恐怖として口をパクパクと開けるが、ひゅーひゅーと空気が漏れるだけだ。

「……………まさか死者なのに記憶でもあるのか？まあ、でも」

少女は眉間にしわを寄せ悲しげに、哀悼の意を示すように一度眼を瞑った。

やがて、紅色に染まった眼を見開くとだらりと下ろした両手をゆっくり、大きく振り
上げる。

「――仇はとつてやるから来世に行くといい、転生したボクが保障する。きつと行けるはずだから」

相対距離は約5メートル、

にもかかわらず振り下ろされ、直後男の体は引き裂かれた。

ネオンの光はなく、ビルの間の月明かりだけが頼りの路地裏で殺人事件が起こった。

肩から腰にかけて肉が爪で引つ搔かれたように裂け、血吹雪が舞いあがる。

骨が碎ける音とともに臓物が腹から地面へ溢れ出て、肌寒い季節もあり臓器から湯気が立つ。

身体を支える筋肉と骨が引き裂かれた男はその場で倒れる。

やがて男の肉体は灰へと帰り、男は本当の意味で死んだ。

後に残った背広や靴が誰かがいた事を示していたがきつと誰も気が付くことはないだろう。

こうして死者の一人は虚無の闇へ還っていった。

「さようなら」

完全に男が消えてから少女は次の死者を狩るべく跳躍しようと構えた瞬間。

「おい、弓塚!!」

「え?」

弓塚さつきが振り返った先には息を切らした遠野志貴がいた。

※ ※ ※

「くそ、どいだ。」

ネオンの光が眩しい繁華街を歩く。

吸血鬼騒動があっても繁華街の活気には変化はなく、

すでに夜の11時は過ぎているが街はまだ眠らない。

が、元より頑丈ではない俺の肉体は既に眠気と疲れを感じている。

明日秋葉や翡翠が心配するかもしれない、と考えてしまうがそれでも俺は通りを歩く。

ふと、視界の脇に交番の掲示板が眼に入る。

そこには吸血鬼騒動が原因と思われる行方不明者の顔写真欄に彼女の写真があった。

「……弓塚」

弓塚さつき、中学からの友人である彼女は昨晚以来俺と同じ非日常の世界へと入ってしまった。

彼女はアルクエイドが探す吸血鬼によって吸血鬼にされてしまい、化け物になった。

人に害をなし、生き血を啜る怪物に。

真祖と協力するだけではとどまらず弓塚さつきを救うとでもいうのですか？

貴方は何者ですか？日常を犠牲にして貴方は何故そうも死に急ぐのですか？

放課後の先輩の言葉が思い出させる。

たしかに友人である弓塚、さらには出会って数日程度のアルクエイドにここまで執着するのは変かもしれない。

いや、よく思えば俺は昔からこうだった。

まだ有彦と知り合ったばかりの昔、有彦になぜ俺に構うのか聞いた時あいつはこう答えた。

「オマエ、壊れているからな」

と言い、「このクラスで俺のライバルになるのはオマエだけだな」

とうそぶくや否や俺の給食のプリンを横取りしたのをよく覚えている。

なんてことはない、

公園でやってしまったあの惨殺もこうして夜の世界へ飛び込んで行くのも何もかも偶然ではない。

遠野志貴という人間は始めから周囲の人間から外れた異端者で、壊れた人間だったのだ。

にも関わらず自分を人畜無害な人間だと思ひ込んでいたのは喜劇か悲劇か、果たしてどちらだろうか。

それは恐らく悲劇だろう、

使われぬ道具ほど悲惨なものはない。

道具は常に手入れし、長く使つてこそ価値がある。

じゃあ、今はどうか？

例えるならば余計な錆が身体全体に張り付いたなまくらなナイフだ。

これではだめだ、錆びついた道具は磨いて錆を落とさなければ。

ちようど街に来ていることだ。

人気のない所で適当に獲物でも見繕うとしよう。

こんなにも月が綺麗で、殺すには丁度良い——。

「え？」

繁華街の隅の路地裏で一瞬、弓塚の横顔を捉えた。

「おい、弓塚!!」

まさかと思ひ声をあげる。

人ごみをかき分け、押し分けつつ路地裏へと走る。

さほどの走らぬ内に目的の人物を視界に確かに捉え、

目的の人物は後ろから人が追ってきたのに気づいてこちらに振り返った。

「…うそ!？」

やっぱり彼女だった。

向うは相当驚いたようで瞳が大きく開く。

直ぐに逃げるように暗く細く入り組んだ道に逃げ込んだ。

「おい! 待て!!」

「来るな!!」

間違いない、あいつの声だ。

女の子なのに随分と変わったあいつだ。

「待てよ!」

「いいから来るな!」

返答は明確な拒絶、なぜか胸を苦しげに押さえながら逃げる。

足取りも確かではなく、よろけつつも離れようとする。

今度こそ――。

「う、」

その願いもむなしく突然目眩を覚え、視界が歪に歪む。

足を上げる動作は重く、服の重さすらも重く感じる。

息は幾ら吸いこんでも荒く、心臓は爆発寸前だ。
何時もの貧血に似た発作だ。

これが何時もなら自分の体だから仕方がないと納得できるし恨みはない。
が、俺はこの今初めて自分の体を憎らしいと感じた。

「あ——ハア——ハア——」

視界が暗く、感覚が狂う。

手を伸ばすが彼女は背を向けたまま去ってゆく。

ここで、こんな所で！

納得できないとばかりに渾身の力を振り絞って身体を駆動させるが、

「が——!!?」

思いとは逆に身体はついて行けず、足がもつれあっさりと転んでしまった。

当然のことながら彼女は待つてくれるはずもなく、

転んでいる俺を置いて行くように10秒も経たぬ間に彼女は姿を消してしまった。

それこそ気配のかけらすらも残さずに。

「弓塚……」

※ ※ ※

「はあ……」

辺りを見渡す志貴を尻目に屋上から見下ろす。

本当はこうして低いビルでも姿をさらすのは危険だが

又持病の貧血を起こしたらしい志貴を見捨てるわけにはいかずこうしている。

だけど、次の死者を気配で探していたがまさかあいつに会うとはね。

一応ここ三咲町もそれなりに大きい地方都市なのでエンカウント率も低くなるはずなのに。

「だけどあの衝動は……」

問題はあいつを見て胸から湧き上がった衝動。

この体になって時折この世界の家族を思い出してこみ上がったものと全く同じであること。

父親と母親、妹。

家族構成は自分を含め4名。

ごく普通の家庭、

毎日がつまらなくありふれた日常の日々。

これといった信念も確固たる思想もなくただ日々を過ごす象徴。

そんな象徴をボクは
貪りたい、犯し尽くしたい。

その首筋に噛みつき血を啜りたい。

恐怖に歪んだ顔を踏みつぶし、肉片に変えたい。

体が疼く

つられて視線が下の人物に集中する。

志貴も同じようにその血を啜りた——。

「…っ!! 静まれ、落ちつくんだ」

視線を逸らすが発作のように震えが止まらない。

眼がさめてから時折凶暴な何かが出そうで怖くてしかたがない。

気が狂いそうで輸血。パックで誤魔化せなさそうだ。

——ただ分ったことは、好意という感情が吸血衝動を引き起こすこと。

いずれこの街に来るであろう錬金術師は自虐するように呟いた。

そんな前世知識とこの現状を照らし合わせると、

「ボクは——」

家族はたぶん家族愛、親愛の好意から来るものだろう。

が、この遠野志貴に対する衝動はなんだろうか？

彼が【物語の主人公】に対する好意から来るものだからか？

彼が【学校の友達】から来るものだからか？

それとも、【男女間の好意】として。

つまり恋心を抱いているのか——？

いやいや心は男の…つもりだが体は女の子で

一方向こうはれつきとした男子だが心は同じなので同性愛になるのか？

趣味嗜好は変化してないからきつと自分は男のまま——。

まてまて以前空の境界でこういうのを…。

「ガラじゃないな、難しい事を考えるのは。」

頭を振り、ごちゃごちゃになった思考を除く。

TSによるギャップに今は動揺する暇はない。

まだまだ死者は100名はいるはずなので早めにケリをつけなければ。

「あと8日ぐらいか？」

頭上を見上げればゲームのように蒼くも大きくもない月が夜を照らす。

今日の月は昨日より欠けている分が少なく、満月が来つつあるのをこれでもかと思

つけている。

吸血鬼になってからは月を見ていると何となく力が沸き上がるが今はただ忌々しい。

「負けるか、ああ負けてたまるか。」

ボクは月を睨みながら呟く。

ロアを殺した後なんて考えていない。

正しくは深く考えたくないと言うべきか、どんなに原作知識を動員しても悪い予想か思い付かない。

シエル先輩に眼を付けられた以上よほど運がないかぎり路地裏同盟のような呑気な未来はこないだろう。

「絶対に許さない。」

ロアは何が何でも許さない。

こうして死者を狩っているのも正義感からではなく、

ロアをおびき出す作戦であり、本音を言えば単なる八つ当たりすぎない。

そして友人として志貴にあまりかかわって欲しくないが、

正直彼の戦力が欲しい、それこそ自分のためという薄汚い考えが同時に浮かぶ。

当事者である彼は今まさに直ぐそこにいるが、既に志貴は巻き込まれているとはいえないが進まない。

「お休み、志貴。」

いまだ下でうろろしている志貴を見送りつつその場を離れる。

原作によれば死者はおよそ1000体、供給源を断つには塵に返すほかにない。さらに街全体に張り巡らせた魔法陣を破壊し、あいつを弱らせる必要がある。さて、やれる所まで抵抗してみせるか――。

第9話 「それぞれの思惑Ⅲ」

「なんなんだよー」

路地裏でもまだ明るい地域で少年は逃げる。

悪態を叫びながら大通りに向けて普段の怠けが嘘のように必死に走る。

どうしてこうなって？

どうしてこんな目に会わねばならないか？

逃走する赤毛の少年こと——乾有彦は思った。

切っ掛けは偶然だった。

学校でも数少ない友人が行方不明になったことだ。

他人にあまり関わろうとしない自分の主義からして、

いつもなら気に留めなかったが彼女は中学からの付き合いがある人物だった。

だが、自分ではどうにもならない事は分かっている、毎日ニュースで確認する程

度の心配をした。

が、ある噂を聞いてしまった。

曰く、弓塚さんが〇〇通りあたりの路地の入り口で見かけた。

それからだ、その晩に殺人事件があるからあまり出歩くなと言う姉の言葉を聞き流し別にそこまで遅くなければ大丈夫と思ひ、大通りを抜け変な猫に誘われて気がつけば、このありさまだ。

「くらえ!!」

通路横の重いゴミ箱を蹴り進路を妨害させる。

人一人がようやく通行できる路地裏なら少しは効果があるはずが、

ガシャン!!と派手に転んだが、すぐさま立ち上がり生気が抜けた表情で追い掛けてくる。

続けて蹴ったビール瓶のボックスも避けもせず何事もないかのように直進し、弾き飛ばすありさまだ。

「――」

その人物、いやもう人ではなくなった生ける死人、

一見どこにもいるサラリーマンだが目に生氣はなく、首は歪に曲がっている。

まさにホラー映画の題材を体現した物が逃げる彼の後ろを全く速度を緩めずに追いかける。

「おいおいマジかよ。あいつゾンビとかじゃねえよな」

こんな時も軽口を叩くが冷汗が絶え間なく流れる。

あの時、変な猫にふらふらと誘われ

眼が覚めた瞬間に男がキスしてきそうだったので自称自慢の右ストレートで撃ち抜き

当たりどころが悪すぎたのか相手が倒れ慌てて様子を見ようしたが、

白目をむいたまま噛みつきこうとした。

その後はとつさの事でよく覚えてない。

ここは危険だと第六感が告げ、こうして現在の逃走劇に至るに違いないとしか言えない。

「お、人か!？」

前方から人影がゆらりと出現する。

文明の道具である照明も碌にないこの路地裏で出会う人間など、

大概碌でもない人間の類であるが、今は例えどんな道徳的観念を持ち合わせた人間であつても、

自分と同じ本当の人間に会えたことが何よりも安心させた。

「あ」

が、どうやら後ろから追いかけてくる仲間だったらしい。

まるでゾンビが歩いているような足取りで乾有彦に近づき、生気の虚ろな瞳で自分を

見つめていた。

一瞬で希望が絶望へと墮落した瞬間だった。

刹那、前のゾンビは口を大きく開き、声にならぬ唸り声を挙げて乾有彦に襲いかかった。

突然のことだったので、乾有彦は動けなかった。

希望が絶望へと変わった動揺で対応することもままならず、

呆然と自分に襲いかかる人間を見届け内心でポツリと呟いた。

ああ、死んだ。

頭で考えなくても体が分かってしまう。

お前はもうすぐこいつらと同類になるのだと。

何の意味もなく、無慈悲にここで短い生を終える。

そう、乾有彦の人生はここで終わる――。

かと思われた。

「え――？」

視点が変わっていた。

地面の香りが鼻を刺激する、どうやら地面に横になつてゐるらしい。

しかも、ここで死ぬはずだった生がまだ存在している。

視線を彷徨わせると正面に誰かの背中を捉えた。

大きくもなく女性独特の小さな背中と垂れたツインテール。

まさか、と、乾有彦が考えた時女性は口を開いた。

「使い魔で誘い込むなんてなかつたはずだけど……いや、ボクもそうして誘い込まれたし」

中学の頃からの友人、弓塚さつきの声が響く。

今の今までどこに行つていたか、なんでこんな所にいる。

等の疑問は山ほどあり、一度唾を飲み込み口を開けようとしたが、

声が出ない、

襲いかかつてきた2人に対して睨んでいる弓塚さつきから見えない殺意が出される。

空気がピリピリと痺れる程の明確な殺意が場を支配している。

「う……あ……」

ありえない、と音声の代わりに心が訴える。

人のカテゴリーであれば存在してはならないはず。

あれは人の皮を被った正真正銘の化け物だと生物本能が警告を鳴らす。

「——つづれろ」

彼女のどこまでも冷えきった響きと共に腕が振り下ろされた。

襲撃者と弓塚との間の距離は大分離れていたはずなのに？

と乾有彦が疑問を一瞬浮かべたが、直後の光景が彼の予想を裏切った。

まずは血漿が噴出し肉が裂け。

次に鈍く骨が砕け、臓物が噴き出し。

最後に体がスライスチーズのごとく縦に細かく裂かれた。

この3つのシーンが音響効果と共に一瞬で為された。

遠距離からまるで薙ぎ払ったように壁に大きな爪痕を残し彼らは消滅した。

辛うじてここに居たという証は壁際まで大きく付着した血痕のみだった。

…何が起こった？

あまりに非現実的な光景に乾有彦は言葉を失う。

彼女から発せられるただならぬ空気といい、思考が追い付かない。

「……うつぶ、やつぱキツイ」

ふつと、重苦しい空気が消えたと思えば彼女は片膝を地面につき口を抑えていた。

一方の助けられた乾有彦もやつと混乱気味な頭が冷め、話すだけの余裕も出た。

「おい！弓塚。あのヤロウは一体何だよ！！しかもお前何処に……！！」

立ち上がり、強い口調で問い詰めるが彼女は答えようとしない。

それどころか乾有彦が立ち上がった気配を感じた途端顔を振り向かず距離を取った。

「……ゴメン、今は説明できない」

「弓塚……」

乾有彦は頭では何らかの理由があつて弓塚さつきがこんな態度をしている事は理解し、

そんな態度を取らざるを得ない弓塚さつきの現状と何もできない自分に苛立ちを覚えた。

——説明するつもりはないってか？だったら強引にでも聞きだしてやる。

そう思い弓塚さつきに一步踏み出した途端、場違いな風切り音を両耳は捉えた。

「っ……！！！！」

弓塚さつきが振り返り、腕を振った瞬間火花が路地裏を照らす。

「うお！！」

一瞬の出来事で事態を把握するより前に、さらに連続して剣のような物体が飛来し続々と着弾する。

着弾するたびに土煙りが舞い上がり、アスファルトの地面を抉り破片が飛び散る。

「——な!？」

驚きのあまり乾有彦は言うべき言葉が分らなかつた。

先ほどのゾンビや弓塚さつきの超人的な能力と言いもはやこの一連の事態を理解することは不可能であつたからだ。

やがて嵐のような攻撃がやみ、再び暗闇に眼が慣れてくると。

「いない?」

土煙りが晴れた先には誰もいなかつた。

墓標のごとく十字の剣が突き刺さっているだけだ。

いや、正しくは一人いた。

その人物は乾有彦にとつて以外過ぎる人物であつた。

「逃げましたか……こんばんは、乾君。」

「シエル先輩?」

カソツクに身を包んだ学校の先輩が人懐っこい笑みを浮かべて、ついさつきまで弓塚さつきがいた場所で振り返る。

いつもと同じ可愛くて頼れる先輩といった感じだが、彼女の青い瞳は笑っておらず不気味なほど冷静なものであつた。

「まったく、いけませんよ。夜遅くまで出歩いては」

「いえ、シエル先輩、そりや、そうですけど……」

——先輩はどうしてこんな事を？

そう口にしようとしたが、ふと気付く。

思ったがいいが、口が動かない。

それだけではない、全身がまるで金縛りにでもあつたかのように動けないことに。

「乾君、帰りなさい。そして忘れなさい」

弓塚さつきと同じく人ならず気配を纏いつつ有無言わずの言葉に乾有彦はたじろぎ

「あ、れ……？」

ぐらり、と体が傾き意識が朦朧とします。

頭は、急速に解体されつつある理性は警告を発し続けるが、

それよりも先に脳の各種機能は停止し、やがて意識を失った。

※ ※ ※

「彼女は完全に飲まれたわけではなさそうですね」

巻き込まれた学校の後輩がすっかり路地裏から出て行ったのを確認してから、

この身が不死身とはいえ、一度殺されるはめになった相手の様子を回想する。本来一度でも吸血鬼として堕ちれば精神も肉体も吸血鬼らしくなる。

具体的には良心や人間らしい心の葛藤は無くなり、魔として暴虐の限りを尽くすはずだが彼女はやや違う。

わざわざ死者を倒すのは親であるロアを殺すための布石と解釈可能だが彼女は人間のころの友人を助けた。

自分を殺したのは自衛のためという要素が大きいことから、まだ人間らしい精神を保っていると言えるかもしれない。

——何もかも滅茶苦茶にしてしまった自分と違い。

「……今はそれでも、かつての私のようににしないととは限らない」

シエルは探索を続けながら湧きあがった言葉に対し言い聞かす。

かつての自分はロアに抵抗しきれず罪を犯した。

片や彼女は時間の問題かもしれないが未だ自分以外の人を殺していない。

人を殺した人数で罪の重さは変わるとは言い難いが

その差がシエルの心に理由が分からない気持ちで沸く。

——しかし、なぜ彼女は吸血鬼に成れたのでしょうか？

ふと湧いた疑問。

自分はロアという吸血鬼の特性のせいでグール、リビングゲッドドといった過程を飛ばして吸血鬼に成れたが、彼女、弓塚さつきは単に嘯まれて成ったことを考慮すると凄まじいポテンシャルを秘めていたことになる。

さらにそれだけではない。

魔は魔を引き寄せる

そんな言葉があるように

この三咲町にはまるで凶ったかのように異能の存在が集っている。

これが果たして偶然なのだろうか？

「そういえば、ここらは候補である混血の末裔が治めている土地ですね」

ロア転生候補としての事前知識が浮かぶ。

本来ならば調べる必要はなく先に門答無用に弓塚を処分し、

しかる後にじっくりとロアが姿を見せるまで街を探索すればいいのだが、

シエルは少しばかり気にかかり一度足を止める。

「危険ですが確かめる価値はあるかもしれませんね」

もしかするその場所は魔術的な要塞と化しており、

危険かもしれないが、一気に本拠地と予想される場所を突くのもたまにはいいだろ

う。

遙か彼方の丘にある屋敷、遠野邸を見つめ彼女は呟いた。

第10話 「それぞれの思惑Ⅳ」

「なるほど、意外と奥が深いのですね日本の混血とは」

夜のとある屋敷の書齋でカソック服に身を包んだ女性が言う。

当然のことながら無断侵入であるが埋葬機関としてあらゆる訓練を受けたシエルには造作なかった。

とはいえ、元々シエルはロアの転生候補として遠野志貴に注目していたため、わざわざこうして遠野の屋敷に忍びこみ家系図などといった資料を調べる気はなかったが、

遠野志貴の豹変ともいえる真祖アルクエイドとの共闘、さらには即座に吸血鬼に成れた弓塚さつきの登場。

などといった変化がシエルにこの騒動の原因と考えられる遠野の一族に興味を抱かせた。

「…軋間の分家の分家に弓塚がありますが、途中で書かれてませんね」

ハラリ、とめくられたページには分家の分家に『弓塚』の名が記されている。

しかし60年前以降は系統が記されておらず、没落したのかあるいは断絶したのかは

わからない。

「彼女は混血の末裔で先祖返りの可能性あり、と。」

とはいえ、同姓の可能性もありますし明日住民票などで確認しなければいけませんね……むっ？」

さらに別の本に手に付けた時、

ふと感じた違和感を覚えつつ本を開けば、本をくり抜いて鍵が隠されているのを見つけた。

「鍵、ですか」

アンティーク調の鍵を手取る。

この部屋に侵入した際、真っ先に調べようとしたが鍵が掛っていたので後回しにした、

事務卓の引出しに鍵を差し込むと予想通り引き出しは開いた。

「これは…遠野家本家の家系図、

やはりどれも反転したせいで短命ですが——こっちは手記？前当主遠野楨久の家系図に載る人物はどれも長生きできずろくな死に方をしていない。

それこそ呪われているとしかいえない血族、と表の人は言い表すぐらいに。

が、事前知識として魔の混血が至る運命を知っているシエルは特に違和感を感じな

かったが、

前当主が残した手記は興味を引く物であった。

遠野には魔が宿る――。

そう始まる手記にはこの屋敷の住人の在り方が記されていた。

「……………」

どれほど時間が経過しただろうか、

シエルは遠野家が隠す数々の暗部を知り、

【シキ】の名前にどこか違和感を感じ始め、真相にたどり着こうとしたが。

「夕方のアルクエイドさんはともかく。

こんな夜遅くに父の部屋に何用ですか、お客さま?」

鈍い木製のドアが開く音と同時にこの屋敷の現当主が姿を現す。

月明かり程度の明かりしかない部屋で彼女、遠野秋葉は正確に不法侵入者を見据えていた。

「……遠野君によると、いつもは寝ている時間帯だと記憶していましたか？」

シエルは手記から視線を外し、音もなく現れた秋葉に驚かず言う。

「…不法侵入者に答える義務はないと思いますが、いかが？」

「あはは、そうですね。」

ですが『弓塚さつき』という名前に聞き覚えはありませんか？」

少しだけ間を開けて秋葉が冷やかに答える。

「……さあ、兄さんのクラスメイトと聞きましたが？」

当たり障りもない回答をするが、この時秋葉の頭にはその名前が強く記憶された。

「そうですか、ちよつと厄介な事に彼女吸血鬼でどうもここによると『軋間』の分家の方

らしいですけど？」

完全に確定された情報ではないが、ブラフとして出された内容に秋葉は僅かに反応し

た。

特に『軋間』の単語に一瞬だけ怒り、焦燥、驚愕といった感情がほんのわずかな一瞬

に噴出した。

わずかな単語の欠片と今の街の状況から秋葉は眼前の侵入者、シエルがいたいこと

を先に口を開く。

「……」の遠野の屋敷に侵入したのはそれだけでなく、私や兄さんに何らかの関係がある

のかしら?」

「その通り、私はとある吸血鬼を追つてまして。この遠野家が一番怪しいと睨んでいるのです」

シエルは相変わらずにこやかに対応するが、

秋葉からすれば貴女の家族を殺す必要があると宣言する侵入者にしか聞こえなかつた。

「で、身内に吸血鬼なんていらつしやいませんか?」

シエルが懐から黒鍵を取り出し、俄かに室内の緊張感が膨れ上がる。

それだけでなく、秋葉は相手に脳を覗かれているような違和感を感じ、直ぐにその原因を看破した。

「人にモノを尋ねる時に、

そんな物騒な物を出してそう答えると思ひまして? 暗示といい」

常人なら何がされたか理解できずに、

そもそも暗示が掛けられたのも自覚できぬまま本心をさらけ出すはずが、

下手な魔術師よりも神秘側の人間である秋葉にはその手の小細工は無意味であつた。

「なるほど、混血には暗示が効かないと、まったく、困りましたねえ。」

「こうなれば遠野君は弓塚さんに夢中ですがもう一度会つて聞くとしましよつかね…」

まったくもって面倒だと言わんばかりの態度で、

シエルは秋葉の前である種禁句とも言える兄の名を持ちだし――。

「そう、なら――」

ゆらり、と秋葉の姿が歪む。

それにシエルは一瞬理解できなかつた、

こんな真夜中に蜃気楼が遠野秋葉の周辺に発生することが。

否、これは自然現象ではない。

これは混血の能力――シエルが咄嗟に黒鍵を秋葉の影に投擲し、

影縛りの術でその動きを止めようと試みたが、それよりも早く秋葉の攻撃が届いた。

「ぐっ――!?!」

炎、否。

熱そのものがシエルの腕に蛇のごとく巻きつき皮膚を容赦なく焼き付ける。

――発火系の能力!?!とにかく一旦下がりましたよう!

そう判断するとシエルは素早く窓を割り外へ逃走した。

「逃がさないわ、どこの誰だか知らないけど兄さんに手を出させてたまるものですか」

秋葉はどこに侵入者、シエルが行ったか確認した後、

内心に溜められた怒りをぶつけるべく優雅にシエルと同じように窓から出て追跡を開始した。

斯くして、ここで異形同士の戦いが始まった。

※ ※ ※

夕方家に帰ってきた時になぜかアルクエイドが寛いでいた。

しかもその時翡翠が部屋に入って来てどう説明すればいいのか慌てたが、

アルクエイドが暗示で誤魔化してくれた後にこの我儘なお姫様を外に連れ出した。

……けど、どうやらこのアーパー吸血鬼。

どうも秋葉に目撃されたどころか秋葉と会ったらしい……明日、秋葉になんて説明すればいいんだろうか。

まあ、それを置きともかくこうして、

再びアルクエイドと二人で夜の街を歩くことになったが、

「う……ぐっ……」

アルクエイドに魔眼で見るように言われて見た男の第一感想は気持ち悪いに尽きた。

確かにどんな人間にだって「線」は何本かある。

「だけどアレは……あり過ぎる、「死」の線がそこらじゅうに描写されている、果たして人間なのか。」

「出鱈目、動いているものなら「死者」さえ殺せるのね貴方は……」

さらにアルクエイドが言葉を落とす。

—— 本当の化け物は貴方の方じゃない。

それは呆れなのか自虐なのか分らなかったが、

死者を見て頭痛と気持ち悪さの余韻に浸る自分を余所に、

こちらを振り返らず爪を伸ばし自販機の傍に立っている死者を殺そうと歩む。

その姿が、その爪で切り裂く対象がある人物と重なり、俺は尋ねた。

「アルクエイドもシエル先輩と同じように弓塚を殺すのか？」

「……殺すしかないでしょ、だって吸血鬼を殺すのがわたしの役割だもの」

あつさりと殺人を肯定した。

アルクエイドが殺人を肯定したことで弓塚が殺されることにショックだった。

いや、彼女の価値観からすればそうかもしれない。

「だけど、俺はどう彼女を説得するか、どうすればいいのかといった小難しいことを考

えるよりも先に口が動いた。

「違うんだ、アルクエイド。」

昨日会ってあいつはまだ人間らしい心を持っているから、きつと……」
が、それから先の言葉を継げなかった。

「なんで志貴はその女の事に疑問を抱かないの？ 擬態かもしれないのに」
背中越しに見えた瞳は黄金に輝き明確な殺意が籠る。

アルクエイドのお気楽で、明るい空気はなく、ただただ恐怖をまき散らす。

いつものアルクエイドではなく、吸血鬼らしい存在が一メートルも離れていない場所にいた。

「志貴はそう言うけどさあ——あの子もわたしも吸血鬼なんだよ？」

ああ、殺される。

本能が逃げろと叫ぶ、

恐怖で膝が震え、喉はカラカラだ。

でも不思議だ、殺されるかもしれないのにアタマは落ちついており、

彼女を前にして自然と言葉が、問われた答えを提示した。

「だって俺はあいつを信じているから」

「……………そう、勝手にすれば」

その回答に不機嫌と苛立ちが混じった声で答え、

俺を無視する形で小走りに自販機に立つ男に向かう。

「おい、待て。くそー！」

弓塚も見捨てられないがアルクエイドも放っておけない。路地に駆けこむのを後ろから追う形で走る。

嫌な予感しかない。

——ギ

見えないはずなのに肉体の捻じれる音と光景。

合わせて喉からせり上がる嘔吐感、必死に耐える。

——ゴ、キン

聞こえた、見えた。

細い道の奥の奥、濃厚な死の気配が。

遙か遠くの有視界内、眼鏡をかけていても分かる程の死と、

やつのことで白い背中が見え——。

「また会ったわね」

アルクエイドは敵意をまき散らしながら前を睨む。

「……そう、ですな」

暗がりでもぼんやり浮き上がる人型、

それは紅い瞳を除けば間違いなく弓塚であった。

あいつの役に立ちたい、でも。

弓塚もアルクエイドの態度を見て臨戦状態に突入している。

消えゆく犠牲者を挟み弓塚とアルクエイドはまさに一触即発状況だ。

「正直、貴女とはこんな形でやりあいたくなかったわ、

そしてこんな出会い方をしたくなかったわ——だからと言って手加減するつもりはないわ」

「ボクも正直戦いたくないですけど、

戦わねば生きられないとなればここで戦いましょう——今のアルクエイドさん

なら、生き残れるチャンスはある」

まずい、一気に場の空気が戦争一色となりつつある。

正面から見て弓塚、アルクエイド、俺という位置関係上、

巻き添えを嫌うならば逃げることは確かにできるが、このまま見ているわけにいい。い。

だけど、逃げてたまるか。

二人は人を超越してるが何か出来るはずだ。

考えろ考えろ考えろ——。

「へえ、言うじゃない。なんで死者を倒しているか分からないけど、わたしを前にして——

「あれ？」

「それは……………いつつ、くそまた痛む」

アルクエイドは最初俺を庇って出来た傷のあたりを抑え弱弱しく壁にもたれる。

よく見れば弓塚の方も胸を抑え、痛みに堪えていた。

狭い路地に充満していた殺気が嘘のように胡散している。

これは……………チャンスか？

「なあ、二人ともそんなのでやってけるのか」

「……………」

「……………」

二人して沈黙する

これを肯定と受け取ってよいだろうか。

「……………正直きつい、路上生活で精神的に来ることもあるけど、吸血鬼化して間もないせいか身体が時々痛む」

「同感ね、わたしがわたしで無くなってしまえばいいけど、ここは志貴の言う通りね
いける。」

そろって調子が良くないお陰で、

特にアルクエイドの頭が冷えているみたいだし。

「二人とも組まないか、お互い争う理由なんてないし。」

「……志貴、正気？」

「……今更かもしれないが、誰に対しても優しすぎると思うなボクは」

呆れ、溜息が聞こえた。

アルクエイド、弓塚の順でひどい言われようだ。

「ま、志貴が言うなら見逃してあげる。正直今の自分じゃただで済まなそうだし」

どうもアルクエイドは思った以上に弱っているらしく、良く見ると顔が青白くなっていた。

思わずギョツとした俺はアルクエイドに声をかけようとするが、それより先に衰弱激しい彼女はチラリ、と弓塚を一瞥して。

「でも、変な事をしたらその限りでないけどね。それに、さつきには『色々』聞きたい事があるから。」

弓塚もその『色々』について理解していたかコクン、と頷く。

「ここで話すのも何だから場所を変えましょう」

アルクエイドは壁から離れるとゆるやかに歩き始めた。

背後に弓塚がいるのに実に堂々とした振舞いであり弓塚はやや呆れていた。

「さつきまで殺し合いをしようとした相手に背中を見せるなんて、

余裕なのか、それとも天然なのか……とりあえず、よろしく志貴」

「ああ、」

アルクエイドの後について行く弓塚とすれ違う際に俺は頷いた。

まだまだ、俺たちにある問題は何一つ解決していなかったが、

なにはともあれこの日の夜、俺は再び弓塚と出会えたことが嬉しかった。

第11話 「参戦と再会」

——遠野の人間は人間ではない。

かつて、そう父から教わったのはずいぶんと昔だと遠野秋葉は思いだす。

その時はただ父が悲しそうにしていると感じたが、今思えば父はただ怖かったのだと思う。

混血の末裔である遠野は能力が開花した時から、それを制御できずに人としての歯車が狂ってゆく。

自分が自分でなくなる自我の崩壊、それに耐えられる人間はなく遠野の人間は常に短命である。

だからこそ、父は琥珀で——したのだ。

生きたい、という何よりの欲求を叶えるために。

父が琥珀で——していると知った時、遠野の暗部を知ったときから決心した。

最後の瞬間まで人間らしく振舞おうと。

琥珀が何か企んでいるのは知っている、恐らく遠野家が滅ぶものかもしれない。

混血の発作を抑えるために、彼女が自身の血を提供すると言いだした時から何となく察した。

けど、いいと思った。

あの日兄の命を背負ったときから、自分の寿命は人より短いものになると決まっていた。

どのみち混血の能力が顕在化した以上うまく制御できたとしても、父と同様に長くは持たないだろう。

だから、兄を親類の反対を強引に押し切り遠野家に戻した。

せめて自分が人間である内に、想い人である兄と共に短くも平穏な日々を送りたかったからだ。

吸血鬼が三咲町で暗躍していると聞いた時、即座に——を連想した。

その時湧きあがった感情は色々あったが、遠野秋葉は決断した。

遠野志貴がいる日常を守るためならどんなこともすると、なのに——。

「あ……」

生暖かい赤い水が秋葉の手にかかる。

血の匂いが鼻を刺激し顔から血の気が引く。

足は生まれただての小鹿のように震えが止まらない。

覚悟していた、自覚していた。

混血である以上、自分はまっとうな人間でない。

——兄さんと一緒にいる日常を守るためなら、なんでもすると誓ったのに、なんてザマ。

「……震えているのですね」

能力を酷使して疲労し、もはやただ殺されるだけと絶望していたが、

彼女、シエルは何を考えてたのか自身が使用していた細剣を持たせると同時に彼女自身の右目に深々と突き刺させた。

眼球を貫通し、頭の反対側に刀身がでるほど刺されているにも関わらず、

秋葉に対して子供をあやかしているのと変わらない口調で穏やかにシエルは話す。

「やっぱり貴方はこの町を騒がす吸血鬼とは違うようですね——貴方に人は殺せません」

ずぶり、と剣を引き抜き抜き眼から血が滴るがすぐに傷が再生を開始する。

「さようなら、秋葉さん」

シエルは傷ついていない眼でウィンクすると、素早く立ち去った。

その姿を追いうちせず呆然と秋葉は眺める。

そして、再度彼女が言った言葉を噛み締め、思う。

—— 本当に、なんてザマ。

「秋葉さま…お怪我は？…御無事ですか…!？」

辺りが焦土化した庭の端からようやく琥珀が駆けつける。

その声を契機に緊張が解け、背にある木にもたれかかる。

今晩はまだ彼女の、琥珀の血を飲んでいないので今日はいつもより多く必要かもしれない。

—— 琥珀を見て真つ先に血を思い浮かべる、なんてまるで吸血鬼ね。

いや、自分は遠野の人間か。

と自虐し、吸血鬼の単語でふとシエルが言った人物の名を思い出す。

—— 遠野君は弓塚さんに夢中ですがもう一度会って聞くとしましょうかね…。

「弓塚…さつき…」

「え？」

弓塚さつき、

この名前については兄を遠野家に戻す前の調査で何度か名前が出ていたので知っている。

兄と仲がいいとこのことで始めは嫉妬を覚えたが、

男女の仲として交際しているわけでもないのだからこれまで強く意識してこなかった。

が、その彼女が兄を、遠野志貴と共にいる日常を破壊する原因となるならばこれを排除しなければならぬ。

「ふ、ふふ……琥珀、弓塚さつきについて調べなさい」

「は、はい。ですが秋葉様いったい……?」

困惑の顔を浮かべた従者の疑問に凄味すら浮かべた笑顔で夜叉が口を開く。

「ええ、決まっていますよ。」

兄さんに纏わりつくその女郎蜘蛛を——

こうして吸血鬼をめぐる三咲町の夜に遠野秋葉が参戦した。

※ ※ ※

シエル先輩の追撃が途中からなくなったお陰でなんとか逃げ切ったが、

死者の気配をまた感知したので現場に駆けつけてみれば全吸血鬼にとつて最悪の処刑人、

アルクエイド・ブリュンスタッドと遭遇してしまい一戦を交えることを覚悟した。

しかし、志貴が駆けつけて来てくれ、

さらにお互いに単独でこの三咲町を騒がす吸血鬼を打倒することはできないと語り、

その話に同意してくれたアルクエイドさんの後をついて行くように公園に集まり現
在に至る、と。

「さて、さつきについて私から聞きたいこともあるけど、

先に志貴に【死者】について講義してあげようじゃない」

さつき見せた弱弱しきは嘘のように眼前のアルクエイドさんは偉そうにのたまう。

美人は何をしても綺麗に見えるというのがそれが妙に似合うから困る。

「それじゃあ聞くけどさつきの吸血鬼なのか？」

久々に会った志貴は躊躇いながらアルクエイドに質問する。

彼を見てちよつと変な感情が浮かぶが喉に食らいつきたいまでの吸血衝動は幸い出
てない。

しかし、なぜだろうか妙に彼の顔が気になってしかたがない。

そんなに間を空けていたわけでもないのに、自然と視線が彼に集中し、彼の一举一動
に注目してしまう。

「違うわ。あれはただの下僕、

【敵】はあれを増やして力を蓄えるから塵に還しただけ」

「…アルクエイド、吸血鬼との違いってなんだ？」

あんまり説明を、というか全然そうした話を受けたことがないんだけど」

「あ、そうね。志貴にはまともな吸血鬼について話してなかったものね、ネロは特異だったし」

今更思い出し、彼女は説明をさらに続ける。

「本来貴方達人間が想像する吸血鬼、人間の血を吸って、

吸った被害者を吸血鬼にさせ太陽に弱い、さつきのようにね。」

アルクエイドは意味ありげに赤い目をこちらに向ける。

志貴もつられて不安そうに横にいるボクに首をこちらに回す。

三人の間に一気に緊張が走る。

っ…：気まずい、しかも志貴は「信じてるからな」といったげだ。

「いや、その。シエル先輩以外は吸ってないけど……一応普段は輸血パックだし」

嘘偽りのない事実を述べる。

たしかにふと気づいたら、人を襲いたくなるような衝動が起こる。

気づいたらごく自然に獲物を狙うかのように、対象をストーカーしたこともある。

時折シエル先輩の血の味を美味しい料理を食べたような感覚で思い起こすこともある。

シエル先輩のは同じ血液でも恐らく魔術師ゆえか、最高の味わいだった……しみ込んだカレー臭さを除けば。

と、こんな感じで今のところ暗示で輸血パックを頂く以上のことはしていない。

「……嘘はついていないみたいね」

アルクエイドがしばし間を空けてからそう言った。

それで、ようやく緊張が解けるが、もしボクが人を襲い血を吸っていたらどうなった
だろうか？

「で、吸血鬼に直接吸われる際に吸血鬼の血が送られる。

それで吸血鬼の言いなりな使い魔、志貴にはゾンビといえれば分かりやすいかな？それが
【死者】よ」

「え、でも弓塚は？」

どうも志貴が気付いたようだボクの異端性に。

「これが何事も例外が存在するのよ、

生まれつきの霊的ポテンシャルが高ければ即座に吸血鬼に成るのだけど、

さつきの場合ははつきり言って異常よ、それこそ原初の死徒二十七祖に匹敵する才能
だわ」

自分もまた出鱈目だとはいえ、

こう改めて言われると【原作】の弓塚さつきの出鱈目さ加減がわかる。

「で、聞くけど。貴女の【親】は蛇かしら？」

紅い瞳が自分を見つめる。

アルクエイドにとってロアは憎悪の対象でしかなく、その子である自分に対して容赦なく威圧する。

その重圧は凄まじく胃が緊張して吐き気がする、

しかも体内の吸血鬼の意識がつけられて浮き上がりそうであったが、一生懸命こらえて質問に答えた。

「分らない、突然後ろから咬みつかれて、気がつけばこんなことに」

「ますます呆れたわ、親の顔も見ずに冗談抜きで独立したのね貴女」

再度ボクの出鱈目加減に呆れ威圧が解ける。

まあ、たしかに【原作】の弓塚さつきの固有結界以上にチートな空想具現化が使えるなんて、

無茶苦茶だと思うのは確かだ、例えそれが使うと吸血鬼側に引つ張られる諸刃の刃であつても。

「気が変わった。貴女、わたしのモノにならない?」

「はい?」

「え?」

等とやり取りしていたら理解不能な単語が聞こえた気がした。

いや、あの、その、それはどういう意味なんでしょわか？

なんだかキマシタワーが立ちそうな単語が聞こえた気がするのですが？

「アルクエイド……おまえアレなのか、それとも冗談なのか？」

呆れ交じりに志貴はアルクエイドに尋ねる。

「志貴が何を言ってるか知らないけど違うわよ、わたしの使い魔にならないかっていうこと」

「アレ」の意味も分かってないだろうけど即座に否定した。

というか、そんなことできるのか？それにもしアルクエイドの使い魔になったら黒レ
ンが先輩となるのか…。

無口猫幼女にこき使われる新米女子高吸血鬼、なかなかシユールだ。

「わたしと契約を結べば貴女のロアの影響力は低下するはずだし、

もしかすると、わたしは力を少しだけ取り戻せる。ね、一石二鳥でしょ」

にぱー、なんて笑顔すら浮かべてよって来る。

男のころなら鼻の下を伸ばしていただろうが、TSして同じ女性として分つたのだ
が。

あの、向日葵のような笑顔は馬鹿な男を騙す類の罠だ、本人は意識していないようだ
けど。

あとそれに、契約といったら真祖の血を飲むんじゃないかなかったつけ…。

「ねえ、拒否するの」

無意識に後ろに後退してしまつたのに、後悔したが後の祭り。

あからさまに否定的な態度をとつたせいで再び公園の温度が下がつた錯覚がした。な、なんでこのくらいでここまで怒るのかな!?

「このわたしがさっちゃんを気にいつたのよ、どうしてわたしのモノになりたくないの色々と無茶苦茶な話だと思ふ。」

というか、何故彼女はここまで自分に執着するのだろうか、まるで子供だ。

いや待て子供、か…考えてみれば今のアルクエイドは志貴に殺されて生まれたようなもの。

【原作】でもアルクエイド自身が知識があつても経験がないと、

言つたように彼女の精神年齢は未だ子供のようなものかもしれない。

しかし、相手をする側としてはたまらないけど、ここは正直に答えよう。

「気に入つてくれたのは嬉しいけど、人をいきなり使い魔にするのは頂けないね。

それにボクはまだアルクエイドさんのことを良く知らないから、アルクエイドさんとはまずは友達から始めたいかな」

「……………」

沈黙が重い。

先ほどから空気の志貴は一連のやり取りについてゆけず唾然としている。

アルクエイドは納得できなさそうな表情……というより、新鮮な驚きを覚えた表情であった。

「トモダチ、友達かあ……じゃあ、いいわ！」

さつきとはそれから始めましょう!!改めて言うけど、

私の名はアルクエイド。まずは一緒に【敵】を倒しましょう、よろしくねさつき!!」

「え、あ、はい!?!こちらこそ……よろしくお願ひします」

こちらの両手を握りぶんぶんと振り回す。

どうも妙にハマったらしくこちらはただただ困惑するばかりである。

「あー仲が良くなったのはいいけど、そろそろ本題に入らないか?」

先ほどから置いてけぼりな志貴がアルクエイドに本題に入るように促す。

「あ、そうね。それでその死者は親玉である吸血鬼の力の供給源となるのよ。

だから親玉の吸血鬼の力を少しでも削ぐために死者を退治しなければいけないけど、これが1000人くらいいるのよ」

「え?..な!..1000人、そんなに!!」

志貴が声を上げて驚く。

信じられないのはボクも同意である。

何らかの工夫はしているだろうとはいえ、100人も死者がいるなんて。

「アルクエイド、一つ聞くけどその【敵】は強いのか？」

「うん。さっきの死者の五つくらい上かな」

散歩にでも行く感覚で陽気に答える。

「でも安心して。わたしとさっちんで2、3日中に始末するから」

2、3日中か、【原作】でもだいたいその位だっけ。

あれ…？今アルクエイドさんが自分のことをあだ名で呼んだ気が。

「だから志貴は日常に帰っていいのよ。代わりにさっちんと二人で解決するから」

アルクエイドさんが眩しささえ覚える笑顔で志貴に向かって言った。

普通に考えて見れば志貴は異常な能力と特異な体術を使うとはいえ、ただの人間が今の三咲町で動くのは危険である。

事実、ネロ相手には彼は一度死にかけており、ましてやこの問題はアルクエイド・ブリュンスタッド自身の問題。

ここ数日共に過ごした仲に言うにしては惨酷かもしれないが、賢い人間ならばここでアルクエイドさんの話に乗るのだが、

「このお、バカ女ども!!」

「へ？志貴？」

「ボクもかい！」

「ただど志貴は公園中に響くくらい音量で叫んだ。」

「ああ、自分の馬鹿さ加減には頭に来る。」

「2人共黙つてとにかく【手伝わせろ】」

「そもそもお前達が駄目だと言つても俺は付いていくからな!!」

「くそ、ネロにあんな目にあつたのにこんな事を口にするなんて」

「普段温厚な志貴が珍しく口を荒げる。」

「これつてアルクエイドだけでなくボクの事でも心配してくれて、だろうか。」

「心臓がドキドキ鼓動する……待て、ドキドキするつてまんま恋する乙女じゃないか。」

「——え？」

「芽生えた奇妙な意識を意識しつつ横のアルクエイドさんを見れば呆然としている。」

「弓塚」

「あ、うん!？」

「視線をずらしていたので気がつかなかったが、気づけばボクの手が志貴に握られる。」

「手を握られることは別に不自然なことではないが、考えてみれば男の人に手を握られるのはこれが初めてだ。」

遠野志貴の手は病弱とはいえやはり男の人の手をしていた。

今の自分とは違い大きく、がっしりとしており、前世の自分を思い出すと同時に誠実で、真つ直ぐな意思が暖かい肌から伝わる。

だけど、同時に心拍数が上昇する。

信じられない——男にドキドキさせられるなんて。

「もう二度と離さないからな」

凄まじく青臭いセリフが放たれた。

いつもなら、聞く側として爆笑しても可笑しくないが、

志貴は今まで見たことのない真剣な瞳で自分を見つめ、ボクは困惑していた。

困っているという意味ではなく、

どう反応すればいいのか思考停止状態であった。

本当に、本当に信じられない。

こんな困惑を抱くなんて本当に——。

「うりゃ」

「(っ)はー！」

内心で生まれた感情に仮説を出す前にアルクエイドさんが志貴の腹に深々とボディーブローを放った。

「げ、げほっ、げほ、

あ、アルクエイド、おま「握手」はい？」

ぷー、と頬を膨らませたアルクエイドさんが志貴に手を出す。

「さっちゃんだけズルい、わたしも握手」

まるつきり子どもが駄々をこねる態度だった。

でも、そんな生き生きとした姿こそ自分が「知っている」アルクエイド・ブリュンス
タツドなのだろう。

そしてもつと見たい、なんて考えるのは自分が「ファンだった」だからなのか「彼女の
トモダチ」だからだろうか？

「ごめん、そうだったな。今後もよろしくなアルクエイド」

「うん……志貴とさっちゃんなら怖いものなんて何もないんだからー」

アルクエイドは嬉しそうにぶんぶんと志貴と握手する。

ここまで単純で屈折のない感情表現を真近で見るとこっちまで幸せな気分になる。
が、内心これで生き残れるという薄汚い利己的な考えが芽生える。

志貴をとうとう巻き込んでしまったという自己への嫌悪感が良心を刺激する。

しかし、実際には口アに対抗するには自分一人では不可能だと理性が理解している。

だから思う、今はちよつとぐらい甘えてもいいかなと。

折角ハッピーエンドへの道筋ができたのだからそれを目指すのも悪くないと。

ともかく、根拠のない自信と嬉しさが心を満たし、星が見えない夜空を見上げそう
思った。

第12話「現在と過去」

「う……」

昨晚ようやく弓塚と再会でき、

アルクエイドと共に三咲町を騒がす吸血鬼に対する共闘関係を結ぶことができた。

あの後、しばらく搜索した後に現地で解散となり、弓塚はアルクエイドの家に泊まることとなった。

アルクエイドは中学のころから俺の事を知っている弓塚に興味津々で、変なことが知らなければならないのだが…。

だが、それよりも問題なのは、

現在居間に座っておられるこの館の主への対策だ。

「あら、おはようございます。兄さん。」

居間には我が妹であらされる秋葉がいた。

紅茶を手に佇む姿は理想のお嬢様といった風体であり、何も知らない男が見れば一目ぼれしても可笑しくない、

実に爽やかな笑顔で朝の挨拶を述べたが、眼は全然笑っていないかった。

口元は上品な笑みを浮かべているが、どこか攻撃的なもので、こちらの背筋が凍りそううだ。

……………昨日アルクエイドが来たのをなんて説明すればいいんだ。

く、くそどうすればいいのだ!?

ただでさえ門限は五時とか色々厳しい秋葉にアルクエイドのことを何ていえばいいのだ!!

恋人…いや、そういう間柄ではないから違う。

友達…学校に金髪の女性なんてそもそもいないから、その辺が絶対突っこまれるぞ！
セツ…馬鹿か俺は一体何を考えているんだ、朱鷺恵さんじゃあるまいし！

「……………兄さん？」

マズイ、秋葉が怪しんでいる。

というより苛立っている、米神と口元がヒクついていることからして。

く、万事休す、か。

……………いや、考えるんだ遠野志貴。

もしかすると秋葉が苛立っているのはアルクエイドのことではなく、単に朝の挨拶が帰って来ないだけだと。

そうだ、それに違いないきつとそうだ!!

普通に、いつものように朝の挨拶を交わせばいいのだ。

だがしかし、今日は返答が遅れたから何時もより親愛を込め、かつフレンドリーに挨拶をするのだ！

「や、やあ。あきはたん、おっはー」

——ピキ。

後に琥珀がこう証言する。

「いやーあの時の秋葉様の顔は見ものでしたよー。

憤怒と驚愕が混ざりあつた表情なんて私初めて見ました。

でもいくら私が志貴さんが選択肢を誤つて、オロオロする姿に愉悦を感じるとはいえ、

あの時の部屋の空気は巻き込まれた身として本当に胃が痛くなるほど最悪でした。

あ、もちろん自分はプロですからそんなことおくびにも出してないですけどねー。」

そして従者は、志貴さんは私のように秋葉様を操縦できていませんからねーと楽しげに締めくくつた。

「……………琥珀。このカップ、罇が生えていてよ」

「あらあら、いけませんね。いい加減新しいのを購入いたしますか」
いや、それは違うよ琥珀さん。

それはどう見ても秋葉がたつた今壊したから。

「……………」

俺は即座に逃げ出したい気持ちになったが、

秋葉の眼から放たれる見えない殺人光線がそれを阻止する。

胃が痛い、というか失念していた。

秋葉がこうした冗談が通じない性格であったことを、

そして秋葉の怒りは凄まじく心なしか周囲が蜃気楼かのようにユラユラと背景が歪んでいった。

「えっと、じゃあ。そういうコ、『——逃げないでくださいね、兄さん。』……………ハ
イ」

何とか誤魔化そうとしたが目前の鬼妹は逃走を許すつもりはないみたいだ。

「兄さん、昨日の方については後にたつぷりと、

ええ、それこそたああつぷり、と追及致しますが『弓塚さつき』という名前に聞き覚えはありますか？」

「へ？秋葉……………どうして弓塚を？」

アルクエイドについてではなく突然現れた意外な人物の名前が出て正直驚いた。

秋葉と弓塚との間に俺の知りえない接点でもあったのだろうか？

しかし、弓塚とは通っている学校からして全然違うしどういふことだろう？

「そりゃあ、あいつとは中学からの友人だから当然知ってるけど、どういう風の吹きまわしなんだ秋葉。」

「……いえ、最近行方不明になった方の中に兄さんと同じ学校の方がいると聞いて確認しただけです。」

秋葉は視線を下に向け悲しげに答える。

そういえば、学校での目撃情報の呼びかけだけでなく、

ニュースや街頭のポスターでも目撃情報の呼びかけがあつたな。

俺と同じ学校の生徒だから秋葉が関心を持ったのだろうか？

「ところで、兄さんは吸血鬼の存在を信じますか？」

「へ、吸血鬼？……あ、ああ吸血鬼か、

俺はいても可笑しくないんじゃないかなと思うけど、どうしたんだ？」

「戯言だと思つて聞いてください。」

もしも、です。仮にその彼女が吸血鬼とか魔物になったら兄さんはどうしますか？」

やけに具体的な例が出てきて一瞬驚いた。

というよりも、今まさに俺が抱えている問題そのものであった。でも、俺に迷いはない。

俺は弓塚とアルクエイドを助けると決めたのだから。

「助ける、いや。絶対力になってあげたい」

「……………吸血鬼、でもですか？」

「ああ」

俺の迷いが無い回答を聞いた秋葉は

諦め、呆れ、怒りといった感情が混ざり合った表情を浮かべた。

秋葉はたとえ話であると言ったが、手は震え、スカートをぎゅつと握りしめており、

俺は秋葉もまたシエル先輩のように何らかの事情を知っているのではないかと疑い、

秋葉に問いつめようと一瞬考えたが、

それよりも、

秋葉の悲しそうな顔が先にすべきことをすべきだと思った。

小さい頃こんな時俺がよく秋葉にやったように彼女の頭を撫でた。

「ちよつと…!!? 兄さん、何をするのですか!! 私はまだ子供では『秋葉だって例外じゃないぞ』え…………?」

普段隙のないお嬢様である秋葉は呆然とする。

「秋葉は大事な家族だろ、当然じゃないか」

とたん、秋葉は顔を紅潮させ何を言えばいいのか分らず口をパクパク開く。

もしかするとそれは俺がこの屋敷に戻ってから始めて見る秋葉の素顔かもしれない。

「っ……………!!」

続けてわしわしと頭を撫でてあげると、

秋葉は恥ずかしいのか、それともくすぐったいのか俯いて身じろぎをする。

しかし、こうしていると本当に懐かしい。

今でこそ完璧なお嬢様といった風格を身につけている秋葉と違い昔は本当に泣き虫だった。

こうして泣きそうな時は頭を撫でてやったし、秋葉とは一緒に遊べる時間が少なかったから「三人」で沢山遊んだな。

——ん、今何か違和感が？

「あーお熱いのは結構ですけど、お二人とも私のこと忘れてませんか？」

過去の思い出に違和感を感じた時、琥珀さんが横から呆れ気味に呟いた。

「え、あ……きや!?!」

「げほお?」

琥珀の声を聞いてわが身を思い出した秋葉が思いつきり立ちあがる。

が、位置的に秋葉の正面にいた俺に派手に頭突きをする形となり悶絶する羽目に陥つた。

「っ——!!——!?!」

「…っす、すみません!!に、兄さん、兄さんしつかりしてください!」

秋葉が慌てて傍に寄るが、

胸の傷を直撃されたので正直、かなり痛いし意識が遠のく。

たぶん今日学校は遅刻するなと思いつつ俺は弓塚とアルクエイドのことを思いつつ意識が途切れた。

※ ※ ※

あの日、アルクエイドさんと、

志貴との共闘関係が結ばれた後、

ボクはアルクエイドさんの家に泊めてもらったのだが、

彼女は昔の志貴に興味深々といった感じで、

その日の晩は志貴のあんなことやこんなことについて語り合った。

ボクが面白おかしく話すたびに彼女は驚き、笑い、呆れたり豊かな表情を見せた。

彼女と語らい合いつくづく思ったのだが、やはり彼女には笑顔が似合っていた。

【原作】でロアはそんな彼女を墮落した存在と切り捨てたが、それは彼女の一面しか見ていないだけだ。

というか、まますトーカーか信者の類の発想だ……まあ、ロアが吸血鬼になった動機からして強ち間違っていないのが困る。

とまあ、こんな感じで次の夜に改めてアルクエイドと共に志貴と合流し、元凶の吸血鬼の力を削ぐために死者を狩りに夜の街に出かけて現在に至るのだが。

「死者、あんまりいませんね」

「ええ、さっちゃんが事前に倒してくれたからかもね」

夜1時過ぎの公園は何時もと違い実に静かだ。

普段この時間でも公園でたむろう人々も、

ただでさえこの街で起こっている大量殺人事件の報道のせいで、ここはボク達3人を除けば無人だ。

「不機嫌そうだな、アルクエイド」

「当然でしょ、せっかく志貴やさっちゃんが手伝ってくれているのに」

志貴の問いにアルクエイドさんは不満げに唇を噛むが

ちよつとだけ頬が緩んでいる所、3人での状況を楽しんでいるみたいだ。

まあ、その実自分も街を練り歩いてきた時から少し楽しかったので同意だ。

「だったらもう一度見て回っても構わないけ」「だめよ（だ）」……「なんでさ」

志貴の好意は嬉しいが思わずアルクエイドと2人して声を揃えてしまった。

吸血鬼になってから改めて志貴の「直死の魔眼」が予想以上に危険な代物だと理解できた。

さつきも死者相手に志貴が魔眼を使用したさい、

ボクは彼のどこまでも透き通った蒼い瞳に見惚れてしまうと同時に、本能が恐怖を覚え鳥肌が立った。

あれはまさに『死』が具現化された存在にして、不死者にとつて最悪の天敵。

【原作】の後の話を描いたと思われる短編小説では、吸血鬼から死神扱いを受けていたが納得した。

だけど、ボクはそんな志貴から眼が離せなかった。

七夜の技を以て死者を狩る姿は、自分には大きなギャップを感じると共に、その姿が美しいと感じた。

そして、それほどの異能を持ちながら遠野志貴が遠野志貴であることに変わりがないことに彼の強さを思い知り――。

……いや、まてまて。

なんでまたもや、まるで恋する乙女のような発想をしているんだ自分は。

「いい、志貴のその魔眼は本来見えない物を無理やり見ているのよ、

だから使いすぎると脳の処理が追い付かず廃人になっちゃうから今日はお終

いよ」

自分が悶々と悩んでいた時、

解説役なアルクエイドが端的に眼の危険性を志貴に説明した。

心なしか志貴は青ざめて——ん？

「あ、れ——？」

アルクエイドの説明が続く前に突然志貴が胸を押さえ、手を服の中に入れる。

これは——かつて【遠野四季】によってできた傷が開いているのか？

だとすれば、この近くにロアが近くにいるのか!!

「ん？さっちゃんどうしたの、志貴もそうだけど」

アルクエイドさんが不思議そうに尋ねるけど無視して辺りを見渡す。

電柱の上、公園の林の中、ビルの屋上、何処を見ても人影すら見えない。

そして志貴の方に振り向いた時、

血の力オリが漂ってきた。

「志貴、それ——」

「ああ…変だな、痛くもないし傷も開いていないのに胸から血がにじんでいる」

喉が痒い、喉が酷く渴いて痛い。

彼の顔と血を直接見ていると、どうしようもなく血が欲しくなる。

犬歯が伸び、ハアハアと息が荒くなる。

欲しい、遠野志貴の血がどうしようもなく欲しくてたまらない。

「アルクエイド、弓塚——？」

志貴はボク達の違和感に気がついたみたいだ。

ボク達？ああ、横に視線をずらせばアルクエイドさんは敵意すら含んだ瞳で志貴を睨んでいる。

「……………」

「……………」

「……………」

沈黙が重苦しい、

遠野志貴との距離は手を伸ばせば掴める範囲にいる。

このまま彼の喉笛に噛みついて飲む血はさぞ美味であろう。

邪魔者は、いない。

アルクエイドさんならむしろこちら側に協力してくれるに違いない。

だって、彼女も遠野志貴が欲しくて堪らないのだから。

ボクも輸血。パツクは飽き飽きしていた所だ。

どこから血を飲むべきか？

やはりここはオーソドックスに喉からいくべきか？

いや、彼の首を横一文字に切り裂き噴き出す血を堪能するのも悪くない。

あるいは、彼と殺し愛のも悪くない——違う!!

「ち、違う——」

口は内心とは正反対の台詞が飛び出る。

それでも体は理性に反して彼に跳びかかろうとしたくうずうずする。

だめだ、だめだ、だめだ、だめだ。

「おい、弓塚、アルクエイド。しっかりしろ!!」

視線が不自然に彷徨い、息が荒く苦しげなボクを心配して声を掛けてくれた。

自分の生命の危機なのに他人を労わる所は彼らしいけど手を、かけないで欲しい。

志貴に触れるとますます血が欲しくなる。

それ以上志貴が近づいたらボクは君を殺してしまう。

だから、やめて——。

「わたし——そんなコト、思っでない」

アルクエイドさんの一言でドス黒い本能が消えた。

「ツ!!……ハア、ハア、ハア!!」

そうだ、自分はその事を思っでいない。

ボクが目指すべき場所がご都合のいいハッピーエンドであつて、そんな事をしてしまえば、何もかもが滅茶苦茶になつてしまう。

危なかつた、理性が壊れる寸前だつた。

長距離マラソンでもしたかのごとく息が苦しい。

「……どうしたんだよ、ヘンだぞおまえたち。2人とも体が回復してないのか」

「ツ……!!?」

「……」

アルクエイドさんと2人そろつて気まづげに彼から視線をそらす。

今はなんとか吸血衝動を抑えているがこれ以上ここにいられない。

「……志貴、今日はこれで解散しよう」

「そうね、わたしもちよつと無理しすぎたみたい。だから、帰るね」

お互い揃つて彼の顔すら見ずに答える。

見てしまうとまた狂いそうになってしまふのは明白が故にだ。

「———そうか」

志貴はどこか納得がいかない音声で言葉を返した。

「……じゃあね、志貴。また明日」

別れを告げ、彼の顔を見ずに真つ先に公園を去る。

アルクエイドさんも思う所があるのかボクとは別の方向に志貴から逃げるよう立ち去った。

「はあ、はあ、はあはあはあ」

どれだけ走ったのかよく分らない。

だけど、人間の頃よりも随分走ったにもかかわらず呼吸が乱れるのではなく、

紅い液体の欲しさのあまりに胸の心臓が破裂しそうであった。

「吸血衝動は好意から発生するもの、か」

———吸血衝動は好意から発生するもので結局それしか分らなかつた。

タタリを追って三咲町に来たシオン・エルトナム・アトラシアはそう自虐した。

「好意、好意かあ」

けど、ボクにはその言葉が実感できずにただ戸惑っていた。

※ ※※

家の外周あたりの坂までたどり着いた。

時刻は午前2時あたり、さすがに眠気が盛んに襲ってくる。

「2人ともあんなので大丈夫なのかな」

けど、先ほどの2人の様子が気にかかる。

痛みに耐えるというよりも、欲望や願望に対して耐えている感じだったのが妙に印象に残っている。

何の原因か聞こうとしたが二人とも逃げるように直ぐに立ち去ってしまった。

もしかすると吸血鬼に関わる問題かもしれない。

明日の晩にでも何が起こったのか聞こう。

「ん？」

カラ カラ カラ

そこまで考えた時、

金属性の物体が乾いた音を立てながら坂から転がり落ちて来た。

「コーヒー?」

足元に来たので拾い上げて見たらそれはコーヒー缶だった

中身は詰まったままだったので、俺はてつきり坂の上の方で誰か落としてしまい――

ド、クン――。

心臓が鼓動することで警告が鳴らされた。

冷や汗が吹き出し嫌な予感がヒシヒシと感ずる。

視界の先に誰かがいることが分かるが、照明の明かりが見えない位置にいるのか姿がよく見えない。

「オ マエ が 殺し タ」

怨念を込めて地獄の底から出されたような声が聞こえた。

ゾクリと背筋が凍りついた刹那、連続してパリンと軽い音を立てて周囲の街灯の電球が全て割れた。

「な――!!くっ!?!」

――きいん。

そして同時に刃物が振るわれる気配。

反射的に迎撃し、月が雲に隠れて墨で塗りつぶされた闇の中に火花が散る。

メガネが弾かれたが、かろうじて反応出来たのは自分でも驚きたくなる。

「おまえ……」

は何ものだ、

と言う前に月が雲の隙間から地上を照らし襲撃者の正体を映し出した。

ポロポロの着流しを着た赤眼白髪 of 男。

あまり食べてないのか胸元から見るにかなり痩せている。

が、兎と同じ色の眼だけはギラギラと敵意を滾らせており、その姿と相まってまるで怪談に出てくる怪異のようだった。

普通の人間ならこんな輩と知り合いなはずがないが、

なのに、俺は会ったことがない筈なのに何処かで会った気がする既視感を覚えた。

「ぐ……!!」

あたま、アタマ、頭が痛い。

眼が眼球からこぼれて脳髓が頭がい骨から飛び出すような痛みを脳は訴える。が、当然のことながら相手は待つてくれずむしろ嬉々として襲ってきた。

ギン、

しかし俺は考えるよりも先にナイフを捌き、防ぐ。

月は再び雲に隠れ暗闇が周囲を支配するが眼が見せてくれる【線】が敵の居場所を教

えてくれる。

ギイン、ギイン、ギイン

二度、三度ナイフが触れ合い火花が散る。

ドコの誰だ知らないがナイフ捌きなら負ける気はない。

【線】を狙っているみたいだが生憎とこちらの方が先輩——。

……………【線】を狙っている？

「嘘だろ、視えて……………いるのか」

口から出た言葉に男はニヤリ、と笑う。

「結構早く気づいたな」と言わんばかりに。

真つ暗な道路の中央でお互い対峙し会い完全に膠着状態に陥った。

此方からは、動けない。

なぜなら相手もまた【線】が見えるということ、その気になれば一撃でこちらがやれてしまう。

俺はまさか自分以外にこの異能を持つ人物がいたことに動揺すると同時に、

身体が恐怖を感じてしまい、ナイフを持つ手をガクガクと震えさせ、主導権が向こう

に移った瞬間であつた。

ク。

男は笑い身体を前に傾けて突進する寸前に異変が起きた。

「ガアアアアアああアア——!?」

絶叫が夜の街を響かせる。

襲撃者は突然蒸気に包まれ、苦しそうに獣のようにもがく。

一体全体何がどうしてこうなったかもわからず啞然とするが、

体中の水分が取られ肉が焦げるような匂いが鼻を刺激し、気分が悪くなる。

「ア……ハ……オマエ、マデ……ジャマ、お。」

誰かの名前を言った気がしたがよく聞こえない。

「ぎ、ギアああああアアアッアアア!!」

それが引き金か、さらに火力が強まり襲撃者は苦悶にのたうち回る。

目がやられて見えないのかフラフラした足取りで、坂道のガードレールに凭れかかるが、

一連の出来事で体力が消耗したのと、目が見えなかった事が重なりバランスを崩してしまい。

「アアアアアアアアアアアア!!」

男は絶叫と共にガードレールの外側に、下へと落下した。

——月が出てきた。

さつきまでの殺し合いが嘘のように静かだ。

でも誰かが坂の上、家の方向に立っているのが僅かに見える。

女性特有の細いシルエットがうつすらと見えるが、

腰まで届きそうな長い、赤い髪が強く自己主張している。

さらには、今時珍しく足首まで届きそうなロングスカート、

それが俺の家族の一人とだぶつかせている、これじゃあまるで。

「秋……葉？」

信じられない人物の名前が脳からはじき出された。

俺の戸惑いとは裏腹に、

その人物はしばらくこちらを観察していたが、やがてスツと消え去った。

第13話 「過去と未来」

昨晚、俺はあの男を目にしてからずっと違和感を感じていた。

なんというか、すごく大事な記憶がごっそりと抜けているような、そんな感じがする。

秋葉に俺の昔の話と昨晚どうしていたかを含めて話をしようとしたが、秋葉は寝込んでいた。

琥珀さんに案内されて秋葉の部屋に入って見ると、

疲れているのか目にクマを残しつつぐっすり寝ていた。

なので朝食は一人で済ませた後、

丁度今日は休日でも雨だったので屋敷を見て回ることにした。

昔の記憶や思い出を探し、広い屋敷を徘徊する。

秋葉と名前の早書き競争をした名前が刻まれた柱など懐かしさを覚えたりしたが、見て回るにつれ重要なことは思い出せず、奇妙な既視感だけが強まった。

そう、どこに行くにせよ子供のころ秋葉だけでなくもう一人誰かがいたような。

そうした現象は琥珀さんが言うに使用人が使っていた木造の家から、

さらに奥の森へと入ってますます強くなってくる。

「はいは……？」

靴を泥で汚しながら歩いて行くと、森の中に広々とした広場があった。

広場の中心にはテラスがあつたが、全く手入れが為されておらず、傷つき周囲には雑草が生い茂っている。

—— 習い事をしている秋葉を連れ出して、隠れて遊ぶにはここが丁度良かった。

「あれ……？」

ふと、昔の記憶がよみがえる。

ここで習い事をしていた秋葉を連れ出して二人で遊んだ記憶だ。

けれども、もつと、もつと重要なことが思い出せない。

ここに、もう一人絶対いたはずだ。

そしてここで俺は一度——。

「あ、ぐ……」

そこまで考えた時ひどい頭痛に襲われる。

まるで画面が砂嵐状態のテレビのようにザアザアと音を立てて脳がかき回される息が苦しい、幾ら息を吸い込んでもまるで足りない。

「ア……」

朦朧とする視界の中に一人の少年が居た気がした。

その少年は幼かったがどこことなく、昨晚会った着流しの男に似ていた。

—— そうだ、俺はアイツを知っている。

※ ※ ※

「来ないね…志貴」

「うん…そうだね」

夜11時過ぎの公園は、

ここの所の騒ぎのせいで相変わらず不気味に静かで、

ボクとアルクエイドさんを除けば誰もこの公園にいない。

あれからまた一晩、

再び公園に集合したけど志貴は未だにやって来ないので、

やむえず女二人で寂しく公園で待ちぼうけをくらっており、

特にアルクエイドさんは暇で暇で仕方がなく落ち着きがない。

しかし、志貴の奴遅いな。

また何かイベントにでも巻き込まれたのだろうか？

む、イベント……もしかすると今日は「原作」の昔のトラウマが蘇ったせいで寝込む日だったかもしれない。

だとするとここで待つ意味はなくなってしまっただが、かといって直接遠野家に乗り込めば遠野の人間に見つかる可能性があり、騒ぎになってしまう。

そもそも、寝込んでいる志貴に会ってどうするかという問題がある。

……あれ、ボクの【原作】知識が全く役に立たない件について。

「……おそいなー」

アルクエイドが適当にブランコを漕ぎながら不満げに呟く。

「志貴は遅刻癖があるし待ちましょう」

「そうね、待つてみようか」

本当は志貴が来ないかもしれないことを知りつつも、

来る可能性に賭けてしばらく、アルクエイドさんと雑談を交わしたが、

かれこれ待つこと数時間が経過し、とうとう時刻は午後11時半過ぎになってしまった。

「ねえ、これって約束が破られたってことかしら?」

「……たぶん」

始めはお互い他愛もない会話を楽しんでいたが、

一時間、また一時間と時間が過ぎてゆくにつれて、

口数は少なくなり、表情は消えうせて、

明るく太陽のような笑顔と楽しげな雰囲気は消え失せ、怒りのオーラがアルクエイドから湧いていた。

「ふ、ふふ……ふふふ。そつかあ、なるほどなあ…。

これが『怒り』という感情かあ……ふふ、志貴の首。引き千切っちゃいたい」

志貴に約束が破られたのに気づいて、

アルクエイドさんはピリピリと殺意すら発しており……正直逃げたいです。

「ねえ、さっちゃん」

「は、はいっ!？」

いつそ逃げてしまおうか、

なんて現実逃避気味に考えていたら、ガシッ!!

という擬音がつきそうな勢いでしつかりと腕を掴まれた。

「志貴の家に行くわよ。さっちゃんも来なさい」

「えっと、拒否権は?」

「ないわ」

ボクに拒否権はないですか、そうですねか…。

「……………」

「……………」

アルクエイドさんに引つ張られる形で、

公園の外に向かって歩く、その間お互い無言であった。

「あのね、さっちゃん」

が、公園の出口に差し掛かった所でアルクエイドさんが口を開いた。

顔はこちらに向けず、自分からは彼女の背中しか見えなかったが、どこか寂しげな空気を纏っていた。

「さっきさ、志貴が約束を破ったことにわたしすごく怒ったけど、

わたし、なんでこんなに怒るのかなって改めて考えて見たんだけど、

例えばさっちゃんはきっと、わたしと一緒に居られるから約束を破ってもまた会えるけど、

志貴は人間だからいつか死んじゃって二度と会えない、それこそ次の日にはこの世から亡くなっていくかもしれないくらい脆い」

続けて彼女は語る。

「志貴と会えなくなると思うと、不安で不安でたまらないの。」

ねえ、なんでだろう。なんで考えることが志貴のことばかりなんだろう？

わたし、こんな気持ちに初めて——何かを失う事を恐れるんなんで、永い時を生きるわたしが時間を恐れるなんて」

……そういえばこの人、

アルクエイド・ブリュンスタッドは一見楽観的に見えて根は悲観主義者だった。

だから、仮定とはいえ明日志貴は居なくなっているかもしれないという発想に辿りついてしまうのだろう。

ああ、くそ。

自分も吸血鬼になってしまったから、アルクエイドさんの不安は人ごとではない。

永い時の流れの中、周囲は変化する中で一人だけ変わらず何もかもに置いて行かれるのは自分も半ば確定している。

今は目先の問題の解決だけを見て、考えないようにしてきたのに考え出したら不安が止まらない。

先が見えない未来ほど恐ろしい物はない。

しかし、延々とその未来と言う名の道を自分は歩まねばならない。

考えれば考える程考えたくもない苦難が待ち受けている事を知っている。

けど——。

「アルクエイドさんはたぶん何もかもが初めてだから困惑しているのかもしれない、だから不安や焦燥といった気持ちが出ているかもしれない、けどそれを含めて今を楽しめばいいなんてボクは思うな」

今を楽しめるとはいい言葉であるが、結局根本的な解決にはなっていない。

けど考え過ぎて後ろ向きになるよりも、前向きに今だけを考えていればずっと救いはなるかもしれない。

「今を楽しむか、その言葉。」

ずっと、眠ってばかりだったわたしには関係のない話ね。

目先のことに夢中になって星を食いつぶす人間らしい言葉だけど…うん、わたしはそういう楽観的な考えは嫌いじゃないわ」

クルリとこちらに顔を向けて、続けて言った。

「さっちゃん、ありがとね。お陰で少しだけ気分が軽くなったわ!」

「そりゃ、どうも」

アルクエイドさんはブンブン握った手を振りつつ、笑顔で感謝の言葉を言った。

いささかオーバーアクションな感情表現であるが、彼女にはそうした天真爛漫な姿が似合っていた。

「それじゃ、気分も晴れて来たことだし。」

志貴の首を千切るの止めて、二人で約束を破った志貴ボコボコにしましょう！」
やめてくださいいしんでしまいます、主に志貴が。

「2人とも遅くなつてゴメン!!」

その時、第三者が介入してきた。

というよりも、吸血鬼二人にボコボコにされることが確定した遠野志貴であった。

もつとも幸いというべきか志貴の首がもげたりボコボコにはされることはなかった。

なぜなら志貴の声を聞いた瞬間、

志貴の所に豹のごとくすつ飛んでゆきそうだった、

アルクエイドさんを押しとどめたのは褒められてもいいと思う。

ただし、そのさいお互い絡み合い、

地面に仲良くキスする羽目になり志貴から「お前たち何やってんだ？」みたいな目で
見られた。

こつちとしては、ボコボコにされるのを防いでやったのに…。

※ ※ ※

「2日連続して死者を積極的に見ないなんてよほどの小心者ね、敵は」

昼に気絶して倒れてから夕方までずっと寝てしまい、

夜にはなんとか動けるようになったけど、買う物があつたから、

約束の時間帯に来るのに遅れてしまったがこうして今日の探索を終えた。

「魔法陣の方は結構壊したから、それでいいんじゃないかな」

「うん、そこはさっちゃんのお陰ね。わたし一人じゃそういう発想が出来なかつたかも」

今日も【死者】は現れなかつたが、

弓塚が隠蔽のための術が施されている可能性を提示したので、そうした術の探索と破壊を今日は専念した。

アルクエイドや弓塚が違和感を感じ取つた場所が丁度そうした術が施された魔法陣があり、二人で競争し合うように物理的に破壊した。

俺は生物以外のものを【直死の魔眼】で視るのは負担が掛るとアルクエイドに口酸っぱく言われたので、

たまに出てくる【死者】を倒す程度にしかできなかった。

それにしても、その術をアルクエイドが初めて見た瞬間、

ありえないくらいいの殺意を周囲にまき散らしたが、理由を聞くとなんでも数紋秘という魔術をベースに施された術であり、

隠蔽もあるが、そこから霊脈を通じて本体が隠れている魔術要塞のエネルギー供給の

蛇口となつてゐる、と忌々しげに言った。

「そういえば、志貴。」

来た時からずつとその紙袋を持つてゐるけど何かしら？」

ふと、興味深げにアルクエイドは俺の手に持つていた物について尋ねて来た。

そうだな、今日もこれで終わりだし、いい加減あげないと。

「弓塚、」

「え、ボクか？」

きよとんと意外そうに声を上げる。

「今日はアルクエイドの服を借りたみたいだけど。」

その、ずつと同じ服だとあれだと思つて、弓塚に服を持つてきた」

「え、ええ!？」

俺はシャツとセーターが入つた紙袋を彼女に差し出した。

弓塚の服装は先輩と戦つたときから変わつていなかったので弓塚の服を買つて来たのだが、

今日の弓塚はアルクエイドのを借りたのか白い長袖の服に黒のミニスカ、黒タイツの姿をしていた。

…そういえば、弓塚はスカートよりもズボンを好んでいたし。

ましてや、ミニスカなんて死んでも履きたくないなんて公言していたのに珍しいな。なんて考えつつじつくりと彼女を観察していた時、

受け取った弓塚は中身を見て、ふと聞いてきた。

「志貴、これってたしかそこそこのブランド物だったような気がするけど……」
表紙のメーカー名に気がついたみたいだ。

たしかに、安い物でもよかったけど、あまりそういうのをあげたくなかったから。

「別に弓塚は気にしなくてもいいよ、心配するなっ」

「……………」

彼女は気不味そうな眼で俺を見て

何か言おうと口にしたが、一度口を閉じ。

眼をつむり顔を伏せてたが、すぐに顔をあげて言った。

「……ごめん、ありがとう。絶対に大事にするから」

小さく申し訳なきさそうに呟き、持っている紙袋を握りしめた。

「ねね、わたしは、わたしは？」

そんなやり取りを横で見ていたアルクエイドは、

穢れのない、キラキラ光る瞳と共に期待する眼差しで俺に寄るが……いや、これは替えの服がない弓塚用なんだ。

「ぶうくく、さっちんだけずるい！」

アルクエイドが頬を膨らませ駄々を捏ねる。

まるで子供のような態度だな、けど、それがアルクエイドらし、うお!!

「ア、・アルクエイド、その…」

「へー、志貴はレディーに『重い』なんて言いたいのかしら？」

いきなりアルクエイドは横から飛び乗り、俺の背中におんぶする形となった。白く細い腕が肩越しに首に軽く巻きつき足を腰に引つ掛かけている。

突然人が乗ってきて転倒しなかった自分はエライと思う。

が、昼間寝込んだこともあり貧血気味な身体は盛んに悲鳴を上げている。

それに加え、首元にかかるアルクエイドの甘い吐息。

飾り気のない服装の下に隠された、柔らく温かい女性の肉体の感触。

秋葉とは違ったわわに実った胸やら何やらが全体に密着しており、

その、なんだ、アルクエイドの堪らないくらい『雌』の香りが、

俺の制御棒とか加熱して非常にマズイ状態です、はい。

「志貴がわたしに何かしてくれるまで離さないんだから」

……このアパー吸血鬼め、人の気も知らないで。

「アルクエイドさん。明日志貴と遊べばいいのでは？」

どうすればいいか考えた時、

そんな様子を見かねて弓塚が助け舟を出してくれた。

弓塚の提案を聞いたアルクエイドは、その発想があったのか！

とばかりに驚くと同時に俺から離れて嬉しそうに弓塚の手を取った。

「いいねいいね!!行こうよ!明日の夕方さっちゃんも一緒に志貴と遊びましょう!」

「あー自分いや、ほら。自分はまだ…」

喜んでいるアルクエイドとは逆に、弓塚は申し訳なさそうに言う。

あれ、何で弓塚は少し残念そうにしているのだろう…あ、そっか。

「その、行けたらいいけど。」

まだ太陽に浴びると即死するから…」

「あ…」

アルクエイドはしまったと言わんばかりな顔を浮かべている。

俺も何時もと変わらない会話を続けていたからすっかり忘れてた、弓塚は吸血鬼だとい

うことを。

思えば、本人は何でもなさそうにふるまっているが果たしてどうだろうか。

絶望に飲み込まれてもおかしくないのに普段と変わらぬ態度をとっている。

「弓塚」

だから俺はそんな彼女に誓いたい。

「『行けたらいい』じゃなくて行くんだ。

昼が駄目なら夜に行けばいいし、あるいは何もかも終わったら3人で行こう」

「……あれ？」

何か可笑しなことでもいったのだろうか？

弓塚はやや頬を赤らめ、眼を見開いている。

「——ほんと、志貴はまるで主人公だな」

しばらくして、彼女は呆れ交じりに言葉を発した。

何時もと違いどこか声が震えつつ。

「そうだな、全てが終わったら行こうか。3人で」

まだまだ、目先の問題は解決されていない。

けど、あの変化はなく穏やかな日々への帰還はたぶんもう直ぐだ。

「ああ、約束する。絶対行こう」

いつも学校で、当たり前前の日常の中で傍にいた彼女。

純粹に支えてやりたいと俺は思った。

第14話「対峙」

「おやおや、お互い楽しそうだなによりです」

こんな穏やかな時間が永遠に続けばいい、そう思っていたが、
楽しい言葉であるが冷やかな音声を伴った第三者の声が聞こえた。

「先輩……」

「こんばんわ、遠野君」

振り返った先にはカソック服を纏ったシエル先輩が佇んでいた。

先輩は何時ものように笑顔を浮かべていたが、学校で見せる笑顔とは違っていた。
そう、まるで獲物を見つけた肉食獣のような笑顔であった。

「弓塚さんも、こんばんわ」

現に弓塚に対しては眼がまったく笑っておらず、

言われた側は肩をビクリと震わせ反射的にアルクエイドの後ろに隠れた。

まさか、

シエル先輩はネロとやりあったあの日の夜と同じく、

弓塚を吸血鬼として今度こそ断罪するつもりなのだろうか？

だとしたら、させない。

なぜなら、今こうして3人で居られる光景こそが俺が望むものだから。

それが間違いだと言うなら俺はそれを否定してやる、例えそれが先輩であったとしても。

「先輩——『まったく、遠野君ったら学校でも噂になっていましたけど、

真夜中に女の子を2人も連れまわすなんて意外とプレイボーイなんですな——
はい!』」

ポケットのナイフを手にして覚悟を決めて、

先輩に問いつめようとした矢先、先輩が言いだした突拍子のない話に呆けてしまった。

いやいや、待て女の子を連れまわしているとかまあ、

確かに事実と言えば事実かもしれないけど、学校で噂になっているってなんでさ!

「遠野君、知らなかったのですか?」

今日学校で夜な夜な金髪の美女と可愛い系の女子を連れまわしている、と噂になって
いましたよ」

思わずアルクエイドと弓塚を見る。

確かに、考えて見れば金髪赤眼のアルクエイドは目立つ容姿をしている上に、

鼻立ち、眼の大きさ、といった1つ1つのパーツの精度が高く全体的に完成されており、

絶世の美女とは誰か？と言われたら俺はクレオパトラではなく眼の前の彼女を選ぶであろう。

一方、弓塚はアルクエイドほど派手な容姿をしていないが、

眼などの顔を構成するパーツのバランスが良く、こまめに整った顔立ちをしており、アルクエイドが美女ならば、弓塚は美人というより年頃の可愛い女学生といった感じだ。

そんな2人と一緒に真夜中を徘徊する俺はどう見られるのだろうか？

——怪しさ万点である、あるいはダブルデートをしている色男とでも見られても可笑しくない。

……有彦に知られたら、殴られるかもな。

「雑談するために来たのかしら？わざわざこんな極東の島国まで御苦労さまね、代行者」アルクエイドが口を開く。

その言葉に普段の能天気さは消えて刺を含んでいた。

「なに、遠野君の学校における先輩としてちよつとだけ振舞っただけですよ。

いくら私でも人間はそうした遊びが必要ですからね——もつとも、吸血鬼である

貴女には関係のない話かもしれませんが」

「へえ——？」

ジクリと冷たい空気が肌を刺す。

先輩とアルクエイドが出し合う殺意がぶつかり合い、険悪な空気が流れる。

しばしの間ピリピリとした緊張感を漂わせ、睨みあいを演じていたがシエル先輩が口を開いた。

「まあ、警告ですよ、警告、主に遠野君に。そう、貴方は今とても危険な状態にいます」

「お、俺？」

思わぬ指名に驚く。

「吸血鬼の吸血衝動、というものを知っていますか遠野君？」

「吸血衝動？」

聞き覚えのない単語に首をひねる。

「吸血衝動とは、要は吸血鬼が血を吸いたいという強い衝動です。

吸血鬼は超越種としての特権の代償として血を吸わなければいけません。

普段はそれこそ輸血パックで満足できますが、生命に瀕した時などは

『眼の前の人間を殺してでも』血を吸いたいという衝動に飲み込まれてしまいます、私を一度殺した弓塚さんのように」

さりげなく弓塚に視線を寄こす先輩。

先輩に恨みといった感情はなかったが、弓塚は気まづげに視線をそらす。なるほど先輩の話は分る、だけど——。

「けど、先輩。だったらそんな危険な目に合わないようにすればいいんじゃないのか？」
だったら、そういった状況下に俺が、

いや俺たち3人が協力し合えばいいだけだ。

だけど、なんで先輩はこんな話をするのだろうか？

仮にロアと戦う事自体が危険だというなら目的が同じ先輩を含めた4人で戦えばいいだけなのに。

「成程、一理ありますが遠野君。

まだ話の途中だったので勘違いしているようですけど、

私が遠野君により注意して欲しいのは、弓塚さんよりもむしろ真祖アルクエイド・ブリュンスタッドなのですよ」

「え、アルクエイドを？」

またもや意外な答えに、

間が抜けたように言葉を出してしまふ。

「アルクエイド、いいえ。

真祖の吸血鬼と呼ばれる生き物は普通の吸血鬼と違って血は飲んではいけない物なのです」

「血を飲んではいけない？吸血鬼なのに？」

血を吸う鬼、

と書いて吸血鬼と読むにも関わらず血を吸わない。この矛盾はどういうことだろうか？

そういえば、弓塚こそ血を吸っていたがアルクエイドが血を吸う姿を俺は一度も見えない。

「真祖とは吸血鬼というよりも精霊に近いもの。

彼らはあらゆる面で人類を超越する存在でしたが、1つだけ欠点がありました」

間を置き続けていう。

「それは血を吸いたいという、吸血衝動。

その強さはもはや単純に精神のみで押さえ込めるようなレベルではなく、

真祖の能力の過半が抑制に費やされてしまうほどで、

1度血を吸った真祖はそれ以降の吸血衝動の苦痛は倍加し、

これに耐えられなかった真祖は無差別に血を貪り、人間では打倒不可能な魔王と成り
ます

——かつて彼女はそうした魔王の処刑人、いいえ兵器でした、ある人間の姦計に手に掛るまでは」

俄かに信じられない。

アルクエイドが人外的な強さを持っていることは知っていたけど、そうした人外の存在を狩る役割をアルクエイドが担っていたなんて。

そして、「ある人間の姦計の手に掛るまで」と先輩は言っただけどまさか、それは。

「そう、その人間こそこの街を騒がす吸血鬼ことロアです。

その男はアルクエイドに自らの血を飲ませて、

自身は強力な吸血鬼になると同時に彼女は暴走して真祖を全滅させてしまいました。

その上、一度遠野君に殺されて分っているはずです、アルクエイド・ブリュンスタッド。

貴女はその吸血衝動を抑えるために永遠の眠りにつくか、自ら命を絶つしかない、ひびが入ったグラスであることを」

シエル先輩の険しい視線がアルクエイドに突き刺さる。

嘘だ、アルクエイドが永遠の眠りか命を絶つかの二択しかないなんて、そんなはずがあつてたまるか。

だから、アルクエイド、いつものようにあの能天気な笑顔で否定してくれ——。

「そんなことは——」

けど、現実是非情であった。

口こそ否定の言葉を発していたが、

眼の前の彼女は何時ものアルクエイドには似合わない焦りと悲壮の表情を浮かべていた。

「そうですね、」

でしたらこの程度の動きに反応できますよね？

そう言い終わると先輩は弾丸のごとくアルクエイドに肉薄し、

アルクエイドから、え？と気が抜けた言葉が出た刹那、彼女はシエル先輩に吹き飛ばされた。

「な——!?!」

俺がようやく反応できたのはアルクエイドが派手に土埃を上げて、転がって行った時であった。

弓塚もまた反応できず、アルクエイドに巻き込まれる形で吹き飛ばされた。

「驚きました、弱体化していることは予想してましたけど、まさかここまでなんて」
拳を突き出した姿で淡々と呟く先輩。

アルクエイドに仕出かしたことに腹が立つ前に、

一瞬で人を吹き飛ばせ、なおかつ冷静、というより冷酷すら思わせる態度に俺は戦慄を覚えた。

「遠野君の傍から立ち去りなさい、吸血鬼。」

おままごとはここまでです、アルクエイド・ブリュンスタッドそして弓塚さつき「懐から投剣のようなものを取り出し、2人に突き付ける。」

「どうやら、先輩は俺のためにしているようだけどさつきから俺の話は聞いてもいい。」

まったく、どいつもこいつも俺を除者にして事を進めようとする。

「さつきから聞いていれば、いい加減にしてください先輩！」

「……………」

先輩はピタリと動きを止め、視線を俺に変える。

青い瞳には遊びはなく、一寸の隙間もない冷酷さを宿していた。

「先輩は俺のためといっているけど、

俺は俺の意思でこうやって一緒に居たいと思っているんだ。

先輩がそれでも、駄目だというなら——俺にだって覚悟はある」

ナイフを取り出して構える。

魔眼殺しの方ははずしていない。

というよりも、俺は覚悟があると言いつつも結局先輩を殺すことなんてできない。先輩は言った、この街に来たのはロアを倒すためだと。

だから、こうしてシエル先輩を先輩と認識しているのは多分偽りの記憶なのだろう。けれども、俺はそれでもシエル先輩は先輩だから、先輩を殺すことは出来ない。

「……浅はかですね、たしかに遠野君は驚異的な体術と魔眼を使いこなしていますが、たかがナイフ一本で代行者、それも埋葬機関第七位にして「弓」の二つ名を頂く私に立ち向かうおつもりですか？」

ネロに匹敵するプレッシャーが襲いかかる。

この現在、俺と先輩との関係は学校の先輩後輩ではなく、殺し合いを演じる関係であった。

いや、違う。正確には狩るか狩られるかの関係、

それも狩る方は先輩で狩られるのは俺であり、襲いかかるプレッシャーで脂汗が吹き出て胃が悲鳴を上げる。

「……………」

「……………」

お互い言葉を発さぬまま沈黙の時間がただ流れる。

見つめあった状態で動かなかったが、先に行動に出たのは先輩の方であった。

「はあ、まさか遠野君が、

ここまで頑固者だったなんて。

前に関わらないように言っただつもりでしたのに」

肩を落とし、ため息をつく。

「先輩……その、」

「突然ごめんなさい、遠野君。

けど、真祖が暴走したさいに、

真つ先に犠牲となるのは彼女の傍にいる遠野君なのです」

剣をしまい、話し続ける。

「それに遠野君はわざわざこちらの世界に入らなくてもいいのです。

ロアにしろ、何にしろこんなことは私のような人間に全て任せてもいいのです。

帰るべきです、こんな暗闇の世界ではなく、日の当たる人の世界に帰るべきなのです、

それでも——」

「それでもなお2人と共にいますか？」そう先輩は質問した。

そんなこと始めから分り切っており、迷いはなかった。

「ああ、元々そのつもりだから」

「……そうですか、後は遠野君の判断に任せましょう、

私が言える義理じゃないですけど後悔がないように頑張ってください」
話はこれでおしまい、

とばかりに先輩は背を向けて公園の外へ歩き出した。

そして、俺は2人が転がっているはずの場所へ振り返ったが——あれ？

「アルクエイド？弓塚？」

そこには誰もおらず、

僅かに乱れた土の跡が人がいた証拠を残していた。

くそ、2人共どこにいったんだ!?

「遠野君、アルクエイドは公園東の方角に走った後に気絶しています。」

恐らく遠野君に吸血衝動の事実が聞かれた事にショックを覚えて逃げたけど、

弱体化していたから途中で倒れたのでしょう、弓塚さんは先ほど彼女のために水を取

りに行きました」

背を向けたまま、東に指を指し先輩は淡々と見たことを口にした。

「ありがとう、先輩。」

やっぱり先輩は先輩で優しいんですね」

「優しい、

じゃなくて自分はただ甘いだけです。」

ついでに、これはただのお節介、贅肉のようなものです。

さあ、早く行きなさい、あの2人の下に行くべきです。」

言い終わると先輩は一度も振り返らず立ち去った。

先輩は自虐していたけど、何だかんだと言って俺が知っている先輩で嬉しかった。さて、俺は2人の所へ行こう——。

第15話「対峙Ⅱ」

「ま、これでいつかな？」

自動販売機で購入した水を手にしてアルクエイドが寝ている所へ向かう。

公園は相変わらず踏みしめる足の音と虫の鳴き声しか聞こえず実に静かだ。

シエル先輩にアルクエイドさん共々吹き飛ばされた後、

ボクは悪態をつきながら起き上がったが、アルクエイドさんは挙動不審に視線を彷徨わせると急に背を向けて逃げ出した。

あまりに唐突であつたからボクは呆然と見送つたが、アルクエイドさんは急に転んだかと思えばそのまま倒れて動かなくなつてしまった。

そして、ボクが慌てて彼女をベンチに運んで何か飲み物を持つてくるべく現在に至る。

「それにしても……」

それにしても、知ってはいたけど直接アルクエイドさんの口から聞くと自分も辛かつた。

※ ※ ※

「はい、はい、かな？」

シエル先輩に2人揃って吹き飛ばされた後、

仲良く公園の埃に塗れ、悪態を口にしながら立ち上がり、

ふと、もう1人の方はどうなっているかと思いいアルクエイドさんに視線を向けると、

彼女と視線が合った刹那、そっぽ向かれただけでなく何か言おうとしたがやはり言えないような態度を示し、

ボクの心配をよそに挙動不審に視線を彷徨わせると、急に立ち上がって逃げるように走り出した。

あまりに唐突だったので啞然としていたが、

急に転んだかと思えばそのまま倒れて動かなくなってしまった、

現在こうして彼女をどこか休める場所はないか探している。

そんなふうにはアルクエイドさんを肩に掛けて、

どこか休める場所がないか探してところどころでベンチが眼の前にあつた。

ゆつくりと彼女をベンチに下ろしてから、肝心の彼女がどんな様子か顔を覗きこむ。

「ん……」

大丈夫、反応がある所を見ると完全に意識を失っているわけではなさそうだ。
「……………」

しかし、こうしてじっくりと見ると、

改めてアルクエイド・ブリュンスタッドが完璧に造形された人間であるかが分る。

例えば髪。

よく、ラノベにしる何にしる金髪キャラが登場するが、現実では本場の人間でも意外とくすんだ色をしたりする。

だけど、例えるなら金糸あるいは秋の麦穂のように実に綺麗な金髪をしている。

「おお……」

さらに髪に直接触れて見ると思った通り、絹のようにさらさらであった。

今では同じ女性の視点を持つから分かるのだがここまでさらさらな髪は始めて見た。

TSしたようやく分ったのだ、女性の髪の手入れはハッキリ言って面倒だ。

そしてこれはなぜ現実の女性は二次元のように髪を長くしないか、という長年の疑問にも答えた。

長い髪は放っておけば直ぐにボサボサになる上に、

髪が長いとさらに汗を掻いたり運動するさいには邪魔で邪魔でしかたがない。

冬場はパサつき、油断していると変な所に引っかかるので不便極まりない。

道理で世の中の女性が腰まで長い髪なんてしないわけだと、納得しつつもボクは腰まで、とはいかないか「弓塚さつき」らしくそこそこ長めの髪にしている。

「……………ねえ、さっちゃん何してるの？」

「え、」

等と余計な事を考えていたら、

アルクエイドさんがうつすらと眼を開き、こつちを見ていた。

「……………」

「……………」

気まずい空気が流れる。

というか、アルクエイドさんどんどん不機嫌な顔になっている!?

「ええつと…少し待っていてください、何か水でも持ってきて」

「ねえ、さっちゃん聞いてくれる？」

踵を返して離れようとしたが、腕を掴まれ呼び止められる。

きつと怒っているだろうな、と予想していたがアルクエイドさんは悲しみに浸るよう

に顔を俯かせていた。

おまけに、良く見れば掴んでいる手も震えていた。

「ねえ、さっちゃん。

初めて貴女と出会った時のことを覚えている？」

「ええ、えつと…」

アルクエイドさんと出会ったのはほんの数日前のことだけど、吸血鬼になったり関わったりで実に濃厚な日を過ごしたせいで、もう数週間前の記憶に思えるけど覚えている。

あれは確かお互いにつつかってしまい、気絶した彼女を介抱して、軽く話したのが彼女との出会いだ。

「少し前にね、わたしは一度志貴に殺されたのよね。

それはもう容赦なく、身体を17分割にされちゃってさ」

指でナイフで刻まれたであろう場所をなぞり自嘲する。

「わたしね、

自分でももう吸血衝動を抑えるのが限界なのを知っていたから、

今回がロアを殺す最後の機会なんだって覚悟してここまで来たの」

顔を上げ、笑みを見せたがそれは未来に希望を抱けない弱弱い笑みであった。

「でも、それが突然見知らぬ誰か、志貴に台無しにされた、

だから蘇った際、フラつく思考で真っ先に思いついたのは憎しみの感情で、」

一息つく、

「さっちゃんとぶつかった際、一瞬八つ当たりバラバラにしてしまおうかな、と思ったの」

……。

……………。

……………お、おう。

あの時は偶然原作キャラと遭遇したのとネロ教授が近くにいるんじゃないかと心配し、

ロアに殺されるんじゃないかと心配したけど、まさかいきなりメインヒロインに殺されかけるとは、

……流石メインヒロインがラスボスの型月世界だぜ。

「もう、ごめんごめん。」

そんなに恐がらなくていいのよ……って、話を戻すわ。

でも、気絶して眼が覚めた後にわたしはふと思ったの、そういうばわたしを殺した人間って何なのだろう、と」

聞いている側として言っているセリフはかなり物騒だが、

アルクエイドさんはそれが初めての恋であったと語る、恋する乙女のように眼をうつ

とりとさせていた。

「どんな人間か会ってみたくなってきた、わたしを文字通り一度殺した人間を。

一体どんな人間だろう、どんな手段でわたしを殺したんだろうって考え出したらドキドキが止まらなくて、

自分なりにどんな人間か色々想像してみたり、早くその人間に会いたくて明日がこないかずっとずっと願ったりもした」

思えば、と続ける。

「思えば、あの時からわたしは志貴に夢中で、

好きになったんだと思う。けど同時に志貴を吸血の対象として見ていたかもしれない」

そう言うとかかに耐えるようにボクの腕を固く握りしめる。

そして、僅かに感じる違和感、ふと視線を自分の腕に変えるとポツリ、ポツリと水滴が垂れ落ちていた。

「わ、わたし、志貴と一緒にいたい…志貴の隣に…ただでいい…」。

叶うなら志貴ともっともつと話をしたい、もつと志貴と一緒に見たことのない場所へ行きたい、

でも、もうわたしはあの代行者の言うとおりの時間がないの、わたしは、もつともつと

志貴と一緒にいたいのに」

「…ア、アルクエイドさん」

嗚咽と共に彼女は泣いていた。

トン、と頭をボクの胸に預けて、自分の先のない未来を嘆く。

ボクはかける言葉も思い浮かばず、ただそつと彼女の背中に手を当ててあやす様に抱きしめることしかできなかつた。

物語の主人公のように人を惹きつける言葉なんて思い浮かばなかつたし、

ニコほ、撫でぽスキルなんて都合のいい能力なんてなかつたのでただそつとアルクエイドさんを抱きしめた。

それに、アルクエイドさんの問題は人ごとではない。

今や吸血鬼となつてしまった自分もいつかは無差別に人の血をすする魔物となつてしまうかもしれないのだから。

それが、来年か、百年先かはわからないがきつとこの世界におけるボクの人生の末路はそうなるだろう。

どれくらい時間が経過したかはわからない。

ただ、ボクの服を涙で随分と濡らした後にアルクエイドさんがようやく顔を上げた。

「ごめんね、さっちゃん。服を濡らしちゃってさ。」

でも後、わたしなんだか疲れちゃった。何か飲み物がほしいかな」

しかし、彼女の表情は弱弱しいものであった。

自分がもし本当の意味で物語の主人公なら、彼女を振り立たせることができたかもしれない。

けど、どんなに考えてもアルクエイドさんにかけるべき言葉が思い浮かばず、

この苦悩が見破られないように笑顔の仮面を被り常識的な応対をしただけであった。

「ええ、いいですよ。」

水ですか、お茶ですか？それともジュースですか？」

「水かな、

それに甘いモノとか味が付いた物や、

今は赤い色をしたものが見たくないかな」

「分りました」

そうしてボクはそっと彼女の元から離れると、自動販売機の所へと向かった。

やや、歩いた後にふと振り返りアルクエイドさんを見ると、彼女は本当に疲れていたように眼を瞑り静かに寝ていた。

いや、疲れていたというよりは正しくは真祖の能力が消耗し、限界にきているからであらう。

「限界、か」

月姫のアルクエイドルートのTrueENDは彼女が教室で志貴に別れを告げる所で終わった。

グッドエンドではどうであったかは、今の自分には思いだせない。

というよりもこの状況下ではもはや参考にならなかもしれない。

果たして弓塚さつきという異分子、

いやボクという異分子が居る中でどんな最後を迎えるかまったく予想がつかない。

出来ることは、ただ眼の前の障害を乗り越えてより善い未来を自らの手で獲得するしかない。

どんなに悔やんでも過去には戻れないが進むことはできる。

己が信じる道に従い、ただ我武者羅に進むことでしかボクと彼女の福音に満ちた未来は開けない。

例えこの世界がボクにとって空想の世界でもここは紛れもない現実の世界。

険しい現実と言う名の道乗り越えてこそ、幸福な未来が訪れる。

※ ※ ※

風の流れが変わった、

いや、より正確に言えば暗闇の公園の中、眼前に誰かがいた。

まさかロア？

その疑問で回想に浸ることから一発で抜けて出すと、

爪を伸ばして抵抗する構えをとった。

しばし、沈黙と嫌な緊張感が続く。

そして先に動いたのは、未だ姿がハッキリ見えない相手のほうであった。

サク、サクと音を立てて公園の砂を靴で蹴りつつゆっくり、悠然と自分に向かって歩

いてくる。

吸血鬼の眼は、近づくと人物の輪郭と特徴を捉えつつあり、

直接は会ったことはないが、『知っている』人物でかつ、その意外な人物にボクは驚きを隠せずにいた。

「こんばんわ、弓塚さつきさん」

腰まで届く黒く、長い髪。

さらに、蒼い瞳に凜とした佇まいは精巧な日本人形を思い起こさせるが、彼女は生きた人間だ。

今時珍しいロングスカートに、皺の一つもないパリツとした高そうなシャツに襟元をきつちりとリボンで締めしており、

本人が出す空気も相まって、やはり今時見かけない本物の高貴な出のお嬢様の雰囲気を出していた。

そして、彼女の名は――。

「初めまして、私は遠野秋葉と申します、いつも兄がお世話になっています」
この夜、志貴の妹こと遠野秋葉が乱入してきた。

第16話「吸血鬼」

「初めまして、私は遠野秋葉と申します、いつも兄がお世話になってます」

意外過ぎる人物の登場にボクは動揺を隠せずにいた。

というのも、そもそも「月姫」においては彼女がこうして外に出て積極的に関わることとはなかったからだ。

その上、彼女を主題とした遠野秋葉ルートは結局の所遠野家内部で始まり、完結する話であった。

…まあ、弓塚さつきに至ってはルートによっては人気があるモブで一生を終えるか、そもそも冒頭部分で出て終了か、目玉の部分では吸血鬼化して志貴を襲った挙句に返り討ちにあうのだが。

そして、どうして彼女がここに居るかはわからない。

少なくとも友好を交わすために来たわけではなさそうだ。

「秋葉さんでいいかな、こんな時間に何の用かな?」

だが、こうして現れたということは話し合う意思があるはずなので、とりあえず会話

を試みる。

「はい、弓塚さん。本日こうしてやってきたのは——貴女を殺すために来ました」
直後無数の赤い、

うつすらとした糸の様な物が襲いかかってきた。

——というか、このナイ乳妹いきなり抹殺宣言ですか!?!
「つう!?!」

地面を蹴り、横へ跳ぶ。

刹那、先ほどまでいた地点を赤い糸が幾重にも包み込み、
ジュウジュウと音を立てて熱が奪われ、冷えた空気が流れる。

間一髪だった、

【原作】として知っていたから良かったけど、

もしもあのまま踏みとどまり迎え撃とうなんてしたら、

今頃体中の体温が奪われ、よくて全身大火傷を負っていただろう。

遠野秋葉が混血の能力として有するのは「略奪」系の能力。

簡単に言えば視認した対象から熱を奪う能力だが、対象は無機物、

有機物のどちらでも可能で、最悪対象を気化させてしまう程の凄まじい火力を有する。

これを最大限発動させた、略奪呪界「檻髪」は対象を自動探知し、対象を抹殺することが可能だ。

彼女を主題としたルートでは、この能力で教室に隠れていた志貴の足を潰した後に殺したり、

逆に足や腕が潰されても、七夜モードに突入した志貴に首をはねられたりと実に型月的展開を繰り返した。

そんな危険極まりない代物からこうして逃れられたのは、

ボクが吸血鬼になり霊格が向上し、人のころには見えなかった霊視が可能となったので、

その能力が赤い糸として見えたからである。

閑話休題

「一体全体、どういうことですか!？」

初対面でいきなり殺しにかかってきた理不尽さに叫ぶが、

当の本人は澄ました顔のままであった。

「どうしたこうしたも、決まっています。

これ以上兄を、兄さんを私と同じ夜の世界に巻き込ませないためです」

残念ながら相手は聞く耳を持っていなかった。

しかし、彼女が言っている内容は肉親ならではの切実な願いであった。

「無論アルクエイドという名の方もです、

ようやく、ようやく過去との因縁が切れて兄さんと一緒に暮らせるようになったのに、

例えそれが兄さんの意思で貴女達を手助けしているとしても、これ以上兄さんを巻き込むわけにはいきません」

自分より歳下にも関わらず威圧感を纏いながら、

じやり、じやりとブーツを鳴らしてゆつくりと間を詰めている。

「突然こんな事を言われて、理不尽だと感じるのは当たり前です、

恨まれて当然なのは分っています、何せ私は貴女を殺すのですから。ええ、憎んでもまったく構いません」

そして一拍置いてから遠野秋葉は言った、

「ましてや貴女は私と同じく魔、だから——」

瞬間、遠野秋葉の姿が消えた。

いや違う、消えたのではなくて移動しただけ、現に彼女は既にボクの眼の前にいた。というか、この人混血だとしてもなんでこんなに速いんだ!?

「——うぐう?!」

不意を突かれ、胸に強力な一撃を受ける。
骨が軋み、衝撃が殺しきれず後ろへ飛んでしまう。

「さあ——逃げてくださいなさい!!」

「っ——!!」

地面に転がり、

起き上がる間もなく次の攻撃。

彼女の真つ赤に染まった髪が自分を囲むように公園に広がる。

「くそー」

そして回避する間もなくそのまま覆い尽くされようとした。

※ ※ ※

アルクエイドは静かに寝息を立てて寝ていた。

元々彼女の造形、と言うのも変だが人よりずっと美人なせいか、

その姿はまるで呪いのリングを食べて眠りにつく姫のようで美しかった。

「アルクエイド……」

彼女が眼を覚ました時、俺はなんて言葉をかけるべきだろうか？

安心しろ、とか大丈夫とかそんな言葉では通じないのは見えている。

起きて俺が追いかけて来たのを知ったら、きつとまた逃げ出すに違いない。

「くそ、このアーパー吸血鬼。自分勝手なのはおまえの方だろう」

巻き込みたくない？

だからどうした、それがどうした？

それらを一切合財承知の上でアルクエイドと一緒にこれまでいたんだ。

たしかに、始めは戸惑った。

なんで俺がこんな世界に入ったんだろう？

なんでこの夜の世界に違和感なく自分が入れたのだろう？

けど、今はどうでもいいことだ。

たぶん、俺は世間一般の人様と比較すれば異常な人間の類だろう。

何せ義務感に襲われているから、とかそういう理由はなく単純に一緒に居てやりた

いなんて。

だけど後悔はない。

こんな「眼」を持って絶望したあの日、

先生が言った通りこんな俺でも俺なりに生きてゆこうと決めただから。

だから、逃げずにアルクエイドと話そう。

もしも彼女の方から逃げるのであれば俺はどこまでも追いかけてやる。

「おい、アルク——」

そこまで言いかけた刹那、背筋に走る悪寒。

続いて爆発音が公園を轟かせた。

「な、なんだ？」

強い風が公園を吹き抜ける。

秋とはいえ、妙に冷たい空気が肌を刺激する。

「まさか、ロアなのか!？」

瞬間、この場にはいない弓塚の顔を思い出しながら、

自然とナイフを手にして走り出した。

※ ※ ※

タン、と着地する音。

【原作キャラ】から与えられた絶対絶命のピンチを乗り越えて、

こうして地面に足をつけることが出来るとは、我ながら褒めてやりたい。

が、

「あ——はあ！はあ！」

空気が熱い、吸い込むごとに喉が焼きただれるような痛みを覚える。筋肉痛ではなく、振りほどいたとはいえ喉に彼女の「髪」が巻きつかれ、火傷を負ったからだ。

ハッキリ言つて遠野秋葉の強さは想定外だ。

軽業師のように何とか攻撃をかわしたけど遠距離攻撃が得意な上に、近接攻撃も、見た所シエル先輩程ではないがそれでもなお、強力な一撃を出してくる。そして、既にここは彼女の庭と化している。

逃げようにも即座に捕捉されてしまうだろう。

やるとしたらそれこそ、彼女を殺すつもりで掛らねば。

——ドクン、

殺すつもり、

その単語でぞわりと黒い衝動が湧く。

言葉通り、このままあいつを殺してしまえという衝動。

頭痛がする、アタマがイタイ。

脳が血を以て喉の渴きを満たせ、と騒がしい。

こんな時に吸血衝動が出るなんて最悪だ。

血を吸う事だけしか考えられず、思考する事、自己を維持する事ができなくなりそう
だ。

「……さて、まさかあそこで逃げられるなんて。どこに逃げたのかしら？」

公園の草むらの間から覗く、距離にして20メートル程だろうか？

暗闇にぼんやりと浮き上がる人影はそう呟いた。

たしかに、正直自分でも驚いている。

あの熱気に囲まれた瞬間自然と後ろに跳躍していた。

喉にまきつかれたけど一度だけの跳躍にも関わらず、ここまで距離をとれたのも吸血
鬼の肉体のお陰だ。

考えて見れば、機動力は此方が上だからきつと彼女を…。

——彼女を殺せる。

「ち、違う！殺したいなんて——」

自分の声だけど、自分じゃない声が聞こえた。

加えて頭痛が倍加してゆき、アタマ、頭が痛くて気が狂いそうだ。

「さすが西洋の魔、ヴァンパイアといった所かしら。こちらの動体視力を上回るなんて
ゆらゆら、と蜃気楼のような物を漂わせながら何か言っている。

けど、こちらはそれどころではない。

いつになく強烈な吸血衝動が際限なく肉体と思考を蹂躪する。

ガチガチと歯を鳴らして、肩で息を吐くような有様であった。

「でも、今度は油断しないわ」

広々とした公園では睨むだけで攻撃できる彼女の方が有利だ。

このまま隠れて密かに公園の外に逃げようにも、物音を一つでも立てた瞬間。

周辺の草むらごど熱を奪われて蒸発してしまう確率の方が高い。

だから、なんとか息を殺して逃走する機会を探っていたが、

「まずは——そうね。その素晴らしい逃げ足を潰してあげる…!!」

遠野秋葉の瞳が確かにボクを真つすぐ捉えていた。

月と街の僅かな明かりを除けば碌な照明がないにも関わらずこつちを見ていた。

反則だ——息を殺して潜んでいたのに、まさか赤外線でも搭載しているのだろうか!

か!?

そして、立ち上がりとにかく駆ける。

が、それよりもずっと早く彼女が纏っていた蜃気楼がゆらり、と動く。

「——くっ?!」

ジュ、と焼けるような音と痛みが足首に走る。

身体が硬直しそうになったが、走る意思を無理やり足に伝え、地面を蹴る。

そのお陰か飛ぶというより飛翔する、といった言葉が似合う程の速度で走れた。さらに足元から赤い髪が纏わりつこうとしたが、振り切る。

「いの——」

遠野秋葉の忌々しげな呟きが聞こえた。

が、こちらも正直厳しい。

「…いっつっ!？」

脳髓の痛みがさらに激しくなる。

逃げることに集中することができない。

そして、あっさりとは終わりを迎えた。

「つかまえた」

「なっ!？」

眼の前に赤い壁があった。

いや、これは遠野秋葉の能力である赤い糸でできたものであった。

最初からこちらに逃げるのが読まれていた…っ!

「あああああああ!!!!」

地面に着地した足を回転させ、

踵でブレーキをかけるが間に合わず真正面から突っこんでしまった。

体温が奪われる痛みに苦しみ、口から絶叫が響く。

痛い痛い痛い痛い!!

熱が奪われてゆくというより身体が溶けてゆく。

足を止めたところでさらに赤い糸が身体に巻き付き無様に地面を這いつくばる。

時間感覚が失われ、どれだけ経ったかはわからない。

ただ、身体が溶けるような感覚しか感じられない。

五感が感じられず自分がどうなっているかすらも徐々に怪しくなってきた。

「お……」

もしかするとこのまま、死んでしまうのか？

この世界で得た弓塚さつきとしての人生はここで終焉を迎えるのだろうか？

元より半ば借り物のような人生。

例え生き延びても吸血鬼として永き修羅の道を歩まねばならない——ならば

いっそ。

——いや、こんな所で死んでたまるか!!

「あ、ああああああああ!!」

地面に這いつくばっていたが、

足、腰、腕、の全身で地を蹴り、飛ぶ。

戦わねば生き残れない、ならば目指すはただ一人、遠野秋葉！

「この死に損ないが——！！」

遠野秋葉はボクが襲いかかって来たのを見ると、

真っ赤に染めた赤い髪を真っすぐボクに突いて来た。

飛びかかるボク、そして地に足をつけて迎え撃つ彼女。

どちらが狙いやすく攻撃が当たりやすいかは自明の理であった。

赤い糸がボクの眼を貫こうとする。

1秒以下の刹那の時間の間に刻一刻と迫ってくる。

気休めだけど、身体を捻りそれ以上焼かれないようにして、

回転しつつ、爪を伸ばした手を彼女に向けて腕を大きく振り抜いた。

鮮血が舞った。

鋭い刃となったそれは、遠野秋葉の片腕を切り落とした。

こつちも片目が派手に焼かれて、たんぱく質が焦げた嫌な臭いが出た。

さらに、正面から遠野秋葉に突っこんだためお互いぶつかり2人して地面を転がった。

「う、ぐ……」

またもや公園で転がったせいで土まみれになってしまった。

視界は片方しか存在しなかったが、幸い感覚が相当麻痺しているのか痛くはない。「げほ!!」はっ、げほ、げほ!

直ぐ近くで遠野秋葉が胸を押さえてせき込んでいる。

吸血鬼の力を全開にして真正面から衝突したから、もしかするとアバラ骨の何本かは折ったかもしれない。

おまけに片腕を一本ボクが切り落としたから、鮮血が地面を染めていた。

けど、ボクはその前に全身の熱を奪われ、

危うく蒸発させられかけた上に、片目が見えないし頭がクラクラする。

いくら吸血鬼の力で回復するとはいえ痛いものは痛いし動けないものは動けない。

このままだと、どっちが先に動けるかが勝負となるけど、意識が遠のく。

「……あ、あき、秋葉、なのか……?」

「え——に、兄さん? どうしてここに!!?」

遠のいたが志貴が来たことで眼が覚めた。

※ ※ ※

そこはひどい有様だった。

草木は涸れ果て、周囲に破壊と殺意の惨状が残っていた。

そして、そんな場所の俺がよく知る2人。それも有り得ない組み合わせでいた。

「秋葉!!その腕はいつたいたいということだ。ここで弓塚と何をしていったんだ!!」

秋葉は公園の土を浴びたせいで全身埃まみれな上に、

黒く日本人形のように綺麗で長い髪はボサボサで、何時ものお嬢様のような清楚な姿をしていなかった。

おまけに片腕を欠落しており、血が絶え間なく地面を汚しているし他にも怪我があるように顔色が悪かった。

「え、それは、その、いつ——!」

「おっと——おい、秋葉!秋葉!」

立ち上がれないのか地面に座り込んでいた秋葉が倒れる。

俺は慌てて秋葉に駆け寄ると倒れこむ寸前に受け止めることができた。

「秋葉、説明してくれないか。どうしてこうなったのか?」

「……………」

秋葉は何も話さない、

ただ俺の胸元を掴んで潜るように顔を埋めたままだ。

「やっぱ志貴は主人公だね、こんな時に来てくれるなんて」

「弓塚!!おまえは大丈夫なのか!?!」

対して弓塚も意識はあった。

けど、起きるのが辛いのか寝転がったままである上に、

よく見れば片眼が回復しつつあるとはいえ焦っていたし、全身に火傷を負っていた。喧嘩なんてレベルじゃない傷を2人は負っていた。

てつきりロアが来たのかと覚悟していた俺はこの事態に正直俺は混乱している。

どうして二人が殺しあうような事態になったか聞かなければ…。

「え?」

そこまで考えた時点でふと気づくと、正面に誰かが立っていた。

今の視線だと影しか視認できなかったが、そのシエルエツトは先輩やアルクエイドではないのはたしかであり。

「よお、志貴。久しぶりだな」

顔を上げれば過去と対面した。

第17話「吸血鬼Ⅱ」

月明かりをバックに白いシャツをだらしなく着た男。

瞳は血のように赤く髪は黒くボサボサで、少なくとも俺の周囲では見たことのない人物。

いや、あの夜に出会った男だと思うけど、呼吸が乱れる。知らないはずなのに、知っている気がする。

いや違う、随分と変わってしまったけど俺は知っている。

——ジクリ、ジクリ

「う——」

胸の傷が疼く。

触れれば服がじわりと血で滲んでいる。

そして封印された記憶が解放され、次々に過去の記憶が流れる。

八年前、シキは一度俺を殺した。

あの広場で俺は殺され、シキ、四季も殺された。

「ぐ——」

ひどい頭痛が走り、

次々に過去の風景が再現されてゆく。

思いだす、いつも一緒にいた少年のことを。

習い事から連れ出した秋葉と三人で遊んでいたあの時、

あの暑い夏の日までずっと一緒にいたのにどうして俺は――。

「四季、なのか？」

「そうだよ、志貴、ほんとうに、ほんとうに久しぶりだな」

シキは実に嬉しそうに言う。

でも、ありえない、シキはあの日死んだはずじゃあ…。

「ひやはははは!! 『ありえない』なんて顔してんなあ。

たしかに俺は一度死んだ、けどあのクソ親父、情があつたのか今日までピンピンして

いたってわけだ」

俺の呆然とした顔が面白いのか、四季は可笑しそうに笑う。

よほど可笑しいのか腹を抱え、涙を流しながら笑い、直後四季から蒸気が吹き出て絶

叫が響く。

「だまり、なさい……四、季」

「秋葉!?!」

胸元にいる秋葉の攻撃だった。

髪を赤くした秋葉が息絶え絶えになりつつも四季を攻撃していた。

どうして!?! そう疑問に思い口を開く前に秋葉が語った。

「今まで黙っていてごめんさい、兄さん。後で必ず説明します」

「……秋葉」

眼を伏せて、罪悪感に浸る秋葉。

秋葉は俺の隠された過去を知っていた、

けどどうやら俺が想像していた以上に複雑な事情が入り組んでいるらしい。

「は、ははは、秋葉も大人になったなあ」

え、と秋葉が驚くと。

ロア、いや四季は酷い凍傷に罹った姿をしつつも、

魔法陣のような物を展開させてそこに立っていた。

「そんな……わたしの混血の能力が防がれた!」

「いやいや、結構秋葉の攻撃は効いたぜ、まるで親父のようによお」

秋葉が信じられないと啞然とし、親父の言葉で硬直させる。

「そして、これはお返しだよ秋葉」

お返しとばかりに一閃、

まずい、初動が遅れたから避けることができない。

せめて秋葉だけは守ろう、そう思って秋葉を抱きしめて守るように身をかがめたが、ガキイン、と鋭い音と火花が辺りに散った。

「ボクを忘れてもらってはこまるかな」

「ああ、テメエか小娘。無粋な真似を折角の家族の会話を妨げるなんてよお」

乱入者は弓塚だった、

弓塚を四季が睨むがすぐに強者特有の余裕の笑みを浮かべる。

「作り掛けだった拠点が代行者に潰されたとはいえ、

今のオレ、いや私は貴様などに比べればアリと象以上の力のあるのがわからないのか？

幾多の死を受け入れ乗り越えて来た私からすれば、例えば貴様のポテンシャルが高くてもあまりにも——脆い」

役者のつもりか腕を広げ大げさに言う。

でも、言っている内容が法螺ではなく本当の事だと俺にはわかる。

「所で、もしかしてここも学校と同様に拠点化しているのかな？」

「おや、小娘。いや、君はどうやら聡いようだな。」

その通りだ、メインではないがここはサブの拠点となっている。

本来ならばメインの学校を拠点に街全体に精気を吸収する陣を引いたが、君たちの努力と代行者がまさか昼間から拠点を強襲するとは思わなくてね、だからこうしてここで顔を見せたわけだ」

四季、いや口調が変わったからロアかもしれないが、弓塚と比較すればどちらが勝つかは明確だ。

たかが数日で吸血鬼になったばかりの弓塚よりも、幾百年もの歳月を過ごした元凶の吸血鬼の方が勝つのが子供でも分る。

それに、眼の前の男は俺と同様にあの死の世界が『視えて』いるのだから。「たしかにこれじゃあ、ボク一人じゃまけるね」

「ほう……」

「弓塚っ!!」

弓塚はあっさりと自分に勝機がないことを表明した。

「けど、時間を稼ぐことぐらいは出来る。」

それに——勝利のカギは既にこちらの手札にあるから」

「はっ！笑わせてくれる!!勝利だと、この私にか!!」

悔るロア、しかし弓塚はどこまでも冷静で、

「だから一緒に戦いましょう——アルクエイドさん」

刹那、ロアが吹き飛んだ。

いや正しく表現すると体が地面ごと真空の刃に八つ裂きにされて、肉片と臓物をまき散らしながら飛んでいったと言うのが正しかった。

「ようやく、会えたわねロア」

「アルクエイド……」

そして、それはアルクエイドによるものだった。

何か言おうと思ったが彼女が纏う空気に気圧されて辛うじて名前を口にするこゝろまでできない。

俺が知るようなアーパーな空気は消えうせており、

ネロや暴走した弓塚の時よりもずっと、殺意と敵意をまき散らしていた。

けど俺は『視た』、死の線はアルクエイドの全身に走っており、

まるで継ぎはぎだらけの人形を無理やり動かしていたようなもので嫌な予感しかない。

「アルク、エイド」

「ん、志貴。私は大丈夫だよ」

くると振り返ると何時もの笑顔を見せる。

「私は死なないよ、だって私は吸血鬼だもん」

——嘘だ。

「やだ、志貴。泣きそうになっているじゃない。」

それに今の私にはさっちゃんもいるし大丈夫大丈夫」

それが、嘘であることは俺にも分った。

たしかに2人掛かりならば元凶の吸血鬼を確実に殺せるだろう。

けど、アルクエイド・ブリュンスタッドもそこで限界を迎えてしまう。

認めない、認めてたまるか。

アルクエイドをほっというたまるか。

弓塚とどういうしてこのアーパー吸血鬼は黙って自分で解決しようとするんだ。

「く、くは、くははははは!!」

弱体化したとはいえやはり真祖の姫はそうでなくてはならない!!

堕ちた魔王を一切の慈悲を持たず、蹂躪し、殺戮する破壊と恐怖、まさしく真祖の姫

だ!!」

そうしているとバラバラになったにも関わらずロアが再起して起き上がる。

全身血まみれで重症であったが、歓喜に震えていた。

「志貴、じゃあ行ってくる」

「おい、待てっ……アルクエイド!!」

そして、彼女は行ってしまった。

「にい、さん……」

暗闇に時折吸血鬼の爪がぶつかり合い、

火花が散る光景の最中、胸の中にいる秋葉が小さく囁いた。

「兄さん……めんなさい、すべて、私のせいです。」

弓塚さんがああなあってしまったのも私が四季を殺さなかったから……」

「あき、は」

秋葉はいつもと違いとても弱弱しく言葉を綴った。

まるで、昔の秋葉のように涙を流していた。

俺はどうするか？

怒るか？許すか？それとも？

その答えはもう決まっている。

「秋葉、弓塚を傷つけた事も秋葉が暴走したこと、俺に黙っていたことも俺は怒っていない」

「……は？」

「よし、だから後で弓塚に謝って許してもらえ」

「は？」

俺の言葉に秋葉は呆けた声を出した。

「秋葉は家族だろ、だから俺は許すから後は弓塚に謝るだけだつてことだよ」

「兄さん……でも、弓塚さんは、」

「大丈夫。俺がなんとか——つう!!」

そうして立ちあがろうとするが体が重い。

四季に向かおうとすると体から力が抜けてゆく。

「兄さん!!あなたの体は本来ならば8年前に死んでいたようなものです!」

あの時私が混血の能力で命を分け与えたから辛うじて動いているだけなのですよ!

しかも、唯でさえボロボロなのに同じく命を分け合っている四季に向かおうとすれば

死んでしまうかも知れません!!

お願いです……私は、家族が死んでしまう所なんて、もう見たくないのに。どうして、

どうしてそう無茶をしようとするのですか……」

服を掴み秋葉が必死に懇願する。

ああ、まったく自分が駄目な兄なのは秋葉の顔を見ればわかるし心が痛む。

本当に俺は心配ばかりかけている——けれども俺の決意は変わらない。

「俺は秋葉もそうだけど、あの二人も俺の日常にいてほしいだけなんだ」

友達だからクラスメイトだから、殺した責任をとるためじゃない。

隣にいてほしい、何事もない日々を共に過ごしたい、ただそれだけ話だ。

「……………わかりました」

俺の話を聞いて秋葉は顔を下に向けたが、

何かを決意したのか俺に顔を近づけて——ちよ!!あき…!!

「んぐ……」

秋葉の唇が俺のと重なった。

混乱して離れようにも残った腕を首にまわしてすっかり固定されているせいで離れない。

秋葉と密着しているせいで女性特有の甘い香りが鼻だけでなく、身体全体を刺激する。

特に胸がアルクエイドのようにたわわには実っていないが、柔らかいだななんて一瞬考えてしまった。

さらに秋葉は舌をねじ込んで来る。

俺はあまりに唐突だったせいで思考が追いつかずただただ為されるがままであった。くちや、ぺちや、と水音がしばらくする。

内心で相手は秋葉、相手は秋葉と念仏のように唱えるが、

悲しいことか男として身体は徐々に興奮しつつあり、理性が劣勢に陥りつつあった。

が、幸い状況が状況であったのと、

秋葉は俺が狼に成る前につう、と唾の糸を引いて離れた。

……というか俺はこんな時によりにもよって秋葉に興奮していたのか!!

「あ、あああああ、秋葉、あの、その」

いや、別にキスなんて初めてではない。

むしろ中学生の時キスどころかに朱鷺恵姉さんに……よし、忘れよう。

「ふふ、真つ赤ですね兄さん。」

別に気にしなくても大丈夫ですよ——私は兄さんを異性として慕っていますし」

「へ——？」

慌てふためく俺が可笑しいのか秋葉はクスリと、妖艶な笑みを浮かべた。

妹としか認識していなかった女性からの告白、という事態に俺はと言えはいいかわ

からなかった。

というか、今日は驚愕の事実が判明しすぎていい加減俺の思考がパンクしそうだ。

それにまさか、秋葉が異性として俺を慕っているとは、

明日どんな顔で秋葉と会えばいいんだ？毎日顔を合わせるといふのに……。

しかし、たしかに昔から秋葉は綺麗な子だったけど、

こうして見るとやっぱり美人になったんだとつくづく思う。

理想の和風美人風に顔立ちは整えられ、いささか気の強いお嬢様であるが、
 気品があるし例えアルクエイドよりなくてもスリム……いかに俺は何を考え
 ているんだ！

…つて、秋葉!!

「命を分け与えましたから、これできつと——ぐっ……」

「何を言っているんだ秋葉!!顔が真っ青じゃないか!!」

前より明らかに顔色が悪くなった秋葉が倒れそうになり、

俺は慌てて秋葉を抱きとめようとしたが、秋葉は眼を見開くと俺の手を払い叫んだ。

「兄さん!!あなたのアルクエイドさんや弓塚さんを助けたいという思いは嘘なのですか
 !?」

兄さんは私を心配する余裕なんてないはずですよ!!はやく兄さんは過去との因縁を絶
 ちに行くべきです!」

秋葉の言葉が胸に突き刺さる。

そうだ、秋葉が俺のためにここまでしてくれたのに、こんな所でじっとしている暇な
 んてない。

身体は確かに動く、むしろいつもより調子がいいくらいだ。

「ありがとう、秋葉——絶対に帰ってくるから」

「ふんだ、さっさと行ってください。」

「じゃないと弓塚さんに謝れないじゃないですか」

「そして俺は死闘を演じている場所へ駆けだした。」

ふと、後ろを振り返れば俺を見届けて直ぐに秋葉はぐったり地面に座っていた。

「ありがとう、秋葉。」

「だから、必ず2人を助けて日常を取り戻す。」

「そう決意を新たにして全てを終わらせるべく2人の元へと走った。」

第18話「直死の魔眼」

「せい！」

「はっ！」

爪によるするどい一閃、しかし鋭い音を立てて弾かれる。

けど、そんなことは既に想定済み、直ぐに横合いからアルクエイドさんが殴りかかってきた。

「死になさい」

地面を削り、肉が裂けて骨が碎ける。

血吹雪と轟音を立ててロアが消滅した。

しかし、時計の針が逆行するようにたちまち蘇った。

「つまらん、アルクエイド・ブリュンスタッド。」

真祖の姫とはしよせんこの程度のものだったのか？

あの慈悲も寛容もなく死徒どもを震え上がらせた恐怖はどこに行った？

「……っ！！」

強い、というかチートと言っていいくらいだ。

こっちがいくら攻撃して死なせてもこうして何度も蘇ってくる。

【原作知識】として知ってはいたが、改めて見ると残機無限が如何に理不尽かがわかる。「くくく、まあ、もしも私を殺すつもりならば、

物理攻撃ではなく教会の概念武装、それこそ1000年単位のものを用意すべきだがな」

ボク達を嘲笑するロア、

その言葉にアルクエイドさんの殺意が一層深まる。

概念武装とは、

物理的な衝撃ではなく概念、つまり魂魄の重みによって対象に打撃を与える物。

例えば黒鍵、一見投剣の類だがあれは死徒に対してもとの人間の肉体に洗礼し直した上で滅ぼす。

例えば、シエル先輩の第七聖典に至っては唯のバイルバンカーではなく転生という事象を否定する。

などと、端的に言えば物理効果ではなく特殊効果がこの相手には求められる。

が、残念ながらアルクエイドさん共々ボク達は物理脳なせいでそんな大層な代物はない。

あるいは本気の、というより姫アルク状態なら瞬殺可能だろうが姫アルクになった瞬

間地球が終わる。

なにせメルブラの姫アルクルートでは、地球の回転を止めて人類を滅亡させようとしたくらいだ。

なお、乱入してきたアルクエイドさん本人？に止めれるが、

「笑って許せ、暴走していると分っているが、自分で自分を止められぬ」

などと見事なアパーブuriを見せつけて、

シエル先輩を色んな意味で絶望の淵に追い込んだよなあ……。

「さて、おしゃべりが過ぎたな——これはお返しだ」

腕を振り下げた刹那、まばゆい閃光と衝撃が走った。

「あ、……………ぐ……………」

朦朧とする意識と視界。

土の香りが鼻を刺激し、自分がようやく倒れていることに気付く。

首を動かして周囲を観察するとやや離れた場所でアルクエイドさんがうつぶせの状態で倒れていた。

「ぐ……………」

身体に力を入れて起き上がろうとするが、生まれたての小鹿のごとく震えるばかりだ。

息は荒く、聞こえる音は不明確で意識も朦朧とするばかりである。

「ふん、所詮劣化した姫ではこの程度か。」

なんという醜態、ならば我が手で消すのがせめての慈悲というものだ」

そうロアは言うのと手から魔法陣を展開し、アルクエイドさんに狙いを定める。

くそ、このままだとやられると言うよりも自分は完全無視かそうですか、くそくそ、何でもいい動け、動けええええ!!

そうして、必死に動かすことを体に念じたお陰か、動いた。

腕を伸ばし咄嗟に転がっていた石を拾いあげ吸血鬼の渾身の力でロアに投擲した。

風切音を立ててそれは、当たる前にロアが気付いたが時すでに遅し、石は頭に直撃し周囲に脳漿をまき散らした。

この手で確かに人を殺した瞬間だった。

しかし、相手は幾百年もの時を過ごした吸血鬼。

たちまち時間を戻す様に割れたスイカのようだった頭が元に戻った。

そして、アルクエイドさんに向けられるはずだった攻撃がボクに向かった。

「無駄な足掻きを」

「あ、ぐ……」

痛みを通り越して動くことがままならない。

足蹴りされて地面を転がるが、感触が感じられない。

「ふん、まあいい。」

まずは小娘、貴様から始末しよう」

自分を見下すロアは魔術を展開し、今まさに殺さんとしている。

ああ、ここで弓塚さつきの人生は終わる、そう考えるのに十分すぎる状況だったが、

「ロア——!!」

はは、おそいじゃないか、志貴。

※ ※ ※

「ロア——!!」

俺が駆けつけて来た時

アルクエイドは立とうとしているのか、地面に膝をつき苦しげに息を吐いていた。

一方、弓塚はシキ——ロアの前で倒れており、明らかにボロボロで弱弱しくこちらを見ていた。

「おお、志貴。来てくれたのか、

てつきり逃げたのかと思って心配したぞ」

「御託はどうでもいい——お前の相手は俺がしてやる」

そして、俺を見るなり嬉しげな態度を隠さないロアのふざけた態度に頭に血が昇る。だから俺は怒りを隠さずロアに宣戦を布告してやった。

「はあ、つれねえなあ。そんなに真祖、いや——」

ロアは言葉を切ると倒れている弓塚の頭を足で踏みつける。

僅かに苦しげな声が漏れるが、ロアはそれを完全に無視していた。

「それとも、こっちの女か？」

「て……めえ——!!」

激情に赴くまま一息でロアの懐に飛び込む。

前頭部に斜めに走っている線を切り裂くべくナイフを振るつたが、ナイフは届かなかった。

ナイフがロアに届くよりも先に俺自身が吹き飛んでいた。

「がっ!!」

実にあつさりと、俺は派手に吹き飛ばされ公園の木に背中を強打して一瞬意識が飛んだ。

それだけでなく胃の中身が口から漏れそうだ、強打したから体中が痛い。

でもそれよりも、弓塚とアルクエイドの今のポロポロの姿を見ると心が裂けそうだ。

秋葉との約束もある、だから俺はこんな所で倒れるわけにはいかない。

「く、くは、ははは、あは、はっはっははは……!!」

痛む体に耐えていたら、ロアの笑い声が聞こえてきた。

「どうだ？」

大切な物を傷つけられた気持はよお、にしてもおまえ最高だ!!

その顔! その傷つきそれでもなお悪あがきをする必死な顔が俺は見たかったんだ!!」

あひやひやひや、とロア、いやこれは多分シキは笑い続ける。

不愉快だ、今すぐその騒音を消してしまいたい——今すぐ『敵』をばらばらに解体してしまいたい。

今夜もこんなに月が綺麗だというのに、その声も存在も何もかもが俺にとって邪魔だ。

「なあ、志貴。

そんなにこの小娘が好きなら仲間になれ。

おまえが持っている直視の魔眼をここで絶やすのは惜しいし

貴様と私の根本は同じだからこれほどいいパートナーはないだろうな。

おつと……どうやらシキとの人格の交差が激し……いや消えつつある、か」

そうか、シキがいなくなるのか。

『敵』が言っていることをボンヤリと聞く。

これから『敵』を解体するのに不思議と心は穏やかだ。

「まあ、もつとも貴様の意思なんて知らないがな。

安心しろ、この小娘と同様にそんな邪魔なものは奇麗に排除してあげよう」

——ぶつり

そんな音が頭から聞こえた気がした。

意識もその一言で何もかもが透き通ったものになる、息をつきロアに問う。

「シキ、いや、ロア。

一つだけ聞くけどおまえが視ているものは線か？

あるいは点か？いや、おまえが見えているのは生き物だけか？」

「はん！命乞いかと思いきや何を馬鹿なことを、モノに『死』の概念なんてあるはずがないだろ」

小馬鹿にするように、今さら何を当たり前のことを問うのか？そんな感じだ、

少なくとも、ロアの性格的にこの状況で嘘を言うとは思えない。

まあ、しかたがない、俺の『眼』は視ているチャンネルが違う特別仕様なのだから。

ならばロアとオレは、

「違う……」

「ああん？」

ロアが何か言ったけど聞こえない。

視線はすでに『モノ』に注がれているから頭痛がする。

これまででない頭痛だが、それでも注視し続け『敵』を仕留める支度をする。
「まったく、生きているうちの遺言すらないのか？」

だが、ここでお喋りはおしまいだ。あの教会の犬とその真祖の始末もあるしな」
・
かつ、かつ、と音を立ててロアが俺に寄って来る。

好都合な事に一切の警戒もない、余裕な態度を保ったままだ。

「シキ、いや、ロアなのか今は？」

「……さあね、

無限転生者と呼ばれる私は宿主の魂に浸食するが

ロア、という人格を形成した本来の肉体でないから『私』という精神に少なからず影
響を与える。

私はシキでありオレはロアでもある、これが正しいのかもしれない」

そっか、じゃあオレはロアでもシキを殺すことになるんだ。

「——シキ、オレとおまえは違うよ。おまえは死を理解していない」
かちん、とチャンネルが完全に入れ代わる。

『理解できないはず』のモノの死が鮮明に網膜に写し出される。
俺の豹変を察したロアは眼を見開き驚愕する。

「——な、何を」

「死は虚無、何も無い。

けど生き物だけじゃない、死なんてそこらのモノにずっと存在している。

死なんてものは万事に繋がっているからそれこそ世界の何もかもが崩れてしまいうだ」

「き、さま——何を、まさか、そんな馬鹿な」

ロアの動揺した声が響く。

そういえば昔誰かが言っていたな、

人は理解できないから嫌悪する、恐怖を抱く、と。

「く、くるな!!こつちに来るな!!」

この小娘がどうなってもいいのか!!志貴イ!!」

さつきを踏みつける足に入れて俺を脅す。

けど、俺は流れるような手際で地面にナイフを唯一刺した。

硝子が一齐に碎けるような音が鳴り響き、ロアが仕掛けた魔術陣は消滅した。

「なん、だと……公園に仕掛けた魔術陣が解けた、だと。」

魔術そのものを殺すなど、そんな、ありえぬ——ありえぬ、ありえぬ!!」
理解できない、か。

いいだろう、俺が教えてやる。

「——教えてやる。これが、モノを殺すっていうことだ。」

短く告げてジャツ！と地面にナイフを走らせる。

刹那、ロアがいる場所に張り巡らされた線が蠢き地面が陥没した。

「な——!!」

恐怖が混じった叫び、ロアが立っていた地点が地面ごと崩れ落ちる。
自由になった弓塚は脱兎のごとく跳躍してロアから逃げて、叫んだ。

「——志貴!!」

ああ、分っている。終わらせようこの因果を。

何よりも足りない、殺し足りない、簡単に殺すことなんてできない。

生き汚く魔術を放ったが、

それを殺すと手始めに右腕を切断、対象の抵抗力を奪う。

「がああああ!!」

俺に接近されて魔術は不利と悟ったのか肉体系戦に移行。

人間なら簡単に潰れたトマトのごとく破壊するであろう蹴りも俺からすれば随分と

遅い。

避けるため這うように低い体勢をしたが、一瞬でロアと真正面から向き合う。

突然目の前に俺が現れた事に動揺したロアだが、俺は躊躇なくナイフを横一文字に走らせて両目を殺した。

絶叫、だが口は健在で対象は距離を取り魔術と思しき詠唱を口にする。

閃光が迫るが、さっきの蹴りよりも更に遅く殺すのも億劫なので横に跳躍して避ける。

そして、接近してロアの細い顎を切り裂いてしまう。

ここで対象は何やらわめく、

どうも吸血鬼の回復能力が発動しないことで極端に恐怖を感じているらしい。

もうすでに冷静な判断はつけないと思われるが——つまらない、退屈だ。

もつと踊つてくれると思ったのに期待外れだ。

幾百年もの時を過ごし弓塚とアルクエイドを食い物にした吸血鬼の割には弱い。これはいけない、できそこないな玩具は壊さなくては。

左手を殺す

手首切断、出血多量。

右足を殺す

右アキレス腱切断、対象の歩行は困難に。

片肺を潰す

対象の口から血の泡が吹き出る。

もはや呼吸すること自体が苦行であろう。

左足を殺す。

太ももが血吹雪と共に派手に飛ぶ。

内臓を殺す。

対象が宙に浮いた所で腹にナイフを突き刺し、内臓機能を完全に停止させる。

殺す

殺す殺す

コロスコロスコロスコロスコロス

殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す

「化け物」

血まみれのダルマかあるいは、

肉の塊に成った対象は短く的確に今のオレを表現する言葉を送ってきた。

「ああ、バケモノさバケモノ。」

だが限界を知れ吸血鬼、カタチがある以上消え去るのが最低限の決まり事だ」

間違つてはいない、だが少なくとも俺は誰よりも死に近いから、その命の尊さとありがたさ、何も無い日常の温かみはお前と違い知っている。そして――。

「じゃあな、ロア」

トス、と

ロアの心臓の右よりにある点を突き刺した。

第19話「ロア」

「本当に倒したの……?」

信じられない、そうアルクエイドは呟いた。

当然だ俺ですらこうもあっさり倒せたことが我ながら信じられない。

けど、かつてロアと呼ばれた男が灰に帰りつつあり、俺がこうして立っているのは俺たちの勝利をこれ以上なく証明していた。

「……志貴、終わったんだな」

隣に来た弓塚が感嘆深げに言う。

そう、弓塚の言うとおり何もかもこの夜に終わった。

俺がこの眼を持つようになった切っ掛けにして、アルクエイドと出会うことになった人物がたった今夜亡くなった。

ロアは俺やアルクエイド、弓塚、秋葉、そして四季の人生を狂わせた、

間違はなくロアは悪人だろう、たしかにロアさえいなければ俺は何事もない人生を過ごしていただろう。

けど——逆——にロアがいなければ俺は先生やアルクエイドと出会わずにいた事を

思うと人生とは不思議なものだ。

さて、と

「さて、これから弓塚をどうやって日常生活に戻すかだよな……」

「う、そうだな」

ロアという大敵を倒して改めて目先の問題に眼を向けて弓塚が口ごもり、俺から眼を逸らす。

元凶の吸血鬼こそこの手で殺したが弓塚が未だ吸血鬼であることには変わりようがない。

太陽に当たればたちまち灰と成り滅んでしまうことは解決していない——彼女が人間らしい日常生活を送るには極めて困難だ。

「ふくん、志貴はさっちなだけにしか気にならないんだ」

嫉妬交じりな声に顔を恐る恐る声の主に向ければ、

アルクエイドが実に綺麗な笑顔を浮かべていた、だが顔は笑っているが眼が全く笑っていない。

整いすぎた顔で、美人なせいか正直迫力がありすぎて怖い——。

「さて、お熱いのはそこまでです」

そして、機械のように感情に欠けたシエル先輩の声がした、

うすうすだが、誰かが見張っていたことを知っていたがやはり先輩は来た。

「先輩……」

「ええ、どうも遠野君。」

「ご無事で何よりです、わたし心配して損しちゃいました」

先輩は学校で会った時と同じように、にこにこ笑顔であったが、

両手には投剣を握っており、先輩から発せられる殺意がピリピリと辺りを支配する。

「何のつもりかしら？ シエル」

「何のつもり？」

それはこちらのセリフですよ、アルクエイド・ブリュンスタッド。

貴女は見たはずでしょう——その子がとんでもない才能を持った吸血鬼である

ことを」

「っ！……それは、は」

アルクエイドが口ごもり、弓塚がビクツ、と震えた。

「まさか一緒にいたいとでも？」

冗談は大概にしてもらいたいですね。

そもそも貴女の使命は死徒の殲滅なはずです。

それがどうしてその吸血鬼に肩入れするのですか？」

そして、反論できないアルクエイドに対して、

どこまでも冷たい視線と口調でシエル先輩は一気に話す。

アルクエイドは俯き、黙ってシエルの言葉を聞いていたがしばらくして口を開いた。

「……………わかん、ない」

ポツリ、とアルクエイドが呟く。

「わかんないよ!!そんなの!!」

理由なんて知らないわ、こんな気持ちわたし初めてだから。でも——」

そしてアルクエイドは真つすぐシエル先輩の眼を見返して言い切った。

「私は志貴と一緒にいたいだけでなくさつきとも隣にいて欲しい!!」

そうよ、私は2人とも大好きだから!!みんなみんな大好きだから!

だからシエル!!さつきに手を出すという事は私と敵対する事を覚悟しなさい!」

「……………っ!?!」

アルクエイドの叫びに先輩は一瞬驚きに眼を見開く。

だが、直ぐに表情を改めより一層険しい顔でアルクエイドを睨み返す。

剣を構え、足を一步前に踏みしめ、今この瞬間にも俺たちと戦闘に突入しそうだ。

そんな緊迫した空気を破ったのは弓塚だった。

弓塚は俺が止めるよりも早く一步前に出て、先輩と向き合った。

「先輩……先輩を殺して御免なさい!!!」

「……………」

弓塚は真つ先にシエル先輩に頭を下げた。

彼女は一度シエル先輩をこの公園で殺し、今日この日まで先輩に謝罪する機会はないのにかつた。

「自分だつて分かっています。

吸血鬼は人が生きる世界とは相いれないことぐらいは。

自分がどんなに恐ろしい能力を持っているか、も含めてです」

淡々と緊張のせいか震えた声で弓塚は言葉を綴る。

しかし、その瞳だけは絶対に逸らさずに先輩に向けている。

「でも、生きたいのです!!」

自分勝手なのは承知です、血は輸血パックで我慢します。

もし暴走しそうな時は……そうなる前に死にます、自分から命を絶ちます」

「おい、弓塚!!」

その気持ちは本当なのだろう、現に足は生まれたての小鹿のごとく震えている。

だが、それを言ってしまった今次の瞬間にシエル先輩が殺しにかかつてくるかもしれないの。

なぜなら先輩の立場として死ぬ覚悟があるならば今ここで殺しても何も変わらないのだから。

俺は再度ナイフを手にしてシエル先輩が弓塚に襲いかかって来た際に備える。

先輩は更に険しい表情を浮かべ、嫌な緊張感が周囲の空気を支配したが、

「——はああ、まったたく」

俺の心配をよそに先輩はいきなり大きなため息をついた。

「ああもう!!」

これじゃあわたしが悪人みたいじゃないですか！

ええ、わかりました。まったたく、わかりましたよ、もう」

降参です、という風に両手を上げる。

「まったたく、数々の吸血鬼を狩り、

幾度も命乞いをする光景を眼にしましたけど弓塚さんのようなのは初めてです。

代行者としては失格なのでしょうが——『先輩』として貴女は殺戮をするような

人間でないことは信用してます」

先輩から緊迫した空気が散り、

俺が知るシエル先輩になった先輩はやれやれ、と続ける。

「それに、今の貴方達に手を出せばこちらもタダでは済まないですしょうし」

先輩がウインクした先を見ると、アルクエイドがサツと腕を隠しそつぽを向いている。

真祖が吸血鬼を守るなんて私、始めてみましたと先輩は苦笑する。

「ですが、弓塚さん。貴方が自分を殺せず魔に墮落した時——その時は必ず私の命に賭けても殺しに來ます」

「……………はい」

緊張からほどけた所に殺意をぶつけられ、

コクコクと頷いた弓塚はその場でペタリ、と座り込んだ。

「ボクは……………生きて、いる……………」

信じられないとばかりに弓塚が独白する。

思えばこれが普通の反応かもしれない、何だかんだとこの非日常に適應した俺が異常なのだろう。

けど共感できる部分はある、それは生への喜び。

その気持ちは分かる、ましてやこんな眼を持つようになってから死の意味を知るとなおさらだ。

あの時、病院で目が覚めると周りは全部線が走っており、それが何なのかは直ぐに理解した。

生き物だけじゃない、死なんてそこらのモノにずっと存在している、死なんてものは万事に繋がっていた。

だから俺は逃げ出して死が見えない青空をずっと眺めていた時、先生と出会った。

先生がいなければ俺は今頃どうなっていただろう？だが少なくとも先生と出会ったことは俺の人生で最良の出来事だ。

「とりあえず……一件落着かしら？」

「ああ」

アルクエイドの言葉に答える。

もつとも色々とまだまだ問題は山積みだけどきつと何とかなる。

俺にアルクエイド、弓塚の三人、いやそれだけでなく秋葉や先輩と協力し合えば何だってできる気がする。

一人で駄目なら皆で手を取り合い支え合えばいい、未来が不安で仕方なくても道を作り目指すだけだ。

そうすれば、きつと生きている限り俺たちが笑い合える福音に満ちた未来が来るであろう。

「さあ、一旦帰ろう弓塚」

「うん………あれ、いや………」

様子がおかしい、気分でも悪いのかと思ひ手を差し伸べるが手を出すことはなかった。

疑問に思ひ弓塚の顔を見るが、表情は徐々に青白いものになり瞳孔が揺れ動いてい

る。

「弓塚？」

「いや……まって！ちよつとまって!!」

肩に手を置いたが振り払われた。

がちがち、と歯を鳴らし体の震えが止まらない——何かが根本的に様子がおかしい。

「まさか——」

シエル先輩が強張った顔で弓塚を見る。

俺もいやな予感が加速して一つの仮説にたどり着く。

ロアは転生し乗っ取るという珍しい吸血鬼で、物理的に殺害してもまた別の宿主に移り替わるだけだ。

そして先ほど俺がロアの点を突いて、魂ごと殺したはずだ——そのはずだが、眼の前

にそのロアの血を分けた娘とも言うべき人物がいる。

まさか——ロアが弓塚に転生したのか

「弓塚っ——!!?」

弓塚に俺は駆け寄るが次の瞬間、弓塚は腕を振るい俺に襲いかかった。

第20話「終幕」

「すばらしい！すばらしいな！この肉体は!!」

弓塚が笑っていた、いや違う。

ただ己に酔いしれる吸血鬼がそこにいた。

俺は事の成り行きを理解できずただ呆然と眺めていた。

「馬鹿な！ロアは予め転生する個体を選んで転生するもの！」

しかもこれほど短時間で転生するなどこれまでの事例にはなかったはず——

「ロア！一体彼女に何をした!!」

先輩が敵意とともにロアに詰問する。

「ああ、そのことか代行者。」

簡単だ、この小娘の血を吸った直後からこの小娘はダンピールやグールの段階を飛ばして吸血鬼化していた。

さすがに私も驚いてね、興味深い事例でもあるから保険として転生の術を施し、万が一に備えていたのだよ」

「生き汚い外道が……!」

可笑しそうにくつくつと笑う弓塚。

いや、吸血鬼口アは激高する先輩に向かって言い放った。

「外道？可笑しな話だな。」

親を殺し、友人を殺し、故郷を滅ぼしたお前が。

それにお前はあの時楽しんだではないか——エレイシア」

「その名を言うなあああ貴様つああああ!!」

直後、先輩が地を蹴り弓塚のもとへ跳ぶ。

明らかに弓塚を助けるつもりはなく激高した感情のまま弓塚を手にかけてようとするものであった。

情けないことに俺は先輩が跳躍した時に、ようやく動き先輩を止めようとしたが当然間に合うわけがない。

一瞬で間合いを詰めた先輩はそのまま腕を振るい、弓塚の頭部を破壊する動きを見せた。

しかし、それより早く弓塚の方が動き逆にカウンターを浴びせた。

顎を打ち抜かれ、先輩は一瞬動きを止める。その隙を逃さず弓塚は再度拳を握って先輩を殴打。

吸血鬼の馬鹿力でそのまま殴られたせいで骨が碎ける嫌な音が鳴り響く。

先輩は地面に数度バウンドして、しばらく転がり動かなくなってしまった。

そこに弓塚が先輩に近寄ると首元をつかみ片手で持ち上げる。

意識はあるのか先輩は微かに呻き声を出していた。

「エレイシア、君の才能も素敵であったがこの身体はさらに素敵だ。

もしも君がこの小娘同様に吸血鬼となっていればどれほどよかつたものか、そう今でも考えるよ。

だが、君は今や聖堂教会の代行者。その貴重な才能が生かされないならばここで死んでもらおう」

突剣のように片手を形作り先輩の胸元に照準を定める。

不死性体質の先輩に態々殺人予告をするということは………まずい、

外見は弓塚だが中身は今やロアだから直死の魔眼で先輩を殺すつもりだ。

くそ、走れ！走れ！遠野志貴！

「さようなら、エレイシア」

——間に合わない!?

「一応シエルも死んでもらっちゃ寝覚めが悪いから、止めてもらえないかしら。ねえ——

——ロア？」

刹那、アルクエイドの声と共に弓塚が吹き飛んだ。

今度は自分が跳ぶことになった弓塚であったが、

先輩と違い致命打に至らなかつたせい、か空中で体勢を立て直して着地。

反動を殺しきれず土ぼこりを立てて地面を滑つた。

「……やはり解せぬ」

ぽつり、と弓塚もといロアが呟く。

「姫よ、貴女なら前のごとくこの小娘ごと殺せたはず。

しかも貴女はあの代行者を殺すなど言つた、本当に貴女はどうなつてしまつたのか？」

神妙な顔でロアがアルクエイドに問いかける。

あの傲慢な態度はなく縋るような思いで、どこか感情が揺らいでいるように俺には見え
えた。

「そうね、貴方の言うとおり私は一度壊れた。

貴方が知るアルクエイドは一度志貴に殺され、もう二度と戻らないわ」

そして一拍。

「始めは怨んだわ、

これが貴方を殺す最後の機会だつていうのにそれを見知らぬ誰かに殺されたから。

けど、今は違う。私は志貴やさつちんを通じて初めて知つた——世界がこんな

も広くて楽しいものなんだって」

続けてアルクエイドは真つすぐロアの眼を見返して言い切った。

「シエルにも言ったけどもう一度言うわ、

どうして真祖の兵器である私がこうなってしまった原因や理由なんて知らないわ、こんな気持ちわたし初めてだから、でも私の心は皆幸せなハッピーエンドを望んでいる。

そして、それ以上さつきに手を出すとこの事は私と敵対し、その永遠の輪廻が終わる事を覚悟しなさいロア」

アルクエイドが断言する。

紅い眼が金色に輝きロアを睨む、妥協の余地は一切なかった。

アルクエイドの話を黙って聞いていたロアは顔を下げ、しばし沈黙に浸る。が、よくよく観察すると口元はかすかに動いており、何かを呟いていた。

「……………違う」

否定の言葉。

「違う、違う違う違う違う違う違う違う」

違う違う違う違う違う違う違う違う違う

違う違う違う違う違う違う違う違う違う!!!」

「なっ!？」

髪を掴み頭を抱え、否定の言葉を壊れたレコーダのごとく大音量で垂れ流す。

足は小鹿のごとく震え、全身から汗が吹き出て、口からはありつただけの負の感情がぶちまけられる。

今までにないロアの反応に俺は戸惑いを隠せずに、ただ驚く他なかった。

「こんなのではない、こんなのではない！」

我が姫はこんなのではない、私が永遠を求めたのはこんなのではない!!!」

現実の否定。

より正確に言えばアルクエイドの今の現状をロアは認めてなかった。

ロアとアルクエイドの細かい因縁は俺はよく知らない。

だがこの様子から察するにロアはどう見てもタチが悪い代物、

——自分の幻想こそ現実と思ひ込みアルクエイドを巻き込んだことだ。

「——ああ、そうか。簡単ではないか。」

やはり劣化した姫など醜態以外他ならない、ならば私と共に消えるのがせめての慈悲というもの」

不穏な台詞と同時に光がロアを中心に迸る。

そして、何かを察したアルクエイドと、この後の展開が予想できた俺が飛び出すより

も早く、

アルクエイドと俺は瞬時に魔術で拘束されてしまった、そしてアルクエイドが俺の考えを代弁した。

「ロアっ……!!?正気なの!永遠を求めた貴方が心中なんて!」

そう、ロアは言った。

私と共に消えるのがせめての慈悲、と。

奴はアルクエイドを巻き添えにして死ぬつもりだ。

「どの道ついさつき志貴に殺されたばかりだ、今更死など私は恐れない。

それにもう、いい。私が求めてやまなかつた姫は既に死んでいる、ならばこれ以上生きる意味もない」

ふざけるな!!

散々人を巻き込んでおいて今更自殺するのか。

気に入らない、その態度が気に入らないし何よりも直死の魔眼を持ちながら、死を大安売りする姿勢が何よりも腹立たしい。

病院から抜け出して、先生に諭されたあの日から、俺はただ生きるだけでも尊いことを知ったのに奴は無視している。

くそ、動けない。

俺はここで死ぬつもりなんてないのに動けない！

さらに地面に幾重もの魔法陣が描かれ、俄かに熱気が冬の公園を満たす。

だが、こつちは少しも暖かくない、むしろこの後の展開が背筋に寒気が絶え間なく走る。

抵抗しても間もなく訪れる死の予感に俺は悪あがきを試みるが時間は無慈悲に過ぎてゆく。

「安心しろ、貴様らだけを殺すつもりはない。

この公園ごと吹き飛ばすつもりゆえに、寂しい思いはさせない」

心に絶望という名の釘が打ち込まれ、輝が生える。

秋葉にシエル先輩の顔が思い浮かんで消えを繰り返し、俺は何も考えれなくなる。

「さようなら」

そして、光が視界を満たした。

「……………っ？」

眩しさに眼が眩み何も見えない。

一瞬、実は死後の世界に来てしまったなどと思いましたが、

こうして意識し知覚し、感じているのは変わらぬ公園の空気の香りである。

「馬鹿な……………そんな、コトは、

まさかこの小娘は——を潜り抜けて、あまつさえ……馬鹿な、他にもいるだと」
視界が元に戻った時は先ほどの変わらぬ光景があった。

そこにはただ唾然とするロアが佇み、独り言をつぶやいていた。

ロアにとって何か予想外の事態があったのだろう、しかし俺にとっては好都合だ。
特に魔術の拘束が解けたのは、好機だ。

「ロアア!!」

駆ける。

距離を詰めると腕を伸ばし、

すばやく直死の魔眼が見せるロアの生命を象徴する『点』にナイフを突き出した。

「ちい!?!」

が、寸前でロアは背をのけぞり避ける。

当然俺はすべての元凶であるロアをここで終わらせるべく一歩前に出る。

ロアはなぎ払うように腕を振るう。

大雑把な動きだが吸血鬼の力で振るっているため空気が震う。

最小限の動きで避けたはずだが、頬が剃刀で切られたかのように薄っすらと横一条の
かすり傷ができる。

大した力だ。

だけど、腕を振るった後は胸元がガラ空きである。

次の動作を行うには俺が胸元にナイフを突きつけるよりも一拍ほど足りない。

そう、今のロアは無防備。

ここでロアを殺し、全てを終わらせることができる！

そして、ナイフを胸元に突き刺そうとし

——魔眼がロアの生命を象徴する『点』と弓塚のそれとほぼ重なっているのを捉えた。

「くそっ!!」

このまま刺すと弓塚ごと殺してしまう。その点に気づいた俺は悪態を口にする。

さらに直後にやってきたロアの攻撃から避けるため距離をとった。

「……………」

「……………」

しばしの睨み合い。

お互いジリジリと円陣を描くように、ゆったりと動く。

ロアは両手を上着のポケットに入れていかにも隙がありそうな姿であるが眼光是鋭く、油断も隙間もない。

何時もなら魔術攻撃なら魔術ごと切り裂き、相手を殺すことができるが相手のその姿

形は弓塚である。

下手にやると弓塚ごと殺してしまうのは、先程のように明白で非常に腹立たしい。

それでも、またロアの元に飛び込めるように構えをとりいつそこちらから動くべきかと考えた時点でロアが口を開いた。

「……さっきのは私も驚いたよ。」

この小娘が規格外であることは承知していたが、まさか『』を通り抜けた異世界人だとはな。

拳句に——の存在の支援を受けて似たような例がこの国にはいるらしい。そして貴様は姫と共に今後の世界を左右する存在であるようだ

は、はは、永いこと生きた私さえもこのような事案は初めてだ………姫の言うとおり、世界とは広いものであるかもしれない。」

「……？」

よくわからないことを言っている。

弓塚が異世界人だとか聞いているだけなら電波でしかないが、

この男が態々虚構を述べることはないの、何か重要な事実を言っているのだろう。ただ俺にわかったのは、最後の部分だけは自らを自虐していたのは確かである。

「昔なら、純粹であった昔の私なら、その謎と原因について探求していただろう。」

だが、今の私にはどうでもいいことだ——ハ、ハハ!! 志貴! 果たして私と小娘を見分けることができるのか?

仮にできたとしても、いかに人を殺すことを極めた貴様でも肉体ごと殺さず、私の魂だけを殺すのは困難なはずだ!!」

「……っ!」

凶星だ。

俺は物の『死』すら見分ける事ができるが、

一つの肉体に二つの生命を抱えている弓塚を肉体を壊さず、

かつロアの生命だけを選んで殺すとなると、標的の『点』が元から小さいこともさることながら、

お互いが半ば重なっていると来た、隙がなければとても狙って突くのは先ほどのように奇襲を除けば難しい。

「ああ、あるいは。墮落した姫を道連れにすることはできないが——この小娘ごと死ぬのも悪くない」

「……つてめえ!!」

ロアは自ら胸もとの『点』にピタリと、

よく磨がれた突剣のように爪を伸ばした手を当てる。

奴はアルクエイドと俺を巻き込んで死ぬことができないならば弓塚を巻き添えにしようと考えていた。

弓塚の元に飛び込もうにも、これでは動けない。

万事休す、そんな単語が頭に思い浮かんだが、奇妙なことにロアはそこで動きを止めた。

「ば、馬鹿な……また、貴様が、いや——小娘エ!!」

まさか、弓塚なのか？

「……シ、キ……、ハヤ、ク……」

弓塚はぎこちない動きで自ら突きつけていた手を離す。

明らかに肉体の主導権を弓塚が取り戻していた。

しかし、余裕がないようで彼女は俺にやるべきことを催促していた。

俺はロアと巻き添えに弓塚を殺してしまう事に躊躇し、ナイフを手にしたまま立ち尽くす。

だが、魔眼は驚くべき事実を伝えてくれた。

ロアと弓塚の生命を象徴する『点』が徐々に離れ狙いやすくなりつつあった。

たぶん、肉体の主導権が弓塚側に傾いたせいだろう、そしてこの機会を逃すわけにはいかない!

「シン……ジテ、イ……ル、から」

ああ、任せろ。

なぜならこの眼は神様だつて殺して見せる——！！

今度こそすべてを終わらせるべく駆ける。

弓塚は動かず、じつとしている。

俺は弓塚の期待に答えるようにナイフをロアの生命を象徴する『点』を軽く突く。

しかし魂が消滅した確かな感触を手は感じ、今度こそ俺たちの運命を狂わせた人物をこの世から抹殺した。

実にあっけなく、全てが終わった瞬間だった。

第21話「可能性未来」(完結)

また寒い季節がやってきた。

ここ十年の間に老朽化が進んだため放棄された廃ビル群の間に流れる風はとても冷たい。

この周囲にはせいぜい4、5階建て程度の細かなビルと朽ち果てたバラック仕込みの廃工場しかなく、

かろうじて近場にあるコンビニが文明の光と利便性を提供しているだけである。

近々再開発が進むらしいがここを根城にする自分にとってはいささか困る。

何せもはや人の身を逸脱し、あまつさえ外見が不老となればそんなに長く人の目があ
る場所ではいられない。

少し前まで友人の好意と外見にまだ誤魔化しが効いたため、人の世に紛れていたが吸
血鬼化して十何年と過ぎると流石に怪しくなった。

周囲の人間が老いたり成長する中で、自分の女子高校生の外見と変わらぬ姿は目立
つ。

何せあのシエル先輩も三十代に突入しそうで、必死に若作りをしているくらいなのだ

から。

前世ならそんな光景など想像したことがない。

なぜなら彼女らの物語はボクら観客側からすれば未完で終わってしまったようなものだから。

もつとも、こうしてリアルで彼女らと出会い共に人生を過ごすなど前世では妄想の類でしかなかった。

「約10年の月日か、」

多くの人と出会った、楽しいこともあれば悲しいこともあった。

想定外の事、予想通りの事、本当に色々あった。

多くの人は月日が過ぎるごとに、

あの10代の面白可笑しい騒がしい騒ぎは収まり、彼女彼らは思い思いの道へ進んだ。

某喫茶店での出会いや、マジカルなステッキが引き起こした平行世界絡みの騒動など、

歳を取るにつれて少なくなってきた——まるで夏休みや、幼年時代に終わりを迎えたつづつあるように。

そんな中、ボクは変化しただろうか？

外見的な意味だけでなく周囲が『大人』になるのに対して自分だけが取り残されているような――。

「――っ…へっくしー！」

鼻がつまりくしゃみをする。

ずると音を立てて鼻水が出る。

まったく、頑丈であるのはいいが吸血鬼化したこの身でも寒いものは寒い。

手早く上着からティッシュを取り出して鼻をかむ。

ティッシュから漏れ出す息は白く、手は寒さで赤く冷たい。

今すぐ今の我が家に帰りたいが、一応こんな辺鄙な場所でも人気はある上に、

ここ数年で急激に進んだ監視カメラの眼とその後の権力とコネを使った神秘の秘匿の労力を考えると吸血鬼パワーで一気に飛ぶわけにはいかない。

おまけに今時の裏世界の住民は携帯電子機器による、動画撮影にも警戒しなければならず、その点についてかの時計塔でも注意喚起しているくらいだ。

ゆえに、ただ黙って地道に歩くしかない。

黙々と雪こそ降ってはいないが冷えた空気が流れる、冷たく硬いアスファルトの道を踏みしめ歩く。

ふと、空を見上げる。

太陽は既に地平線へ沈んだため、空は濃紺からさらに黒に変わりつつある。この寒い季節といい、あの日ボクの運命が変わった日とよく似ていた。だからボクはふと、ロアと最後の会話を思い出した。

※ ※ ※

「ん……？」

目が覚める。

頭は未だぼんやりと動かないが、

視界情報から察するに知らない天井ではなく、どうやら夜空らしい。

しかし、鼻を刺激する花の香りが、ここが公園でないことを証明している。

上体を起き上がらせ、改めて周囲を見渡すと一面に白い花が咲いていた。

なだらかな丘に延々と月日に照らされた白い花が咲き誇り、夜風に揺られその香りと美しい姿を魅せていた。

ここは、どこか？

そんな疑問が一瞬浮かんだが、

夜空を照らすありえないほど大きな月と「原作」からすぐに答えが出た。

「そうだ、ここはかつて純粹であった私が姫に見惚れた場所。

そして今この光景は、私の記憶を元に再現されたものに過ぎない」
振り返るとロアが立っていた。

だが、その姿は先ほどまでのと随分違う。

まるでカトリックの神父のごとく隙のない服装を着こなしている。

いや、首に掛けてある帯からキリスト教の司教や司祭が礼拝に使用するストラであるから本物の神父なのだろう。

そして、彼は眼鏡をかけ瞳には狂気はなく高い理性と知性を宿しており、

ボクは目の前の人物が「アカシヤの蛇」の蛇と呼ばれる前のミハイル・ロア・バルダムヨオンであることを悟った。

「こうして、正面から話すのは初めてだな弓塚さつき。

始めまして私の名はミハイル・ロア・バルダムヨオン、かつて永遠を求めた愚か者。適うことなら吸血鬼になる前に君に会いたかったと今はつくづく思うよ。」

「そりゃ、どうも……」

なんだかえらく丁寧な口調と態度のせいかこっちの調子が狂う。

しかし、こうしてお互いが出会ったということはここは、

「心象世界」

「そうだ、ここは心の世界。」

恐らく元々無理やり君の魂を乗っ取るうとした影響だろう。だから、私たちはこうして話せる」

「だから、失敗して志貴に殺された」

「ああ、だから君たちに妨害され私は死んだ」

……あれ【君たちに妨害され】？

たしかに何が何だが詳しくは覚えていないが、

イメージ的には、我武者羅にこの男と肉体の主導権をめぐる争い、

何とか主導権を握るとすべてを志貴に託した所まで覚えているが、何か重要なことを忘れてる気がする。

「……そうか、覚えていないのだな。」

いや、君がいう所の【原作】知識と同じく認識でないのか」

何か釈然としない。

だが、それよりもどうして【原作】知識という単語がこの男から出ている——!?

「ああ、それは簡単だ。」

私が乗っ取る際、寄生された人間の記憶は一通り引き継がれる。

君が言うロアは言うなれば私は四季でありロアでもあったのだ、だから弓塚さつきの

記憶は一通り見せてもらった。

……まったく、永遠を求めてここまで来たが君のような例は正直驚いたよ、姫の言うとおり案外世界は広いものようだ」

なんてことだ。

よりにもよってこの男に知られるとは。

「そんなに構えなくていい、

どの道私はあの殺人貴に殺された消える身。

ゆえに、今更君を殺したり我が物にしたりする気はない。

それよりも 老婆心ながら今後の君について言いたいことがある」

思わず襲おうとしたボクを手で制止するようにサインすると、ロアは紳士的に話を進めた。

「改めて言おう、君の吸血鬼としての才能は特異だ。

私に血を吸われ、グルルやりピングデットを通り越していきなり吸血鬼へと変化。

ある意味君の才能が開花したと言える、もはやこの現象は進化と表現してもいいものだ」

「まったく、嬉しくないね。

シエル先輩には殺されかけるし」

「ああ、そうだな。

才能の開花は必ずしも人を幸福にしない。

見方を変えればむしろそれ以外の生き方を束縛しかねない」

ボクの愚痴に同意する口ア。

先ほどまで殺しあつたはずの相手だが、

可笑しなことにボクらは随分と親しく話せている。

「そして、例えばいずれ出会うアトラス院のエルトナムの娘が、

どれほど労力を割いてもせいぜい太陽の下を歩ける程度で、君は吸血鬼のままその人生を過ごすだろう」

……ああ、やつぱり。

薄々だけでも覚悟はしていた。

やはりシオンの知識を以つてしても人間に戻るのは無理か。

「君は良くも悪くも吸血鬼として才能がありすぎる。

姫や殺人貴の元にいる限り今後更なる苦難に見舞われることは間違いない

ただでさえ、姫は裏の世界では目立つ存在だ。そこにあのバロールの眼を持つ人間、

空想具現化が使える君が加われば、魔は魔を引き付けるように裏世界の闘争に巻き込

まれるのは確実だ」

そっか、ロアから見てもそうなのか。

アルクエイドさんや志貴の傍にいと巻き込まれることは確かなんだ。

元よりあの2人は平穏とは程遠い存在、むしろ原因の渦中になるか飛び込んでしまう性格だ。

だから、彼らの傍にいれば必然的に修羅の道へ自動的に歩んでしまう。

少し前まではそんな修羅の道を避けることばかり考えていたけど、今は違う。

吸血鬼になってしまった以上、

どんなに平穏な日常を過ごすことを努力しても、

遅かれ早かれ巻き込まれ、ビクビクと過ごす日々が来るだろう。

ならば答えは一つ。

「別に構わない、むしろあの2人と一緒に過ごす方がボクにとって重要だから」

「……そうか、君は逃げるという選択はしないのだな」

当たり前だ。

どうせビクビク過ごすならあの2人と一緒にいたほうがいい。

「ならば、これは餞別だ。受け取れ」

刹那、頭に膨大な知識が流れ込んできた。

錬金術、数紋秘、魔術、幾何学、神秘に関するあらゆる知識が続々と頭に刷り込まれ

る。

軽く頭痛がするが、これは……。

「シエル先輩と同じ」

「然り、あの娘も蘇った後は不死耐性だけでなく私の知識を継承した」

【原作】の設定を思い出す。

シエル先輩の経歴はかつてロアに乗っ取られ殺戮を演じるが、まだ殺人機械であったアルクエイドにより滅ぼされる。

だがシエル先輩の霊的ポテンシャルは世界が生かそうとする程に優れていたのだから蘇生を果たしてしまった。

同時に世界にとって矛盾した存在つまりシエル先輩に憑依したロアこそ死んだが、

ロアは次の宿主に転生し、シエル先輩はシエルでありながらロアでもある存在となった為、死ねない肉体になったのである。

天才魔術師だったロアの知識が丸ごとあるので魔術協会の最上位の魔術師、王冠（グランド）に匹敵する魔術知識を持つ。

しかし、ロアだった頃を思い出してしまうために魔術の使用は控えているが、任務遂行のためなら使う事も躊躇しない。

そんな設定であった、

そして今度はボクはその知識を継承することになる。

「今後世界が君の言うところの【鋼の大地】か、

あるいは【Fate/Extra】に進むにしろこの知識は君のためになるだろう」

「……サービスと話が良すぎて逆に怖いな」

ボクが知るロアとはネタキャラで、

もつと粗暴な印象が強いせいで先ほどから主導権を握れず調子が狂いつぱなしだ。

「どの道私は消え、あの娘は魔術を使いたがらない。

ならばまだ私の魔術を継承し継続して研究してくれる可能性がある君に、

私の一生を求めて追求した神秘の奥義、その全てを君に継承させるだけだ」

「随分と期待してくれているようで、どうも」

少しばかりロアに対する見方が変わった。

やはり過去のロアはボクが知るロアとは随分と違うものらしい。

思うにロアは下手に知識があった上に、永遠という名に固守しすぎた。

転生を繰り返してゆけば、

遠野四季に寄生したロアのように転生先の人格に大いに影響される。

ロアという人格は変容し、寄生先の人格との境界が曖昧になる。

それではロアという人格は消耗し、何れなくなってしまう。

もしかするとロアは理性では承知していたが、アルクエイドに見惚れて以来、それすら承知で転生を繰り返したのだろう。

「あ

ふと、ロアが口を開け惚けた声を漏らす。

眼を見開き、硬直しているロアに不審に思ったボクは彼の視線の先を振り返った。

視線の先にはアルクエイドさんがいた。

しかし、ボクが知るアーパー吸血鬼な彼女ではなく、

真祖の姫にして真祖の最悪の処刑人であるアルクエイド・ブリュンスタットであった。

表情こそ無表情であったが、

天上から照らす月の光で混じりけのない金髪が黄金色にぼんやりと輝く。

人の形をしていながらその造形が出来過ぎていて、この世ならざる者の空気を出している。

その彼女が肅々と歩き、長いドレスが風に揺られる姿にボクはその美しさに一瞬息が止まった。

「ああ、そうか」

ロアがポツリと呟く。

そして、驚いたことにあのロアの瞳に涙が溜まっていた。

「本当は根源探究のためではない、

私はこうしてただ姫を見ていたかっただけなのだ。

にも関わらず——私は何のために永遠を目指したかも忘れてしまった」

今のロアは死徒27祖でも三咲町を騒がせた吸血鬼でもなく、

涙を零し、ただただ自らの過ちと後悔を嘆くミハイル・ロア・バルダムヨオンであった。

永遠の時を過ごし、目的と手段を見失った事に死んだ今ようやく知った哀れな男がそこにいた。

「……………」

そして、ボクはロアを笑うことも哀れむこともできなかった。

吸血鬼になった今、永遠の時を過ごした末の末路が目の前にいる以上他人事ではないからだ。

いつか、この世界の両親、志貴やシエル先輩の事を忘れてしまった時。

果たしてボクはどうなっているのだろうか、ボクの未来の可能性について考えさせる。

そう、いつかボクも皆との出会いを忘れ、

ただ殺戮を楽しむ吸血鬼に堕ちる日が来るのかもしれない。

そんな嫌な未来の可能性に逃避するため、何気なく天上を見上げボクは気づく。

「空が……っ！」

故障し砂嵐状態のテレビ画面のようにボロボロと空が欠けてゆく。

空だけではない、地面の花や草、見える全ての空間が消滅しつつあった。

「時間が来たようだ」

ロアに振り返れば体全体が半透明で向こうの風景が見えるほど、

存在がすっかり薄くなってしまう、とうとう別れの時間が来た事実を悟った。

「お別れだ、弓塚さつき。」

私が言っても君は喜ばないだろうが、君と姫の人生に幸福あれ」

「ロア……っ！」

その時は何て言えばいいのか思いつかなかった。

ただロアの名を口にして手を伸ばしたがそこで意識が消え、

ボクは志貴やアルクエイドさん、シエル先輩が待っている現実世界へ帰還した。

※ ※ ※

そんな風に回想しつつ黙々と歩き続け我が家にたどり着いた。

古びたマンションの階段を上がり、ドアに手をかけるが誰もいない部屋から人の気配を感じた。

だが気配から毎度屋敷から抜け出す不法侵入者であることはわかっていたのでそのままドアを開ける。

「遅い、待ちくたびれた」

待っている間に読んでいた漫画から眼を離し、少女が顔を上げる。

そのさい、少女の金糸のような、長く美しい髪が少しの間だけ宙を舞う。

見た目は10〜13といった所だろうか。

女という言葉はまだ似合わずやつと少女になった幼い肉体と顔をしている。

しかし、黄金の瞳には見た目には似合わない高い知性と理性を宿しており、それが当たり前であると思わせた。

今時見かけない古典的な白いブラウス、

首元を黒いリボンでピッチリと締め、露出度が低い黒のロングスカート。

靴はブーツとそんな隙のない姿と少女の完璧な造形と合わさってまるで西洋人形のような出で立ちである。

そのせいか古ぼけた事務所を改装した部屋と全然合っておらず少女は異彩を放って

いた。

おまけに、不法侵入した挙句真っ先に言い放った言葉が待っていたと言わんばかりの物であった。

「そりやどうも。で、それより見たところまた無断で屋敷から抜け出したのか？」

あれほど勝手に屋敷から抜け出し、翡翠さんを困らせるなどボクは言っただけで、お嬢様？」

「む、確かに用事から無断で抜けたのは事実だが、

別に重要なものではないし、何よりも暗示で誤魔化しているから問題ない」

「なおさら悪いわ!!」

口調と気品こそ教育の賜物か素晴らしいお嬢様で在らされるが、

このアーパーと自由人気質は間違いなく両親の、それも両方から受け継いでいる。

「しかたがないだろ、

屋敷では琥珀の部屋に行かなければテレビもゲームもない。

漫画もさつきの所に行かなければ読めないし、何よりも小遣いが少ない……………」

先程までの尊大な態度とは打って変わって、

遠くを見るように眼を細め呟き、落ち込む姿に妙に哀愁を誘う。

小遣いは日500円（昼食代扱い）

アルバイトは当然禁止で門限は夕方まで、

夜10時を過ぎれば屋敷内を動き回るのすら禁止。

おまけに居間にテレビはなく在るのは新聞だけでテレビやゲームなどの娯楽品も禁止。

遇に待遇改善デモを琥珀さんと一緒に行っているようだが、勝つたためしがないとか何とか。

—— 嗚呼、親子二代で鬼妹に絞られるとは。

「あーオホン、話を戻そうアルク。

ボクの所に来たのはただ漫画やゲームをしに来ただけではないんじゃないか？」

この娘がここに来たという事は、

ボクにとって親戚の子供が遊びに来ただけでなく仕事の依頼が来たという事である。

吸血鬼になって以来、遠野の屋敷に世話になり、メルブラなど神秘絡みの事件を解決してゆく内に、

今では怪異や神秘絡みの事案を遠野家が依頼する形で調査、解決する三咲町を守る正義の味方といった所だ。

某喫茶店やカレイドステッキには梃子摺ったが、大抵は自分が強力な吸血鬼なため穏便に済んでいる。

ただ昔、秋葉さんに頼まれたとはいえ、若さと勢いで志貴を追って欧州までブイブイ行つたせいであつたまに厄介な事案もあるけど……。

「ああ、これだ」

彼女がファイルを差し出し、すぐに受け取り概要に眼を通す。

簡単な仕事を期待していたがどうやら今日はそうでないらしく実に面倒なものと来た。

だから読み終えた後、ボクは思わず口にした。

「魔術師か、」

やっかいだな。

しかも知り合いであるしこの人は——。

※ ※ ※

ボクは支度を済ませると直ぐに行動に移つた。

間もなく日付が変わろうとしている時間にも関わらず人は多い。

世間は世界規模の不況に悩まされているが、繁華街を歩く人々に笑顔が絶えない。

「あれだ！次はあれを！」

「……買い食いに来たわけじゃないんだぞ」

で、この金髪お嬢様はあつちこつちで買い食いし、口に突っ込んだ食べ物で頬を膨らませていた。

一度彼女を屋敷に戻そうと思ったが本人が駄々を捏ねて結局ついて来たがご覧の有様だ。

おまけに彼女の見た目的に金髪美少女なせいかなり目立っており、周囲からの好奇心と関心の視線が痛い。

なお、代金はボク持ちである。

既に千円札さんが数枚財布から消えている。

別にそのくらい奢れるだけの収入は得ているからかまわない。

ただ、彼女がはしゃぐ姿を見ると、どうしても今は眠っている彼女を思い出す。

彼女だけでない、

多くの人間と出合い過ぎた短くも濃厚な青春の日々。

そして、二度と戻ってこないあの日々が思い起こされる。

「はあ……」

いけない、どうも歳を取ると過去の事ばかり考えてしまう。肉體こそボクは成長し老化しないが、精神は確実に老化してゆく。

そして永い年月の果てに精神が老化して磨耗した果てには——やめよう、考えるのは。

ただ今の仕事に集中しよう。

「本業に戻るぞ。こっちだ、アルク」

今度はシユークリームをほお張っていた彼女を引つ張り、路地裏へ入る。

繁華街の喧騒と眩しいばかりの光はなく、そこは本当に静かであった。

天にそびえるビルの際側の僅かな隙間とたまに出現する広い空間を次々と超えてゆく。

上を見上げてても星空は見えず、碌な明かりもなく、地面と流れる冷たい風は体の芯まで届く。

進めど進めどビルしか見えさながらドイツの黒い森、シユヴァルツヴァルトのようだ。

しばらく入り組んだ路地を歩き、やがてその先に目的の人物がいた。

「向こうからすると自分たちは後ろからやって来た上に寒い時期で上着を羽織っているため、

男女の区別は光の角度によって赤髪にも見えなくもない長い髪だけでしか判断できない。

そして、妙に頑丈そうな皮のケースを脇に置いている。

「こんばんわ、いい夜ね。」

でもわたしの後ろにいとビームと一緒に蹴り飛ばすわよ」

「ゴルゴですか貴女は、

いや強ち間違つてはいないけど。

はい、こちらこそこんばんわ、お久しぶりです——蒼崎青子さん」

そう、今回の対象は魔術師であることに違いないが正確には魔法使い。

志貴にとって生きるための人生の切欠を作った恩人そして世界で数人しかいない魔法使いの1人、
蒼崎青子が今回の対象であった。

「で、管理者である遠野家に未通達で貴女はどうしてここに来たのか教えて貰えますか？」

冬木が遠坂家の管理下にあるならば三咲町は遠野家の管理下にある。

通常裏の住民が三咲町に訪問、あるいは活動するさいには遠野家に許可を得なければいけない。

そしてボクは無許可で入り込むモグリの中をへて追い出すことが主たる仕事と
なっている。

「あ、いやー忘れてた……てへぺろ」

あ、今少し殺意が沸いた。

「冗談よ冗談。

にしても貴女随分と仕事熱心なのね、

わざわざ直接顔を見せるなんて、でも安心しなさい、

わたしはただ高校のころの知り合いに会うだけだから」

高校のころの知り合いねえ……久遠寺さんと静希さんのことだろう。

久遠寺さんなんて出会った瞬間、志貴やアルクエイドさんを巻き込んで殺し愛に突入
したし、

静希さんは静希さんで無駄のない動きでボクの心臓を潰し、生死を彷徨う羽目になっ
たのは……色々思い出したくない記憶だ。

今でも久遠寺さんは「実験材料となって」と迫るし、

静希さんは戦闘訓練でこっちが吸血鬼なせいとか、人畜無害な顔をしてるのにまったく
手加減ないし……。

「……、そこ……なに遠くを見ているのよ。」

それよりわたしは久々にあの2人に会うのだけど、あの2人に何か変わった所があった?」

「ええ、まあ相変わらないうべきか、

久遠寺さんは琥珀さんとタッグを組んで怪しげな薬を作るし、

静希さんはあつちへフラフラこつちへフラフラしていますよ、ただ——」

ボクと違ってあの2人もまた歳をとった。

今でこそまだ若いとその次の10年後はどうなっているか考えたくない。

彼らもまたいつかは寿命に勝てずに亡くなる定めなのだろう。

「……まあ、人間だから仕方ないわよね

それが自然の摂理、わたし達のような人間こそ異常なのだから」

眼を細めどこか達観するように魔法使いは呟いた。

その態度にボクはふと気づく、彼女の姿が始めて会った時からさほど変わっていない
事実。

「青子さん、もしかして貴女も——」

「知りたい? フフン?

でも教えない、乙女は秘密があるのよ」

ボクの疑問に対しこれ以上ないドヤ顔で、

この魔法使いは自らを乙女と言い切ったシリアスが台無しな上に——乙女はな
いわー。

そう思つた瞬間、顔の真横にビームが走つた。

衝撃で髪の毛が何本か飛び、頬に一条の傷跡が薄つすらできてしまう。

その後、後ろに響いた破壊音でやつと何が起こつたのか理解した。

「今、何て思つたかしら？」

にっこり、と向日葵のような笑顔を浮かべる魔法使い。

あ、アハハハー、いやー冗談ですよ、さっきのは冗談ですよ。

今日も蒼崎青子様は若くて凛々しく実に美しい、いや本当ですよー。

「今回は許してあげる、けど次はないけどね。」

——まあ、次といっても次は何年後になるかはわからないけど」

そうだ、この風来坊な魔法使いと出会えたのは奇跡のようなものだ。

前回出会つたのは欧州での騒動前後、それも10年以上前の過去である。

次に魔法使いと出会つたそのとき、彼女を知る人間は果たして生きているのだろうか

？

「じゃあ、わたしはこれで。」

と、言いたいところだけどそのお嬢さんの名前をまだ聞いていないわ
アルクの事を聞かれ、ボクは首を横に向ける。

彼女は一步前に出て魔法使いと向き合うと綺麗にお辞儀を言った。

「はじめまして、私は姫月アルク、

父がよく貴女の事を話していました——先生」

先生、その単語にどこか懐かしそうに顔を緩め、

驚き、同時に全てを悟った表情で魔法使いは彼女を見つめた。

「そっか、やっぱりそうなんだ。奇跡って以外とあるものなのね」

何時も見せるおちやらけた笑顔ではなく、

慈悲深く、その奇跡を心底祝う笑顔を魔法使いは浮かべる。

「じゃあね、次はいつになるか分からないけど貴女の人生に幸あらんことを」

「こちらこそ、貴女とまた会える日々をお待ちしています」

お互い軽く別れの会釈をすると、

図つたかのように体の向きを変えてそれぞれの道を歩んだ。

実にあつけない別れだ。

けど、それもまた悪くない。

別れもあれば出会いもあるし再会もある。

まだまだ、ボク達が演じる物語は終わっていないのだから。

「さて、次はたい焼きを頼む」

「金髪だからって、食いしん坊キャラでも目指しているのか？」

彼女と再び手を繋ぎ繁華街へと向かう。

お互い吸血鬼の類だが伝わる確かな体温の温かみ。

ボクはこの世界で転生者という異邦人であった。

そのせいで定められた未来を変え、この世界に影響を与え続けた。

けど、今はこの世界に住む一住民として暮らし「原作」にない未知の未来を歩んでい

る。

【月姫】から10年以上過ぎた。

ボクはどこから来たのだろうか？どこに向かうだろうか？

その答えは出ないが、確かに言える事実は未来の可能性は無限だ。

「？」

ボクに見つめられ、キョトンとするアルク。

こうして彼女という未来は少なくとも「原作」なかった未来だ。

だから行き着く先は見えないけど未来はきつと可能性に満ちている。

そう、ボクは思うんだ。

お
わ
り

外伝「奮闘記的アーネンエルベの一日」

午前9：03

「いらつしやいませー」

「おや、土郎君じゃないか？」

遠野志貴にとつてすっかりアルクエイドとの待ち合わせ場所になった、

喫茶店「アーネンエルベ」のカウンターから出迎えたのは衛宮土郎であった。

彼とはここで色々縁があつて知り合つたが、その時は同じ客としてである。

お互いデートプランが重なり、仲良く修羅場を見ることになつたのも忘れられない

……。

「しかし、土郎君がここでバイトしているなんてね」

「ええ、まあ。家は大飯ぐらいがたくさんいますから」

苦笑まじりの回答に遠野志貴は思わず金髪碧眼の騎士王の顔を思い浮かばさせた。

あそこまで清々しい食いしん坊キャラは彼女以外ありえない。

「ところで、今日は態々早朝から来ましたけどデートですか？」

「ああ、まあな。」

今日はここで一日アルクエイドとダラダラ過ごそうと思つてね、

とりあえずモーニング、飲み物は紅茶をお願いできるかな、士郎君」

「任せてください、遠坂に散々鍛えられましたから」

「お、言つたな。期待しているよ」

自信満々に衛宮士郎は答えると厨房へ走つていった。

「しかし、士郎君。相変わらずエプロンが似合うなあ……」

長袖のシャツに単色のエプロンを羽織つただけであつたが、

琥珀さんの割烹着と同じく違和感を感じさせない姿とオーラを放つていた。

もしかすると正義の味方よりもよっぽど天職な気がするの俺だけだろうか？

そう遠野志貴は思いをはせ、ゆっくりモーニングがくるのを待った。

※ ※ ※

「とりあえずモーニング、

それにその他の準備はできている。

けどなあ、カレン。おまえは知らないと思うけど、

こういうのは調理免許とか資格が必要だったりするんだぞ」

厨房ではモーニング用のパンが焼きあがり、サラダの野菜にはたっぷりドレッシングがかけられ、

その他事前準備が必要なカレーやデミグラスハンバーガーの準備も店にあったレシピ通り完成していた。

食欲をそそる香りが充満し、文句の付けようもない状態であったが。

彼、衛宮士郎は大きな、それも巨悪な問題に対面していた。

「あら、人殺しの分際によく吼えるわね駄犬。

それとも何かしら？ 私が警察に突き出すよりも自首してハラキリする覚悟ができた
と？」

背後からパイプオルガンのBGMでも流れてきそうな知人の銀髪シスター、カレン・オルテンシアが淡々と衛宮士郎を犯罪者として処分しようとしていた。

「なんでさ!!!というか自首してなぜに切腹しなきゃいけないのさ!？」

というか、言ったよな。厨房に入ったら巻き込まれただけで俺は無実だ!!」
だが、カレンの黄金の瞳はまるで屠殺場の豚でも見るかのような、

実に冷やややかで、口元は曲がり、汗をかきながら必死に弁解する衛宮士郎を嘲笑して
いた。

どうして俺はいつもこんなおぼつかりなんだ、と内心で嘆きつつ手は調理器具の片づ

けをしている所を見ると。

やはりこの少年の末は正義の味方ではなくブラウニーに相応しいかもしれない。

「衛宮士郎、残念です。」

私が目撃したのは自称正義の味方が哀れな一般市民をその手で殺人を犯す現場だけです。

ああ、哀れな店長さんどうしましょう。店員として、この落とし前…どうしてくれましょうか？」

「待て待て待て?!?!」

なんか割烹着を改造した女の子から攻撃を受けたから防衛して。

たまたまはじいた流れ弾が当たっただけで俺は何もしてないぞ、カレン!!!」

カレンがポケットから携帯電話を取り出したことで動揺が深まる。

身振り手振りであれこれ言い訳を述べようとしている姿は隙だらけ、

そしてこの瞬間こそが腹黒シスターにとってそれは待ちにまった機会であった。

「いんです、マジカルアンバー」

「はあい、呼ばれてきちゃいましたー」

「げえ!!割烹着の悪魔!!!」

ジャーン、ジャーンと銅鑼の音声と共に、

突然あらわれた元凶に驚きを隠さない衛宮士郎。

「イエイ、時代は今まさに魔法少女。

リリカル☆マジカル、奇跡も魔法（物理）もあるんだよ！

さすがウロボッチー、まさに外道の必ず殺すと書いて必殺!!母の日ステインガー
!!!」

マジカルアンバーは誰もついてゆけないノリで、

何処からか取り出したステインガーを（そもそも収納する場所はどこだか？）

哀れな標的に定め、一切の躊躇もなく発射した。

「な、なんでさ——!!!」

お約束の言葉の後に厨房に響く轟音と煙。

普通ならば外の人間に気付かれて当たり前な程の影響を及ぼすであろうが。

ここは何が起こつても不思議でないアーネンエルベ、ゆえに外の人間には気づかれな
いほど防音設備が行き届いている厨房などあつて不思議でない。

さらに言えば衝撃で用意してあつた料理の数々が汚れたり散乱することもない、とい
うご都合主義もまかり通つており、

「いってて、おいおい。」

いくらこのオレを起こすためとはいえ、少しやりすぎなんじゃないか？

「つーか、なんだ。なんでこのオレが今更この正義厨から現れることが出来るんだ？」

煙が晴れた先から現れたのは衛宮士郎ではなく全身に刺青を入れた少年。

より正確に記すと、彼の殻をかぶった悪魔、アヴェンジャーであった。

そして悪魔は砕けた口調でわざわざ自分を起こした理由をカレンに問うた。

「やはり駄犬は駄犬ね。」

「ここがあらゆるご都合主義が蔓延し、

奇跡がバーゲンセールされる場所であることを理解していないようね。」

貴方呼び起こすことなど、ここではコーラを飲んだらゲップが出るくらい确实よ。

それに私たちのエンターテイメントのために、この程度の労力を惜しむわけにはいか

ないわ」

「そうですよねー。わたしも秋葉様をからかう事に手は抜けませんし」

「エンターテイメントのためだけにオレを起こしたのかよ!! 相変わらずアンタは無茶苦

茶だな!!」

愉悅に満ちた笑顔で即答したシスターとマジカルアンバーの言に突っ込みを入れる

アヴェンジャー。

せめてもつともつともらしい理由で呼んでほしかったと悪魔は内心で落ち込んだ。

「というわけで、貴方にはアーネンエルベの店員をしてもらいます」

「私からもお願いしますね、アヴェンジャーさん」

「おい、待て。待て待て待て。」

話の展開が見えないしそれならこの主夫に任せておけばいいだろうが」

そもそもそれなら衛宮士郎に任せておくべき、

とアヴェンジャーは2人に疑問を投げかけるが、

「言ったでしょ、エンターテイメントのためだ。」

ただの衛宮士郎が店員をしていても面白くないですし、

貴方を皮切りに型月キャラは今日1日カオスと混乱、ご都合主義に色モノの安売り

セールを始める予定ですから。」

そして彼らの弱みを握ることで私の冬木支配もまった一歩前進するでしょうし、私の

趣味もまた……ふふふ、楽しみですよ」

「わたしも秋葉様の弱みや、

皆さんをおちよくって楽しみたいですね。」

あと、リアルタイム的に今日は4月1日。何でもありの日ですからはっちゃけちゃいますよ」

「……うわあ」

「……うわあ」

おっかしいなあ。

ホロウではこれほど饒舌じゃなかったし、

もつと聖者のイメージが前面に打ち出されていたはずなのに。

などと、アヴェンジャーはすでに遙か彼方の思い出となってしまうた。

在りし日のカレン・オルテンシアとのギャップに感傷に浸る。

「言っておきますが、拒否権はありませんよ」

守りたくなくなるような笑顔でカレンは命令を発する。

だが、その内容は脅迫の域に達する最低の言葉であったが。

「…それでもあえて一応聞くけど、もし拒絶したら？」

「その時は、フェイトゼロ以降増えた腐人方に貴方を主題とした薄くて高くてホモオな本を…」

「貴方にしたがいいます。マム…」

ペンと紙を手には不穩極まりない単語をスラスラとのたまうカレンに、

男としての尊厳を死守することを優先したアヴェンジャーは反抗を放棄した。

そう、誰にだって、色モノはあってもおかしくないが尊厳を捨てるレベルには彼といえども負けを認める他はないのだ。

「期待してますよ、アヴェンジャー」

「了解した、地獄に落ちろ」

計画通り、とばかりに満面の笑みを浮かべるカレン。
対して悪魔はこれから起こるのであろう悲劇と喜劇に絶望に似た感情を抱いた。

※ ※ ※

「おっそいなあ、士郎君」

15分ぐらいだろうか？

いくら待っても厨房から衛宮士郎は現れない。

遠野志貴は視線を厨房のドアから外し、ため息をつく。

そして、ふと気づく。

——このパターン、見たことあるような？

「……………たしかめるか？」

立ち上がり、厨房に足を向ける。

既にポケットのナイフは何時でも使えるようにしている。

場合によってはこの『眼』も使う必要があるかもしれない。

そう志貴は考え、さらに眼鏡も何時でも外せるように少しだけずらす。

ゆつくりと、慎重に。

そしてあらゆる事態に対応できるように覚悟を決めて厨房へ足を運んだが。

「マスター、今日は普通の珈琲。

それとチーズケーキを……って、いない。それにそこのお前は——」

ドアの鈴を鳴らして着物の女性が入店した。

志貴は何も知らない一般人が入店したと思ひ振り返り驚愕を覚えた。

肩あたりで切り揃えた黒い髪、中性的で眼や鼻などの顔のパーツが整いすぎた凛々しい顔立ち。

今時珍しい和服で完全に身を固めており、そこに革の赤いジャケットを羽織ってれば完璧であったが。

どうしたわけか、今日は羽織っていない。

志貴の記憶ではあの蒸し暑い夏、2度目のタタリでは彼女、両儀式はそのジャケットを羽織っていた。

同じ『眼』を持つ者同士自己嫌悪と同属嫌悪でお互い殺すつもりで戦ったが。

弓塚さつき、そして彼女の後を追ってきたらしい黒桐幹也と名乗る男性が必死にお互いの感情を冷ましたおかげで事なきを得た。

以来両儀式と出会っておらず、志貴にとつてそれはもはや過去の記憶であったが、少なくとも過去の記憶でも両儀式の腹部は膨らんでいなかった。

「え、えええつ!!こ、子供!?!な、なんで?!!」

「というか、まさか一度殺しあつた女性が妊娠している姿に遠野志貴はただただ驚愕した。」

「ん?ああ、これは……その。」

「まあ、そういうことだ………」

志貴の驚きに両儀式は恥ずかしげに答えた。

誰とは口では言わないが、恐らく黒桐幹也であろうことは志貴も想像できた。

「えつと、その。おめでとうございます」

「お、おう。どうも」

志貴は曲りなりとも殺しあつた人物と再会し内心混乱状態であつた。

が、次に志貴の口から出た言葉はごく普通の祝いの言葉である。

正直な所、色々ありすぎて何を言えいいのか分からなかつたためである。

両儀式も自分と同属で嫌悪する相手と遭遇してどう反応すればいいか分からなかつた。

「前程殺す気もないこともあり、ゆえに、両儀式は志貴の祝辞をぎこちなく受け取つた。」

「あの………」

「……なんだ?」

「あ、な、何でもありません」

「そうか」

「……………」

「……………」

お互い会話の糸口が見つからずに微妙な空気が流れる。

そもそも、お互い一度本気で殺しあつた仲であり、これで会話をしると言われて出来るほうがおかしい。

居心地の悪さを2人は覚え、どうしたものかと途方に暮れていた時にこの空気を破る乱入者が登場した。

「おいおい、あんまり騒がないでくれないか？」

早朝とはいえ、曲りなりとも商売をやっている身からすると堪らないからな」

「ああ、すまない士郎君……あれ？」

志貴が衛宮士郎に謝罪を述べるつもりで声の方角に顔を向けたが、一瞬戸惑う。

なぜなら声の人物は黒い肌、というよりも顔面全体に施された何らかの模様を描いた刺青姿という異様であつた。

口調も違う、だがにも関わらず背丈や服装は直前まで会話をしていた衛宮士郎そのものであつた。

が、同時に志貴は自分の体がまるでロアやネロと出会った時のような興奮を感じている事実に驚く。

しかも、気づいたら手はポケットにあるナイフを握っていた。

「……今度は悪魔か。あのアーパー吸血鬼といい、いつからアーネンエルベは魔窟になっただんだ？」

両儀式が呆れと嫌悪を滲ませた言葉を呟く。

慌ててナイフから手を離れた志貴は彼女の言葉に納得した。

目の前にいるのは自身に流れる血が拒む魔そのものであったからだ。

「おうおう、ここはそんな常識が通用する所じゃないからな」

両儀式の嫌そうな言葉に悪魔を嬉々と反応を示す。

そして衛宮士郎の身を借りて現界した悪魔はニヤリと、オリジナルなら絶対浮かべない笑みを浮かべた。

午前9：23

少女たちが道を歩いていった。

それだけならどこにでも見られる光景であったが、少女らは目立っていた。というのも、3人の少女は未だ小学生高学年程度の歳相応の幼さを残していたが。

その内2人はこの国では珍しい銀色の髪を有する「ガイジンさん」の風貌であった。めだ。

しかも3人揃って将来に期待が持てる容姿をしていたため、なおさら道行く人々に見られた。

「あーもう、喫茶店いこー喫茶店」

焦げ茶色の肌をした少女、クロエ・フォン・アインツベルンが天を仰ぎつつぼやく。

そして、クロエの橙色の瞳が隣の銀髪少女に向けられる。

「そんなこと言ったらてお金ないよ、クロエ」

視線を向けられた銀髪赤眼の少女、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンが即座にその提案を却下する。

なぜなら、自分たちは未だ小学生であるため使えるお金など知れており、その事実を思い出したクロエが言葉を詰まらせた。

が、そんな2人のやり取りを見ていた黒髪の少女、美遊・エーデルフェルトがそのイリヤの言葉を否定した。

「大丈夫、ルヴィアさんからお小遣いは貰った」

「え、お金あるって……うそお!!」

「ちよ、ちよつとこれって!？」

美遊のい言葉に怪しんだが、視界に入ったそれを見て驚愕する。

そのお小遣いと称するものは財布にギツシリと詰まった福沢諭吉の群れであった。

小学生どころか大人にも手が届かなさそうな金額にイリヤとクロエ思わず唾を飲み込む。

そして、クロエは神妙な顔つきでイリヤに顔を向けると言った。

「持つべきは金持ちの友人だとは思わない、イリヤ?」

「自分も過去に似たような事を言ったけど最低だー!ー!!!」

『プリズマ☆イリヤ』ではすっかり突っ込み役が定着したイリヤが叫んだ。

「だから喫茶店に行っても問題ない」

「じゃ、みんなでケーキを食べましょ! 決まりね!」

「待ちなさいよー！クロエー！」

美遊の手を握り嬉々とクロエが喫茶店へ走り、イリヤがその後を追いかける。

『おや……？』

「どうしたのルビー？」

『アーネンエルベ』という名前の喫茶店のドアを潜った後に。

どこぞの割烹着の少女と同じ声を持つ天然人工精霊にしてネタ製造機のルビーが疑問符を口にする。

『はーい、なんだか面白おかし……』

いえいえ、少しだけネタの空気を感じただけですから、イリヤさんは気にしなくて大丈夫ですよ』

「それって私にとって凄く嫌な予感を意味するよねルビー！」

ルビーの発言にイリヤがまた巻きまれるーと嘆くが時既に遅し。

既にギャグもネタもあるんだよ、という言葉が思わず出てしまうアーネンエルベに入っていた。

※ ※ ※

「改めて結婚、そして懐妊おめでとうございます。両儀さん」

「悪魔なオレからも新たな命の誕生を祝福してやるぜ」

「あ、ああ。どうも……なんか、おまえ達に祝福されるなんて違和感を感じるな」

再度改めて言われる祝福の言葉に両儀式はぎこちなく受け取った。

片や同属嫌悪で一度殺しあつた人物、片や退治すべき魔である悪魔であるからある意味仕方がない。

「しっかし、散々ドラマCDの『アーネンエルベの1日』で、

「月姫はエロいつ（キリツ）」と言つておいてヤルことはヤツタ式だつて十分にエロいじゃないか!」

「ぶう——おまつ!」

アヴェンジャーの発言で式は口にしたお冷を噴出した。

前に自分が言ったことが今になって反つて来たのだから仕方がない。

「ケケケケ、そういうえばオレはカレンと教会で後ろからヤツタがやつぱオマエもそうなのか?」

「う、うるさいな!」

女性に向けて体位を聞くなどセクハラ全開の発言をアヴェンジャーはする。

これに何時もの式ならば養豚場の豚を見るような冷たい眼と共に物理的に切り捨

てていただろう。

が、覚えがあるせいで顔は赤くなり、動揺が止まらずたじたじになる。

この様子にニヤニヤと人が悪い笑みを浮かべた悪魔は更なる追撃をしようと試みたが。

「失礼じゃないか士郎君、いやこの場合アヴェンジャーか。そんな事を言うなんて」

さらに何か口にしようにとした刹那。

しかし、遠野志貴がアヴェンジャーに制止を促す。

式が殺人貴といえどもその辺は常識人であることに感謝した。

「だいたい女の子、例えばアルクエイドだつてエッチが好きだし、俺も好きだ。

すなわち、エッチが大好きなのは男女の区別はない。つまり、両儀さんは普通だ！」

「その絶倫眼鏡は喧嘩を売ってるんだな。

そうだな？次に会った時はたっぷり買ってやるから覚えていろ」

式の殺意交じりの鋭いジト眼が主人公2人に向けられた。

「……はあ。で、おまえ達はセイバーとアーパー吸血鬼を連れていないのか？」

これ以上この手の話を追求するところらがまた弄られる。

そのことを知っていた式は前回ここに来た際にいた主人公に伴うヒロイン2人について言及する。

「ええ、もう直ぐ来ると思いますがすけど。なにせ携帯電話とか持ってないし」

「こつちも以下同文。まあそのうち腹ペコの騎士王サマは来るだろうから問題ないぜ」
のんびりと答える志貴に、やれやれと言いたげにアヴェンジャーは答えた。

「そういえば、おまえ達は携帯電話とか持っていなかったな」

今や日常生活に不可欠な文明の利器を持っていない事実は今更ながら式は気づいた。

「まあ『月姫』は『魔法使いの夜』より新しいけど、

『空の境界』と並んで年代が少し古いですから、琥珀さんが仕事で使っているのなんて黒くて頑丈な奴ですよ」

「メタいな、おい」

「こつちは辛うじて2000年代の一枚のせいかな正義厨は持って無くもないが、

普段持ち歩かない上にネットなんて繋がらない通話とメールだけで姉貴分からのもらい物だ」

日本のガラパゴスの技術、文化の象徴として日本の携帯電話がしばし指摘される。

今でこそスマートフォンに押されているが1996年に世界初の着メロを開始。

また、1999年に京セラは世界初のカメラ内蔵携帯を発売。

2001年にはインターネット回線と繋げるようになるなど技術的には最先端を走っていた。

「まあ、2014年秋に公開されるだろうFateで正義厨の服装も変わる様だし、その辺も変わるかもな」

「そういえばそうだったね、リメイクおめでどうアヴェンジャー君」

「ケケケ、今回はゼロでも好評だったufotableが担当だからDEENのようにはいかないぜ。

この人気を背景に、このままホロウまでアニメ化すれば今までゲームでしか出番がなかったオレとしては満足だな」

「リメイクなんて相変わらずFateは型月のドル箱だな。

ああでもDEENの事は言うな、当時はあれで面白かったのだから……」

元々ufotableはオリジナルアニメの作成より、

原作の再現度が高い評価を得ており『空の境界』そして『Fate/Zero』で高い評価を得ている。

一方DEENは全体的に可も無く不可もなくで、たびたびufotableと比較され、酷評されてしまっている。

「カツコイポーズとかか?」

「あれは、うん。そうだな、うん……」

対バーサーカー戦で見せたアーチャーのカツコイポーズ(棒)

を思い出した式は露骨に眼を逸らし沈黙した。

「しかし、いいね Fate は派生作品もあつて。

こつちの『月姫』はリメイクしているらしいけど全然だよ」

「別にいいじゃないか、静かで。

こつちは銀幕に出たりエクストラで出演したりで忙しかったからな。

ま、『魔法使いの夜』もなんだかんだと言つて出たわけだしそのうち出演する機会はあるさ」

「何この銀幕出演者の余裕はよお、おい？」

志貴のぼやきに式は経験者として助言する。

だがどう見ても出番がある恵まれた役者の類の発言でアヴェンジャーが突っ込む。

「で、その全身刺繍のウェイターは雑談ばかりでいつまで客をいつまで待たせるつもりだ？」

再度ジト目でアヴェンジャーを見る式。

忘れてしまつていたが、この場ではアヴェンジャーは喫茶店「アーネンエルベ」の店員である。

すつかり客に奉仕する義務を忘れ、雑談に興じてしまつていたけど。

なお式の手には空になつたお冷を持つており、どうやらお冷もほしいようだ。

「ぎゃはは、そうだったな。

オレとしたことがすつかり忘れていたぜ、出来ちゃった婚のお・きや・く・さ・ま」
「知っているか？妊婦は感情が乱れ易いってことを。」

——なあ、こいつを17分割にしてもいいか？」

「抑えて！両儀さん抑えて！芸風、これは彼の芸風だから！」

煽るスタイルのアヴェンジャーに苛立ちが抑えられない式は懐のナイフを手にする。

そして最後の良心として妊婦による殺人事件を止めるべく志貴が必死に思い留まるように説得する。

だが、式は本気らしく眼を青く光らせる。

重心も前のめりになり、次の瞬間には切りかかって来そうである。

ここは俺が全力で止める必要があるかもな、そう志貴が達観した刹那救いの主は外から来た。

「店員さん、ケーキとかある？」

ドアの鈴を鳴らし、愛らしい少女の声が店内に響く。

流石に人前で流血沙汰はまずい事を自覚していた式はその声でナイフを仕舞う。

来客が幼い少女であることを確認したからなおさらである。

「……銀髪の少女か、いや2人揃って普通の人間じゃないと来たか。」

おまけに妙な存在が一緒にいるし、いよいよアーネンエルベが魔窟じみてきたな」
が、唯でさえ目立つ銀髪 of 妙に整った顔をした肌黒の少女。

同じく黒髪の少女の正体を一発で看破し、意味人外の類であることを察した式が眉を
顰める。

ついでに、愉悦製造機の人工天然精霊の存在も式は看破した。

そして式の眩きは少女たちに聞こえたらしい。

現に黒髪の少女はびくり、と肩を震わせる。

黒い肌をした銀髪の少女は意味ありげに式に視線を寄越し言う。

「あら、悪魔に人の皮を被った殺人貴、それに空の入れ物。何だかここは妙に賑やかね」

「へえ、歳の割には言うじやないか——コピーの割には」

嫌な緊張感が漂う。

俺は喫茶店でのんびりするはずだったが、どうしてこうなった？

志貴は嘆くが、再度救いの主は外からやって来た。

「待ちなさいよークロエ！つてお兄ちゃん?!?じやなくて誰なのよ！」

さらに遅れて店に入ってきた銀髪の少女、イリヤがアヴェンジャーを指差して叫ぶ。

騒がしい奴が来たな、と面倒臭そうに見る式に本格的に接客をしなければいけない事

にやれやれとアヴェンジャーは頭を振る。

そして、志貴。

遠野志貴はまたカオスが深まることを予感した。

午前10:05

時刻は午前10:05。

まばらながらもモーニング狙いの客が喫茶『アーネンエルベ』の門を潜り出す。

流石に雑談に興じていた某全身刺繍の悪魔も店員として真面目に働きだし注文の応対に回る。

他にも料理担当らしい赤毛の少女、補助に銀髪のシスターが店員として働くなど妙に濃い面子がいたが、客は特に奇異の眼で見ない。

なぜなら、ここは普段出会えない人と出会える曰くつきの喫茶店で客もまた濃い面子が揃っていた。

例えば栗毛の女子高校生と談笑する金髪赤目の少年や、ひたすらカレーを頬張る髭の男性などと非常に個性豊か面子がいた。

そんな中、両義式、遠野志貴。

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン、クロエ・フォン・アインツベルン。

そして美遊・エーデルフェルトの5人は机を挟んで談笑していた。

「ふーん、おまえ達も冬木出身なのか？」

「はい、今日はみんなで一緒に外に行っていたんです」

式がチーズケーキを突きつつ質問し、イリヤが答えた。

イリヤの方も飲み物は紅茶とするモーニングセットを食べつつ笑顔で応対する。

一見すると和気藹々とした雰囲気を出していたが。

イリヤの隣に座っている肌黒の少女は時折意味ありげな視線を寄越すし。

同じく隣に座っている黒髪の少女、美遊・エーデルフェルトはそわそわしていた。

式の隣に位置を移動した遠野志貴もまだまだ、どう言葉をかければいいのか分からない

ようである。

そもそも、わざわざお互いがこうして同席するようになった原因は。

出会い頭に式が少女3人の正体を見破り、クロエが逆に皮肉ったため嫌な緊張感が流れ。

後から入ってきたイリヤが全身刺繍の男が兄にそっくりにな事のに驚き、さらには行き成り喧嘩上等の修羅場に驚き。

どうしてこうなった!?

とテンパリ言い出した言葉が。

「あ、相席してもいいでしょうか!?!」

と言い出したためである。

式は別に断ることも出来たが、セイバーやアーパー吸血鬼と似たような空気を察し。興味が湧いたのと、監視も含めて相席に同意し志貴の方は事態が丸く収まることに歓迎した。

実は式は目の前の少女。

特にイリヤスフィールについてはセイバーから聞いたことがある。

なんでもかかつて使えていた主の娘で、一度対立したが今は衛宮士郎の家に居候状態だとか。

しかし、彼女らの話を聞く限りどこか微妙に違う。

特にイリヤスフィール、イリヤの態度と発言はセイバーから聞いたものとはギャップがある。

式が聞いたところでは由緒正しい貴族の振る舞いをしているはずだが、どう見ても普通の少女だ。

それにイリヤが言う「お兄ちゃん」の話がどうも違う。

そもそもクロエ・フォン・アインツベルンと美遊・エーデルフェルトの存在は今まで聞いたことが無い。

まあ、しかしここはそういう所だ。

そんな事があっても不思議ではないし、それがここでは当たり前。

だから式は警戒しつつも特に深く追求せず、チーズケーキを頬張った。

「でも両儀さんが言っていた観布子市。」

何て聞いたことが無いし遠野さんが言っていた、三咲町なんて冬木の近くにあつたかな?」

「イリヤ、ここはそーいう所だから気にしたら負けよ」

おつかしいなあ、と首を傾げるイリヤ。

そして、音を立てずに紅茶を飲んでいたクロエがアーネンエルベの存在を一言で表現した。

「そうだね、クロエちゃん。」

それより3人とも『プリズマ☆イリヤ2wei!』放送おめでとう」

「採算とか色々厳しい中での2期放送だ。」

そこは尊敬するな、そして新たな型月の世界の誕生おめでとう」

「……あ、ありがとうございませす」

「いえいえ、こちらこそ。」

遠野さんや両儀さんと比べれば大したことありません。

私達なんか2人のように伝奇や怪奇物じやなく萌え全開の新米だし……」

話題を変えるように志貴が2014年7月の放送予定の『プリズマ☆イリヤ2wei

『プリズマ☆イリヤ』2期放送を祝福し、式も同じく祝福し新しい型月世界の登場を歓迎した。

美遊とイリヤは型月世界の先陣を切った大先輩とも言える2人の言葉に嬉しさやら恥ずかしさでうまく言葉で表現できなかつた。

何せメタい話でぶつちやけると『プリズマ☆イリヤ』は『Fate／stay night』からのスピンアウト漫画作品だ。

基本的な設定はFateと型月世界観に準じているがかなりの部分がスピンオフゆえに二次創作的なものとなっている。

何せ作者自身が「原作にはフィードバックされない」ので「絶対にツツこむな」と明言しているくらいだ。

その上で内容が大きな子供とお兄ちゃん方が大好きな魔法少女物である。

型月の歴史的にも浅く、そんな自分達が大先輩達に祝福されたのだからイリヤと美遊の反応は仕方がない。

「ふ、ふふふ。」

ドラマCDにこそ登場したけどゲームでは白黒だったわたしについて、ついに出番ね

！

長かったわ……でもお兄ちゃんをメロメロにして私だけの物にするのだからイリヤは覚悟しなさい」

「ちよつとお、それはどういうことよクロエ！」

「というか、あの合宿といいお兄ちゃんに変な事をしたらただじゃ済ませないわよクロエ！」

「同意、抜け駆けは反対」

クロエが出番が来た！と喜び、イリヤに恋の宣戦布告する。

イリヤはこれに黙っているはずもなく、即座に戦うことを表明する。

また、美遊もクロエの抜け駆け宣言に一步も引くつもりは無く、黒い瞳に闘志の炎が宿る。

イリヤと美遊が引くつもりはないと分かるとクロエはニヤリ、と口元を笑わせた。

そして言葉には出てこないが、目線で静かであるが同時に激しい火花が散る、3人の少女達の恋の冷戦が始まった。

「微笑ましいですね、両儀さん」

「おまえはこれが微笑ましいといえる状態に見えるのか？どう見ても修羅場の類だぞ」

そんな様子を見ていた志貴が暢気な意見を言い。

女の視点として見ている式は、その言葉に突っ込んだ。

「いい、その眼鏡のお兄ちゃん。

言っておくけど私は本気でお兄ちゃんを狙っているんだからね！」

歳ゆえにお兄ちゃん大好きにしか見ていなかった志貴にクロエが叫ぶ。

もつとも、そんな背伸びをした様子がますます微笑ましく見えてしまい志貴が微笑する。

「わ、私だって本気。その士郎さんと、その、あの」

美遊も顔を赤らめ思いを口にする。

一体どんな事を想像しているのかは分からないが実に可愛い反応だ。

「わ、私なんておでこにキスされたことあるし。

それに兄妹でも血は繋がっていないから全然大丈夫だし、

前にイリヤの水着に一番ドキドキした、って言ってくれたもん！」

そして、イリヤが2人に対抗するように絶叫。

叫んでからイリヤは気づいたが、その内容に——くうきが、こおりついた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」
気まずい沈黙が場を占領する。

ふと、式はホロウのとある一節を思い出す。

——ドクン

「……………」
…あれ……なんか可笑しいぞ、俺。

焦点がぼやけて、ヘンに言葉が浮かばない。

イリヤを見る。

銀髪の少女は顔を赤くしたり青くしたりと急がしそうである。

だが少なくとも式は彼女を見て焦点がぼやけたり、言葉がでないことはなかったことを確認する。

「そうよ。私は人魚だもの。」

泳ぎくらしい、水のほうが教えてくれるわ」

「……………」
さつきと同じだ。

イリヤの笑顔で意識が空っぽになる。

クラツとした浮遊感、眩暈に近いが、断じて眩暈なんてモノじゃない。

再度思い出す一節。

もつとも意識が空っぽになっているのはイリヤらしく。

自分の失言にあたふたし、少女2人から突き上げを食らっている。

——ドクン

くらりと傾く。

…そうだ、みんな同じぐらいキレイだった。

それでも一番をあげろと言うなら。

「……………イリヤには、一番ドキドキした」

ああもう、その通りだ、いまさら誤魔化してどうしようもない。

この節操なしは、ウソ偽りなしに、イリヤの水着に見惚れて、マトモに頭が動かなくなつたのだ。

「ホントは今もバクバク言っている。

……その、なんだ。イリヤはドキドキしないか？」

頬を掻きながら、なんとか視線を逸らさないうで問い返す。

「うん！すつごくドキドキしてる！」

首もとに抱きついてくる感触に逆らわず、イリヤと一緒に水中に落ちた。

来いよ、ア○ネス！と言わんばかりなロリコン賛美。

ふと、式は視線の先に今は刺繍姿のアヴェンジャーだがその「お兄ちゃん」を捉えて
呟いた。

「……………ロリコン」

式がゴミか使い捨て派遣社員を見るような。

絶対零度の冷たい視線と共に率直な感想を述べた。

「ち、違うもん！お兄ちゃんは私が好きだけでロリコンじゃないもん!!」

「そーよ……………じゃなくて、お兄ちゃんはわたしの!」

「士郎さんが、小さい女の子が好きなら……………私はいいです」

「いや、ロリコンだろ」

式の言い草に、少女達は思い人であるお兄ちゃんを一斉に援護する。

しかし、結局言っていることは衛宮士郎ロリコン疑惑を強化するものであった。

「士郎君つ……………見損なつたぞ!」

「あれ、そういえば確か。おまえは歌月十夜で……………」

ああなる程、同類だったな——よかった、殺人貴。ロリコン仲間が出来て」

志貴が友人が幼女性癖を持つ友人を見損なう。

が、式が絶倫眼鏡のロリコン性癖を思い出して志貴から距離を取る。

「レ、レンとは同意の上だ!」

また、くうきがこおりついた。

「うわあ、うわあ、うわあ……………」

「イリヤ、あれがガチのロリコンね。わたし初めて見ちゃった」

「……………」

イリヤ、クロエ、美遊の順で批評すると、ロリコン絶倫眼鏡から少女達は距離を取る。そして、女性陣から白い眼で見られている志貴はただ顔を青くしダラダラと汗を流すほかない状態であった。

※ ※ ※

「おいカレン、またカレーの追加だぜ」

「分かりましたアヴェンジャー。直ぐに用意します」

「はいはい」

絶倫眼鏡が女性陣から絶縁状態に陥っている中。

アヴェンジャーは店員として忙しく働いている最中であつた。

また厨房では今回の黒幕とも言えるカレン、マジカルアンバーが真面目に料理を用意していた。

「流石にそろそろ忙しくなって来ましたね」

「ああ、そうだな。というかこの規模の喫茶店で料理、精算、ウェイターを3人でこなすには少しきついぜ」

カレンの言葉にアヴェンジャーが同意する。

何せアーネンエルベはそれなりに名の知れた喫茶店で規模も大きめだ。

それを3人だけで動かすのはモーニング、そしてランチと徐々に増えてゆく客に対応するには厳しい。

おまけに琥珀、もといマジカルアンバーは普段から家事を行っているため問題なかったが。

カレンは味覚が壊滅的であるため盛り付ける作業、あるいは皿洗いの仕事しかできない。

「そうですねー。そろそろお屋敷から援軍を呼びましょうか」

2人のやり取りを聞いたアンバーは懐から携帯電話を取り出し電話をかけた。

「もしもし弓塚さん、おはようございます。

この間話したお仕事ですけど……大丈夫です！

ロツカーに例のものがありませんから太陽の下でも歩けますよ……はい、お給料は弾みますから、それでは」

午前10:30

——茶番だ。

金髪赤目の少年は内心で呟いた。

なぜなら少年は一見レトロな雰囲気を出す喫茶店の正体。

そして、本来合うはずも無い人間と出会い、話すことができることに違和感を覚えな
い現象。

その全てを少年は知っていたため、少年は茶番と断じた。

何せ神秘側の人間や化け物共が続々と入店してきては仲良く喫茶店で寛ぐ光景など
本来はありえない。

それも現代の二流三流のものではない。

少年がかつて生きていた時代にも劣らない水準の異能を有する人材が来るのだ。

例えば先程から随分と騒がしいテーブルに座っている、眼鏡の青年は一見ごく普通の
学生に見える。

しかし、掛けている眼鏡は一級品の魔眼殺しである。

そしてその眼は、かつて神代の時代の神々の物とどこも似たものを感じ取った。おまけにそれが一緒にテーブルに2人座っており、女性の方もまた別の奇跡を体現した存在と来た。

奇跡の存在は1人だけでない。

対面に座っている少女3人の内、黒髪の少女は奇跡の杯を再現した存在と思われる。残りの銀髪白人の少女は人造人間、銀髪褐色肌の少女は魔力で出来た存在と実に個性豊かだ。

少し視線をずらせば一心不乱にカレーを食う人蛭。

もとい吸血鬼だが、血を吸わずにカレーを食べることに少年の好奇心をくすぐる。

何せかつては、英雄として数多の魔を倒して来たがああも常識が飛んだ存在は初めてである。

さらに視線を動かせば、他にも片腕がない青年、眼鏡を掛けた地味な少女。

紫色の髪を有する2人組の少女、栗毛の学生服の少年と赤毛ツインテールのペア。等等などと実に多彩な面子が揃っている。

その全ての正体を少年は知っており、こんな場所で一緒にいてはいけないものだと知っていた。

魔は魔を引き寄せせる。

神秘は神秘を引き寄せる。

と俗に言われているが明らかに限度を超えている。

正直な所よくまあこの場で殺し愛、ならぬ殺し合いが起らないとは、と少年は感嘆するほどだ。

——まあ、皆知った上で楽しんでるのでしようけど。

そして少年は思う。

恐らく、この場にいる皆はこの異常事態を認知している。

だが、同時にこれが夢、あるいは幻のようなものだとは知っている。

だからこそ、無用な争いをせず今この時間を過ごし、楽しむことを優先しているのだ。

「ギル君？」

「なんでもありませんよ、由紀香」

自分も同じだ、ゆえに精々この喜劇を今は楽しむのみ。

古代ウルクの王にして最古の英雄で英雄王のギルガメッシュは現在、神代の薬で子ども姿になっていた。

この状況を壊すことは今の状態でも十分可能であったが、今日はこのアーネンエルベの1日を楽しむことを優先した。

※ ※ ※

カオスな喫茶店アーネンエルベの中でも特に目立つ組。

両儀式、遠野志貴、イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。

クロエ・フォン・アインツベルン、美遊・エーデルフェルトの5人は相変わらず談笑していた。

「で、型月の主人公2人がロリコン、

という事実を確認したわけだ。ああ、こっちに近寄るなよロリコン絶倫眼鏡」

Fateの主人公である衛宮士郎、月姫の主人公である遠野志貴。

両者は型月における代表的な主人公で、多くのSSでも主人公として活躍している。

公式の見解によれば両者の相性は大変悪い、と言われているが今回目出度いことに共通点としてロリコンであることが判明した。

「づ、誤解だ！両儀さん!!」

「そうよ！お兄ちゃんはロリコンじゃなくて、私の事が好きなんだから！

あ、でも遠野さんは近づかないでください、というか私に話しかけしないでください」

「同意、話しかけないで」

「な、なんでさー！!!」

完全にロリコン絶倫眼鏡と認定された遠野志貴に味方は存在しなかった。

とはいえ、これ以上ロリコン談話をしてもしようがないとクロエが口を開いた。

「遠野のお兄ちゃんがロリコンなのはもういいわ、軽蔑するだけだし。」

秋のリメイク版FateのPVがまた新しく出たわけだけどもみなどう思う?」

今年の秋に放送が予定されているUfotable版リメイクFateを議題として持ち出す。

【Ufo版】Fate Stay night PV2

「Parts: eNoztDjkhAMmJvNECwLSzOD4lwjYIM
DcxNDEwBAFgUE」

「すごかった!というか、お兄ちゃんカッコイイ!!」

「士郎さんの服装も新しくなっていた……すごく期待している」

そして大好きなお兄ちゃんが絡んだ話だけにイリヤ、美遊の順で食いついた。

『空の境界』『Fate/Zero』と極めて評価が高いあのUfotableが製作しただけに2人に期待は高かった。

「俺はアーチャーとランサーの戦いが良かったかな。」

ゼロでも戦いの描写が凄く良かっただけに今回もそうしたシーンが凄く楽しみだね」

アーチャー対ランサーのシーンはPVゆえに僅か数秒しか出ていなかった。

しかし、その数秒だけでも一体何人のアニメスタッフが屍となったのだろうか？

そんな感想が出てしまうほど、精巧で完成度の高い描写であったため志貴は今後に期待を膨らませた。

「あれ、よく考えてみれば両儀さんはずっとUfotableで出演していましたよね？」

「ん、ああ。そういえばそうだったな」

イリヤがふと疑問を口する。

考えてみればここにいる全員はアニメに一度は出演したことがある。

しかし、Ufotableで出演したのは唯一人両儀式だけであった。

「でも、オレはゼロみたく怪獣を聖剣でなぎ倒したり、固有結界を展開なんて派手さには欠けていたけどな」

「戦闘シーンとかそこらのアニメよりもずっと写実的で動きまくりだったじゃないの！

というか、行き成り銀幕デビューだったし!!……つく、これが銀幕ヒロインの余裕ね……」

クロエが式の言葉に激しく突っ込みを入れる。

確かにゼロほど派手ではなかったが、見事に再現された型月世界。

そして、ファンも大満足な丁寧な描写は全7章を好評と共に見事に完結した。

「大丈夫だよクロエ。遠野さんなんて『アレ』だったし、わたし達はまだ希望が持てるよ」
「……うつ、そうだったわね。」

たしかにそれを考えると恵まれているわ」

「あれは、悲惨」

「型月は世界観が難しいから……」

イリヤの慰めにクロエが自分が如何に恵まれているか確認する。

美遊、式の順で型月の黒歴史を思い出すと、同情と哀れみの視線を月姫の主人公である志貴に向けた。

「あ、うん。」

イリヤちゃん、そして皆言いたいことはわかるけど、

アレ呼ばりされると地味に傷つくから、あと同情の眼でみないで、お願いヤメテ」

実は月姫はFateよりも先にアニメ化していた。

だが、原作の設定を無視したもの、例えばシエル先輩がカレーではなくスパゲティを食べる。

と、原作ファンに納得できない描写が多々あり、製作に原作スタッフが携わらず。

おまけに監督が原作つきアニメに対し独自路線を展開しがちなスタンスを持つていたため賛否両論を巻き起こした。

とはいえ、当時の技術水準と原作物のアニメ化の水準を考えれば特に悪くはない。元々1クール全12話で収めよ、ということ事態ポリユーム的に不可能であり、全てを描写しきれない。

ある程度の短縮、そして改変は原作物アニメでは間々あることだ。

また、原作未体験者、海外コミユニティなどでは単体のアニメ作品として、そして良質なBGMで高く評価されている。

だがそれでも、原作ファンにとつては納得しにくいのは事実だ。

型月世界は世界観設定に細かいことが売りに関わらず、それをぶち壊してしまつた。

ゆえに型月ファンの原作至上主義的な性質もあいまって今日では「アニメ化なんてされてないよ」と黒歴史扱いされてしまった。

なお、作者第三帝国の感想として、当時型月に関する予備知識がないまま一通り鑑賞したが「???」な状態であったことを記す。

型月に嵌ったのは友人に進められて鑑賞したDENの運命の夜の方からである。

以後、ゲームをプレイし、漫画の月姫、メルブラも読み出しウェブ小説の存在を知るとそちらにも熱中。

読んでいく内にやがて自分も書きたい。

と思い「弓塚さつきの奮闘記」を執筆、5年の時間を掛けて今に至った。

「オレの『空の境界』2010年の『Fate/Zero』

今年の秋の『Fate/stay night』の全てはUfotableが担当しているから、そのうち月姫もUfotableがリメイクするかもな」

「だといいますが、両儀さん、俺の場合はPCのリメイク版が先に出てほしいです」

「でも、遠野さん。きのこはダークソウルに忙しいから、当分先だと思えますよ」

志貴の願いを打ち砕くように、イリヤが無慈悲な現実を突き出した。

原作者がゲーム、ダークソウル2に忙しい事実は4月のエイプリルフィールネタの路地裏ラジオにて。

弓塚さつきが「ダークソウルで忙しいからー、三体の黄金のゴーレムに囲まれているからーまた弓塚さんに丸投げー？」

と呟いたように創造神たる原作者は絶賛自分の趣味に邁進している。

そもそも、1月の時点で原作者は下のように記していた。

とまあ、そうはいつでも月姫もガシガシやってるからそこは大目に見てほしい。

らつきよも終わったし、具体的には週五月姫・週二Fateぐらいの割合。ホントだつて。

……ホロウの収録とかEXTRAまわりとかあるけど、そこはそれ、一週間を九日ぐ

らしいに増やせればなんとか……なる……さ……

「そうは言うけどよキノコ！もしダークソウル2が出ちまったらどうするんだい!?」

「その時は——笑ってごまかすさあ」

仕事しろコノ野郎（泣）といたくなるのは自分だけだろうか？

「ま、ゆつくり待つしかないさ。」

『魔法使いの夜』といい先延ばしはいつものことだから」

「年単位で既に待っているんですけど！

……くつ、これがシリーズを完結させたヒロインの余裕なのか!？」

『未来福音』でどう見てもハッピーエンドを迎えた式の余裕な態度に、思わず志貴が突っ込みを入れた。

「でも、遠野さんは私達と同じく漫画版があるし完結している」

「あ、遊美。それって佐々木少年のね！あれは、よかったわよねー」

美遊が漫画版の「月姫」を持ち出すとクロエが同意を表明する。

通常、アニメやラノベ、ゲームの漫画版は大抵途中で打ち切られるものであるが。

同人誌時代には型月物を描いていたという作者の佐々木少年の原作に対する愛もあつて見事に完結させ、今日でも極めて評価が高い。

原作に忠実に再現しているためテンポが遅い、という批判がありながらもコアなファンを満足させ、原作スタッフすらも絶賛する出来に至った。

実に7年半の時を経て見事に完結した実績は、同じ型月シリーズの「月の珊瑚」の漫画版執筆に携わったのは決して偶然ではない。

「けど、私達は今年の夏に3DSのゲームに出演するけど、月姫に新作は出ないのは事実」

美遊の一言で再度志貴は格差社会の現実を思い知り、再度絶望の淵に立たされた。

月姫はスピントフのメルブラこそあっても月姫そのものを題材とした新作のゲームは「歌月十夜」以降未だ登場していない。

悲しいかな、現在型月の主力商品はFateシリーズであるため、原作者の遅い仕事ぶりと相俟って新作の話はない。

しかもエクストラでは式は普通に出演し、アルクエイドもサーヴァントとして出たが志貴は名前すら出ていない。

「……ええと、なんだ。どんまい」

式が慰めてくれたが、まったくありがたくなかった。

そして、この時間もまたグタグタでネタネタな、いつも通りのアーネンエルベの茶会であった。

午前10:53

「よつと、やれやれ」

喫茶アーネンエルベの路地裏。

全身刺繍男ことアヴェンジャーが溜まったゴミを出していた。

現在アーネンエルベはアヴェンジャー、マジカルアンバー、カレンの3人で運営しており力仕事はアヴェンジャー担当であった。

カレンはこうした力仕事をもっとも不得意としていたし、アンバーは調理に忙しい。ゆえに、配膳担当のアヴェンジャーがこうした力仕事全般を担当していたが流石に疲労を覚えつつあった。

おまけに今はモーニングを終え、ランチタイムに入りつつある時間帯。

配膳だけでも大変にも関わらず、こうした雑務に追われているのだから仕方がない。

会計でカレン、調理はアンバーとある程度役割分担をしているためどこぞの牛丼チェーンのごとく。

一人で何でもしなければならぬことはないが、それでもオーバーワークであることには変わりがない。

「とうか、あの自称魔法少女が言っていた援軍はいつ来るんだ？」

だから、周囲に人がいないためアヴェンジャーがボヤク。

とうか、今日の働きに給料でるのか？と疑問を覚えた所で人の気配。

それなら特にアヴェンジャーは気にしなかった。問題はその人物が発する気配が堅気のものではなかった。

そう、とても濃厚な魔の空気を纏っていた。

「っ……おいおい、こんな昼間っから………はい？」

反射的に振り返り、右歯嚙咬（ザリチエ）と左歯嚙咬（タルウイ）を具現化する。

最弱を自認する英霊であるが、それでも意地というものがあり戦闘準備を整える。

もしも、相手が自分に敵意をむき出しにした瞬間、立ち向かうつもりであったが、ア

ヴェンジャーは絶句した。

確かに堅気の雰囲気ではない。

だがその人物は何故かしま〇ろうの着ぐるみを着込んでいた。

「……もしかして、アヴェンジャー？」

しま〇じろうから声が漏れる。

年齢性別が不詳であったが、少女であるらしい。

この姿をあまり人前で出さず、かつ知っている人物は限られている。

にも関わらず、開口始めに自分の名前を言い当てたこの少女は何者か？

アヴェンジャーは警戒心と疑問が内心で浮かんだが、その思考は一度中断された。

「あ、弓塚さん来てくれたんですね！」

アンバーこと琥珀が裏のドアから顔を出し、少女の名前を呼んだ。

どうやら、目の前の着ぐるみの少女がアンバーが言っていた助っ人らしい。

にしてもここまで強力な魔が喫茶店の助っ人とは……と、自分の事を柵に上げてアヴェンジャーは呆れる。

「ああ、琥珀さん。いくらこれで日中歩けるとはいえ、この姿は狙っているでしょ!!」
「当然じゃありませんか！ 似合ってますよ」

ああ、そういえば声がしま〇ろうに似ているどころかまんまだな。

とアヴェンジャーが悟り、いい感じに割烹着の悪魔に玩具にされてるのを見て。

思わず自分とカレンの関係を連想させ、親近感が沸いた。

※ ※ ※

はい、久しぶりに出番をいただいた弓塚さつきです。

志貴が幼女に手を出して思わずドン引きした、歌月十夜。

エジプトニーソと出会い、ボクが余計なことを知っていたせいで面倒になったメルブラ。

等などと色々あったけど、現在遠野家に居候状態。

扱いとしては遠野家専属の何でも屋で琥珀さんの実験台から始まり夜の見回り。

裏世界の揉め事の解消、屋敷の清掃など本当に色々やっている忙しい日々を過ごしている。

いや、本当に色々あった……。

志貴がレンに手を出したことを知ったアルクエイドさんは別に気にしてなかったけど、

シエル先輩はマジ切れで黒鍵片手に志貴を追いかけ回していたし、巻き込まれたボクは志貴のラッキースケベの被害にあった…。

おまけに、メルブラではボクが余計な知識を持っていたせいで、

不安要素と捉えたシオンが本気で殺しに掛かって来たし、ワラキアはボクの知識を元に強化するわで散々だった。

ワラキアの能力で Fate のサーヴァントが再現され、真正面から戦ったせいで両腕をぶった斬られた。

あの時、首が胴から分かれなかったのは本当に運がよかった、というか二度と思い出

したくない出来事だ。

まあ、流石に古の英雄達を再現し続けることはワラキアのキャパシティを超える行為だったから、最終的には自滅したけど。

けど自滅したとはいえ、その状況に持ち込むまでに粘ったボク達の勝利であることに違いなく。

その夜は遠野の屋敷で勝利を祝い、始めはボクを殺しに来たシオンと友情を結んだ。彼女はボクが転生者であることを知る唯一の原作キャラだ。

そして、その秘密を共有する仲間であり、共に見果てぬ未来を目指すことを約束し合った。

でも、翌日シオンが志貴のベットにいたけど！

裸だったし、シーツに赤い染みとかあったし、どう見てもベットウエー開戦の後でした本当にありがとうございました。

それを発見した翡翠さん悲鳴で集まってきた女性陣がホイホイと食った絶倫眼鏡を吊るし上げ、大騒ぎする中シオンが、

「魔術師として子孫を残すのは義務であり責務です。

彼の異才をエルトナムに取り組みたいと考えています。

それに、その：彼には女性として私は惚れています、というわけで、志貴を婿に下さ

い、秋葉」

顔を赤らめつつも、これ以上ないドヤ顔で言つて、

途方にくれる秋葉さんを始めとする面々が妙に印象に残っている。

とか、シオンさん、貴女原作では淡い恋心を抱きつつも三咲町を去るはずだったけど何故にここまで積極的なんですか？

その後、当然ながら大反対な女性陣により大乱闘（ガチ）が勃発。

黒鍵が壁を貫き、吸血鬼の爪が柱を打ち壊し、怒り狂う鬼が床を破壊。

そこにタタリの残骸が加わり、わけの分からない状態になり魔女の大鍋とはこのことか、と納得する以外なかった。

本当、色々あつたなあ……。

おっと、ここだな。

ええつと、何度か来たけど喫茶アーネンエルベの裏口は……なんだあの男？

アーネンエルベのウェイターの姿をしているけど、顔全体に刺繍を入れ込んでいるし。

いや、待て。

バンダナ、いや赤い布を頭に巻いた黒髪。

それに、背丈は一度アーネンエルベで見たことがある人物にそっくりだ、とすれば。

「っ……おいおい、こんな昼間っから………はい？」

と、答えを口にする前に向こうが振り返った。

両手に物騒な代物をこっちに向けて、直後に絶句した。

あ、うん。

その気持ちは痛いほど分かるよ。

何せ今のボクの姿は某教育番組に登場する虎のきぐるみ姿だから。

そんなのが街中にいるのは正直ない。

けど、こうでもしなければ太陽を浴びればたちまち灰になってしまいう吸血鬼である自分には必要なものだから。

仕方がない、といえば仕方がないのだけども○じろうとか、琥珀さん分かっていたでしょ？

さて、それは置き。

眼の前で絶句している青年の名は、多分もしかして。

「……もしかして、アヴェンジャー？」

あ、正解のようだ。

アヴェンジャーの言葉に向こうは反応した。

けど、どうやら向こうは自分を知らないよう警戒している。

……しまった、アヴェンジャーとは会ったことがないから警戒して当然か。というより、本来ならボクと彼とは会うはずがない仲だ。

方や夜にしか動けない吸血鬼、方や幻のような存在と接点がない。

しかも、お互い住んでいる場所は三咲町と冬木とまったく違う所である。

けど、こうして出会ってしまったのは、

これも全てあらゆるご都合が許される喫茶店アーネンエルベの奇跡と言うべきか。

「あ、弓塚さん来てくれたんですね！」

なんて、思いに浸っていたらボクをここに呼んだ琥珀さんが出てきた。

肩には黒いマントを羽織り、頭には猫耳、そして服は妙に短い裾をした改造和服姿だった。

ニーソックスと裾の間にある絶対領域がとても眩しい……じゃなくて、今の琥珀さんはマジカルアンバーのようだ。

「ああ、琥珀さん。いくらこれで日中歩けるとはいえ、この姿は狙っているでしょ!!」
「当然じゃありませんか！ 似合ってますよ」

やっぱり、狙っていたか畜生め！

まあ、それでも支払いがいいからここに来たけど、いい加減真意を聞くとしよう。

「で、琥珀さんがわざわざボクをここに呼んだのは、

ただ喫茶店の援軍だけではないと思うのだけど、どうかな？」

「おっ、御明察です。」

喫茶店のお手伝いなら翡翠ちゃんにもできますからね〜」

楽しそうに向日葵のような眩しい笑顔を浮かべる琥珀さん。

けど、内心はさながら魔女の大鍋で煮込みまくって黒焦げになるほど腹黒であることをボクは知っている。

そして、琥珀さんは騒動を起こし、楽しむ人間であり、何かを企んでいるのは確かであつた。

「実はですね……」

直後、破壊音が喫茶店から轟いた。

「わっ!？」

「おいおい、何だこれは？」

「しまった!まさかこんなに早く来るなんて……っ!!」

ボク、アヴェンジャー、琥珀さんの順に反応する。

いや待て、「こんなに早く来るなんて」とはどういう意味だ？

「説明は後です!ヒロインの座を狙う憎つくきあの化け猫たちがまたやって来たのです!」

化けネコ？化けねこ？化けぬこ、化け猫……って！

「ネコアルクのことかー！ー!!」

見たことないけどいるのか！

二次だと落書きみたいな姿をしていたけど、三次元だとどう見えるんだ!!?

気持ち悪い、あるいはキモ可愛い（リーズバイフェのみ）とコメントしていたけど。

というか、アレはヒロインというよりマスコット。

あるいはクリーチャー・枠の存在なのに何故にヒロインの座を狙うのだろう…。

「さあ、弓塚さん！ヒロインの座を死守するために行きましょう！ー」

そう言う琥珀さんはどこからか箒を持ち出し、

両手に派手な原色入りの注射器を指に挟み、よく知るマジカル・アンバーのポーズで

構えた。

「カカ、オレは主人公枠だが助太刀するぜ。

丁度給仕作業で疲れてきたからな、殺し合いで気分展開だ」

ニタニタ笑みを浮かべるアヴェンジャー。

両手には歪に曲がり、禍々しい装飾をなされた武器を握っている、殺る気満々である。

はあ、まったく。

来て早々騒動に巻き込まれるとか、実に面倒だ。

しかし、これも琥珀さんから頼まれたバイトの内と思えば気が楽である。

ゆえに、拒否する理由もない。

「じゃあ、思いつきり暴れていいのだよね琥珀さん？」

「もちろんです！そのため呼んだのですから！」

あ、安心してください、店の被害請求は全て化け猫と秋葉様に押し付けますから！」

「ケケ、いいぜ、いいぜ、最高だなあ！」

よし、決まりだ。

「了解、行こうか」

「はい！」

「おう」

そして、しま○じろうの着ぐるみ、全身刺繍男、コスプレ少女。

という我ながら奇妙で個性的な3人はカオスの世界である喫茶「アーネンエルベ」に突撃した。

午前11:25

扉か吹き飛び、轟音が響く。

店内の客達は何事かとどよめき、店の入り口に注目する。

そして、発煙筒が店の中に投げ込まれ、店内は一瞬で煙にまみれる。

クラッシュクな雰囲気を保っていた喫茶アーネンエルベが一瞬で台無しになった。

それだけでない、折角この雰囲気と共に味わっていた、某主夫自らが調理した数々の美食も台無しになる。

とはいえ、襲撃者にとって幸い。

というべきはこの場に腹ペコ騎士王がいなかったことだ。

もし彼女がこの場にいれば、即座に自身のアホ毛を掴みオルタ化した後に襲撃者を殲滅しただろう。

しかし、それでも休日を台無しにされて店内の客のフラストレーションは上昇。

一体全体こんなことをした馬鹿はどんな奴だ！と殺意と敵意を込めて店の入り口に視線を注ぐ。

淫乱ピンクなキャスターこと、キャス狐もまたご主人様とのイチャラブを妨害され怒

りが頂点に達していた。

「ふ、ふ、ふ、ふ。主人様とのデートを妨害するなんて……よつぽど死にたいようですね」

キヤス狐の被害は発煙筒の煙だけではない。

投げ込まれた発煙筒の一発がテーブルに直撃してしまう。

一部では都市伝説と言われているが、

全国の童貞があこがれる恋人の食べ差し合いっこする「あーん」の最中にだ。

結果、至近距離から煙を直撃したため全身煙塗れになるだけでなく、美食もスウィート空間もぶち壊れた。

自らの尾つぽが引き起こした騒動の後処理に追われ、

権力や富に関心はなくセラフの片隅の四畳半アパートで死線を潜り抜けたマスター、

いや、自身の夫となる人物と共に静かな日々を過ごしていたが世界的権力側からしかけてくるちよっかいを払い。

さらには、同じく死線を潜り抜けた仲間が持込んだ厄介ごとの処理などを片付けてようやく一息ついた矢先にまたやって来た厄介事。

結果、キヤス狐は全身から魔力を滾らせ、周囲に殺意を撒き散らし怒りを狂っていた。

しかし口は型月世界において最もスウィートで媚媚なキャラ立ちをしているが、

某割烹着と同様に腹は黒く頭脳は驚くほど理性的かつ計算的であった。

(さてさて、呪い殺すか肉体的に不能にするか迷いますが)

……英霊に吸血鬼、人造人間に神殺しの類が屯っているここに襲撃を仕掛けるとかどこの馬鹿ですか!?)

キヤス狐が内心で突っ込んだように、ここは異能者のバーゲンセール状態。

かつて戦った英霊の存在だけでなく無心にカレーを食らう吸血鬼、店員だが何か訳ありの銀髪シスター。

他にも色々いるが、ここで一つ一つ取り上げていくとキリがない程実に多様性に富んでいる。

そして、どいつもこいつも戦闘力は無駄に高く、こんな場所に喧嘩を売る輩は正直言つて馬鹿であるとか表現しようがない。

だからだろうか、店内の人間は皆喧嘩を売ってきた者が何者か強い関心を抱いた。

ある者は警戒し入り口を睨む。

ある者は好奇心を膨らませる。

またある者はまたカオスな連中がやってきたと達観する。

やがて煙が晴れる。

徐々に写るその姿は人ではなく――。

「にやはっはっはー！アーネンエルベは我々が占領したのだにやー！」

……何だが良く分からないナマモノがそこにいた！

「……………」

静寂な空気、否。

どう反応すればいいか分からず微妙な空気が店内を支配する。

「ぬふふふーアタシの勇姿を見て声もでないみただにやー」

客の沈黙を自身に威圧されている、

と勘違いしたナマモノが胸を張りこれ以上ないドヤ顔で周囲を見渡す。

「いや、ここは我輩のハンサムな姿に見惚れているからだろうニヤ」

ナマモノの後ろにいた別のナマモノがこれまた渋いボイスと共に呟く。

幾つかの客はその声に見覚え、というより某マーボー神父そのままに驚愕する。

キヤス狐も某購買部の店員そのままの声であったため、マスター共々驚きのあまり転げそうになった。

（ちよ、おまつ……!!な、なんですかー!!）

考えてほしい。

身長190センチ近くのガチムチ神父の渋い渋いボイス。

それがキヤス狐が知るジョージボイスであるが、それが猫だか良く分からないナマモノが口にするのだ。

そのシニールさに、ギャップ萌えに見出すどころか、ギャップのあまり精神が保てない。

そして、辛うじてキヤス狐の精神が保たれたのは聖杯戦争で幾つもの修羅場をくくり抜けたおかげである。

「にや、にあんだとー！

アタシの金髪ヒロイン要素を差し置いて人気を得るなんてありえないニャー!!」

灰色のナマモノに対して金髪赤眼のナマモノが喰らい突く。

Fateのセイバー、月姫のアルクエイド等と型月は金髪ヒロインがその人気を誇っている。

ナマモノ、もといネコアルクもまた金髪を有したキャラであり、ネコカオスに対抗心を燃やしていた。

だがこのナマモノのこの発言に、店内にいた人間は人種や種族が違えども一瞬で心を一つにした。

(「オマエにヒロイン要素なんてあってたまるかー!!」)

「ふ、生憎私はヒロイン枠ではなく、悪役枠だ。

後この渋い声が商売でね、私は様々なメディアに引つ張られている人気者なわけだ。

最近『ウルフェンシュタイン：ザ ニューオーダー』には主人公として出演している。

あ、画面の向こうのみんな、ニコニコ動画でもプレイ動画があるから是非見てくれたまえ」

「いやいやいや、それは中の人だにやー!」

ウルフェンシュタイン：ザ ニューオーダー。

かつてFPSの基礎を築いた伝説とも言えるゲームは6月を以ってPS4でリニューアル。

リアルな描写、派手なアクション、細かい世界観設定と素晴らしいもので、ぜひ遊んでほしい。

「あのくそれで、何しに来たのでしょうか?」

行き成りやってきて身内で馬鹿騒ぎをするナマモノズに、

イリヤスフィール・フォン・アインツベルンがおずおずと尋ねた。

「む、き、貴様は金髪ヒロインの永遠のライバル、

あらゆる二次元で強い人気を誇る銀髪ロリコンヒロインだとおー!!」

自称ヒロインのナマモノがイリヤに戦慄する。

それもそのはず、数多の二次元において銀髪ヒロインとは特別な存在だ。

なぜなら金髪こそ現実にも存在しうるが、二次元において銀髪とは希少で幻に等しい。

強いて言うなれば、銀髪とは二次元にしか生息しない生き物と言える。

ゆえに、多くの二次元で描かれている銀髪のヒロイン達は不思議で幻想的な存在として描かれるパターンが多い。

キャラとしての個性の強さ、それが強い人気へと繋がる。

さらにロリの要素が加わったヒロインは、金髪ヒロインを押しつける最強のヒロインと評するのは過言ではない!

「ちよ、人を指差して。な、何を言っているのよー!」

だが、常識人なプリズマ☆イリヤのイリヤはネコアルクの物言いに赤面する。

これが Fate のイリヤならばネタに食いつきドヤ顔で自身のキャラ立ちを自慢していただろう

……ただし保護者（バーサーカー）がすっ飛んで来てミンチミートにされる確率が非

常に高いに違いない。

「あら、私の事を忘れていないかしら、化け猫。

褐色、ロリ、なおかつ銀髪でお兄ちゃん大好き！な、この私を？」

しかし、Fateのイリヤに近い性格。

頭脳は大人、見た目はロリ、確信犯的小悪魔ロリの、

クロエ・フォン・アインツベルンがこれ以上ないドヤ顔でナマモノ達を見下す。

「なん、だと……褐色に、銀髪……しかもロリ子悪魔キャラニヤンて!!？」

「く、それだけでないにや、お兄ちゃん大好きなキャラは——我々には出来ないっ……!!」

お兄ちゃん大好きな妹、これは兄妹関係を前提とした設定がなければ成立しえない。

ネコアルクとネコカオスは某アイドルの薄い胸板のごとく立ちはだかる壁に戦慄を覚えた。

「ふ、ふふーん、それだけじゃないのよねー。

私は今年の夏にはいよいよアニメでデビューする予定だから、これから人気が出る予定よ。

あら、カニファン以来動く姿を見せたことがない貴方達には関係のない話だったわねー、あはははははー！」

2014年7月9日より「プリズマ☆イリヤ2wei!」が放映されることを知るクロエは得意顔である。

翻つて2012年の「カーニバル・ファンタズム」以来化け猫たちは動いた姿を見せたことはなかった。

「へ、これがヒロインの余裕ニヤのか……………」

あまりに圧倒的なヒロインの実力によりネコアルクは戦意を喪失する。

彼女（なのかどうかは分からないが）から見てクロエは某アイドルがいくら頑張っても胸が大きくならないように、

適うことがない夢の象徴、または永遠に超えられない障害のごとく立ちふさがり、膝に矢を受けた衛兵のように思えた。

このまま、ネコアルクは自身がヒロインに相応しくない事を認め、

回れ右で撤退するはずだったが、調子に乗ったクロエの一言で事態は急変する。

「この夏でお兄ちゃんのハートを掴むだけじゃなく、

TYPE-MOONのメインヒロインの座をセイバーから奪って見せるんだから！」

「でも、Fateに限定するならエクストラの赤セイバーにキャス狐が強敵」

盛り上がったクロエに美遊が冷静な指摘を入れる。

普段のクロエならばこの場ではその言葉を絶対に言ってはならないことを承知して

いたが、

夏に自分の出番が出ることに改めて思いを馳せ、興奮したせいで冷静さを失いつつあり言ってしまった。

「え、某ドラゴン音痴ヒロインはともかく、

あんな無駄な脂肪を持つ金髪ヒロインと淫乱ピンクの年増ヒロインなんて眼中にな
いし」

刹那、魔力の渦が店内をかき乱す。

物理的波動となったそれは皿やコップがひっくり返す。

殺意がそこらじゅうに吹き溢れ、空気が凍りついた。

「今、何ていいました……………?」

キヤス狐であった。

普段なら嫌味を飛ばす程度であったが、

唯でさえデートを邪魔されてイラついていた所に年増世呼ばりされて完全にキレたのである。

クロエは地雷を踏み抜いたことを知るが、時は既に遅し。

彼女はただキヤス狐の鬱憤を晴らすだけのサンドバックに過ぎない事実を思い知った。

それにまた、厄介ごとにー!?

と巻き込まれたイリヤは嘆き悲しむ。

だが、思わぬ人物から救いの手が差し伸べられた。

「え、でも事実じゃないかな？」

よく16歳で熟女、18歳でババアなんて言われているし。

それに、神であった時期を合わせればぶっちぎりでキング・オブ・年増だと思おうよ僕は」

「あ、!!?死にたい奴はどこですか!!?」

あまりの言い草にキヤス狐は声の主の元に顔を向ける。

店内の客もまた、この騒動を娯楽として捉えてつつあったため注目する。

客達は止める気配はまったくなく、唯一キヤス狐のマスターが怒れる九尾の狐を宥めているが効果はない。

「成る程、こうして見ると美女であることに間違いない。

けど、腹に一物を抱えているし——僕の好みではないね」

キヤス狐が顔を合わせた先にいた人物は、赤眼金髪の少年であった。

妙に整った美貌を有する少年は尊大とも言える口調でキヤス狐を品定めする。

一瞬、キヤス狐はようやくやく10に届く少年に年増呼ばりされてさらに怒りのゲージを上げたが、違和感に気づく。

成る程、見た目は顔が整った少年だ。

しかしその体からあふれ出る魔力はそこらの魔を超えている。

そして、神代の時代を生きたキヤス狐はその懐かしい雰囲気に見覚えがあった。

(な、何ですか……この少年はまるで過去の私か、それ以上の——)

かつて、神代の時代というものがあつた。

人は未だ脆弱な存在で恐れ、崇拜、信仰した神々の時代だ。

だが、時代が進むと共に人々は神々を幻想として捉えるようになり、神の権威は失墜。今日では神の存在は殆どなくなつたと言つてもいいが、

少年は現在では幻となつた神が生きている事を証明していた。

「僕の正体に気づいたみたいだけど、

今の僕は頭に来ているから許すつもりはまったくくない。

——さっきの魔力の波動で、由紀香の服が汚れたからそのお返しをしなくちゃ」

視線を少し横にずらすと同じテーブルに座っている少女が、

クリームパスタで汚れた服を涙目になりつつ汚れを落としていた。

少年の口調から察するに、キヤス狐が出した魔力の波動で料理がひっくり返り、服が汚れたのだろう。

おまけに耳を澄まして聞いてみると「折角買った服が……」

「どうしよう、今月厳しいし……」等と呟いており、完全に悪いのはキヤス狐であった。
(やっちゃまったー！……流石にこれはこちらの非ですね。)

理性を回復させたキヤス狐が流石に不味いを気づく。

ゆえに、謝罪の言葉を口にしようとするが先に少年が行動を起こした。

「あ、いい訳とか謝罪とか聞くつもりはないから黙ってボコられてね」

直後、宝具がキヤス狐に飛来。

次の瞬間には煙と轟音を立ててキヤス狐の姿を見失った。

だが、キヤス狐は健在であった。

吹き出た煙を払い、私服姿からサーヴァントとしての姿に変わった、

彼女の周囲には同じく宝具の鏡が周囲を回っており、少年が発射した宝具をそれで迎撃したのだろう。

「……いいでしょう、そっちがその気ならこちらも覚悟を決めます！」

売られた喧嘩を買ったキヤス狐は惚気た思考を改め、サーヴァント・キヤスターとして立つ。

そして、傍には彼女の伴侶が聖杯戦争のマスターとして立っていた。

「へえ、狐狩りは初めてじゃないけど、

どこまでやれるか僕に見せてほしいなっ……!!」

キヤス狐の言葉に少年、

子ギルことギルガメッシュはその言葉に答えるべく、さらに宝具を展開させる。

「あらゆる鋭鋒からご主人様を守り、あらゆる魔手からご主人様を護る、絶対無敵の鋼。

そう誓い、生涯を共に過ぐすと約束した私達の仲を甘く見ないでくださいましっ……

!!

対するキヤス狐もやる気満々。

これ以上語るものはなく後は戦うだけであった。

「さあ、始めようか」

「ええ、そうしましょう!」

次の瞬間喫茶店内に宝具が飛び、魔力が入り乱れる戦争が勃発した。

喫茶店は大量破壊兵器である宝具、さらにはキヤス狐が繰り出す大魔術でたちまち破

壊されてゆく。

客も流石に喧嘩を肴に、とは行かずに逃げ出し一部は乱闘をはじめ出し、落ち着いた喫茶店の空気はぶち壊された。

「……あ、あのー皆さん、喧嘩は良くないと思うのニヤけど？」

ネコアルクが変わりすぎた状況に呼びかけるが、誰も聞いていない。

ある意味この騒動の種をばら撒いたネコアルク達を放置して店内は乱闘騒ぎへ突入した。

正午12:00

国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。

と、有名な文学作品のフレーズがあるが——ドアを抜けるとカオスであった。

「あは、オバサンなかなかやるね」

「あ、!?!この糞餓鬼があ——!!」

金髪の少年と、

桃色の髪を持つ少女が互いに宝具と魔術をぶつけ合う。

流れ弾が喫茶店の床や机を破壊し、破片があたりに散乱する。

おつかしいなあ、ボクはヒロインの座を狙う化け猫退治を依頼されたはずだけど。

というか、桃色の少女はもしかしてキヤス狐か？

うおおおお、リアルキヤス狐キタコレ！

なんだ！あのけしからんスタイルは!!

アルクエイドさんやシオン、秋葉さんとか美少女は見慣れているけど、

流石かつて帝に魅入られた絶世の美女、キヤス狐マジ美少女。

そして、隣にいる学生服の少年はそのマスター、ザビエルだな。

エクストラエンドならば4畳半アパートであんな美少女と同居してるんだよな……爆せりア充。

「あ、あのー喧嘩はその、本当によくニヤイから辞めませんか……つて今掠ったニヤー!!?」

なんか足元から声が聞こえるから視線を向けると、いた。

本当にそれは奇妙な生き物であった、なぜなら見た目は動物の属するにも関わらず人語を解していた。

それだけなら、魔術の世界ならばさほど珍しくないが、問題はその造形だ。

2速歩行で人間の服を着て、頭にこれまた人間のような髪を生やしていた上に、その顔が実に奇妙であった。

神の造形ミスを疑いたくなるようなアンバランスな配置、特にその瞳は宇宙人グレイのごとく顔の面積の多くを占めていた。

早い話美少女マンガの大きな瞳をしたヒロインがそのまま三次元に登場したらどうなるか？

そんな思考実験的代物がボクの視線の先に存在しており……ネコアルクはグロイというよりクリーチャーだった。

それこそ、クトウルク神話で出てくるようなクリーチャー並に見るに耐えられるものではなく、ボクのSAN値が一瞬急降下した。

体温が一気に低下し、ガチガチと恐怖で歯が鳴る。

心臓もまた恐怖と極度の緊張で暴発寸前で今にも暴発し、その動きを止めてしまいうだ。

また、冷や汗も流れる。

息もひゅーひゅーと吐くだけでうまく呼吸することが出来ずにいる。

化け物、血を吸う鬼になってもなんて様だ。

今は奴は自分を見ていないがもしもこちらを向いた時、ボクは正気でいられるだろうか？

あの、大きな瞳が自分の姿を捉えた時、果たしてボクは――。

「弓塚さん、どうかしましたか？」

「……………っ、あ、い、いや何でもない！」

ヤバイ、琥珀さんが呼びかけていなかったら本気であのままSAN値直葬しそうになった。

とうか、何でこいつだけ二次元的描写に忠実なんだ!!?

今まで見たことなかったグロイ、

キモイと皆が口を揃えていたけどその気持ち分かるよ……。

で、リーズバイフェはこれをキモ可愛いと申すとか、訳が分からないよ。

少なくともシオンよりも芸術のセンスはあるというのに、どうしてアレを好むのか理解不能だ……。

「さて、弓塚さん。あのお二方を止めましょう!」

なんて考えていたら琥珀さんが両手に注射器を挟みそう言った。

……え、冗談ですよね琥珀さん、あれをボクが止めろと?

「当然じゃありませんか、アーネンエルベを守るために弓塚さんを雇ったんですから」

何を言っている?と言わんばかりに返された。

あ、あのー琥珀さん相手はどちらも神話世界の住民ですよ?

片や古代メソポタの英雄、片や国を傾けた傾国の美女にして最強の魔、勝てるわけないですよー。

リアルに二次元的表現を再現したせいでクトゥルフ生物みたくなくなったネコアルクを相手にするよりましかも知れないけど。

「まあ、確かに元悪神とはいえ今は正義の味方症候群の肉体を借りているだけの抜け殻。弱体化しているよーだが、マジモンの神の類を相手にするのは少しどころかオレの自

滅技でもキツイぜ」

気だるげにアヴェンジャーが呟いた。

どうやら、この全身刺繍男は意外とまともなものである。

よし、このままアヴェンジャーと共同戦線を張り逃げてしまおう。

「ケケ、だがオレは別にかまわないぜ」

あ、アヴェンジャー、この戦鬪狂があー!!

「アハ、大丈夫ですよ塚さん、

赤信号、皆で渡れば怖くない、という言葉があるじゃないですか」

色々一杯な自分に対して、

琥珀さんは向日葵のような笑顔を浮かべつつそう励ました。

だけど、琥珀さん赤信号を渡ったら普通に車に轢かれますがな……。

「覚悟を決めろ、吸血鬼。

アーネンエルベで素敵なパーティーをしようぜ」

某ソロモンの悪魔のような言い回しでアヴェンジャーがニヤニヤと話しかける。

逃げようにもさり気無く琥珀さんが退路を絶っており、前方は子ギルとキャス狐が絶

賛戦鬪中だ。

あー分かった、分かりましたよ畜生!

英霊2人を張り倒すだけの簡単なお仕事をこなせばいいのですね!

「あーもう、分かりましたよ琥珀さん、行きますよ。」

ええ、行きますからその怪しいお薬を準備しないでください」

「おやおや、違法じゃないお薬ですから大丈夫ですよ?」

注射器を自分に刺す素振りを見せていた琥珀さんは、

何のことかしら?と人懐っこい表情と共に惚けて見せた。

………一体どういう薬を注射する気だったんだ?

「カカ、話しは纏まったようだな、んじゃ一番乗りはオレだ」

「ちよ、アヴェンジャー」

隣のコンビニに行つて来るのノリで、

ボクが止めるより先にアヴェンジャーが突撃した。

何の考えなしにカチコミするなんて何時も皮肉っている正義の味方同様正気じゃないな

いな!!

「オレにも混ぜさせ…」

「あ、何ですか?」

「君、邪魔だから」

そして案の定というべきか、

アヴェンジャーが2人に飛び込んだ瞬間、

キヤス狐の魔術に子ギルの宝具が飛来し、アヴェンジャーの周囲は粉塵に包まれる。ボクは粉塵にむせるる。

そして粉塵が晴れた先にいたはずのアヴェンジャーはいなかった。

いや、視線を天井に向けるといた。

アヴェンジャーはカニフアンのランサーと同じく天井に突き刺さっていた。

アヴェンジャーが死んだあああああ！

というか全身刺繍で無くなっているから衛宮士郎に戻っている……衛宮士郎も死んだ！この人でなし！

「あー何ですかそこの方々、私の喧嘩を邪魔するつもりですかー？」

アヴェンジャーが突撃したせいで、

最悪なことに今度はボクの方にタゲられた。

子ギルも興味津々といった感じで宝具がこちらに向いている。

逃げようにも狭い喫茶店。

ゆえに、前に進む以外道はないのだ——畜生、やってやる！

※ ※ ※

少女が2人歩いていった。

その事実だけなら、どこにでもある現象であったが、

2人はこの国ではいわゆる「ガイジンさん」である上に2人揃って美女と来た。

1人は金髪碧眼の少女。

ネクタイを外す習慣が根付いて久しいこの国の習慣に反するように、

この暑い時期にブラウスの襟元をリボンできつちり結んでいた。

にも関わらず汗をかかず涼しげな表情を浮かべている事実から、

少女は体を鍛えている事が推測される、現に歩き方も武術を嗜む者特有の体のブレがない動きをしている。

そして、見た目から年は高校生によく届くと思われるが、

中性的な顔立ち、愛らしいと表現するより凛々しい顔つきで、どこか剣を連想させた。

もう1人の少女もまた美少女であった。

ただし、先の1人より女性らしい顔つきをしている。

体の方も女性らしさに溢れており、たわわに実った双球が服の下から突き出ていた。

また碧眼の少女よりも感情表現が豊かで、

紅い瞳はクルクル動き、表情が話すたびに変わった。

そして、美少女たちの正体は、

碧眼の少女は英霊のセイバー、紅眼の少女は真祖の姫アルクエイドであった。

「で、セイバー。」

夏のプリズマ、秋のUBWといい今年の型月はFateアニメ祭りね。

おめでとー、いいなー私のほうはエクストラで友情出演して以来暇よー」

アルクエイドが夏、秋と連続してFateシリーズが放映されることに、

セイバーに賞賛を送ると同時に、いつまでたつてもリメイク版が出ない自分の現状を嘆いた。

「ありがとうございます、アルクエイド。」

ですが、いずれ月姫のリメイク版もでるはずですから、アルクエイドも大丈夫です」

「何年先の話になるか分からないけどねー。HFが劇場版で放映される予定だし」

セイバーが慰めの言葉を綴るが、

アルクエイドは頬を膨らませて不貞腐れる。

無理もない。

これまで小出しに月姫の続編やリメイク版の情報は出たが、

続々と各種メディアで展開するFateとは違い、月姫には動きがまったく表現していないほどない。

幾ら月姫が2000年に登場した古い作品とはいえ、

2004年にアダルトゲームとして登場したFateも今年で10年。

Fateシリーズはその勢いが減速することなく、未だ根強い人気と派生作品は増殖が続いている。

しかも、月姫よりも古い。

始めはウェブ小説でしかなかった空の境界に至っては劇場で全話が放映されている。

型月3大ヒロインとして、そして月姫のメインヒロインとしてアルクエイドはまったく面白くなかった。

「き、きのこがダークソウルに飽きるのに期待しましょう」

「飽きる何て期待はしてないわよ、セイバー。」

あの暗黒世界観、一撃死上等の鬼畜設定とか、きのこの好みにドンぴしゃりだし。

例えるなら、八極拳神父に穴を埋められて、思わず気持ちよすぎてダブルアへ顔ピース状態のケリーのようにな

「ちよ……!?アイリスフィールみたいな例えはよしてください!」

貴女は、貴女だけではそうではないと私は信じていますから、もつと言葉を選びなさいアルクエイド!!」

セイバーが苦し紛れな慰めの言葉をかけたが、アルクエイドは腐ったネタを吹っつけた。

ゼロ以来増えたホモオナネタを混ぜている所から見ると、アルクエイドは相当不貞腐れているようだ。

そして、セイバーはドラマCDで守るべき主君ともいえる存在が、

アイリス腐イール、すなわちホムンクルスならぬ、ホモオクルスへ進化した事を知るだけに慌てる。

「ああ、そういうえげ。

秋に放映されるUBWなら定番のアツー！チャー×槍（意味深）だけでなく、

肉塊×ワカメの触手プレイ、金ぴか×狂戦士のリョナプレイな組み合わせもできるわね」

「……っ!!」

駄目だ腐つていやがる。

早急に何か話題を変えなければ。

さもなければ、よりアルクエイドが腐界の深みに入り込んでしまう。

冷や汗を流しつつセイバーは内心で独白する。

何か、何か話題を変えられるものはないか!!?

セイバーは周囲を見渡すが、何も——いや、あった。

「きよ、今日は月がきれいです……ではなく、暑いですね。

アルクエイド、アーネンエルベに着きましたし、まずは冷たい物でも飲みましょう」
「え、あつ、ちよつと！」

まだ、ゲイ♂ボルクが主人公の……」

アルクエイドの腕を掴み、

セイバーは強引に喫茶アーネンエルベに入店する。

最後の不穏な台詞については、聞こえなかったフリをして。

同時に、これ以上腐った話を聞かずに済む。

そう安心したが、アーネンエルベの有様に驚きの声を挙げた。

「な、なんなのですかこの惨場は？」

というか、シロウ！しっかりしてください！」

虎の着ぐるみが頭から床に突っ込み、

セイバーのマスターである衛宮士郎が天井に突き刺さりぶら下っている。

他にも桃色の髪をした少女に、妙にカレーが匂う筋肉質の男が床に倒れていた。

当然のことながら喫茶店の内装はボロボロで、

まるで戦争でも起こったかのごとく廃墟当然の有様であった。

「うっわ、何このカオス？」

というか、そこの着ぐるみはさっちゃん？」

セイバーの後ろからアルクエイドが顔を覗かせ、アーネンエルベの有様に眉をしかめる。

一体何があつたのか？

そんな疑問が2人の中に疑問として浮かぶが、手がかりはない。

振り子時計が正午 12 : 00 の鐘を鳴る中、2人はただただ途方に暮れた。

午後12:15

「この間桐桜。」

ついに、ついにヒロインになりました！」

紫色の髪をした少女、

間桐桜がこれ以上ない程ドヤ顔でヒロイン宣言をした。

「長かった……。」

後輩キャラでありながらもエログロなHFルートのせいで、

正統派金髪ヒロインと王道貧乳ツインテールヒロインルートの猛攻で影に隠れて幾星霜。

公式のヒロインの人気度でもセイバーさんと姉さん、イリヤさんの3ヒロインに押されてた状態。

二次創作でもセイバールートと姉さんルートを元にしたものがメジャーで、わたしのルートはマイナーでした……」

遠くを見るように桜は回想する。

確かに間桐桜は金髪ヒロイン枠のセイバー、ツインテール王道ツンデレヒロイン枠の遠坂凜。

とそれぞれ属性がある中で密かに主人公を慕う後輩キャラとしてFateのヒロインとして想定されていた。

だが、桜のルート。

HFルートは凜のUBWルートをクリアした後に解禁される隠しルート。

そして、これまでの愛と信念を主題とした内容とは打って変わって、HFルートはエログロホラー要素を前面に出したものだ。

Fate、UBWルートでは判明しなかった聖杯戦争の裏、主人公にとって日常の掛け替えのない存在が抱える闇。

そして型月お約束の「ヒロインがラスボス」を体现した。

と、まあそんなわけで公式人気投票では他のメインヒロインと比べると水をあけられてしまった。

また、二次創作の世界でも純粋にHFルートを元とすることは少なかつた。

とはいえ、逆に少ない分光るものがあるように「まとうりん」「IFアーチャーのHFルート」のような名作がある。

そしてヒロインの人気度だが、2012年6月8日から24日にかけて行われた、

Fate／Zero、空の境界。魔法使いの夜、月姫から選ばれたオールキャラクタ―人気投票の結果では8位。

5位アルクエイド、6位イスカンドル、7位蒼崎青子、9位ギルガメッシュという順位であり善戦したといえる。

だがしかし――。

「Fate／Extra CCCでは確かに、確かに前作と違ってヒロインルートはありましたよ、えええ。

でも、でも……何で公式は4月のエイプリルでは扱いが未だラスボス色物系ヒロイン何ですかー!!」

2013年に発表された「路地裏さつき ヒロイン十二宮編」

ではメガ林桜子と遊びすぎな名前が登場したように、桜の扱いは色物であった。

シオンからは「ここまで暗黒面に落ちたヒロインがトップアイドルになる世界は、間違っている」と指摘され、

逆に桜は「怨念系の役回りとか超☆上等！一周まわって楽しくなってきたところですよ！」と開き直る始末であった。

ホロウから始まりコロシウム、カニファンと桜にファンの間では腹黒キャラ属性がつき、

公式の引くことを知らぬ悪ノリと相俟って間桐桜はすっかりラスボス腹黒色物系ヒロインの扱いであるのだ。

「それに今旬のプリズマ☆イリヤに至っては姉さんとルヴィアさんが出ていても、

私なんて影も形もアニメの諸事情どころか、原作からフェードアウト状態ですからね……ふ、ふふふ……」

なお、桜は出ていなくても毒舌シスターカレンはカーニバル以来2度目のアニメ出演となっていた。

「ですが、そんな黒桜の時代はもう終わりです。

銀幕デビューが決定した私、間桐桜は正統派後輩ヒロインとして生まれ変わるのでから!!」

「答・コロンビア」のポーズでこれ以上ないドヤ顔で再度宣言する桜。

携帯音楽機器で態々某ユニコーンのBGMが流しているあたり、実に手が込んでいる。

だが、それは「ヒロイン十二宮編」で判明したアホの子疑惑により説得力を抱かせるだけであった。

「ヒロイン、ヒロイン。実にいい響きです。

後は劇場で先輩と（自主規制）なシーンを流せば金髪ヒロインなんて目じゃないはず。

空の境界で原作に忠実に（自主規制）なシーンを流した u f o t a b l e なきつと、きつとやってくれるはずです！」

だが、桜はヒロインの条件を忘れていた。すなわち男が理想とする乙女心とキャラ属性を。

一体誰が要素ガン無視の、確信犯的にエロネタに走るキャラをヒロインとして見るだろうか？

それが分からない間桐桜はすっかり腹黒かつ、ネタキャラ要員でしかなかった。

「どアホー！！！」

「ひゃん！！？」

そして、これまで黙って聞いていた桜の唯一の肉親が暴走する桜の頭を叩いた。

「黙って聞いていれば、

脱げば人気出るとか何とか、

桜、アンタ。ヒロイン舐めてんの!？」

「ね、姉さん」

頭を抑え、涙目の桜が振り返った先には、

王道貧乳ツインテールヒロインの遠坂凜が憤怒の表情を浮かべて桜を睨んでいた。

「正統派どころか、型月のドル箱にしてヒロインの覇者セイバー。」

プリズマから人気をさらに高めつつある、お兄ちゃん大好き、ロリコン銀髪魔法少女のイリヤ。

ダークホースに、セラ、リズの銀髪メイドコンビに褐色銀髪幼女のクロエを始めとするロリコンヒロインの攻勢。

エクストラなら貧乳ヒロインから卒業しやがった赤セイバー、淫乱ピンクのキャス狐、ロリコン梓ヒロインのドラゴン娘。

どいつも、こいつも強い個性があつてヒロインとして熾烈な戦いを繰り広げているのに、脱げば人気でるとかヒロイン舐めんじやないわよ！」

溜まっていた思いを言うと、凜はフーフーと荒い息を吐く。

増え続ける型月のヒロインの中で、未だ現役で数々の派生作品に出演する遠坂凜であるが、

近年の型月のヒロイン増産体制（ただし月姫を除く）で強力なライバルが出現しつつあり危機感を覚えつつあった。

だから、色気の1つや2つで簡単にメインヒロインになれる。

等と甘い言葉を吐く唯一の肉親の言葉に我慢できなかった。

「でも、そういう姉さんだって、

エクストラでは尻チラとか絶対領域の極みをしてたじゃないです——あいたあ

!？」

「シヤラツプ!!CCCではセーラー服だったから関係ない!」

だが、エクストラで尻チラという新たな領域を開発した事実を桜が指摘するが、否定される。

「だいたい桜はCCCでは、何あの胸？」

パッションリップは私への当てつけかしら？

幼女枠のメルトリリスは下半身丸出し、エロ路線しかないの？」

「あ、あれは私じゃなくて、オリキャラ！」

二次創作で生まれたオリキャラだから関係ないもん!!」

黒歴史な姿を思い出した桜が涙目で強く否定した。

エクストラCCCでは桜を模した新キャラが登場したが問題はその姿だ。

パッションリップの外見は桜そのものであるが、上半身はサスペンダーのみという完全な痴女。

なお、その胸のサイズは160センチあり、某メイドの90センチ代を突破し、型月ヒロインの中でナンバーワンであるのには間違いない。

パッションリップと同様に桜と同じ姿であるが、

幼い姿をしており、服は袖が余るぶかぶかなロングコート。

足に付けた剣のように鋭い具足『だけ』そう、下半身を覆うものは股間にある貞操帯のような下着のみであった。

しかも、コートの前は画さず全開状態で全開にしている上に腰から下を隠すものではなく股間は殆ど丸出し。

どこからどう見ても痴女であるが、当の本人はこれ以上ないくらいドヤ顔で「貞淑に隠している」と主張しているのであった。

「やっぱり、桜はヒロインというよりネタキャラ専門よね」

「……………」

姉の茶々に桜は俯く。

昔の彼女ならここで黙って引いていたであろうが、

ホロウで虎視眈々と蟲爺の暗殺を企んでいたように成長した今の桜はここで黙って引くような人間ではなかった。

「あは、姉さんこそプリズマ☆イリヤではギャグ枠。

虎聖杯では猫耳、軍服、魔法少女と大活躍だったじゃありませんか？」

「あ、!？」

地雷を踏み抜いた桜の発言に凜の米神に血管が浮き上がった。

「あは、怒っているのですね、姉さん。」

ふふふ、前みたいにルヴィアさん直伝のプロレス技を披露しましょうか？」
「あら、上等。前回は油断したけど、

外道神父が教えてくれた八極拳の威力。まだ桜は味わったことなかったわよね？」
売り言葉に買い言葉。

戦う以外の選択肢はなかった。

桜は一瞬で腰を落として、両手を前に出すプロレスラーの型を作りじり寄る。
対する凜も腰を落とし拳を握り、八極拳の構えで桜を待ち受ける。

このまま、姉妹対決が成されるかと思いきや――。

「凜、桜。往來の前で喧嘩はよしてください」

「!」

「!」

姉妹喧嘩を止める人間がいた。

聞き覚えのある声に姉妹2人は声の元に振り返り、驚く。

「せ、セイバーさん、どうしてここに!」

「というか、何でセイバーがメイド服なんて着ているのよ!」

振り返った先にいたのはセイバーであった。

理由は知らないがフィギアにもなった背中のラインが美しい某メイド服姿ではなく、

足元が汚れないロングスカートに、これまた頑丈な白いエプロンを羽織り、胸元にはきつちりとリボンを締めた正統派メイドの姿をしていた。

「本来。客として喫茶アーネンエルベに来たのですが、

色々ありまして不本意ながら店員をすることになりました」

「アーネンエルベ……あ、ここアーネンエルベの前だったのね」

今更ながら凜が往来で騒いでいたのに気づく。

「そして、店の前で見知った方々が騒いでいたので、来ました」

「う、すみませんセイバーさん……全部姉さんが悪いので、後でヴェルデの大判焼きを姉さんが奢りますから」

「ちよっ！桜！何、私だけに戦犯を押し付けようとしてんのよ！セイバーに奢るとか破産させるつもり！」

ジト目で姉妹を見るセイバー。

慌ててる姉妹であるが、さり気無く姉に責任を押し付ける桜は間違いなく黒かった。

「結構です、今は大判焼きは不要です」

しかし、セイバーは桜の言葉を否定した。

あのセイバーが食べ物に釣られない、その事実姉妹の間に衝撃が走った。

「え、……嘘！セイバーさんが、

あのセイバーさんが食べ物に釣られないなんて」

「く、落ち着きなさい桜！」

まずは胸は……よし、私と同じまっ平らだから赤王ではないわ」

「な、なんですかその認識は！」

腹ペコキャラが根付きすぎたせいで、

食べ物に釣られないセイバーの態度に疑心暗鬼になる凜と桜にセイバーは、

不本意だと言わんばかりに吼えるが、店内から出てきた金髪の少女に追い討ちを駆けるように肯定される。

「事実じゃん、セイバー。」

アーネンエルベの店員やる代わりに余った食材食べ放題で釣られたくせにー」

新たな登場人物、アルクエイドが店のドアから出てきた。

彼女もまた、メイド服、よくよく見れば遠野家で使用しているのと同じものを着込んでいた。

「あ、やつぱり」

「だよねー、セイバーは……。」

「ん、なあ！それを暴露しないでくださいアルクエイド！」

「えーいいじゃん、別に」

アルクエイドの言葉に納得する桜と凜。

対してセイバーはアルクエイドに憤慨するが、気にしていない。

「私もセイバーと同じく色々あって、

店員をやることになったんだけど、アーネンエルベに寄っていかない？」

紅い瞳をウインクさせ、

アルクエイドは遠坂姉妹をアーネンエルベに招待する。

「……ま、そうね。」

少し暑いし、せつかくだから休ませてもらうわ」

「……そうですね、姉さん。」

決着は何か飲んでからもできませんし入りましょう」

その言葉に姉妹は顔を合わせて一瞬考える。

だが、結論は直ぐに出て、アルクエイドの提案に凜と桜は乗った。

「はいはいー。2名様のご案内ー」

かくして、アーネンエルベは新たな客人を向かえ入れた。

午後12:30

金髪の少女が十字架を前に跪き、祈る。

願う内容は己の救いを求めず、ただただ人のため。

ひいては人類のため、少女は願い、信じる神へ祈り続け、宣言する。

「主よ。今一度、この旗を救国の——いえ、救世の為に振ります」

少女、否。

救世主、オルレアンの乙女。

奇跡を体現し、祖国を滅亡から救い出した少女が今一度信ずる神へ誓いを立てた。

そして、ゆつくりと立ち上がり、

背後に立つ人物、マスターに対して述べる。

「サーヴァント・ルーラー、召喚に応じ参上した。

……ですがマスター。調停者（ルーラー）のクラスですら、もはや一介の英霊にすぎ

ないのです」

調停者（ルーラー）は本来聖杯戦争の運営役として、

戦いに秩序を保つことが期待された存在であり、マスターの存在を必要とせず、

如何なる陣営にも関わらず中立を維持していたが、今の彼女はその他の英霊と同じだ。

「秩序は燃え尽きた。多くの意味が消失した。

わたしたちの未来は、たった一秒で奪われた」

回想し、悔やむように言葉を綴る。

目を伏せ後悔、悲しみといった感情を彼女は表現する。

だが、彼女。

調停者（ルーラー）は涙を流さなかった。

かつて姦計でその身を業火に焼かれてもなお、自身の選択肢を嘆かなかったように。

顔を上げ、自身の象徴である軍旗を床に立て、言った。

「聞け、この領域に集いし一騎当千、万夫不倒の英霊たちよ！

本来相容れぬ敵同士、本来交わらぬ時代の者であっても、今は互いに背中を預けよ！」

声を張り上げ、周囲にいるであろう数多の英霊達に語る。

姿は見えないかあちこちから突然の申し込みに動揺する雰囲気の流れる。

「我が真名はジャンヌ・ダルク。主の御名のもとに、貴公らの盾となろう！」

宝具たる旗を高々と掲げ、

高らかに、誇らしげに、奇跡の少女は宣誓した。

◆ 『霊長の世が定まり、栄えて数千年』

『神代は終わり、西暦を経て人類は地上でもっとも栄えた種となった』

『我らは星の行く末を定め、星に碑文を刻むもの』

『そのために多くの知識を育て、多くの資源を作り、多くの生命を流転させた』

『人類をより長く、より確かに、より強く繁栄させる為の理——人類の航海図』

『これを、魔術世界では人理（じんり）と呼ぶ』

◆ 『第一の聖杯 救国の聖処女』

A.D. 1431 ■■■百年戦争 オルレアン』

『貴方の戦いは、人類史を遡る長い旅路』

／ 『第二の聖杯 薔薇の皇帝』

A.D. 0060 永続■■■帝国 セプテム』

「ですか悲観する事はありません。貴方には無数の出会いが待っている」

『第三の聖杯 嵐の航海者』

AD. 1573 封鎖終局四海 オケアノス』

「この惑星（ほし）のすべてが、聖杯戦争という戦場になっていても」

『第四の聖杯 ロンディニウムの騎士』

AD. 1888 ■■■■■■■■ ■■■■■■■■』

「この地上のすべてが、とうに失われた廃墟になっけていても」

『第五の聖杯 ■■■の白衣』

AD. 1783 ■■■■■■■■ ■■■■■■■■ イ・プルーリバス・ウナム』

「その行く末に、無数の強敵が立ちはだかつても」

『第六の聖杯 輝けるアガートラム』

AD. 1273 ■■■■■■■■ ■■■■■■■■ ■■■■■■■■』

「結末はまだ、誰の手にも渡っていない」

『第七の聖杯 天の鎖』

BC. ■■■■■ 絶対魔獣戦線 ■■■■■

「さあ——戦いを始めましょう、マスター」



「過去最大の規模で行われる聖杯戦争、

開幕。——それは 未来を取り戻す物語」

「Fate／Grand order」2014年冬、開戦予定！

「さあ、皆も艦これに続いて課金して遊んでください、わん！」

「え、??」

※ ※ ※

「と、いうわけで生憎ですが自分はFate／Grand order、

に参戦が確定しているので、ゼロ同様今年は主人公枠となりました」

「くそっ！敵！」

やっぱりセイバーは敵よ！

ええい！これが、ゴールドヒロインかつ、型月のドル箱の余裕か……」

「うう、セイバーさんはずるいです！反則です！」

澄ました表情で今年の出演を表明したセイバーに遠坂姉妹が悔しがった。

これまで Fate はタイガーコロシウム、

エクストラと散々ゲーム化されてきたが今回はいよいよ課金ゲーム業界への参入が決まったのだ。

しかも、これまでマスター枠として活躍が期待できる桜と凛の出番は今回は望めない可能性が高いと来た。

「でも、セイバー。」

この場合、貴女のセイバー戦隊が一番のライバルになりそうね」

「はい、アルクエイド。」

たしかにヒロインとして私は負けるつもりはありません。

ですが、黒から始まり白、赤、そして桜と増え続ける量産型ヒロインの猛攻に正直参っています。

A p o c r y p h a に至つては我が息子であるモードレットが活躍してしますし……元が自分だけに色々複雑です」

最初は「セイバーのアホ毛を握ると属性が反転する」という一発ネタに過ぎなかつた。だが、公式が月姫やその他 F a t e シリーズ以外への創作意欲の変わりにこの一発ネタに注ぎ込んだ結果、暴走が始まつた。

純白の姫騎士である白セイバー。

アーサー王じゃないけどそんなの関係ねえなローマ皇帝の赤王。

公式では設定のみだつたがついに父親と続き聖杯戦争で活動を開始したモードレット。

そして、コハエースの帝都聖杯奇譚で登場した桜セイバーと、ネタの暴走は留まる所を知らない。

というか、月姫2はよ！

そうでなくてもメルブラの続編でもいいから……。

「あー、セイバーさん、セイバーさん。

セイバーさんのライバルは量産型セイバーだけじゃないと思うなー」

と、ここに第三者の意見が出る。

奮闘記の外伝と言いつつ、影が薄い主人公弓塚さつきだ。

が、太陽光対策のため、し〇じろうの着ぐるみを着ているため、声でしか判別できない。

弓塚さつきのアイデンティティーともいえるツインテールも学生服も今はなく、さながら某パンダのようだ。

「あ、さつちん起きたの?」

「あー、はい。何とか……」

アルクエイドの問いに気が抜けた調子で答える。

椅子を並べて作ったソファーから起き上がった弓塚さつきだが、体の彼方此方が痛むように動きが鈍い。

無理もない。セイバーとアルクエイドが来る前は英雄王（小）とキャス狐のどつきあいに巻き込まれたのだから。

DEADENDにならなかつたのは、ここが何でもありのアーネンエルベであるお陰に過ぎない。

「それは良かったです。

で、さつき、私のヒロインとしてライバルに何か意見があるようですが?」

介抱した者として安堵するセイバーであるが、

さつきが話したヒロインのライバルについて喰らい着く。

今でこそ型月のドル箱にして黄金ヒロインであるが、

Appocrypha、そして昨年ヒロイン十二宮でそのあざと過ぎる演技。

何よりもどれほどセイバーが努力しても得られない包括力（胸）を持つルーラーのよ
うに、

ゴールドヒロインの座を脅かすヒロインが後から後から登場しているので、さつきの
話を聞き漏らすわけにはいかなかった。

そして、ヒロインとしての矜持を持つ、

その他の人物、アルクエイド、遠坂凛、間桐桜もさつきに注目している。

「セイバーにとって最大のライバルになり得るのはさつき……」

「さつき……」

一拍。

ざわ、ざわ、ざわと某賭博漫画の緊迫した空気が流れる。

そしてさつきは言った。

「ヒロインにしてヒロインに在らず。」

ヒロインとは真逆の存在であるが時に最凶のヒロインとなりうる存在——男の
娘だよ」

「「「な、なんだって——!!?」」」

その時ヒロイン一同に電流が走る。

なぜならその発想はまったくなかったからだ。

男の娘。

それは男にも関わらず女のように可愛らしい、

というギャップ萌えを前面に打ち出したキャラクター属性である。

「男の娘？馬鹿な型月にはそんなキャラは……いや、アストルフオか!!」

「あーなるほど、それがあつたかー」。

ウチの所には男の娘枠なんて、強いて言うならば、メレムかな？

出番がない月姫のせいで随分前に出版された「Character materia

1」以来出てないしなー」

型月にそのようなキャラがないと否定しようとしたセイバーであつたが、

男の娘として息子と共に活躍している聖杯戦争、Apo cryphaのアストルフオ

を思い出す。

アストルフオ。

シャルルマーニュ十二勇士の1人。

中世における武勲詩に登場する人物で性格は極めて陽気。

というより、元ネタの作品でも「理性が蒸発している」という設定であるほどだ。

なお、女装しているのは「狂えるオルランド」と呼ばれたローランを鎮めるためと言われている。

どうして女装することでローランの狂気が静まったのか、実に気になるが……。

そして、なぜか *Apocrypha material* 「C86 ver」ではヒロインと混ざって乳比ベをする男の娘であった。

「く、たしかに強敵です。

あのけしからん胸を持つセイバー系ヒロインが負けられない戦いがある、と言わしめたほどの敵ですし」

「それだけではないわ、セイバー。

色々なキャラ属性のヒロインを抱える型月世界の中で、現段階で男の娘属性はアストルフオただ1人。

例えば、キャラの人気でナンバーワンでなくても、彼女、いいえ彼は誰もが持ち得ないオンリーワンのキャラよ」

セイバーが戦慄し、

凜がアストルフオを彼女なりに考察する。

思わぬダークホースにその他のヒロインもまた戦慄を覚えるが、さつきがさらに爆弾を投下した。

「ついでに言うとおストルフオの髪はピンク、そうあの淫乱なピンクなんだよ！」

この時、くうきがこおりついた。

淫乱ピンク。

その語源はどこから来たかは定かではないが、一説によると。

二次元においてピンク色の髪を持つヒロインは18禁の作品等において、

金髪ヒロインと並んで高い確率でやり易い……ゲフンゲフン、攻略しやすかったため
だと言われている。

そして、アストルフオの髪はピンク。

さらには小説においてマスターのSMプレイを受けるなど淫乱要素を有していた。

つまりアストルフオは淫乱ピンク、キャラ立ちとして、これ以上濃いキャラはいない
だろう。

「男の娘で淫乱なピンク、だと」

セイバーが衝撃のあまりよろめく。

「く、淫乱なのは桜だけかと思っただのに！」

「そうです、淫乱腹黒梓は私だけの席……って、何を言わせるんですか!!」

凜、桜も衝撃を受けるが、

さり気に酷い事を言う姉とそれを自覚する妹がそこにいた。

そして、アルクエイドの反応だが彼女だけは違った。

「待ちなさい、さっちゃん。」

淫乱ならエロイエロイといわれている、

月姫だつて負けていないわよ！お尻プレイをしていたシエルのように！

シスターのくせにけしからんお尻をしているし、志貴なんて舐めていたし！」

「あ、はい、ソウデス、というかそれ誇るところですか？」

尻カリーの異名を着けられたネタを暴露したアルクエイドにさつきは若干引いた。

少しばかり後ろに下がりが、彼女から距離をとった刹那——先程までいた場所に剣

が通り過ぎた。

そして、剣がアルクエイドに直撃し、吹き飛ぶ。

受身の体勢をとる事ができず、そのままカウンターの方まで飛び皿やコップが割れ、

内装が碎ける派手な轟音が響いた。

「さつきから、監視も兼ねて黙って聞いていけば、

何て事を言うのですか、アルクエイド!!エクストラでサーヴァントとして出演して以

来最近調子に乗っていませんか!？」

ヒロイン達が振り返った先には、
黒鍵を指に挟んだシスターこと、シエルがそこにいた。

弓塚さつきの奮闘記〜MELTY BLOOD編

【予告】弓塚さつきの奮闘記〜MELTY BLOOD編

ロアとの決着を付けて吸血鬼として人生を始めた弓塚さつき。

遠野の屋敷に身を寄せ、真祖、代行者、混血、殺人貴が集う人外魔境と化した遠野の屋敷で騒がしくも穏やかな日常を過ごす。

だが、魔は魔を引き寄せる。

そんな言葉があるように新たな危難——ワラキアの夜が来た。

「針金を操る白髪の女、路地裏に出没する魔物、徘徊するパーカー姿の男性。

……可笑しい、どう聞いても、第四次聖杯戦争の関係者を再現していると思えな
い」

先程ヒトデ型の魔物を処理した弓塚さつきは、

改めて流れる噂から【原作】から完全に隔離した事実に戻った。

現在知っている噂は人間であるが、何れ英霊達の噂が広まるのは時間の問題であるの

を覚悟した。

「弓塚さつき、貴女のような異分子が全てを狂わす——ここで散りなさい！」

ワラキアの夜を追いかけて来たシオン・エルトナム・アトラシア。

だが、ある意味タタリ以上の異常な存在である弓塚さつきを知った彼女は、その抹殺を図る。

「間違いない、あれはサーヴァントを再現している。

今のは第四次聖杯戦争で召還されたアサシンだ、見間違えるはずがない」

「やはりそうですか……ですが妙です。

聖杯戦争、サーヴァントを知る人間がこの街にいるなんて聞いたことがありません」

タタリの異常を察知したシエルはかつて聖杯戦争に参加した男を呼び寄せる。

結果は黒、だがそれは聖杯戦争を知る人間が三咲町にいることになり、シエルは首を傾げる。

「不愉快極まりないわね、今度こそ消し炭にしてあげますわ——兄さん」

「あは、あは、あはははは!!オレをもう一度殺すのか秋葉!!」

例えそれが夢あるいは幻であろうとも遠野の闇と再び向き合う遠野秋葉。彼女にとって血の繋がった兄は、今宣言した殺害予告に身を振じらせ爆笑する。

「あ——があ?!」

吸血鬼の力を十全に発揮し、

双槍を避け続けたが、たとえ影法師でも英霊は英霊であった。

一瞬の隙を突いて放たれたランサーの槍はさつきの肩を貫いた。

「ねえ、貴方。本当に人間？」

胸の中にそんな物を仕舞いこんで生きているなんて普通はありえないわよ」

「一目でこの私の状況を見抜くとはな…なる程、流石真祖の姫」

紅の眼を細め、神父を観察するアルクエイド・ブリュンスタッド。

周囲の空気が歪む殺意を神父に叩きつけるが神父は平然としたままであった。

「どこで計算を間違えたのだろうか、それを私は知りたい。」

弓塚さつき、貴女は分かりますか？貴女のその情報を見てもなお、私は理解できない」

この世界、そしてこの事件の原因にして特異点である弓塚さつきにシオンは問いかけた。

「く、くは、くはははは!!主よ感謝します。

例え影法師、一夜だけの幻だとしても、あの男との決着をつける機会が来たことに……!!」

歓喜の声を挙げる言峰綺礼。

彼の視線の先にはくたびれたコートを羽織った男性が佇んでいた。

その男の名は——衛宮切嗣。

かつて第四次聖杯戦争で殺しあつた最強の敵。

言峰綺礼にとって倒さねばならない、最大の障壁がそこにいた。

「——ハ、ハハハハハハ。そうかそうか、そうか至らぬか。

何千年タタリを続けようと貴様には至れぬというのか朱い月よ!!!

だが! 滅びぬ! 私は滅びぬぞ。たとえ今宵が私の果てだとしても。

貴様を仕留めれば嘘も消えよう。元よりこの方法で至らぬとあらばこの夜の夢もこれまで。

貴様を飲みつくしその力を持って次の手段を講じよう!!! 我が名はワラキアの夜。現象と成った不滅の存在だ!!!」

「シオン、志貴、来るぞ!」

「はい!」

「分かっている…!!」

シユライン、神殿と命名されたビルの屋上。

弓塚さつき、シオン・エルトナム・アトラシア、遠野志貴はアルクエイドを守るように立ちふさがる。

千年後の月を具現化している彼女がいてこそタタリは唯の吸血鬼となる。

逆に彼女が月の具現化を終えたとき、タタリは再び現象へと戻ってしまう。

それを防ぐには、全力で彼女を守り抜かねばならない。

「ボクとシオンが壁役になるから、志貴は隙を突いてくれ」

「ああ、了解した。さつきと終わりにしよう」

「ええ、悪夢はここで終わりにしましょう」

「弓塚さつきの奮闘記〜MELTY BLOOD編」

作者の調子しだいで随時連載開始予定。

ご期待ください。

「魔術師として子孫を残すのは義務であり責務です。

彼の異才をエルトナムに取り組みたいと考えています。

それに、その：彼には女性として私は惚れています、というわけで、志貴を婿に下さい、秋葉」

顔を赤らめつつも、これ以上ないドヤ顔でシオンは部屋に集合した面々に宣言した。

堂々過ぎて途方にくれる秋葉、笑顔を凍りつかせた琥珀、シヨツクのあまり気絶した翡翠。

眼が点になるアルクエイド、啞然とするシエル。

そして、結果的に余計な知識を与えてしまったさつきは現実逃避を開始した。

おわり。

ACT. 1 「冬の噂」

私はシオン。

シオン・エルトナム・アトラシア。

私はずっと、私自身に疑問を抱いていた。

けど、それは何か。

思考を重ねに重ねても答えはでない。

答えが分からぬまま生きてきた。

だから3年前。

私はあの吸血鬼の討伐に参加した。

外に出れば得るものがあるはずだと思っていた。

けど、結果は出なかった。

半分が吸血鬼となった私は奴を追うためだけにこの3年を過ごした。

私はどこから来たのか。

私は何者か、私はどこへ行くのか。

考えて考えて考えても、分からない。

どこで私は間違えたのか、答えはずっと出ない。

※ ※ ※

今年は奇妙な冬だ。

交通量1時間あたり平均5台。

鉄道機関利用者1日あたり100人前後。

気温は極めて低く、口から漏れる息は白く、冷たい。

身を包む衣装越しから突き刺さる寒気。

どこにも逃げ場はなく、体温は刻一刻と奪われていく感覚。

そして、気を抜くとどこまでの沈んで行きそうな感触。

——まるで深海で溺れる魚のようだ、と誰かが言っていた。

「深海で溺れる魚、か。奇妙な例え、いやそうでもないか」

街を見渡す。

日中、それも休みの日だと言うのに人影はない。

道路を走る車は少なく、まるで廃墟のように街は静かであった。

空は曇り模様で降り注ぐ光りは少ない。

人気がない聳え立つビル郡は墓石か深海に沈んだ古代都市のようだ。

「なるほど、深海で溺れる魚。確かにそうだ」

そんな場所で確たる目的もなく、

ゆらりゆらりと歩く俺はたしかに魚そのものだ。

だが、それでも人々の生活は止まることはない。

墓石のようなビルの中では今日も人々は明日のために働いている。

ただ表を俺のように歩く人間が極端に少ない。

特に夜になれば人気は完全になくなり、闇夜と静寂が支配する。

こうなった原因は全てはあの『噂』であるのを俺は知っている。

曰く、殺人鬼は死神のような吸血鬼だった。

曰く、猟奇殺人鬼の被害者は残らず血を抜かれていた。

曰く、あの戦争が再開される

吸血鬼！

そう吸血鬼だ。

アルクエイドと出会い、

自身の過去と対面したあの吸血鬼を巡る戦い。

それはもう去年の話。

この手で確かに因縁を終わらせたはずだ。

第2、第3の吸血鬼など現れるはずがない。

にも関わらず、この噂は広がる一方で人々は語られる犠牲者の数に怯えている。

だが、俺。

いや、遠野の屋敷で関わる全員が知っている。

【吸血鬼の犠牲となった事実は存在しない】という事実を。

「本当に変だ」

この街の裏世界を管理している秋葉だけではない。

シエル先輩、アルクエイド、それにさつきも調べて出てきた結論だ。

それと、あの戦争が再開される。

という噂についてはシエル先輩が聞き覚えがあるらしいが俺には分からない。

さらに、さつきが無意識に呟いた「早すぎる」という呟きも気になって仕方がない。

それよりも、噂は収束することなく拡大するばかり、

火のない所に煙は出ない、というが今回は火はないにも関わらず煙が出る。

と言うべき状況で、ただの噂にしては違和感を覚えることが多い。

まるで人為的に、誰かが噂そのものを意図して広めるような――。

「それは、当然です。

もしなければ存在できない存在ですから」

「え？」

まるで自分の思考を読んで答えたかのような、突然な言いぶりに思わず、声がする方角へ振り返る。

そこには紫色の髪を持つ少女がいた。

最近、遠野の屋敷に入り浸るシエル先輩にアルクエイドのように外国の少女だ。

日本人にはない彫が深く、高い鼻。

シエル先輩やアルクエイドのように西欧系の顔立ちでなく、

中近東の血を引いている様で、彼女達とはまた違った美人さんがそこにいた。

少女もまた此方を振り返り俺を見ている。

知性を宿す紫色の瞳がじつと俺を観察するように見ている。

いくら遠野の屋敷で男が俺一人、女性には慣れているとはいえ、こうもじつと見られると落ち着かない。

「失礼……」

そんな俺の考えを汲み取ったように、

少女は何かを抜き取るような動作をした後に俺から離れていった。

「一体何なんだ……？」

まるでこちらの事情を知っているかのような口ぶり。

もしかすると、先輩やアルクエイドと同じ世界の関係者なのかもしれない。

「追ってみるか……」

恐らく彼女はこの噂の原因を知っている。

ならば、彼女に直接聞いてみるのが一番だ。

歩く向きを彼女の方角へ変える。

足音を殺し、距離を保ちつつ追跡を始める。

さほど離れていなかったもので、目標である彼女には直ぐに追いついた。

そのまま追跡を開始する。

……。

……。

……。

……。

彼女に出会ったのは昼前。

あれからずっと後をついていたけど、もう太陽は沈んだ。

1日歩きっぱなしで、あまり丈夫でない体は既にガタガタである。

秋葉が定めた門限は既に越えており、

この後どうやって言いつくろうか実に悩みどころである。

前なんて不用意にアルクエイドの家で泊まったなんて言ってしまったから……地獄を見たな。

米神に青筋を浮かべて、物理的に首を締め上げる秋葉。

秋葉を止めるべく乱入するアルクエイド、シエル先輩から始まる何時もの乱闘騒ぎ。

破壊される屋敷、そして逃走を凶つても巻き込まれる俺の様式はもうすっかり定番と化している。

さつきは俺の事を「モテモテだな、志貴」と冷やかしていたけど、

アルクエイドだけは兎も角シエル先輩や秋葉を俺は口説いた覚えはないぞ？

つと、今はこちらが大事だ。

そして、彼女といえど、何もせず。

街を散策するように歩いているだけであつた。

立ち寄った場所も、怪しい場所があつても目的地が分からない。

今立ち寄っている場所は「神殿（シユライン）」と呼ばれるビルだ。

現在建設中で何に使われるか知らないが、神殿とはやりすぎな命名だと思う。

「ここら一体は元々公園であったが、整地されてしまいすっかり昔の面影が見当たらない。」

そして目的である彼女は相変わらず、周囲を散策しているだけだ。

時折立ち止まり、何かを口に行っているけど離れているから何を呟いているのか分からない。

「が、今日1日の行動を見て分かったのは、

彼女は間違いなく今この街で流れる噂について調べている人物であることだ。

彼女が歩いたルートは俺たちが吸血鬼の噂に関して調べて回ったルートと重なる。

だが、これはあくまで憶測、推測の域を出ておらず確定した証拠ではない。

このまま彼女を引き続き追跡し、彼女の本拠地を調べるのもありだが。

それでは埒が空かない、いい加減直接彼女に尋ねる時が来たのかもしれない。

俺は懐に入れたナイフを手にして一歩前へ踏み出した。

「……………!!」

刹那、心臓が俄かに鼓動を強める。

全身を悪寒が駆け回り、手足に電流が走る。

緊張に心が支配され、肺が圧迫され気持ちが悪いくらい。

さらに一歩前へ踏み出す。

「……………」

心臓はよりテンポを早く鼓動し、悪寒が強まる。

俺はこの感覚を知っている、そうこれは明らかに『人間離れた何か』と出会った時と同じだ。

初めはアルクエイド、次にロア、そしてさつき……そう、吸血鬼、吸血鬼だ！吸血鬼と出会った感覚と似ている。

まさか、彼女は三咲町で噂されている吸血鬼そのものなのか——！？

と、言うべきでしょうか遠野志貴

正面から声、声の先には月夜の灯りを背景に立つ彼女がいた。

「あ、ああ。どうも」

何故か悪寒は消えていた。

しかし、彼女に見つかってしまった以上誤魔化さねばならない。

こんな場所で男が女を尾行していたなんて外聞が悪すぎ、あ、待て。

どうして、俺の名前を彼女は知っている？

「私を尾行しているのは初めから知っていました」

ああ、しまった。

どうやら、これは。

「貴方達が探しているものと、

私が探しているものは同じではありませんが、

目的は違う、何よりも私にとって貴方はイレギュラー。

このタタリにおいて、貴方の存在は全ての計算式を乱す存在ですから」

ナイフを出し、構える。

どうやら俺は彼女に一杯食わされたみたいだ。

彼女も拳銃を取り出し、次のアクションをすべく構えている。

「ゆえに私、シオン・エルトナム・アトラシアはここで貴方の自由を奪うことをここに宣言します!!」

高らかに己の名を告げると、

彼女、シオン・エルトナム・アトラシアは猛然と俺に襲い掛かった。

「ツクくそー！」

自分の迂闊さを呪いたい！

だが、今はそうした考えや言葉は不要、戦うだけ。

呪うのは後にしよう。

そして、彼女に問い詰めるとしよう。

ACT. 2 「見敵」

そして彼女は忽然と俺の目の前から消えた。

否、ここで消えるなど有り得ない——後ろだ!!

「っあッー!」

横に飛ぶ。

直後、立っていた場所に彼女、シオンの蹴りが通過した。

速い!後ろを振り返っていたら、避けるのが間に合わなかっただろう。

アルクエイド、シエル先輩程ではないが、吸血鬼の力を発揮したさつき並だ。

「初撃は失敗、計算修正——ここです!」

さらに次の一手。

シオンとの距離は両腕で戦うには離れている。

だが、彼女は確信を持って俺には見えない攻撃を行う。

腕を振るう。

考えるよりも先にナイフを振るい、何かを切った。

感情を表に出さなかったシオンが驚愕の表情を浮かべた。それでも続けて何かを操作する動作。

丁度綾取りとか、糸を操るような動作をする。

今度は彼女が糸を操っているのを理解した上で、

これもまた考えるより先に腕を動かし、切つて捨てる。

「…エーテライトを切断するなんて、何てデタラメ」

俺の行いを見たシオンは唾然とした表情を向けた。

「別に見えない攻撃をするから卑怯とか言わないけど、俺には効かないよ」

見えない糸程度、ネロにロアといった怪物たちと比べれば楽な相手だ。

あの2人のように魔の恐れや、恐怖はないのだから。

「ほう、ならばこちらはどうでしょうか？」

俺の挑発に紫色の眉を上にと同時に、

懐から黒い物体を…つて、拳銃、うお、掠つた!!?

「くそっ！銃刀法違反だぞ、君!!」

「ばれなければ犯罪ではありませんん！」

続けて発砲。

俺は乙字に駆けることで紙一重で避ける。

くそ、飛び道具、それも拳銃を持ち出すなんて卑怯だ！

「ちっ！」

「っ!?!これを避けますか!?!」

しかも、それだけではない。

拳銃で此方を牽制しつつ、シオンがエーテライト、

と呼称した糸が同時に俺に襲い掛かって来ており、対応の難易度が上昇している。

偶に模擬戦を付き合う、シエル先輩にアルクエイド、そしてさつきとは全然違うので

戸惑うばかりだ。

しかし、それでも活路はある。

確かに彼女の戦い片はシエル先輩、アルクエイドといった面々とはだいぶ違う。

体の動かし方は純粹にパワーに頼りがちなさつきよりもむしろ上手である。

彼女、シオン・エルトナム・アトラシアはまるで数学の計算式のように正確で、

詰め将棋のように次の一手一手を打ち続けており、侮つてはならない相手であるに違

いない。

しかし、俺からすればそれが逆に読みやすい。

本能だけで戦うアルクエイドの方が逆に次の行動か読めない。

「よっー!」

「視界外からのエーテライトを察知!」

それだけではない。

シオンが操るエーテライトは確かに見えない。

だが、俺にはこれに対応できるだけの技術がある。

例え魔眼を使わなくても、これは切断できるし、動きは分かる。

問題があるとすれば音速で飛来する拳銃の弾だけだ。

シオンの腕の向き、視線から推測して避けているが弾は必ず真っ直ぐに飛ばない。

むしろ空気の湿度、気流、その他諸々の条件が重なり軌道は常にずれるものである。

ゆえに、避けたつもりでも当たる可能性は高いのである。

そして現状俺にとつての最大の脅威は魔術とは縁のないその拳銃のみ。

悪いけど、シオン。

君のその武器を破壊させてもらう——!!

「どうした、俺の脚でも撃てば俺の自由を奪えるかも知れないぞ、シオン!」

まずシオンが拳銃を此方に向くように。

それも体の特定の場所を狙うように挑発する。

実戦経験豊富なシエル先輩には絶対通用しない手だが、彼女ならきつと。

「~~~~いいでしょう!!そう貴方が言うのでしたらその足を潰しましょう」

掛かった!

彼女は俺の言葉に答えると同時に、

一番当たりやすい胴体ではなく足を狙うように拳銃を下に向ける。

次に撃たれる弾丸の軌道が簡単に予想できる。

彼女は弾倉を撃ちつくしても、俺の足を打ち抜くことで動きを止めようとするだろう。

そして、俺は今まで通り地面を駆けて避けるもの。

そう彼女は判断するだろう、だがここで少しばかりの小細工を見せるとしよう。

「その足を止めます——遠野志貴!」

直後、連続して発砲。

放たれた弾丸は全て俺の足へ向かう。

このまま、真っ直ぐ駆けていけば忽ち足は撃ち抜かれるだろう。

かと言って、ジグザグに逃げるには遅い——だから俺は空を跳ぶ事を選ぶ。

「おおお!!」

足を地面に打ち付けるように力を込めて踏み抜く。

膝を曲げて、腰を下ろし足だけでなく全身の筋肉を総動員する。

今日1日の疲れと、この戦いでの肉体の酷使もあつて体がうめき声を挙げる。

俺の肉体はあの日。

四季に殺されてからポンコツだ。

だが、俺に流れる七夜の血はそのハンデを覆す、たかが跳ぶ事など造作ない！
直後、俺の体は浮遊感と共に飛翔した。

高さは地面から2階程度だろう、ビルの壁を蹴りつつ駆ける。

シオンは予想外の事態だったのだろう。

細長い瞳を大きく開き、驚愕の眼で俺を見ている。

慌てて照準を俺に向けて再度発砲しようと引き金を引くが、弾は出ない。

なぜなら先程の俺の挑発に乗って、弾倉の全てを空にしたのだから。

彼女は外套の中から新たな弾倉を取り出し、再装填を図るが間に合わない。

なぜなら、それより先に俺が地面に降り立ち、

今の戦闘で出来たコンクリートの破片を無事拾えたのだから。

「しゅー」

投擲。

手のひらに収まる程度のコンクリートの破片は、

吸い込まれるようにシオンが持つ拳銃へ直撃、粉々に粉碎された。

「な——」

絶句するシオン。

彼女の視線は俺ではなく、

粉碎された拳銃を握っていた手に向いている。

飛び道具はシオンが言うエーテライトのみ。

そして、今彼女は別のものに意識を向けている。

ならば選択肢は1つ、一気に距離を詰める！

息を吸う。

重心を前に傾け、

足の指先から手の先まで力を蓄える。

そして、息を吐く。

貯めた力を解放しシオンの元へ駆けた。

「くう!!」

今度はエーテライトを破壊すべくナイフを突き出すが、紙一重で避けられる。

後方へ下がり、大勢を立て直そうとシオンはするが、俺は密着するように彼女に着いていく。

「体術の性能が計算と予想より早い…。

エーテライトは間に合わないっ……体術で挑みます。

高速思考再計算、リミッター解除、魔力を身体強化に！」
俺が振るうナイフから逃げられない。

そう確信したシオンは退避をやめて、真正面からの対決に挑んだ。
…つて、危ない！

「つつ!!」

なんら変哲もない突き。

が、こちらの予想を上回る鋭さだ。

頬を掠めただけでも、ビリビリと刺激が走っている。

「はあっ！」

さらに、拳を突き出した流れを利用して、

足を一歩前に踏み出し、続けてシオンから回し蹴りが飛来する。

咄嗟に受け止めた刹那。

ミシリ、と骨が呻き声を挙げた。

まともに受けていれば、骨が碎ける！

そう、考えるより先に体が判断し、

後方へ跳んで蹴りのインパクトが最大値に至る前に逃げた。

「くっ——はあっ！」

だが、それでも腕に痛みは残った。

幸いまだナイフを手にするには出来るが、

肉体の疲労は増すばかりで吐く息は荒く、今すぐにも休んでしまいたい程だ。

幾ら俺の体がポンコツとはいえ、

何時もならこの程度の戦闘でバテる肉体ではないと自負している。

だが、今日は1日歩き回った上での戦闘だから、疲れがもう出てしまっている。

翻つて彼女、シオンはまだ体力に余裕が残っているように見える。

いや、寧ろ回復しているように見える上に、先程までより威力も動きも向上したように見える。

俺はこのカラクリをしっている。

なぜならこれは、さつきが学び、使っている物。

「魔術か」

「その通りです、遠野志貴。」

確かに貴方のその技は常人の範疇から外れたものだ。

だが、我々魔術を学ぶ人間、魔術師もまた常人の範疇から外れたものですから」

俺の呟きにシオンが肯定した。

魔術師、それは魔術師成りたてのさつきの言葉を借りるならば、

「この世の真理に届かぬと知りつつも、子孫へ延々と呪いのごとく伝承し続ける人種」だ。

魔術師の目的はこの世の真理、根源へ至ること。

根源へ至るための研究に研究を重ねるのが彼らの存在意義である。

しかし、奇妙な話だ。

たしかにアルクエイドの言葉を借りると「研究のためならば手段を選ばない外道の集団」である

例えば死霊魔術はその性質上、大量の死体が必要で紛争や虐殺が起こるたびに死体を嬉々と収集していたらしい。

また、魔術の研究のためならば、自分の親族あるいは他人を犠牲にするのを厭わない、ということだ。

が、外道に走りすぎた魔術師を殺害する側の人間であるシエル先輩が言うに、ここ三咲町は自分のような魔術師を刈る人間に、吸血鬼でも親玉のアルクエイド。

と、危険極まりない人物が居るせいで好んでこの街にやって来る人間はいないと、断言していた。

「なあ、君。えっと、シオンでいいかな？」

「時間稼ぎですか？ 残念ながら代行者、

それに真祖の姫が来るより前に貴方を打倒する未来の方が先になる」

「あ、いや。そうじゃなくて、

どうして態々ここに来たのかなって？

俺が言うのも何だけど、先輩とかアルクエイドの事が怖くないのかなって」

「……………」

なぜなら、幾ら魔術師でも命は惜しく、

態々危険を冒すような真似はしないとのことだ。

にも関わらずシオン。

シオン・エルトナム・アトラシアはその危険を承知の上でここ三咲町に来たのだ。

己の研究成果が散在し、最悪子孫にその成果を残さぬまま死ぬ可能性が遥かに高いにも関わらずに、だ。

そしてシオンはしばしの沈黙の後、淡々と口を開いた。

「…………どの道、私に残された時間は短い。

ここで逃せば、次に奴が現れるのはさらに数年後。

その時には、私が私であると正気を留めている可能性は極めて低い」

「正気を留めている可能性が低い？」

残された時間が少ない、

加えて正気を留めている可能性が低い。

なんて、俺の予想を超える不穏な言葉を聞けてしまった。

そしてシオンの口ぶりからすると噂の吸血鬼とは因縁のある相手。

一体噂の吸血鬼とはどんな関係なのか、何が原因で彼女をそこまで急き立てるのか、俺はその理由を知りたい。

「じゃあ、だったら——」

だったら、ここで戦う意味はない。

俺は吸血鬼を見つけ出して倒すだけ。

シオンも同じく吸血鬼を打倒することが目的と見える。

だから俺はナイフを仕舞い、手を差し伸べ——。

「そうね、貴女はそのためにもアトラス院から出た。

でも、無駄よ、今度こそ私は第六法を完成させてみせるのだから」

第三者の声が聞こえた。

シオン、そして俺はその声が聞こえた方向を振り向く。

月の光を背後に長い銀髪の女性が佇んでいた。

肌は雪のようどこまでも白く、人間というよりもまるで人形のような容姿。

おまけに、瞳はアルクエイドと同じく鮮やかな朱色。

羽織っている白い外套もあつて雪の精霊、という言葉が浮かぶほどの美女がそこにいた。

けど、俺の体に流れる血が、そんな美女を前にして警告を発している。

気づけばナイフを構え、眼鏡を外せるように手が顔の前に出ていた。

「馬鹿な、私の前に貴方が出るのは早すぎる！」

計算外にも程がある、それにその姿は一体どういうことだ!!」

「あら、どうやら私の子孫は今だ未熟者のようね。

現実には常に変動する乱数のようなものであるのは常識。

ゆえに、我らアトラスの者達はそれも踏まえた上で未来の計測を行うものよ」

感情を露にするシオンに対して、女はクスクスと笑みを零す。

が、内心と外見が一致していないような気がして不気味な印象がしてしまう。

「戯言を、ぐう——がああ!!」

「シオン!？」

突然、胸を押さええ苦しむシオン。

さつきまで戦っていたのを忘れ彼女の元へ駆け寄る。

「シオン、しつかりしろ!シオン!」

「あ——」

地に膝を着け何かに耐えるように、

しやがむシオンの肩を掴み、無理やり起き上がらせる。

ひどい顔だった。

汗は絶え間なく流れ、呼吸は荒い。

眼の焦点が合わず、揺らいでいる。

整った顔は今にでも恐怖で押しつぶされそうに怯えていた。

「馬鹿ね、私を前にして正気で居られるとでも？」

銀髪の女性はそんなシオンの姿を見て嘲笑する。

「素直に受け入れれば楽になるのよ、シオン」

そう言って、銀髪の女性は歓迎するように両腕を広げた。

それがシオンのためでないのは考えなくて分る。

だから俺は立ち上がり、ナイフを女性に向けた。

「何、かしら？私の邪魔をするつもり？」

「はっ、邪魔をする？そんなわけないだろ、吸血鬼？」

首を傾げる女性。

いや、もうシオンの様子から目の前の女性が吸血鬼であるのは確定だ。

ならば、俺がすることなんて変わらない。

むしろ今日一日を費やした原点へようやく戻れたと表現できる。

「シオンにくだらぬ事をしようとしているお前を——解体し尽くすだけだ」
「へえ、人間にしてはすごい殺気。」

知ってはいたけど、凄いなね貴方。

いいわ、虚数は実数から常に省く不要な要素。

ここで貴方を排除して、あの戦争の再現を始めましょう——!!」
そう啜う吸血鬼を前に俺は言葉を綴る前に駆けた。

ACT. 3 「闘争」

コンクリートの大地を蹴る。

距離が近いこともあって一息で銀髪の女性の懐へ飛び込めた。

女性、いや女性の姿を形どった吸血鬼が行動に移すよりも早く、より早く体を動かす。

さらに刹那の時間。

僅かばかり眼鏡をずらす。

そして視界にはあらゆる場所に線が不気味に蠢く世界が映し出される。

直死の魔眼。

かつて俺が死を理解したことで会得した異能。

「モノの死」を視界情報として捉え、それに触れることが出来るもの。

俺はこの「モノの死」を線と点という視界情報で取り組み、

その線や点に触れることで「存在の寿命」という概念を殺すことができる。

その対象となるのは生物だけに留まらず森羅万象あらゆる概念であり、

だから俺はかつて人間には対抗不可能な化け物であったアルクエイドを殺すことが

出来た。

けど、俺は覚えている。

この力は良くないものだという事を先生から教えてもらったのを。

やがては俺自身の命を削り、破滅へと導くことは薄々気づいている。

が、今はこの力だけが頼りだ。

だから俺は一切の躊躇の欠片もなくナイフを振るう。

横薙ぎの一閃。

女性が咄嗟に腕で体を守ろうとするが遅い。

肘を切断、そのまま流れるように腹から斜め上に向けて一気に「線」に沿ってナイフを走らせた。

「いっふ——」

臓物が漏れ出すと同時に、銀髪の女性の口から血が漏れる。

致命傷を与えることに成功したが、これで終わりなんてしない。

相手に休む時間なんて与えるつもりはない。

ナイフを振り払いから、突く様に持ち替える。

狙うはただ一つ、奴の「点」である心臓のみ——開幕早々終わりだ、吸血鬼！

「いっふ——」

直後。

ずぶり、と肉に刃物が突き立つ感触が手から伝わる。

そのままナイフを押し付け、女性を押し倒した。

今度も致命傷だ。

ナイフの刃が肉に全て埋まるほど突き刺したのだから。

女性の白いコートからは血がにじみ出していた。

「あ、れ——?」

ようやく自分の状況を理解できたのか、

女性が疑問の声を口にし、赤い瞳が驚愕の目で俺を見ていた。

「ようやく気づいたのか? ふん、役者として落第点だ」

シオンを苦しめた吸血鬼にしては実にあっけない終わり方だ。

これで、この町を騒がした吸血鬼は退治され、俺は元の日常へ戻るだけ——。

「あは、」

「なっ」

そう思ったが、吸血鬼は嗤っていた。

死の「点」を突かれてもなお嗤っていた。

「あは、あははは、舞台役者である私を役者不足と言うのね、遠野志貴!

いや、確かにそうね、唯の魔術師では貴方にとっては退屈極まりない相手でしょうね」

俺を見上げる形で吸血鬼を噛い続ける。

死を前にしてどうして、こうも笑っていられるのか理解できない。

そして、理解できないから気持ち悪く、悪寒が体を支配する。

いや、落ち着け遠野志貴。

吸血鬼はどのみちここで死ぬ。

その事実だけには変わりようがない。

「はっ、笑っている吸血鬼。」

どの道、おまえはもう直ぐ死ぬのだからな」

「ええ、そうね。貴方のその異能は27祖であろうが殺すことが出来る最強の魔眼よ」

アルクエイドすら一度殺したこの眼だ。

どんな異能、異形の持ち主でも、この眼の前では無意味だ。

現に今殺した女性は指先から既に体が灰となつて散りつつある。

「あーあ、でも残念。舞台は殿方よりも女性の方が映えるから態々この姿になったのに、本当に残念ね」

気になることを口にした。

そう、この姿は仮の姿であるという口ぶり。

殺したはずなのに嫌な予感が強まり、そして――。

「では、第2幕と行きましょう」
刹那。

吸血鬼はテレビのノイズのように姿が乱れ、消えた。

血の跡を初めとして一切の痕跡を残さずにその場から消失した。

吸血鬼は倒されれば灰となり消えるもの。

ゆえに死体は残らないものであるが、これは違う。

これはネロにロアを倒した時とは違う。

まだ終わっていない——！！

「志貴、避けてくださいー！」

シオンの警告。

同時にナイフで正面から飛来した物体を叩き落とす。

が、衝撃で腕の感覚が完全に麻痺してしまう。

ナイフを握る感覚もあやふやだ。

「これは……!!」

飛来した物体は剣。

投擲用の割りに長い刃のため担い手を選ぶ代物だが、

これを愛用する人物には心当たりがある——シエル先輩だ。

けど理解できない、これは先輩の話によれば吸血鬼用の武装だ、にもかかわらず吸血鬼が扱うなんて。

いや、今は余計な思考は不要だ。

ただ目の前の敵と戦うことだけに集中し、

「遅いぞ、遠野志貴」

「っ!!」

奴は目の前にいた。

信じられないことに俺が反応するよりも早く、飛び込んできた。

先の銀髪の女性とは違つて身長が2メートル近くある長身の男がいた。

距離は1メートルもなく、男は縦に構えた拳を腰辺りに握りコンマ数秒後には拳が放たれる体勢であつた。

そしてこの構えは八極拳だ。

時南の藪医者じじいの姿とそっくりだ。

しかしあれは、あくまで健康のためであるが、これはただ人間を破壊するだけの技。拳が俺の胸に触れたとき、体の外ではなく中から肉と骨を破壊し口から臓物が噴出するだろう。

「!!!」

シオンが何かを叫んでいる。

その内容を聞き取るには後1秒の時間が必要だが、

1秒後に俺が生存する未来の可能性は限りなく低い。

避けるにはしては近すぎる、時間が圧倒的に不足している。

灰色の脳みそは骨と肉を砕かれ、あの世へ旅立つ未来しか想像できないでいる。

いや、手はある。

文字通り手はまだある。

一か八かであるが、今の俺にはこれしかない!!

衝撃、そして体が飛ぶ。

地面に何度も叩きつけられ、転がる。

体中が痛い、肋骨が何本か折れてしまったみたいだ。

けど、生きている現にほら。

「志貴、志貴——!!」

シオンの声が聞こえる。

そう、訪れた1秒後の未来は生存で賭けに勝った。

「……………」

対する男はまじまじと切り落とされた腕を見ていた。

たしかに、体全体を動かして避けることは出来ないが、

腕を動かし、奴の腕を切り落とすだけの猶予は辛うじてあった。

奴の拳が到達する前に、腕ごと直死の魔眼で切り落とす、それだけの結果が未来を掴んだ。

「ふむ、腕を取られたか良い、体術の再現は良好。

まさかこの私が代行者の姿を借りるとは思わなかったが、これは良い。

貴様のカラクリには驚いているが、遠野志貴は既に戦闘不能であるのだから、何も問題ない」

生存の代償として今の俺はもう動けない。

奴の拳が俺に触れる前に切断することは成功したが、

切断された腕が切り落ちるより前に拳は俺の胸に突き刺さった。

威力は低下したが、ポンコツの肉体に致命打を受けるには十分すぎるものであった。

現に視界は歪んでおり、思考が低下するばかり。

息をするだけでも苦しく、地面の冷たさで体温が奪われる感覚が進行している。

「では、止めをさそろう」

男が俺に向かって歩む。

対する俺は立ち上ることすら出来ない有様だ。

「させません」

ぼやけた視界が紫色に染まる。

いや、シオンが男から庇うように立ちふさがった。

「ふむ、解せぬな。錬金術師としてこの場から逃走を図る。

特に遠野志貴が狙われている間に逃げるのが最も合理的な選択ではないかね、シオン？」

「私は魔術師であると同時に貴方のせいで落ちぶれたとはいえ名誉を重んじる貴族なのですよ、タタリ」

ぼやけた感覚のせいで、当事者にも関わらずまるで第三者として聞いているように思えてしまう。

だから思わず名誉を重んじる貴族かあ、シオンって秋葉のようなお嬢様なんだな、なんて考えてしまう。

「いいや、違うな。君は名誉を口にしたが本当は違う。

そう、君が己自身に感じている違和感同様己を誤魔化している。

もはや後戻りできぬ肉体、決して打倒できない敵、君は既に諦め死に場所を探しているのではないかね」

「何を言っているタタリ！その良く回る口を閉じなさい！！」

いくつか重要な言葉が聞き取れた。

タタリ、どうやらそれがこの吸血鬼の名前らしい。

そしてタタリとシオンとの関係は随分と根が深いものであることが分かった。

「高速思考——っああ!？」

「悪性情報を送り込まれただけで、このザマか」

エーテライトを展開したシオンだが、

タタリから何らかの攻撃を受けたらしく膝を地面に着け荒い息を吐く。

恐らく戦えまい。

どうやら、ここで本当に——。

「ここで積みだ。

期待はずれだよ、シオン。

あれから数年、君が私を追い求めたのだから、

どんな手段を私を打倒するのか、心を躍らせたのだが、本当に残念だよ」

失望を隠さないタタリ。

その物言いに何時もなら切りかかっている所だが、動けない。

「さくらばだ、遠野志貴。

そして、残念だよ我が子孫、シオンよ。

私の第六法実現のためにここで仲良く死んでくれ」

黒鍵を俺とシオンに向けて吸血鬼は宣言した。

こんな所で俺は死ねない、秋葉に先生に救ってもらった命をここで絶やすことなんて出来ない。

そう頭はそう理解しているけど、体は指一本たりとも動かすことが出来ない。

対するシオンは俺を守るように手を広げ、震える足を無理やり立たせ、俺の前に立っている。

無意味な行為だ。

黒鍵がシオンごと俺を殺す未来が見える。

今の彼女にこの状況を打開する策なんてないのは分かる。

そしてシオンが俺を庇っても2人でここで死ぬことには代わりがない。

「では、幕引だ」

シエル先輩と同じように吸血鬼は黒鍵を投擲した。

言わなくても分かるが、数秒後に訪れる未来の姿は、串刺しにされる俺とシオンに姿だ。

今の俺にはその未来を変える力はなく、黙って受け入れるだけしかなかった。

——何て、無様。

直後、激しい金属音が周囲を響かせた。

俺たちを狙っていた黒鍵は全て横から飛来してきた別の黒鍵に阻まれた。

「間一髪だな、遠野志貴、シオン・エルトナム・アトラシア」

一瞬、先輩の名前が浮かんだが違う。

それどころか、対峙していた吸血鬼とよく似た声が聞こえた。

「ふむ……まさか己自身と戦うことになるとは、な」

「いや、だがこうしたイベントは好みであろう、言峰綺礼？」

「……ふつ、全てを知っているのか、吸血鬼」

歪む視界の中で会話が聞こえる。

どうやら吸血鬼とは同一人物のようだが、敵ではないようだ。

だって、ほら。

「遠野君！」

「志貴！志貴！」

シエル先輩ときつきと一緒にいた人物だから。

2人には心配させて、申し訳ない気持ちで一杯で、謝罪の言葉を綴りたいけど口が動かない。

それに2人だけじゃない。

妹の秋葉、琥珀さんに翡翠さん、そしてアルクエイド。

みんなきつと心配するはずだ——本当に、何て無様だろう。

「よしっ……応急処置でカバーできます！弓塚さん、治療を私はタタリに対応します！」
「分かりました、まずは止血、それに骨を……」

けど、生き残った。

だから後で面一杯謝ろう。

秋葉やアルクエイドは怒ると怖いけど、

今回は俺の不注意なのだから彼女達の怒りを受け止めよう。

タタリのこととは悪いけど2人に任せよう。

今の俺は、少し、眠い。

ACT. 4 「休息」

ここはどこだろう？

上下左右の感触が掴めない不思議な意識の中に俺はいた。

重力もないように体の重みも感じられず、浮遊感にただ身を任せる。

一体いつからここにいたのだろう。

記憶もひどく曖昧で、思考することができない。

おまけに、視界情報もなく、自分がどうなっているかがまったく分からない。

しかし、何も分からないことに不安に駆られることはない。

なぜならこうしてじっとしている間、不思議と体は暖かく、気持ちが良い。

気力が湧かない、体が動かない。

けどこのまま別にずっと居ていいような気がする。

そう、それこそ永遠に——。

唐突に紫色の少女の姿が瞳に浮かんだ。

灰色の脳漿が彼女、シオンとの出会いの記憶を再現する。

吸血鬼との対決、そして俺は致命傷を受けて倒れた記憶が蘇る。思い出した。

俺はこんな所でボンヤリとしてはいけないかった事に起きて、あの子の話の話を聞かなくてはいけない。

体が重い。

瞼を開くだけでも重みを感じる。

けど、それでも開けねばならない。

吸血鬼、シオン。

そして謎の第三者の介入。

その全てを俺は知る必要があるのだから。

「く、は——」

徐々に瞼が開く。

光りが鼓膜を刺激し、眩しさを感じる。

まだ吐く息は荒く、呼吸はか細いものであるが、

沈み込んでいた意識は覚醒し、視界情報が認識できるようになる。

「ハハハ」

体に掛かる布団。

首だけを回して周囲を見るとどうやら俺の部屋らしい。

多分、シエル先輩とさつきがここまで運んでくれたのだろう。

が、部屋には俺以外誰も居ない。

ここから、先は俺が行動に出る必要があるようだ。

しばらく、浅い呼吸を繰り返し、

やがて上半身を起き上がらせるのに成功した。

「ぐっ……!？」

痛みが胸元から走る。

視線を自分の胸に移せば包帯がキツチリと巻かれている。

しかも、包帯には何らかの文字が書かれておりどうやら唯の包帯ではないようだ。

こんなことが出来る人間は俺が知る限り2人しかいない。

1人はロアから知識を授かることで魔術師を始めたさつき。

そして、同じくロアから魔術の知識を学び、例えば仮の姿でも俺にとっては先輩の、

「もう、こんばんわ。

と言おうべき時間帯ですけど、

おはようございます、遠野君」

「先輩……!？」

横から声。

首を回せばその先輩ことシエル先輩が佇んでた。

「まったく、男の子は無理をするものとは知っていますけど、それでも限度というものがありますよ」

「え、その……」

はあ、とため息を吐く先輩。

先輩が言う無理に覚えがありすぎる俺には反論できない。

油断していたとか、そうした言い訳をする資格がないことは十分に承知している。
「これで懲りたら私としては万々歳ですが、

まあ、遠野君のことですからあまり期待していません、はい、眼鏡です」

「耳が痛いです、先輩。」

あ、どうも……先輩？」

「はい、何でしょうか？」

「あの、俺と先輩との間に何かが繋がっているようですが、これは？」

シエル先輩が俺の眼鏡を差し出す。

受け取ろうと手を伸ばすが、先輩と俺を繋ぐような糸が確かに見えた。

「魔術的なパスを視界情報として認識できるなんて、

相変わらず出鱈目な眼をしますね、遠野君は……。

はい、そうです。私と遠野君との間に魔術的なパスを結んでいます」
魔術的なパス、

シエル先輩は秋葉と同じく俺に命を分け与えてくれた事実を意味した。

「ありがとうございます、先輩。」

そしてごめん先輩、俺のせいでここまでさせてしまつて」

頭が上がらない。

この命は秋葉、先生だけでなくシエル先輩からも頂いたことになる。

先輩は何の利益も得られないにも関わらず、こうして俺を助けてくれた。

「感謝の言葉は私だけでなく、

翡翠さんにも言つてくださいね遠野君。」

私だけでなく彼女も遠野君の命を繋ぎとめるのに協力しましたから」

「翡翠も、か」

翡翠まで俺を助けてくれたのか。

いつも俺の周囲の世話をしてくれていたけど、

これでいよいよ本格的に頭が上がらないようになってしまったな…。

「分かつた先輩、

後で翡翠にもありがとうって言ってくるから」

「感謝の言葉もいいですけど、

そこに具体的な行動を追加するとより良いですよ」

「具体的な行動？」

翡翠にも後で感謝の言葉を伝えるといった矢先、

シエル先輩は言葉だけでなく、行動に出た方がよいと言ってきた。

具体的な行動……ダメだ、思いつかない、俺には解けない謎かけだ。

「その様子だと分からないようですね、

まったく、そうした方面には相変わらず鈍いままですね、遠野君」

「面目ない」

やれやれ、と手首と首を振るジェスチャーをする先輩に俺は頭を掻く以外反応できな

かった。

「いいですか、遠野君。

手短に言うて感謝の意を込めて翡翠さんと何か付き合いなさい。

というか、デートしなさい、男女で仲良く外に遊びに行つて行きなさい」

「なるほど、デートか。そっかデート……ってーデート！翡翠と俺が!!!」

な、なんですか!?!

意味がわからないぞ、まったく！

「好意を抱いている男性から、デートの誘いを掛けられると女の子は嬉しいものですか？」

「好意を持つているって、翡翠と俺の間には主人と使用人の間に結ばれた信頼とか信用といった好感情という意味ですか？」

朝起こしに来てくれるメイド。

なんて、有彦と一緒に遊んだエロゲの世界かよ！

と、内心で突っ込んでちよっぴりドギマギしたけど今はそんな邪心はない。

今は朝に強いとは言えない身体と、

そうしても見過ごしがちな日常のサポート全般において、

翡翠は俺にとって欠かすことが出来ない信頼できる人間である。

「……無茶にも限度があると申しましたけど、鈍感なものにも限度がありますよ？」

だいたい、翡翠さんは勇気を振り絞って遠野君に初めてを捧げ……あ、今何を想像しましたか？

ほほう、別にエッチな意味ではなくキスですよ、キス。それでも初めてを捧げたので、すからデートに誘いなさい、いいですね？」

初めてという単語で思わずアルクエイドと過ごした夜を思い出し顔が赤くなった。

そんな姿の俺を見て先輩が笑みを浮かべつつさらなる爆弾を投下した。

「まあ、ですが。実は私も男の人にキスしたことは遠野君が最初なんですよ……」
「え、……………」

先輩と俺がキスをしたという事実には俺は硬直してしまった。

何せあまりの衝撃で走馬灯のごとく先輩とすごした過去の記憶が再現されるが一度のそのような記憶はない。

それに、はにかむ先輩は殺人集団の代行者のシエルではなく、学校の留学生にして俺の先輩である、シエルであった。

月夜を背後に嬉しそうに微笑む先輩の姿に俺は思わず見惚れてしまった。

だけど、なんだ、その。

「あ、でも遠野君はこれが初めてじゃないのですよね。

今回の翡翠さん、ロアの時に秋葉さん、付き合っているアルクエイド……………ふふ、モテモテですね」

「うぐ、えつと、えつと……………」

そうだ、俺は既に複数の女性と既にキスをしてしまっている。

今回で遠野の屋敷に関係する人間で俺とキスをしていないのは、さつきと琥珀さんだけとなった。

……………4人の女性とキスを交わしてしまった俺は色んな意味で駄目人間かもしれない。

「でもそんな浮気体質な遠野君でも私は好きですよ。

それにもし、アルクエイドに飽きたら、私と付き合ってもいいですよ？」

「な——」

——今何ておっしゃいましたか？

先輩と俺が付き合うなんて、そんな事を言いませんでしたか！

これは是非とも……あ、待ていくら何でも二股は駄目だ。

激怒したアルクエイドの怖さは十分承知しているし、何よりも彼女が悲しむ姿を俺は見たくない。

だから答えは決まっている。

「先輩の好意はありがたいけど、俺はアルクエイド一筋だから」

「そうですか、残念です」

今まで笑みを絶やさなかった先輩がこの時だけは少しばかり悲しそうな表情を浮かべた。

「おっと久々にこうして話し会えたものですからつい長くなってしまいました。

私はそろそろ言峰神父と合流して吸血鬼の捜索に向かいますから、しつかり休んでくださいね、遠野君」

「え、ああ。もちろんだよ、先輩」

「はい、いい返事です。ご褒美に私からプレゼントを差し上げましょう」
そう言うと先輩は俺に近寄り、

頭の側面に手を寄せて、先輩の顔が徐々に――。

「あ――」

額に湿っぽく、暖かい感触。

どうやら、俺は先輩にキスをされたらしい。

それは分かったのだが、アルクエイド一筋と公言した矢先の出来事なだけに、シエル先輩の行為に反応できず、情けないことに俺は動揺し、硬直してしまった。

「では、私は言峰神父と共に吸血鬼を調べに行つてきますから、遠野君はしばらく安静しててください」

硬直している俺を他所に先輩は傍から離れ、部屋の窓を開ける。

「お休みなさい、遠野君」

そして窓から飛び降り夜之三咲町へ消えていった。

「先輩のキス、良かったな……」

姿が見えなくなった先輩への開口一番がこれであつた。

意識をせずに呟いた言葉がこれとは、我ながら体は正直というべきか……。

思わずキスをされた額に手を当てる。

まだ少しだけ、先輩のキスした時に残った湿っぽい感触が残っていた。

……アルクエイドとはもつとすごい事をしているって言うのに、何を恥ずかしがっているんだろう。

というか、先輩との一連の会話を聞かれたら色々和不味い。

付き合っているアルクエイドだけでなく、特に秋葉あたりは——。

「へえーそんなにシエルのキスが良かったんだ、へえー」

「ふふふ、兄さん、今日と言う今日こそたつたつぶり、お話しが必要みたいです」

空気が凍りついた。

いや、凍っているのは空気ではなく俺だ。

声の方角は部屋のドア、そしてこの声の主は見知った人間だ。

振り向きたくない、どんな事になっているか深く考えなくても分かる。

だが、ここで無視を決め込んだら余計に事態が悪化する。

ゆえに逃げ場なく、ゆっくりと首をドアの方へ回転させた。

「志貴」

「兄さん」

そこには俺の想像通り、

黄金と紅の怒りのオーラを纏った2人の鬼がそこにいた。

どうやら俺はここまでのようだ……。

ACT. 5 「原因」

深海に溺れる魚、

と言う厨²的詩的表現をつい口にしたくなるほど今年の冬は寒い。

吐く息は白く。

吸い込む空気は喉と鼻を刺激するほど寒気を帯びている。

おまけに深夜の公園ということもあつて周囲に人影はなく余計に寒い気がしてしま
う。

いや、公園だけではなく街全体がそうだ。

例の吸血鬼の噂のせいで夜を歩く人間は少なくなり、街全体の活気が冷えている。

吸血鬼の噂。

ボクはそれを知っている、そうタタリの事だ。

だが「原作」ならば本来それは夏の蒸し暑い夜に演じられるはずのもの。

しかし、現在それは年が明けた冬に始まった、いや始まってしまっている。

その原因は初めはボクのせいではないかと考えていた。

なぜなら、吸血鬼タタリは人の噂を媒体として現れる吸血鬼。

それも人が口に出さずとも一度思ったり、見ただけで再現してしまうチート野郎だ。

そんな吸血鬼からすればボクのように型月のあらゆる知識、【原作知識】などと言う物を持つ人間は非常に都合がよい。

例えば英雄王。

例えば騎士王。

例えば征服王。

そんな古今東西の英霊の姿を文字、

あるいは絵と言う媒体でしか知らなくともタタリはそれらを再現してしまう。

現に今街で流れる噂。

そして昨晩志貴と戦っていたタタリはまさにそうだった。

あの時は英霊ではなく、ただの人間を再現していただけだったが、

このまま行けば間違いなく、英霊と対峙することになる——あ、鼻が。

「へっくちー！」

人間よりも頑丈な肉体とはいえ、吸血鬼でも寒いものは寒い。

くしゃみと共に鼻水が鼻から垂れる、そして生憎ティツシユを持ち合わせていない。

どうしたものかと思わず考えていたが、

「ふむ、寒いのか?」

隣に立つ長身の神父がそう言うのと懐からポケットティッシュを差し出した。

自然と出た神父の気遣いに感謝の言葉を告げたいのだが、直ぐに口にでなかつた。

それもそのはず何といつても彼こそが蟲爺、桜、に並ぶ Fate におけるラスボス枠、言峰綺礼なのだから。

「いらないのかね? 女性がそういつまでも鼻水を垂らすのはよくないものだと思うのだが?」

「え、あ、はい……」

どう反応すべきか迷っていたが、

極めて常識的な助言を神父から頂いた。

あるいは頂いてしまったというべきかもしれない、しかも、あの言峰綺礼から。

とはいえ、彼の言うことは事実なので、

感謝の会釈と同時に、ティッシュを受け取った。

紙に魔術的な加工といったものはなく本当に唯のティッシュであり、そのまま鼻をかんだ。

「まだ寒い時期だから今後はティッシュを携帯するように気をつけるとよい」

「どうも……」

おまけに寒いから風邪に気をつける、ティッシュを携帯するように言われる始末。まるで母親のようだ、というか、イメージしていた言峰綺礼とのギャップについていけない。

そもそも見た目の印象からして隣に立つ神父が他人の不幸が三度の飯より大好きな愉悦部部長とは思えない。

表情が乏しいとはいえ、見た目は長身で真面目な神父さんといった印象が強い。

とても間桐雁夜の空回りっぷりを見てワインがうまい！と愉悦していた人間には見えない。

かといって愉悦覚醒の契機となった聖杯戦争は〔原作〕通り勃発しているのは確かだ。なにせ今回シエル先輩経由でここ三咲町に来たのは、聖杯戦争の体験者の意見を求められたからだ。

そしてこの神父と態々夜の公園で突っ立っている理由は勿論タタリ搜索のためではシエル先輩を待っている。

「お待たせしました」

って、先輩のことを話したと勝手に本人がやって来た。

まずは情報収集した結果を話さなければ。

「来たか。では、はじめるとしよう」

神父の言葉にボクと先輩は頷いた。

「三咲町に流れている様々な噂は第四次聖杯戦争に類似しているかどうか、結論から言えば黒だ。

正直見覚えがありすぎて困惑するほどだ、特に昨晚のタタリが実体化させた人間は戦争参加者のアインツベルンの人間で間違いない」

「やはり、そうですねか……」

言峰綺礼の話に先輩が深刻な表情を浮かべる。

ボクと同じような最悪の展開、タタリが再現する英霊と対峙する可能性に気づいたのだろうか。

だが、問題がある。

タタリは元となる噂や人間、伝承がなければ存在できない。

秋葉さんのような混血に長期滞在しているアルクエイドさんを再現したのが【原作】の展開だ。

つまり常道とは違う、異物がこの街に紛れ込んだことにほかならない。

その筆頭がボク自身であるが——他にもある。

「第四次聖杯戦争で生存したマスターは3人。

1人は言峰綺礼神父、1人は時計等の魔術師、ウェイバー・ベルベット。

そして最後の1人は衛宮切嗣の3人のみ、つまりこの内の誰かが三咲町に訪れた可能性が高い」

三咲町の神秘と冬木の神秘が関わる可能性。

それはビル爆破を初めとしてあの苛烈な聖杯戦争を生き残ったマスターの誰かが三咲町に訪れること。

これならば、タタリが【漫画版の原作】で、

遠野志貴が弓塚さつきの吸血鬼化とその死を胸に秘めていたにも関わらず、噂という形で再現したようにタタリは確実に再現できる、その候補は3人。

「私は冬木、あるいは海外で教会の仕事をしていたため三咲町へ訪れた事はない」

1人は目の前の神父、言峰綺礼。

だが、海外での討伐に参加、後見人としての仕事のため三咲町に訪れたことはない。

「時計塔の魔術師、ウェイバー・ベルベット。」

聖杯戦争時に世話になった家に訪問するため日本に何度か来ていますが、三咲町には来ていません。

彼のスケジュールを確認した所、冬木以外は東京の秋葉原かその他観光地ぐらいしか移動していません」

2人目は時計塔の名物講師、ロード・エルメロイⅡ世として名を馳せつつあるウェイ

バー・ベルベツト。

先輩が調べた所によるとこちらもやはり、三咲町とは関わっていないようである。というか、冬木は世話になった老夫婦の下を訪問しているのだからけど秋葉か……。本人はゲームオタだが、前に人形師と魔法使いを見かけたようにコミケには参加しているのだろうか？

「残るは魔術師殺しの衛宮切嗣——この男だけはこの町に訪れた」

「魔術師殺しが、かつてこの町に来たと？」

残る一人。

魔術師殺しと恐れられた衛宮切嗣。

その男がかつてここに来た事実には嫌悪感を隠さない先輩。

人を嫌うような素振りを見せない先輩がここまで嫌うなんて【原作知識】以上に何をしたんだあの正義の味方は？

まあ、正義の味方がこの町に来たことにはボクも驚いたし…。

「弓塚さつきがこの町に住む裏専門の医者から聞いた話では。

「どうやら、あの男はその医者に魔術師としての肉体の修復を図るため治療に訪れたらしい」

「裏専門……まさか、遠野君がいつも通っている時南宗玄の所ですか弓塚さん!？」

「あ、はい。そうです、先輩」

衛宮切嗣は聖杯戦争で魔術回路の大半を破壊され、あの肉体は呪いに浸された。

聖杯戦争では遠坂の結界を解術する腕前がアインツベルンの結界を感知、突破できないほどにまでなる。

と、なれば肉体と魔術回路の修復を図ろうとするのは自然だ。

この町に住み、なおかつ裏のこと、神秘側の世界を知る医者とは時南先生のみ。

たしかに先生は魔術師というより退魔師の類だが、

直死の魔眼という破格の神秘を身に抱き常に壊れ気味の志貴の肉体を管理するだけの技術の持ち主だ。

だからもしかすると衛宮切嗣も同じように助言や治療を試みたのでは？そう考えて本人に聞いてみたら、大正解であった。

正直、冗談かと思っただけ、

患者のカルテとい物的証拠まで出てきたのだから間違いない。
とりあえず先輩、これを見てください。

「っーそれはカルテですか。」

見せてください……なるほど魔術師として死んだも当然の肉体になっていたのですね。

おまけに、この肉体は何ですか？どんな呪いを受けたやら？だから密かに治癒を試みた……辻褄が合いますね」

先輩に渡したカルテには「原作」では表面上でしか分からなかった病状が詳細に記載されていた。

素人の自分でもよく生きていられるな、と感想を述べたくなるような状態である。

先生本人から聞いた話では人の手に余ると匙を投げ、

気休め程度に痛みを和らげる薬を与え、長生きするための幾つかの助言したそうだ。

「しかし、まさかあの男との縁がまたできるとはな」

ふと、神父が言葉を漏らした。

それに思わずボクは尋ねた。

「言峰さんはその、

衛宮切嗣という男の事をどう思っているのですか？」

「……嫌いな男だ、当たり前の幸福を自分から捨てる愚かな人間だ」

ボクの問いに顔を背けつつ言葉を発した。

当たり前の感情と幸福を自分から捨てる男、衛宮切嗣。

当たり前の感情と幸福を感じることができない男、言峰綺礼。

そんな2人は考えてみれば、両者が互いを理解することは決して出来ない。

そう言えば、ゼロではこの神父は衛宮切嗣に怒りを——。
「だが僥倖だ」

刹那、ぞつとする殺意と笑みが言峰神父から漏れた。

「例え夢幻であれ奴は奴だ。」

今度こそ完膚なきまでに叩き潰せる。

ああ、まったく今回は遣り甲斐のある仕事だ」

そう、くつくつと神父は笑った。

さつきまであった真面目な神父の印象は崩壊。

こんにちわ、ボクらの愉悦神父である、

というか、この人行き成り人相が悪くなつたぞ！

どう見ても悪人の類にしか見えないし、リアルで見ると引くな！

シエル先輩なんてサドな上司でも思い出したのか顔に手を当てて天を仰いでいるし。

「はあ、真面目そうな方だと思つたけどやっぱりこうですか……。」

さてさて、話は分かりましたし、捜索を開始するとしましょう言峰神父、弓塚さん」

つと、そうだった。

先輩に話すべき話はこれでお仕舞いだ。

聖杯戦争のことやシオンのことなど不安要素は沢山あるが、今すべきことはタタリを

探すことだ。

「ふむ、その通りだがどうやら向こうからまた来たようだ」

「つ！の、ようですね！」

反応できなかった自分はえ、

なんて間拔けな声を出して言峰神父と先輩が向けた視線の先に振り返る。

「あ、あああああああ あ あ あ あ ——！！」

故障したテレビの画像のように姿はあやふやであつたが、

たしかに人であつて人でないものがそこにいた。

くそ、何時の間に!?

そして両手に持つ2本の槍。

これは間違いなく聖杯戦争の、

「故ロード・エルメロイのサーヴァント、ランサーか」

感嘆深げに神父が呟く。

しかし手には代行者を象徴する武器、黒鍵を先輩と共に既に構えている。

この場には志貴もアルクエイドさんもいない中、

現象に過ぎないタタリにどこまで通じるか分からないがやるしかない。

体内の電子回路に電流を流すイメージをし、魔術回路を起動。

さて、どこまでやれるか？

ACT. 6 「シオン」

弓塚さつきがタタリと交戦を始めた頃。

アルクエイドと秋葉に散々絞られた遠野志貴は再度眠りについた。

いつもなら無理をしてもタタリの捜索に行つて行くところであつたが、

シエル先輩の安静するようにとのお願いに従い、眠りについていた。

アルクエイドと秋葉はそれぞれタタリの捜索に出ており、

ゆえに今部屋にいるのは志貴のみ、寢息だけが部屋の中で小さく音を立てていた。

そんな中、静かにドアが開かれる。

するりと忍び寄るように人影が部屋に入る。

人影はゆつくりとベットで眠る志貴の元へ近寄る。

やがて、枕元まで来た人影は何もせずじつと眠れる王子を見た。

直ぐそばに人が立っているにも関わらず志貴は相変わらず寢息を立てて寝ている。

これだけなら、何ともない事実であるがしばらくその姿を見ていた人影は、ふと違和感を覚えた。

人影は人より遙かに優れた頭脳を回転させ、その違和感について考える。解答は直ぐに出た、そうあまりに静かなのだ。

魔術で自己暗示による精神洗浄をしているならともかく自然の眠りにしては生気がない。

志貴の眠りはまるで、

「まるで死体のようですね、貴方の眠りは」

そうシオン・エルトナム・アトラシアが感想を呟いた。

そして、そつと手を志貴の頬を撫で、エーテライトを接続し志貴の体調を見る。

傷は回復傾向にあるが体温は平均より低く、心拍数も少ない。という解が直ぐに頭脳にはじき出された。

「よかった」

その結果にシオンは思わずそんな言葉を発し、

刹那、自分の口から出た言葉の内容に動きを止めた。

何故ならシオン・エルトナム・アトラシアが、

他人を氣遣ったような経験は、今は亡き友人であるリーズバイフエ以来だ。

アトラス院にいたところは他人に対して全て無関心で、

ここ最近教会とアトラス院から逃げる日々であったためそうした余裕は一切なく、

加えて言えば、タタリを追うことのみで他人に興味関心を持つという発想自体まったくなかった。

それがどうだ？

たつた今他人を氣遣った。

それも初対面は殺しあつた人間だ、おまけに異性だ。

何がシオン・エルトナム・アトラシアにこのような行動に移させたのか？

遠野志貴の異能の希少価値？

たしかに研究材料として魅力的であるが解に合わない。

何故ならその眼だけを奪う隙はあつたはずだがしなかつた理由が見つからない。

タタリ打倒のための協力者であるから？

それはあるかも知れないが、何故遠野志貴なのか？

協力者ならば真祖に代行者、吸血鬼と選択肢は複数あつたはずだ。

しかも彼とはタタリが襲来する直前まで殺しあつていた関係だ。

彼が単独でタタリを迎撃しただけで、協力者という関係には至っていない。

「……………」

高速思考を展開し、思考を深めるシオン。

だがそれでも解は得られず、謎が深まるばかりである。

「私は」

私は一体どうなってしまったのか？

そんな疑問と不安がシオンの内心を蝕む。

じつと志貴の顔を見るが、答えは当然出ることはない。

だが、ふとシオンは思いついた、もしかすると彼なら答えを知っているかもしれない、と。

そう思い志貴を起こすため手を伸ばし——。

「悪いけど、志貴を起こさないでくれるかしら？」

手を伸ばした所で第三者の声が介入してきた。

声の主に聞き覚えがあったシオンは主がいるであろう方角に振り返る。

「真祖の姫君……」

「こんばんわ、錬金術師。もう体調は大丈夫みたいね」

声の主はいつの間にか開いていた窓に座っていた金髪的女性。

真祖の姫であるアルクエイド・ブリュンスタッドであった。

「…昨晩は姫君のご好意、深く感謝致します」

「まー、屋敷に置いてくれないか妹に頼んだのは私だけど、

最終的に決断したのは妹だから明日にでもそっちの方にお礼を言っておいてね」

「はっ」

アルクエイドであることが確認できたシオンは即座に姿勢を正し礼を述べる。そして、改めて己の名と願いを続けて口にした。

「改めて 私の名はシオン、シオン・エルトナム・アトラシア。」

この街に来訪したのはタタリの打倒と共に姫に願いたいことがございます」

「ふうん、その年で穴倉の院長補佐？ すごくいわねー。」

そして外部との接触を一切絶つアトラスの人間が私に願ひ、いわ、聞いてあげる」
遠野志貴とその周囲の人間以外にあまり興味がないアルクエイドであるが、
錬金術師が提示した変わったお願ひにその内容を話すことを許した。

「私の研究課題は吸血鬼の完全な治療。」

すなわち吸血鬼から元の人間に戻すことです、姫」

「…続けなさい」

アルクエイドが催促する。

「吸血鬼を生んだのは星の精霊である真祖の血。」

ならば、その血を解析することで吸血鬼から人間に戻すことも可能はず。

無礼を承知ですが、どうか姫の血を提供して頂けないでしょうか？」

懇願する言葉に徐々に熱が入るシオン。

そして最後に、再度頭を下げた。

その姿を黙ってみていたアルクエイドは、

シオンの願いに即答せずしばらくの間沈黙を保つ。

数十秒ほどの静寂な時間が流れたが、ゆっくりと口を開いた。

「…死徒になりたがる魔術師はごまんといえるけどその逆とは、ね。

もしも私の眷属になりたいなんて言い出したらこの場で殺していたわ。

でもね、死徒から人間に戻るなんて——無理よそれは」

「なっ!？」

それは否定。

その内容にシオンが絶句した。

「な、何故です!! 大本である真祖の血を解析すれば吸血鬼化に治療に…」

「無理なものは無理なのよ」

必死に問うシオンにアルクエイドが顔を横に振り否定を重ねる。

「貴女は知っているはずよ、

人間が吸血鬼になることは肉体的な変化だけでなく魂そのものが改変されること。

もしも人間に戻るならそれこそ魔法、それも時間を戻す魔法を使わなければならな

い、と」

「黙りなさい!!」

考えていたがあえて見ぬふりをしていた事実の羅列にシオンが感情を爆発させる。

何時もなら感情を露にすることすら稀であったが、吸血鬼化治療の中でも最後の希望が消滅してことで感情のタガが外れた。

「だいたい、元はと言えば貴女達真祖が撒き散らした病魔ではないですか!」

それを治療できないと言うのはあまりにも身勝手すぎます!」

「怒りで我を忘れているようだけど、大昔から神様や魔物。

それに貴女達魔術師という人種が生きる世界はそうしたものでしょ?」

「そ、それは……」

アルクエイドの正論に頭が冷やされたシオンがたじろぐ。

「理不尽な魔が人間を襲う」この図式は遥か神話の時代から続いた現象だ。

そして英雄と呼ばれる人種を除けば人間の大半はこの魔に対してまったくの無力だ。

たとえそれが科学技術が発達し、神秘が薄れた今日でもその図式に変化はない。

「それに、教会の受け売りになるけど、魔さえ神の創造物らしいわよ。

よかったわね、錬金術師。貴女の肉体が半分魔であつても嘆くことはないわ。

貴女の存在を何せカミサマが保障してくれているのだから、何がいけないのかしら

?」

「——っつっ!!」

吸血鬼の存在を良しとするアルクエイドの言葉にシオンに衝撃が走る。

朱色の瞳を細め人を皮肉する姿はまだに人ならざる魔の傲慢さを具現化させていた。

「——志貴の情報から実りのある会話を期待していましたが、どうやら私の思い違
いのようにしたね」

「あら悪いけど、自分の事すら分かっていない人間と仲良くしようなんてこれっぽちも
思っていないから」

「…自分のあり方がわかっていない？何を一体、」

自分の事すら分かっていない人間。

そんな評価にシオンは疑問を覚えアルクエイドに尋ねる。

「貴女のあり方と吸血鬼になりたくない、

という願望に矛盾が生じているのが分かってないのよ」

「何を馬鹿な……」

アルクエイドの言葉を即座に否定する。

吸血鬼にならない、それはあの蒸し暑い夏に友人を失って以来誓ったもの。

そこに矛盾など一切入る余地はない。

シオンは続けて語ろうとしたが言葉が出なかった。

ほんの少し。

ほんの少しだけ違和感を覚える。

アルクエイドの言葉を即座に否定することができなかつた。

「やっぱり答えはでない、か。」

じゃあね、錬金術師。私これでも忙しい身だから」

「あ……」

己に迷っているシオンを見て興味を失つたアルクエイドが窓から飛び降り、颯爽とその場を後にした。

部屋に残されたのは眠りを続けている志貴、そして答えを言い出せなかつたシオンだけとなつた。

「……………」

開けっ放しの窓を黙って見るシオン。

しばらくの間アルクエイドがいた場所を見ていたが、思いを口にする。

「貴女の言うとおり、私は私のあり方が分からない」

顔を俯かせシオンは彼女の言葉を肯定するしかなかつた。

ACT. 7 「敗北」

槍の使い手を刀の担い手が倒すには3倍の技量が必要。

という俗説があるように、リーチ差がある槍の方が白兵戦では有利だ。

だから人類の歴史ではよりリーチ差のある武器を開発し、槍という兵器を絶滅させた。

しかし、今直面している魔術の戦いはそうではない。

例え投剣に魔術と遠距離の攻撃手段があっても本質的には格闘戦、白兵戦。

そして相手は槍の使い手、今まさに原始的な戦いへ逆戻りした。

味方はシエル先輩、言峰神父。

両者はいずれもボクなど一瞬で抹殺できるほどの技量を持つ歴戦の代行者である。

潜った修羅場の数も段違いで、唯の吸血鬼1人だけなら十分すぎる陣容だ。

が、相手は27祖の一角であるタタリ。

今の姿はかつての第4次聖杯戦争のランサー、デイルムット・オディナ。

これがもしもカッコいい外見だけならよかったが、タタリはランサーの能力を引き継

いでおり、

人間がサーヴァントに勝てる可能性など、赤毛の異常者を除けば極めて難しい。だからこうなる事は薄々分かっていた。

「あ……ぐっ——!!」

「シエル先輩!!!」

ランサーの槍が先輩の左肩を突き刺し鮮血が飛び散る。

「ふっー!」

直後言峰神父が黒鍵をランサーに向かって投擲。

その数は6本、数秒もしない内にランサーに黒鍵が殺到する。

が、ランサーはもう一本の槍を回転させてその全てを叩き落とす。

例え一本でも人間の手足を吹き飛ばす威力を持つはずの黒鍵を吸血鬼は片手で軽々と迎撃してしまった。

「先輩から離れろ!」

だけど視線はボクから完全に外れた。

その隙を突く形で地面のそこらで転がっているコンクリートの破片を投擲。

狙い通り、ランサーの頭に直撃し派手な音を立てるが頭が割れて脳漿がブチ撒かれることはなかった。

くそ、知識として知ってはいたけど本当にサーヴァントの人外の力と頑丈さには恐怖を通り越して呆れるな！

しかし、今の攻撃でランサーはよろけ、シエル先輩が自力で脱出しボクの隣まで後退する。

「シエル先輩！」

「ああ弓塚さん、この程度ならまだ大丈夫……。」

いやそれでも無いようですね、どうやら治癒魔術が効かないようです」

「……え、あ？」

絶え間なく血が流れる肩を押さえ苦笑を零す先輩。

魔術師として最高の技術を有する先輩を以って直せない傷となれば、

「ふむ、その身体能力だけでなく宝具まで再現するのか……厄介だな」

言峰神父が答えを呟いた。

ランサー、デイルムツト・オディナ。

聖杯戦争では運がない歴代のランサーの中でも特に不運にまみれた英霊だ。

だが、傷を癒すことができない呪いを与える槍、必滅の黄薔薇（ゲイ・ボウ）を保有しており、

セイバーのエクスカリバーのような派手さはないが相対する相手にとって厄介極ま

りない宝具に違いない。

まあ、その第四次聖杯戦争では外道上等の敵がいたのもあるが、身内の不穩調和がランサーにとって最も厄介で最大の敗因であったが。

だが、今は違う。

現在ボク達が相対しているランサーはマスターの縛りが一切ない状態の英霊。

腹ペコのように魔力不足もなければ、手加減する気は一切ないと——来た!!

「■■■■■■——!!」

獣のような咆哮と同時に一瞬で距離を詰めて来てからの一突きをギリギリ避ける。

負傷しているシエル先輩も傷があるとは思えぬ素早さでランサーの攻撃から逃れる。

しかし、飛び込んで来たランサーがこれだけで攻撃を終えるはずもなく、

主にボクを狙って二双の槍を自由自在に操り追い詰める。

「ぐう!？」

それにこっちは反撃どころか避けるのに精一杯だ。

致命打を受けずにいられるのは例え戦い方はド素人のボクであるが、

それでもなお英霊を相手にしてかすり傷で済んでいるのは吸血鬼の能力のお陰であ

る。

が、それもいつまで持つやら。

吸血鬼の能力が優れていても何もかも経験不足のボクでは長くは持たない。

これがもし平均的な魔術師もしくは魔術使いならば、経験不足を人外の力で無理やり捻じ伏せたであろうが、

英霊とはボクのような人外を殺すには慣れているのだから、本当に相手が悪すぎる

……!!

「■■■■■■——!!」

「——つつつ?!」

槍の横なぎを避けられず左腕で受け止めてたが、

魔術で強化しているにも関わらずミシリ、と腕が嫌な音を立てると同時に激痛が走る。

そして受け止めた槍は止まらず、進み続けている。

漫画とかアニメなら衝撃を殺すため自分から飛んで衝撃を和らげるなりするのが定番だが、

残念なことに自分はまだそこまで器用な真似は出来ない、ゆえに次の瞬間ボクはランサーに宙高く吹き飛ばされた。

「が……あ——つつ?!」

今まで経験したことがない激痛と共にぐるぐると視界が何度も上下逆さまになる。

数秒ほど宙を舞い、その間に公園の木々をなぎ倒しながら落下した。

それでもなお起き上がることはできるのは吸血鬼様様であるが、

眼がチカチカするし、何よりも勝てる要素が見当たらないという絶望の心境が心を犯し、体の動きを鈍くする。

そのせいだろう、だからランサーの槍を今度こそ避けることができずまともに受けてしまった。

「あ……？」

わき腹に深々と突き刺さる槍。

意外と痛みはあまりなく、熱い感触しかない。

吸血鬼ならこの程度問題ないがランサーの宝具は傷を癒す力を防ぐ代物。

全身から力が抜けて地面に倒れ、視界に移るのは黒い地面だけとなる。

「弓塚さん!!」

「ちっ……!」

ゆえに聴覚だけが外界を知る手段となり、

シエル先輩がボクの名を叫ぶ声、それに意外なことに言峰神父の悪態が聞こえた。

「吸血鬼を心配する代行者が、実に珍しい。」

そして、今宵の我が舞台の役者として演ずるに値する」

「…ランサーではなくタタリが出てきたか」

狂戦士のように雄叫びを挙げて襲い掛かってきたランサーが口を開いたようだ。

否、この無駄に自らを演出家と看做しているような口調はランサーではなく、タタリだ。

「然り、神父言峰。先ほどまでは意識はランサーであつたが、今はタタリだ」

「そうですか、出来ればこの町から去つてくれませんか？

なんだかんだと言つて私。この町を気に入っているのですから」

いつもの柔らかな雰囲気は一切消してシエル先輩が本心を述べる。

「君の願いは却下する。」

私にはやらねばならぬことがある。

それが適うまで私は辞めるつもりは毛頭ない。

しかし…英霊を再現するのはなかなか骨が折れたが…これは実に良い。

今まであらゆる者を再現してきたが、ああ、実にすばらしい、まったくすばらしい!!」

そう言い人の感情を逆なでするような声でタタリが大笑した。

くっそ、気に入らない、まったく気に入らない。

ロアと同様自分の願望、いや妄執のためだけに人を巻き込んでおきながらこの態度が

気に入らない。

今すぐ奴をこの手で消してやりたいが、ようやく地面から顔を上げることしか出来ない自分の無力さが情けない!

「さて、お喋りはここまでとしよう。

真祖の姫、魔眼の死神に続く3番目の不安要素はたった今排除した、次は君たちだ。私としてももう少し会話を楽しみたかった所であるが何、予定が混んでいる故ここで死んでくれ」

「…っ舐められたものです!アーパーや遠野君はともかく、

私を差し置いてへっぽ吸血鬼の弓塚さんを3番目の脅威を見ましたか!!」

「その話、興味深いが、私がそこに転がっている半端者兼肉壁以下とは実に不愉快だ」

え、あれ?

いや、アルクエイドさんや志貴がタタリにとつて脅威になるのは納得できる。

けど何でボクがシエル先輩を差し置いて3番手に!?

で、半端者はともかくさりげなく肉壁呼ばりした言峰神父う…。

「疑問、という顔を浮かべているな弓塚さつき。

今は新人役者に過ぎないが、いずれ人々から舞台の役者として注目されるだろう。

君の真の能力はそう評価するに値する力を秘めているのだよ、それこそ君と同じく才能に満ちているそうだろう埋葬機関?」

ニヤニヤと意地の悪い笑みをタタリは浮かべる。

そうだ、シエル先輩もボクと同じく辺凡人間であったが、

ロアの吸血鬼と成れたように吸血鬼としての才能に恵まれてい——うっ……っ。

「不愉快ですね、どうして吸血鬼という生き物は進んで人を不愉快にさせるのか疑問を覚えますね」

そのシエル先輩は無表情かつ息が詰まるほど濃厚な殺意を纏い淡々と怒りの言葉を綴った。

かつて対峙した先輩なんか比較にならないほど本気の殺意に気持ちちが萎縮する。

あの時の先輩は確かに殺すつもりがあったけど、ここまで迫るものはなかった。

そしてもしもあの時に今のような態度で先輩が対応していたら……生き残れなかっただろう。

だけど、それで今の問題は解決しない。

先輩がどんなに卓越した代行者でもまがい物であつても片腕が負傷した以上英霊に勝つことは無理だろう。

言峰神父もそうだ。

元々シエル先輩に能力的に劣る以上英霊に対抗するなんて無理だ。

つまり状況は相変わらず絶望的、ボクに出来ることは——くそ、何にもできない!!

何か手は、何か手はないのか？

いっそ【漫画版】のシオンのように意図的に吸血鬼として暴走させるか？

けど、ボクはシオンのように暴走しつつ制御するほど賢くない。

そのまま周囲を巻き込んだ挙句自滅するか、先輩に殺されるかの2択になるだろう。

「おや……？」

タタリが首を傾げつぶやく。

つと、今度は何を……あ、タタリの姿が。

「英霊を再現するのはどうやらここまでのようだ」

タタリはぼやけたテレビの画面のように姿が薄れる。

「今宵はここで終劇としてごきげんよう、また会おう紳士淑女の皆様」

「待ちなさい!!」

先輩が叫ぶと同時に黒鍵を投擲。

黒鍵は姿が薄れたタタリを貫くが陽炎を貫くように打撃を与えることはなかった。

「キ、キキ……キキキキ!!! 劇は始まったばかり。」

君の怪我もその吸血鬼の傷もランサーを演ずる私が消えれば回復する。

慌てる事はない、劇はまだ回り回る、次は君が活躍できる劇を脚本家として用意しよう!!」

狂笑するタタリに先輩は睨み、

言峰神父は無表情で観察し、ボクは呆然と見る。

黒板を爪で引っかくような頭が痛くなる笑いと共に姿が薄れていたタタリはやがて本当に消えた。

「我々の負けだな」

ぶつきらぼうに呟いた言峰神父の言葉が今の感情を代表していた。

あのままタタリと戦っていれば間違いなくボク以外の2人もあの場で倒されていただろう。

準備不足を言い訳にしても負けは負け。

相手のお情けのような形でこの瞬間を生きながらえたという、圧倒的な敗北であった。

ACT. 8「夜明け」

意識がゆるりと覚醒する。

眼はまだ開いていないが、肌寒いながらも穏やかな空気の流れ、瞭越しに入る光。

あの戦いの夜を終えて朝がやってきたのが鈍感な俺でもわかった。

「……………ん」

瞳を開けば部屋はすっかり明るく、見知った天井がよく見える。

しかもタタリとの戦闘を展開していながらも気分と体調は良好と来た、珍しい。

例え普段の日常でも翡翠に起こされる形で起きる程、起床が苦手な俺のポンコツ肉体にも関わらずにだ。

「やっ、と」

脇のテーブルにおいてある眼鏡を取り、顔を上げる。

翡翠には悪いが今日は調子がいいから先にこのまま起きてしまおう。

あの後についてアルクエイドや先輩、さつきに聞きたいことが山ほどあるから。

そう思っって顔を上げると同時に己の身を持ち上げるが腹に違和感を感じた。

違和感の元凶をを調べるべく視線を下げて、見つけた。

俺の腹に顔を乗せて寝る紫色の髪を持つ少女がいた——シオンだ、つて。

「え？」

予想外の人物に間拔けな声が俺の口から漏れた。

「いや、な、なんでさ」

シオンとはタタリと戦う直前までは非友好的関係。

いや、正確に暴露してしまえば殺しあつていた仲である。

その当事者がどうして俺の部屋にいるのか。

そもそも何故俺の腹を枕に寝ているのか突っ込み所満載で、頭がこんがらがりそう
だ。

「ん……」

等と混乱している最中シオンが目覚めた。

「おはようございます、遠野志貴」

「お、おはよう」

重たげに瞼を上げたシオンと朝の挨拶を交わす。

しかし、シオンは朝が弱いようでまだぼんやりとしている。

お互い語るべき会話がなくしばらく視線が合ったまま沈黙が続く。

「あ、あのーシオンさん？」

「……………」

勇気を振り絞って声を掛けるが反応が芳しくない。

シオンから漏れる音は吐息だけで、未だ感じられるシオンの体温と合わさって息子が……じゃなくて!!

「シオン、いつまで俺の腹を枕にするつもりなんだ?」

「枕、枕? そういえば今日の枕はいつもより暖かくて寝心地が……な、なななな!?」

シオンは俺の言っていることがようやく理解できたようだ。

飛び上がるようにベットと俺から離れた。

「く、遠野志貴!!」

よくも乙女の寝顔を盗み見しましたね!!

そこになおりなさい!! いえ、成敗します!」

「な、なんでさ!!」

そう言っつてシオンは俄かに戦闘態勢を整えた。

誤解もいいところだ、俺は何もしていないのに。

だいたい、シオンが俺の腹を枕に寝ていたのが全面的に悪い!

「貴方の言うとおりです。

油断していた私が悪いということ。

——ですからこれは八つ当たりですが何か？」

「最悪だな！」

理不尽だ！

些細なことで突然機嫌を損ねる秋葉以上だ。

「とはいえ、今の貴方は怪我人。

怪我人をアトラスの私が成敗した所で名誉は保てません。

よつて、今回だけは乙女の寝顔を覗き見したことは許します」

「あ、あははは……」

しかし彼女なりの矜持ゆえに乙女の寝顔を見たことは許されたようだ。

だけど、これ以上ない得意顔で言う姿に態度はどこなく秋葉を連想させた。

ん、そういうえば肝心なことを聞いていなかった。

「なあ、シオン。シオンは何故俺の傍にいたんだ？」

シオンは俺の時間感覚ではついさつきまで戦った相手だ。

途中からタタリという共通の敵こそ見出したが、それだけだ。

お互いに組むといった話はまったくしていない。

そもそもする暇もなかった。

それでも俺とシオンの関係を言うならば、

ついさつき知り合つた裏家業の人間でしかない。

「それは……」

俺の問いかけにシオンは言葉を濁す。

そして言いたくないのかそつぽ向き黙る。

俺は何も言わずにシオンを見つめる。

しばらく彼女を見つめ続けているとシオンが先に根を上げた。

そして、意を決したように顔を上げて言葉を綴り始めた。

「貴方の寝顔を見ていると不安だったので、そのつい見ていました……」

「俺の寝顔を？」

シオンの回答は意外なものだった。

アルクエイドも前に同じ事を言っていた。

まるで死人のようで見ているほうが不安だと。

「こんなことを聞くのは失礼だと承知してはいますが貴方は怖くないのですか、死を」

シオンが俺に問う。

そんなの答えは初めから決まっている。

「怖いさ、眼鏡を外せば周囲は全て死で溢れている。

ほんの些細なことでその全てが崩壊してしまうことを俺だけが理解できて、する事が

出来る」

今でも覚えている、四季に殺され、秋葉に生かされ病院で眼を覚ました時の光景を。壁に床、そこら全てがこの手で殺せてしまう空間であつた。

周りの人間にそれを理解してくれる者はいなかつた。

孤独と不安に犯されわけも分からず外に出て、先生に出会い、この眼鏡をもらった。

先生はこの力のありようの理解者で使い方を教えてくれた。

もしも、あの時に先生に出会わなかつたら今の俺はいなかつただらう。

「けど、それでもこの世界に生きる人間として俺はいる。」

その時その時を楽しめばいいかなって俺は思っているよ」

人より脆弱な肉体で人より短い命しかいない俺。

だが、それでも先生のお陰で前を向いて生きていくことはできる。

先生は今どうしているのだろうか？

魔術師であるシオンなら知っているかもしれない。

「魔法使いの居場所なんて知りません、遠野志貴」

なんて考えたらシオンが先読みするように回答してきた。

「へえ、そうなのか」

「そうなのです」

そうなのか。

シオンもシエル先輩みたいに物知りだ。

と、シオンとの会話もいいけどそろそろ起きないと……て？

「何をぼんやりとしているのですか？」

「いや、だつて……」

俺が起きようと思ひ身を構えたところ、

なぜかシオンが手を差し伸べてきた。

「貴方の体調が良くないので起こすのを手伝うだけですが、何か？」

何をおかしなことを？

と言わんばかりにシオンは述べた。

普段翡翠に起こしてもらう際にはそこまでしてもらっていないが、

今回はタタリとの戦いで体力が消耗しているのは事実なのでシオンの好意に甘えよう。

「ああ、ありがとう、シオン」

こちらも手を伸ばしシオンの手を握り起きあがろうとして――。

「む、意外と重いのですね志貴」

「そりゃあ俺は男だからな」

そんなシオンの眩き。

何ともないような言葉だが事件は次の瞬間に発生した。

「うわあ!?!」

「きゃー!」

俺の体重を見誤ったシオン。

そしてシオンの手を引っ張っていた俺が力加減を誤算したことでバランスが崩壊。

結果、ベツトに2人揃って倒れた。

「いっつつ…!」

倒れ掛かったシオンの体重が合わさって体が軋む。

けどそれは悪いことではない、シオンの重みと少女特有の甘い香りで気持ちちが——

じゃなくて!

「し、志貴」

というよりち、近い!

シオンと俺を隔てる距離は僅か数センチ。

互いの熱い吐息が掛かり、心臓の鼓動が聞こえる。

今この場にいるのは俺とシオンだけ、部屋は妙な静けさで満ちている。

「ま、魔術師は等価交換が絶対の原則。

助けられた礼を私の肉体と要求するならば、そ、その、優しくお願いします………」
し、シオンさん!!

貴女は一体ナニを言い出すのですかー!!?

俺はそんなことを少しだけ望んで…あ、じゃなくてちつとも望んでないし!

「志貴……」

再度己の名を呼ばれる。

その声の音色は震えており、

普段は理性が支配する瞳が動揺という感情で揺らいでいる。

まだシオンを知って短いが、彼女が見せるギャップと肉体の接触で思わず喉にたまつた唾を飲み込み。

「シオン、俺は——」

俺の言葉に何故か瞳を硬く閉じて、

何かを待ち受ける体勢を整えたシオンに俺は——。

「ふうん…ボクはタタリと戦ったというのに、

志貴は早々にフラグを立てているなんていい身分だね」

こんな姿を見られたら遠野家の住民からは村八分。

特に秋葉とアルクエイドに半殺し確定な俺はシオンに離れるように言おうとしたが

何もかも遅かった。

「それとももう致してしまっただから、

ゆうべはおたのしみでしたね、というシーンかな？」

開いたドアには日光対策のせいで季節はずれの雨合羽を羽織った少女、さつきがいた。

「ち、ちがう！誤解ださつき!!」

「へえ、何がどう誤解なのかその口から詳しく話してくれると嬉しいな」

さつきは何かと騒がしい遠野家女性陣の中で、

秋葉にアルクエイド、シエル先輩、琥珀さん、翡翠の皆とも仲良くできる穏健派であるが、

逆に言えば彼女の口から過激派女性陣全ての耳に今の出来事が満遍なく広がることを意味する。

ここは何が何でも誤解を解かねば俺は明日の朝を迎えることができなくなってしまう……!!

「さつき、よく聞いてくれ……これは訓練！そうタタリとの接近戦を想定した訓練だ！」
「夜の訓練という意味でいいかな」

あ、より誤解が深まった。

「そんなに訓練をしたいのだったら、

この事を秋葉さんとアルクエイドさんに伝えて、鬼ごっこをしてみるといいよね」
「文字通り鬼じゃないか！」

吸血鬼に鬼の末裔である混血を交えた鬼ごっこなんて死ぬよな俺！

というか、シオン。さつきが誤解している原因はシオンだから何か言つて…え？

「そんな馬鹿な…」

青ざめた表情を浮かべたシオンがそこにいた。

「貴女は、いえ【貴方】は、そんな——」

「な！対策は採つたはずなのに【読まれた】!？」

同じく俺を置いて何かに驚愕するさつき。

一体どうということだ？

「——つつつ!!!」

ようやく合点しました、何故タタリが予想外の時期、場所に出現したかが！

……全ては、全ては世界の異物であり特異点である貴方が原因なのですね!!!」

「うわ!？」

ベットから跳ね起きるシオン。

俺はというとベットから跳ね飛ばされ床に落下する。

落下する最中はまた面倒なことになったな、なんて俺は暢気に考えていた。けど、逆さになる視界でさっきの両腕が吹き飛び、血吹雪が舞ったことでそんな陽気な考えは吹き飛んだ。

ACT. 9 「対立」

「ぐっ——！」

シオンの叫びと同時に魔力を放出。

身体に突き刺さっているであろうエーテライトを無理やり取り除く。

そして、後ろに跳躍する。

が、間に合わず両腕がエーテライトで切断された。

飛び散る腕、そして血が志貴の部屋を汚してしまう。

「しっ——！」

申し訳ないと考えるよりも先にシオンの第二撃が迫る。

腕がないから鋭い蹴りを体を捻ることで避けるけど——駄目だ！

「がっ!？」

次の一撃をまともに受けてしまったっ……!!

その細い体から出せたとは思えない程重い正拳突きだ。

骨が軋む、いや肋骨が折れた。

肺から強制的に空気が排出され意識が飛ぶ、痛いつ!!

「やっつきー」

一連の出来事が終わった直後、志貴が立ち上がる。

けど、多分ボクを助けることは、

「遠野志貴、貴方はそこで止まっていなさい」

「な、何を言っているんだシオン！大体——な、動け、ない!？」

やはり無理だ。

魔術回路もない志貴ではエーテライトで簡単に体を操られてしまう。

で、こっちは吸血鬼が苦手な朝な上にとくにダメージを受けていると来た。

状況は極めて悪い。

「弓塚さつき。貴方はここで亡くなるべきだ。

貴方という存在がタタリを強化させ、手に負えない存在にしてしまう。

逆に貴方が亡くなればタタリへの勝算は最低3パーセント向上するのですから」

さつきまでラブでコメっていた人間とは思えない程淡々とした声で彼女は言葉を

綴った。

いや、しかしそれにしても……。

「……何が可笑しいのですか弓塚さつき?」

ああ、いけない。

面白すぎて思わず顔が笑顔を浮かべている。

両腕がなくなっているのに我ながら実に陽気なものだ。

「いや、あははは、

想像通りの人間だなんて」

「——不愉快ですね、

私の考えを見抜いているとでも？

『キャラクター』相手だから何でも知っているつもりですか？」

シオンはご機嫌斜めのように。

すんごい表情で今睨まれている。

うん、ここは正直に話した方が良さそうだ。

元々頭が良い彼女相手に小手先の誤魔化しなんて通用しないだろうし。

「まあ、それもある。

けど知ってはいいたけど、

勝算が3パーセント上がっても『タタリに絶対勝てない』

と内心理解しているはずなのにそんな言葉を口にする人間だったから、ね」

「……黙りなさい」

シオン・エルトナム・アトラシア。

という人間は理論を重んじる魔術師である一方で、タタリに執着する感情的な人間であり、その内心は矛盾を含んでいる。

例え吸血鬼化しても魔術の研究は不可能ではない、

むしろ寿命が短い人間以上に研究時間を確保できる、

と喜ぶのが『普通の魔術師』である・・・衛宮切嗣の父親がそうだったように。

「どこまでボクの頭を覗いたか分からないけど、

そもそもこんな事をして意味がないことぐらい理解しているはずだよ。

ボクを殺せばアルクエイドさんとシエル先輩から狙われることぐらい知っているはずだよね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

この場でボクを殺害すれば2人は間違はなくシオンを脅威と看做す。

場合によってはより倒しやすい敵としてタタリより先にシオンの排除を試みるだろう。

志貴の記憶や思考を読み取っているならば、

方や真祖の姫、もう片方は埋葬機関の殺し屋と、

通常ならば手を組むなどありえないと思われる2人が実のところ仲が良く、

彼女らの知り合いに手を出せばただでは済まないことが想像できるはずだ。
ではなぜこうなったのか？

「戸惑い？それとも困惑？」

あるいは混乱して何が何だか分からない状態なのかな？

まあ、でもこの行為はどちらかと言えば八つ当たりと言えるか」

「黙りなさい！」

シオンのエーテライトによる一閃。

しかし先ほどとは違い大振りな動作ゆえに簡単に避けることができた。

「冷静じゃないね、

やっぱり八つ当たりだね」

「その口を閉じなさい！」

貴女に何が分かると言うのですか!?

己が抱いていた矛盾に無理やり気づかされた苦悩を！

そして身体を蝕む吸血鬼としての衝動、飢えと渴きを彷徨う苦しみに！

絶叫。

それは彼女が数年に渡って蓄積された感情の発露でもあった。

負の感情が盛大に爆発したせいかな吸血鬼の力を制御しきれず、

紫色の瞳も今はボクと同じく吸血鬼の血のような紅色の瞳へと変化している。
「まあ、たしかに分からないね。」

事前に「知っていた」としても何せ他人様のことだから」
嘘ではない。

現にシオンがこうして激高するなど予想できなかった。

事前に彼女の事を知っていたとしても所詮紙の上だけの知識にすぎなかった。
それを今痛感している。

「だけど、その苦しさは理解できる。」

ボクだって経験したから、吸血鬼の衝動には」

今だって覚えている。

人の生き血を啜りたいという止められない欲望。

人を人として見ず、血袋として認識する欠落した論理感。

吸血鬼という二次元の世界の住民に成れた喜びよりも自身に恐怖を覚えた。

「だからお互いに『これから』理解し、分かり合えるはず。」

このタタリの騒動がシオンの想定よりも悪化していたとしても、

協力しあえばタタリを抹殺できなくても退けることぐらいできるよ、きつと」

「戯言を・・・」

「うん、まあ。」

戲言なのは知った上での発言だよ、勿論。

「ただ、このままだと勝ち目何て最初から皆無だと思っただけ？」

「……………」

沈黙するシオン。

何かと理由を付けていたけど、

結局のところ感情的な行為でしかかなには薄々理解していたみたいだ。

得意の計算でもしているのだろうか、

視線はボクや志貴ではなく何も無い場所を向いている。

「……………私が事前に知っていた遠野志貴の戦闘能力。」

そして貴女と貴女の知識を持つてしてもタタリへの勝率はさほど変わりません」

そして静かにシオンが口を開いた。

「しかし、分岐する可能性。」

という要素が非常に変化に富んでいました。

特に真祖の姫の手によって「朱い月」を再現させることが鍵であり、

これ以外にタタリを完全に打倒する手立てはなく、姫と協力関係を結ぶことが肝心。

そのためには目の前にいる異邦人、弓塚さつきを通じて姫と協力関係を結ぶことが必

要——そう結論ができました」

「うわ、アルクエイドさんと協力するためだけにボクが必要なだけか、傷つくな。

こっちでも仲良く路地裏同盟を結成して、夜のプールに忍び込んだり、ピラミッドで遊びたかったのに」

「生憎、貴女となれ合うつもりはありません。

それに、その可能性を歩んだ私と弓塚さつきが友好関係を結べた理由は、

例え吸血鬼となっても弓塚さつきが魔術をまったく知らない一般人であったからでしょう。

ロアの知識を継承し、半分魔術の世界の住民である貴女には魔術師として接していただきます」

こちらの冗談に対して、

冷ややかな目でセメント対応されてしまった。

魔術師として対応、か。

まあ、それは仕方がないと言えば仕方がない。

【原作】で弓塚さつきとシオンが和気藹々とやれたのも、

強力極まりない吸血鬼にも拘わらず、一般人感覚が抜けていなかっただからだ。

だけど……。

「つまり【魔術師として】協力し合えるわけかな？」

「その通り、魔術師としてタタリ打倒の契約を交わすことを提案します」
友達感覚で協力こそできなくとも、

魔術師として協力し合うことは可能だ。

行き成り腕を切り落とされ、

殺されかけたことには思うところがある。

だけど、タタリ打倒にはシオンの協力も必要だ。

だから回答は——。

刹那、窓を打ち破って黒鍵が部屋に飛び込んできた。

投擲された剣とは思えぬ威力を保ったそれは部屋を派手に破壊する。

「つつあ……!？」

一振りがシオンに命中し、吹き飛ぶ。

ドアを打ち破り、廊下へとたたき出される。

黒鍵なんて代物を操る人間は一人しかいない。

「御無事ですか遠野君！弓塚さん！！」

シエル先輩だ。

ACT. 10 「憂鬱」

「ぐ、は——」

足取りは重く、呼吸するたびに喉が焼けるような乾いた感触。

体力は消耗し、疲労で睡魔が絶え間なく襲いかかっている。

このままこの場で睡眠を取ることができればどんなに楽か。

そんな誘惑にシオンは心を動かされるが、それでも体は動き続ける。

何故ならいくら人気がないとはいえ、

彼女の計算によれば再度代行者に捕捉され、

今度こそ生命活動を強制的に停止させるに至るだろう。

ふと、その時シオンは思った。

今の自分はどんな姿になっているのだろうか。

視線を下に向け、路地裏に散らばっている窓ガラスの破片に映る己の姿を見出す。

そこに映るのはこれまでになく酷い表情であった。

顔は青白く、目元は何日も徹夜してきたように疲労の極みであることを示し、

おまけに代行者に傷つけられた生傷まであった。

「ふ——、なんて無様」

シオンの口から自嘲の言葉が漏れる。

何せこうも酷い状態となったのは全て自分自身が原因なのだから。

「長年の疑問が解決したにも関わらず、それを拒否。

拳句タタリ打倒に必要な協力者とは戦闘状態に入る・・・。

ふふふ、私と言う人間は計算ではなく感情的な人間だったとは初めて知りました」

自虐の台詞がシオン自身から発せられる。

自らを演算装置と見做す高速思考で感情という要素は省かれる。

計算において感情という計算できない要素は必要でなくむしろ邪魔である。

シオン・エルトナム・アトラシアという人間はだれよりもそれを実現してきた人間で、

これからもそうした生き方に疑問を抱いていなかったが・・・。

「異世界人、それもこの世界を俯角することができた人間の介入など計算外にもほどがあります」

壁に背を預け、シオンが嘆息する。

始めは遠野志貴の記憶から読み取ったなかに登場する重要人物、という程度の認識でしかなかった。

だから実際に弓塚さつきと邂逅した時、

『いつものように』エーテライトで情報を抜き取った。

そして得られた情報にシオン・エルトナム・アトラシアは全てを知った。

弓塚さつきが平行世界、否。

『この世界を物語として』観測できる存在は平行世界、

と言うよりも異世界人と表現した方がこの場合適格であろう。

そしてそんな存在などアトラス院の院長補佐に上り詰めた頭脳を以てしても理解不能であった。

「どう、すればいいのでしょうか？」

月を見上げるシオンからそんな言葉が漏れた。

これまでの人生で積み上げて来た物が通用せず、否定されたことにシオンは途方に暮れた。

「妹から聞いたけど、

随分と派手に暴れたみたいね、錬金術師」

—— 第三者の声が突然路地裏に響き渡る。

女性の、凜と響く声だ。

シオンは顔をゆっくりと下げ声の主を確認する。

暗闇にでも輝く黄金の金髪。

爛々と燃え盛る紅の瞳に造形美を極めた肉体と表情。

何よりも彼女が作り上げる空気は「人の形をした何か」をこれ以上なく主張していた。

「・・・真祖の姫」

「こんばんわ、エルトナムの末裔。

今夜は良い月ね、私達みたいな魔性の者にとつては」

アルクエイド・ブリュンスタッド。

全ての吸血鬼の生み親である真祖の生き残り。

どういうわけか、極東に長期滞在しているのを把握しており、

タタリ打倒と吸血鬼化の治療に協力を求めるつもりであったが・・・。

「成程、ここが私の旅が終焉する場所ですか。

・・・いいでしょう、好きにしてください」

真祖の姫に関わる人間を害して生き残れるとはシオンは考えていない。

もはやこれまで、という心境で終わりを受け入れる。

しかし、シオンの諦めに対しアルクエイドは予想外の言葉を投げかけた。

「何勘違いしているのかしら？」

さっちゃんが傷ついた事には腹が立ったけど、

私は別に貴女をここで殺すつもりなんて無いわ」

「なっ……!?!」

呆れと共にシオンの決断を否定したのだ。

やれやれ、と言わんばかりの身振りすらしている。

「馬鹿な、何故です?」

目の前に吸血鬼がいる。

それだけでも姫が動くだけの理由があるはずです!!」

魔術師の常識が崩れシオンはアルクエイドに聞いたです。

吸血鬼の前にして行動を起こささない真祖の姫、という事実は受け入れがたい物であった。

「そんな事言われても意味がないし。

……そうね、強いて言うなら貴女の様子を見に来た、それだけよ」

「……………」

殺す価値もない、

と言われての衝撃と様子見という想像の範疇外の回答にシオンの思考は停止する。

弓塚さつき、遠野志貴から抜き取った記録から魔術師が考える真祖の姫と、

実際の人物の間に大きな亀裂があることを知っていても予想外であった。

「それにしても、正直がっかりだわ

てつきり私に突っかかって来るものかと期待していたけど、

世界を知り過ぎて自ら絶望に捕らわれた歴代のアトラス院と同じ道を歩むなんて」

「アルクエイドの言葉に対しシオンは沈黙を保つ。

「まあ、それが貴女の選択、

ということなら別に私は止めないわ。

こここのタタリは私やシエルで何とかするから三咲町から出ていくといいわ。

それじゃ、もう会うこともないと思うけど、バイバイ——」

「待ちなさい、アルクエイド・ブリュンスタッド」

踵を返し立ち去ろうとしたアルクエイドに沈黙を保っていたシオンが言葉を投げかけた。

「先ほどから随分と好き勝手に私を評していましたが、

認めましょう、確かに私は所詮アトラス院という穴倉の住民。

自らの行き先とこの世界の未来に絶望と狂気を覚える錬金術師です」

「ふうん……?」

批評を素直に認めるシオンの話す内容にアルクエイドは足を止めた。

先ほどまで失せていた関心が再びシオンに向けられる。

「その上自分の矛盾を認められず癩癩を起した未熟者です。」

「……ですが、貴女が言うようにタタリから逃げるなど有りえません！」

タタリとの戦いは私が決着を付けねばならない事情で、そのために此処まで来たので「すから」

僅かに残った意地と勇気を頼りにシオンは己の内心を口にした。

「これまで自分自身を欺いていた事実を認めつつタタリから逃げないという発言。」

その内容にアルクエイドは……。

「……あは、あはははははは!!」

成程、貴女は意地だけを頼りにしているのね。

愚かね、貴女程度ではタタリに敵わないことは自分で分かっているはずよ?」

腹を抱えて爆笑した。

金髪の髪が乱れ、瞳には涙さえ浮かべている。

眼の前にいる人間が抱える矛盾と愚かさに笑い続ける。

「魔術師としては失格だけど——私はそういう人間の事嫌いじゃないわ」

だが、遠野志貴に『壊され』た後、

そうした人間という種族の性質を理解しそれを良し、

とするアルクエイドはシオンの発言に対しそう締めくくる。

「じゃあ、今夜はこれで。」

貴女の健闘を期待するわ」

再度踵を返し、

今度こそ立ち去ろうとする、その時。

「ところで、真祖の姫はどこまで知っているのですか？ 『弓塚さつき』という異物を」
シオンの質問が飛ぶ。

夜の路地裏に響いたその声は冬の様に冷たく、
肌を突き刺す緊張感がこの場を支配し、重い空気が流れる。

「さあ、私を知るさっちゃんは、私が認識するさっちゃんしか知らないわよ」
一拍間を開けてアルクエイドが質問に答える。

しかし顔は振り向かず背をシオンに向けたままだ。

そしてその声の音は先ほどまでの感情豊かな音声と違い抑制された音調である。
「好奇心が強いのは感心するわ。」

でもね、あまり深入りすることをお勧めしないわね。

今回は腹を立てた程度にしたけど——次はないから」

「っ!!？」

刹那、濃厚な殺意が夜の路地裏を制する。

人には耐えがたい強烈な意思と気配に気圧され、

シオンは吐き気を堪えるように口を手で塞ぎ堪える。

「今度こそ、ばいばい。」

せいぜい足掻きなさい。

それが未来を目指す人間のあるべき姿であり、

過去にしがみ付く吸血鬼との最大の違いだもの」

言い終えるとシオンの方へ顔を振り向くことなく、

手をひらひらと振りアルクエイドはその場から立ち去る。

残されたシオンはただ茫然とその後ろ姿を見送る事しかできず、

より深い夜の闇に消えゆくアルクエイドの姿が見えなくなるまでその後ろ姿を見つ

めていた。

ACT. 11 「会話」

「・・・知っている天井だ」

目が覚めたらよく知っている天井だった。

というか吸血鬼になった後に遠野家からあてがわれた自室だった。

太陽の光を直撃すると即死してしまうから基本閉めっぱなしな窓のせいで全体的に薄暗い部屋。

後、吸血鬼の跳躍力で天井にタッチする遊びでうっかり爪を立てて天井に出来た傷なんてここしかない。

翡翠さんや秋葉さんにバレていない間に修復しないとなあ・・・。

で、現実逃避はさて置き。

切り落とされた両腕はくつつけば治るので問題はない。

あるとすればまるで病院に運び込まれた恋人を心配するように、

しっかりとボクの右手を握ったまま寝ている遠野志貴がそこにいたことだ。

いや、さ。

心配してくれているのはありがたいよ。

だけど、それよりも志貴の方が体の具合を心配しなきゃいけないはず。

まあ、今は体調が良さそうなのは手から伝わる体温から分かるけど……ああああ、と
いうか正直、気恥ずかしい!!

「目が覚めたようね、弓塚さん。」

兄さんは寝てしまっていますけど相変わらず仲が宜しいようで」

「……あ、あははは」

何たつてこの部屋には志貴以外の人間も同席しているのだから。

志貴の傍に座る秋葉さんが嫉妬交じりの視線と共に嫌味を零して来た。

髪の色こそ変わっていないけど、部屋の温度が数度下がりつつある気がする!

……それと緊張感で胃が痛い。

「腕の方は……まあ、あのアーパー吸血鬼と同類ですから問題なさそうね。」

例の錬金術師と戦って怪我をしたと聞いて館の主人として様子を見に来ましたけど、
その必要はなかったようね」

ジト目でこちらを見つつ突き放すように秋葉さんはそう述べる。

事実とはいえ、怪我をした身でそう言われると結構キツイな……。

まあ、でも。

「早速秋葉様による言葉のストレートパンチに面食らっているようですけど、ご心配なく。」

これは素直じゃない秋葉様なりの感情表現ですから、何たって弓塚さんが両腕を落とされたと聞いて……」

「お、おだまり琥珀!」

「やーん! 暴力反対! パワハラだー!」

うん、こうなるのは分かっていた。

さっきまでの緊張感が遙か彼方にすっ飛んだ。

さよならシリアス時空、こんにはギャグ空間。

「ありがとう、秋葉さん。」

わざわざ心配してくれるなんて」

「で、ですからそんなつもりではありません!」

ああああ、弓塚さん! 貴女までそんな微笑ましい表情で私を見ないで!!」

秋葉さんは顔を茹で蛸のごとく顔を赤らめていた。

微笑ましい表情と共に感謝の言葉を述べただけでこれだ。

ああ、確かに琥珀さんの気持ちはわかる。

たしかにこうも素直な反応をされるとからかいたくなる。

「う、うんんっ……」

と、志貴が唸り声を漏らしてうつすらと目を開けている。

どうやら目が覚めたようだな。

「おはよう志貴。」

心配してくれてあり『さつき!!』・・っわあ!？」

んで、目が覚めるなり志貴はボクに抱き着いた。

な、なんで突然抱きついてくるんですか——この主人公は!

べ、別に嫌じゃないし、

むしろ病弱な体な割に意外と体格が良くて・・・。

じゃなくて! 恥ずかしい以上に鬼を背負った秋葉さんのオーラが怖い・・・。

あ、琥珀さん待って。

さり気なく距離を取って逃げようとしなide!

ぶち

突然そんな擬音が聞こえた気がした。

発生源は——言わずとも判る。

「う、うふふふふふ。」

私はずっと心配していたんですよ。

兄さんの部屋にいた錬金術師が暴れたと聞いて。

・・・本当に弓塚さんとは仲が宜しいようですね、に・い・さ・ん」

「あ、秋葉っ!？」

で、鬼妹の存在に気づいて青ざめる志貴。

唯でさえ低めな体温が更に低下しているのが分かった。

・・・いくら秋葉さんが怖いとはいえさらにきつく抱きしめないでほしいな。

そして蛇に睨まれたカエルのごとく固まった志貴の首根っこを掴んでボクから引きはがす。

「弓塚さん、少し兄さんをお借りしますわね」

「はい、どうぞ!」

煮るなり焼くなり好きにしてください!」

「ちよ、さつきー!」

うるさい!

こつちだつて命は惜しい身なんだ。

それに、これは志貴のためでもあるんだ。

少しくらい秋葉さんの気持ちに答えるのが兄としての務めだろ！

「ご協力感謝いたします、弓塚さん。」

兄さん、別に弓塚さんへの見舞いを悪く言うつもりはありません。

ただ少一しばかり頭に来ているので、今度という今度は兄さんに対して自重や自愛。

という単語の意味を懇切丁寧、かつ兄さんの何度言っても分からない頭に叩き込んで

差し上げますわ」

「ま、待って。」

待ってくれ秋葉！

首が締まる首が締まる!?!」

秋葉さんは志貴の首根っこを掴んだままズルズルと引きずって行く。

南無阿弥陀仏、骨は拾えたら拾ってあげるから安心して逝ってこい、志貴。

「ではご機嫌用、弓塚さん。」

いくら吸血鬼は治りが早いとはいええ、

完治するまでしつかり休んでいて下さいね」

そう秋葉さんが言うのと志貴の悲鳴をBGMに部屋を後にした。

残されたのは琥珀さんとボクだけで、

「……ふふ、鬼の居ぬ間に何とやら。」

これでしばらく秋葉様は志貴様に夢中ですから私はしばし自由の身、バンザーイ！」
主人が去つて向日葵のような笑顔と共に万歳する琥珀さんがいた。

志貴を鬼妹に差し出した罪悪感など一片もない態度である。

「はい、弓塚さん。」

ハイタッチ！イエーイ！」

「い、いえーい……」

何かよくわからないノリに浸っている琥珀さんに言われるがままハイタッチを交わす。

琥珀さんとの付き合いが未だ浅いこともあるけど、唐突にこうした事をしてくることに慣れないな。

いや、まあ。

【原作】の琥珀さんの過去を知るだけに、

琥珀さんの態度について疑つてしまうからかもしれないが……。

「うーん、何をしましょうかねー」。

やりたい事は大方済ませてますし何をしましょうかねー、

「この前開発した試験薬をこっそり弓塚さんに飲ませましょうかねー」

「本人の前でバイオテロ宣言は止めてくれませんか?!」

加えてこんな感じで「月姫」というより、

その後のスピノフ作品で登場する琥珀さんのような言動をしているから、余計に戸惑う、というかどう対応すれば良いか分からなくなるんだよなあ……。

「でしたら雑談でもして時間を潰しませんか？」

秋葉さんから安静しろ、と言われても暇でしかたがないし」

特に考えずにボクの口からそんな言葉が出た。

「おや、弓塚さんからの誘いですか。」

良いですねー以前から弓塚さんについてよく知りたいたって思っていたのですよ」

む、ボクの事を？

てつきり学校での志貴の様子やら、

夜間屋敷に侵入して来るアルクエイドさんとか、

同じく志貴目当てに侵入してくるシエル先輩とかに興味を抱くと思っていたけど。

「だって弓塚さん、

貴女は「初めから私の事を知っていた」じゃないですか。

そんな方が世の中に居るなんてとてもとても珍しいから私、気になります」

向日葵のような笑顔を浮かべたまま琥珀さんは言った。

「……………え？」

自分でも非常に間抜けな声と自覚できる程、間抜けな声が漏れた。思わず琥珀さんを凝視するが、変わらず笑みを浮かべている。

——しかし、視線はこちらを探るように鋭く、

口元は間抜けなボクをあざ笑っているのは気のせいだろうか？

いや、それよりもどうして琥珀さんからこんな事を言い出した！

「初めから私の事を知っていた」なんて言っているけど、そんな素振りを出していないはずだ！

「……………珍しいって、それは吸血鬼よりもかな？」

「ええ、それはもう。」

遠野に連なる様々な魔を見ましたけど、

これはとびつきり珍しく希少価値のある存在だと言えます」と、言いつつボクのすぐ傍に近寄る。

例え吸血鬼でなくても琥珀さんを力で押しつけることは可能だ。

しかし、それをしてしまえば、曖昧な表現になつてしまふが何かが後戻りできなくなるだろう。

かと言つて下手な反論や誤魔化しが通用するとは思えない。

何たつて今でこそ裏の世界の住民だが少し前まで太陽の世界に生きて来た自分と違
い、

眼前にいる割烹着姿の少女は頭の先から足先まで裏の世界の闇で生きて来た人間で
即座に見破られるだろう。

「驚いちゃいました。」

そんな存在がいる事と、

『驚く』という感情がまだ私にもあつたなんて」

「.....」

ゆえに黙つて琥珀さんの独白を聞くに徹している。

沈黙は肯定、とも捉えかねない行為であることは知りつつも。

「おまけに弓塚さんは私に対して好意的で、

魔にも関わらず酷い事をしないなんて困惑することばかりです」

そしてスツと身を乗り出し、

ボクの耳元で琥珀さんは囁いた。

「貴女は、それとも【貴方】はどこまで知っているの？」

耳元で囁かされた声は普段の『琥珀さん』ではなかった。例えるならばまるで「人形が人間のふりをして発声させた」様な代物であった。汗が止まらない。

心臓はけたたましく鼓動する。

緊張感で一秒が一時間のように感じてしまう。

どう答えるべきか？

いつぞ正直に「ウェブ小説のように自分は転生主人公です」と言うべきか？

しかし、そう言われて納得するなんて普通は有りえない。

どう答えれば――。

「なーんて、冗談です。」

ふふふ、弓塚さんを驚く姿を見たかっただけです」

そう言うなり琥珀さんがぱつとボクの傍から離れる。

表情も何時もの笑顔を浮かべる「琥珀さん」に戻っていた。

「……うん、とつても驚いたよ」

どこまで本気だったのか。

どのような意図なのか分からず、

そんな率直な感想を辛うじて口にできた。

「イエス、作戦大成功です！」

我奇襲に成功せりですトラトラトラ！」

ボクの回答を聞いた琥珀さんは大満足なのか、

良くわからない決めポーズを取り歓喜の声を挙げていた。

・・・なんだろう、この徒労感は。

先ほどまでのシリアスな空気はなんだったんだっ・・・!?

「さてと、何だかんだと時間が過ぎちゃいましたね。

弓塚さんをからかって楽しめましたし、とつても有意義でした。

そろそろ私は弓塚さん用の輸血パックをお持ちしますから、安静にしてください

ね。」

そう言うなりパタパタと足音を立てて琥珀さんは部屋を後にした。

「・・・本当に、どこまで本気だったんだ？」

足音が遙か遠くに消えて行ってから思わずこんな言葉が漏れる。

加えてなぜ琥珀さんがそんな事を言ってきたのか気になるが、今はまず休もう。

何たってまだ傷は完治していないのだから――。

ACT. 12 「雑話」

そして夜が再び来る。

三咲町の空気はここ最近流れる噂のせいで重い。

人通りは少なく、肌だけでなく内臓まで凍りついてしまいそうな冷気が流れる。

そんな夜の中。

ビルの屋上で黄金の髪を揺らす人物。

アルクエイド・ブリュンスタッドは街を一望しつつ呟いた。

「まあ、予想通りね。

タタリ本体が出てくるであろう場所は。

このままだと明日の夜には現れるでしょうね」

はるか彼方に見える建物。

三咲町の中で最も高いビルとなる予定の建物。

そこそこが今回の騒動の原因であるタタリが最後に現れる場所であるとアルクエイド

ドは見抜いた。

「・・・でさ、それにしても知ってる？」

あのビルの名前はね『シユライン』と言うの。

神殿なんて名前を持つているのだけど貴方はどう思うかしら？」

周囲に人影はいないはずだがアルクエイドは誰かがいることを前提に口を開いた。

「ふむ、そうだな。

この劇を組んだ脚本家は少しは気が利くではないか。

安直ではあるが観客を満足させる心意気という物を理解しているようだ」

背後で光の粒子が人の形を作ってその男は現れた。

アルクエイドと同じ黄金の髪、血のごとく赤い瞳を持つ男。

しかし、男はガイア側の吸血鬼にあらず。

そして今を生きている人間でもなく、失われた神話世界の人間。

すなわち、

「はあーあ。

まっさか英霊。

しかも人類最古の王様がいるなんて予想外よ。

・・・加えて受肉しているようだけど、真つ当な手段じゃないみたいね」

「くくく、見ずとも分かるのか。

我の名だけでなくあの泥も見抜くか。

よいぞよいぞ——流石は真祖の姫、ほめて遣わそう」

「ドもアリガトウゴザイマース」

英雄王ギルガメツシユ。

その名を頂く人間がこの場にいた。

「色々言いたいこととかあるけど、

貴方はこのタタリに携わる気はない、そうよね？」

「当然であろう。

王である我が何故役者として動かなくてはならない？

我は観客席にて雑種共が演ずる劇をゆるりと観賞するのみ」

「・・・そう、好きにすれば」

分かり切っていた回答を聞いたアルクエイドはそのまま立ち去ろうとする。

「ああ、だが面白い人間がいたな。

たしか名は・・・遠野志貴であったか。

奴の在り方も興味深いがまさかこの時代にあのような魔眼を持つとはな。

なかなか希少価値のある存在ゆえに、我の倉に眼だけを保管するのも良いかも・・・」

次に言葉を綴る前に濃密な殺意が場を圧した。

「志貴に手を出したら——殺すわよ」

これまで顔すら向けていなかったがこの時初めてアルクエイドは英雄王に振り向いた。

瞳は月のごとく爛々と輝いているが、視線はどこまでも冷たいものであった。

「ほう……」

それに英雄王は目を細めて呟く。

途端、濃厚な殺意をアルクエイドに浴びせる。

常人ならば発狂しても可笑しくない代物である。

「我と戯れたい、

と言うならば存分に戯れようではないか。

我として久々に体を動かすのも存外悪くはない」

英雄王の背後の空間が揺らぐ。

そして剣、槍、斧、など無数の宝具が現れ照準をアルクエイドへと向ける。

「――喧嘩を売ってきたのは貴方でしょ？だから私は全力で相手になってあげる」

「久しい。」

久しいなあ。

我に対してそのような言葉を述べるとは」

ここまで真正面から自分に対して挑戦してくる人物は本当に久しく、アルクエイドの啖呵に英雄王は喜色を隠さずそのままの感情を表に出す。

「余裕な態度だけど、

この距離なら貴方の喉元を切り裂くなんて簡単な事よ？」

対するアルクエイドには武器は己の身体のみ。

しかし、真祖の吸血鬼が繰り出す身体能力は圧倒的だ。

一呼吸で英雄王の懐に飛び込んでその喉を爪で引き裂くことは容易である。

そして何よりも空想具現化という真祖の吸血鬼にしかない能力もある。

「強がっているようだが、どうかな？」

見るからに一度殺された、いいや『壊された』せいで随分と弱まっているみたいだが

？」

「……………」

英雄王の指摘にアルクエイドは沈黙を保つ。

何せ遠野志貴に殺され、壊されたのは事実であるからだ。

そのまま睨み合いが続いていたが、

終わりを告げたのは英雄王の方からであつた。

「まあ、いいだろう。」

そこまで言う痴れ者はあの杯を巡る戦い以来だ。

普段ならば八つ裂きにしてもなお足らぬが、今宵の我は観客。

観劇が始まる前に役者に手を出すなど無粋な真似は控えるとしよう」

吸血鬼タタリで街全体が死街と化する瀬戸際を「観劇」と言い切つた英雄王。

加えて先にアルクエイドにとって逆鱗に触れてきたにも関わらず上から見下す態度を継続している。

「上から目線な態度。」

本当に腹が立つわね、この金ピカは」

そうアルクエイドは呆れ、

どこぞのツインテールと似たような感想を口に出す。

「当然であろう。」

時代は違えど雑種共が住まうこの星は我の庭ぞ」

「サーヴァントという『粹』でなければこの世界に現界できない今の状態でも？」

マスター……大方心臓にみよーな物を抱えている胡散臭い神父でしょうけど、よくまあ、そんなことが言えるわねえ」

その雑種がいなければここにいられない、

という皮肉も込めてアルクエイドが言葉を綴るが、

「は、違うな。」

今世の雑種に呼び出されたのではない、我が来てやったのだ！」

英雄王はこれ以上ないドヤ顔でそう宣言した。

「何、このポジティブな思考は？」

人間って色々面白いことは知りつつあるけど、

貴方ほど思考が吹っ飛んだ人は初めてよ……」

対するアルクエイドはあきらめ気味にぼやく。

「は、貴様が熱を入れているあの人間も、

我とは違う意味で面白い思考を持っているではないか」

「……否定はしないわ。」

でも金ピカの貴方に志貴の内面を口にされること自体が腹立つわね」

英雄王が遠野志貴の内面を口にする。

聞き手側は身に覚えがあるのか否定の言葉は出ない。

「怒るな、

これでも我は褒めているのだぞ。

この贗物しかおらぬ世界で我に価値が見出される数少ない雑種ゆえに」

そんな言葉を口にした後、

身をひるがえしてその場を後にする。

「さて、我も少し眠い。

今晚はここまでとしよう。

明日の夜に開催される観劇には期待しているぞ・・・」

そう言い終えると光の粒子と共に英雄王はその場から消えた。

「・・・・・・・・・・なんて身勝手なのかしら」

残されたアルクエイドは短い間ながらも会話を交わした相手に対してそう総括する。

何せ吸血鬼タタリがしようとしているのを観劇と表現した上で、自分は観客として見物する。

と言いつてしまう存在に対して好意的な印象など持ちようがない。

「まあ、いいわ。

邪魔だけはしてこないみたいだし・・・後は」

振り返った先にはタタリが現れるであろう高層ビルが変わらずある。
だが、吸血鬼特有の魔性の匂い、あるいは気配がより濃厚になりつつあり、
決着の日が近づいていることをアルクエイドは確信した。

ACT. 13 「胎動」

根源を目指す魔術師という人種は真理を探究するという点において科学者と同じである。

違うのは方向性が未来でなく過去であり、過去の再現を以て未踏の領域を目指すことにある。

しかし過去を目指すのがゆえに魔術は衰退することが決まっていた。

ならば一致団結してこの問題に対応しているかといえはなかった、できなかった。

魔術師といえども人間であり、探究より象牙の塔に籠り権力闘争を楽しむ。

ということは魔術師の貴族主義的な仕組みと合わさってもはや当たり前前の現象と化していた。

そんな中。

今から500年ほど前にある錬金術師が現れた。

男は天才錬金術師であった。

そして真面目で理想主義者であった。

だからこそ魔術協会における三大部門の頂点の1つにたどり着けた。
しかし男には悩みがあった。

どう計算しても人類滅亡という未来の予想を覆すことができなかった。

人間の平均寿命より先。

親、子、孫、と幾世代もの先の先の未来の予想であり、

人類滅亡より先に男が寿命で亡くなる方が先の話であるので自分には関係ない。

そう開き直る選択もできたが男は真面目で理想主義であった。

ゆえに男は諦めることを認めず考えて、考えて、考え続け——狂った。

魔法に挑むが敗退。

肉体は滅び霊子で漂う存在となり果てる。

しかしそれでも男の意思は存在し続け、いつ来るか奇跡の日まで待ち続けた。

その過程で大勢の人間が亡くなることも「些末な事象」と切って捨てつつ生き続けた。
だがそれも今日で終わる。

今宵こそ必ずや奇跡に届くと男、否々たりは確信していた。

何せこれまでの舞台を予想を上回る役者たちが揃いつつああったからだ。

役者が豪勢であればあるほど人々の噂は誇張され、々々りの術式はより強化される。
自身の能力の強化。

存在の強化ともいふべき行為は奇跡へ近づくと同意義である。

——ズエピアはアトラスの禁を破り外界で研究を重ね果てに吸血鬼となった。

結果エルトナムの権威は失墜しエルトナムの者は一生消えぬ罪を負わされた……。

そんな時、男の子孫が呟いた。

これに対して男は未だ自身と向き合わない彼女に対して嘲笑する。

すでにこの街の隅々まで把握しているのでこの場にいなくとも彼女の言葉を聞いた。

シオン・エルトナム・アトラシア。

彼女が障害になることは万が一にもないことは計算済みである。

哀れな舞台観客として、悲劇のヒロイン役として今宵にて命を落とすであろう。

——君は戦う前からワラキアに負けるつもりか？

シオンに付き添っていた青年、遠野志貴が言葉を口にする。

これに男は人の形として顕現していかないにもかかわらず心臓の鼓動が高ぶり感情の揺らぎが発生する。

そして一連の現象が徐々に人間らしい感情の揺らぎ、すなわち動揺という物であることを思い出す。

タタリとなって以来あり得ない事象に一瞬思考が停止。

すぐに再開するが表現しがたい感情に支配されかけ男は久方ぶりに苛立ちを覚える。やはり、脅威とみなすならこの男と弓塚さつき、という吸血鬼もどきに違いない。そう男は確信する。

異能を有し、才能に恵まれてはいるが2人とも魔術の「ま」を知っていても実力は素人同然。

しかし、幾度も幾重も何度も計算するたびに真祖の姫と共に最大の障害として立ちふさがれる結果がでる。

埋葬機関、代行者、錬金術師、鬼。

これらを差し置いて脅威として立ちふさがれる結果がでるのは『違和感』を覚える。

抑止力、という可能性も考えたがそれに相応しいのは――。

ほう、言峰め。

なかなか良い顔をするではないか。

たとえ幻であろうと貴様の人間らしい欲望の発露、実に甘美だ。

足止め役として出した第四次聖杯戦争におけるセイバーのマスターと対決しているのは冬木より来た代行者。

何故かマスターでもある代行者を手助けせず見物に徹しているサーヴァント、アーチャーが呟く。

——相応しいならこのサーヴァントであろう。

第四次聖杯戦争のサーヴァントが未だ現世に留まっております、

しかもこの三咲町へこのタイミングで来たのは抑止力の存在の後押しを証明する。

加えてサーヴァントとしての真名も「人類最古の王」であることはさらに抑止力の存在を肯定する。

だが、同時にいくら過去の人類史における英霊。

と言えどもサーヴァントは根本的には『魔術師の使い魔』という枠からはみ出た存在ではない。

加えてサーヴァントのマスターは代行者であるが魔術師としては大した存在ではない。

しかもサーヴァントはやる気がなく昼は町を散策し、今もなお何故かマスターに助力していない。

何を考え、何をする、そうした行動原理が不明確でありながら強い力を有した存在であるがやる気がないのは確かであり、

——たとえ人類最古の王であれども、

現象にすぎぬこの身を滅ぼすことは不可能であり、

何人たりともこの身を止めることは叶わぬ。

そうタタリはそう結論を下し、

意識を間もなくエレベーターから現れる子孫へと向けた。

しかしタタリは気づいていなかった。

いや、気づくはずがないと思ひ込んでいた。

視界に映っていたサーヴァント、

英雄王ギルガメッシュの赤い瞳はタタリを捉えており——。

「精々励めよ、雑種」

と呟いていたことを。

ACT. 14 「蹂躪」

シオンに襲われてまた寝込んで一晚。

街に漂う気配は不穏かつ不気味な空気をより一層濃く纏っている。

ネオン輝く繁華街も明かりは消え失せ、

オフィス街で働いていた人々は既に我が家へと帰宅済み。

と、まるで凶つたかのように人の気配が早々と街から消え失せている。

元々タタリが流す不穏な噂で人々が怯えていたこともあるが————人の気配が無さすぎる。

そのくせあの神殿の名を冠したビルを軸として妙に血生臭い空気と臭いが街全体に漂っている。

だから黒レンに叩き起こされた時から直ぐに悟った。

いよいよタタリが動き出したと。

タタリがどこにいるか調べなくとも『知っている』

そして志貴たちはどこへ行って戦っているかは『分かっている』

だから屋敷から飛び出し、公園を通り抜けてあのビルへと急いでいたのだが……。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

気配すらもなかったにも拘わらずいきなり目の前に現れた不審人物。

姿、形から誰であるかは察しはつくけど、

「おいおい、沈黙なんて酷いじゃないか？」

俺との仲だろ、怖い顔して何処へ行くんだい？」

「で、誰？」

お約束だから名前を聞こうか？」

音声から既に察したが改めて問いただす。

「吾は遠野志貴の面影、七夜志貴。」

吾は糸を巣と張る蜘蛛——。

ようこそ、この素晴らしき惨殺空間へ」

そうドヤ顔でそう宣言した。

この着崩した制服を纏った青年の名を知っている。

遠野志貴の裏、「七夜」の部分が出た偽物、七夜志貴なのだが……。

「うわ、うわ、うわぁ・・・・・・・・」

知ってたけど、知っていただけ！

三次元で聞いて、見て、言われると・・・ドン引きだよ！

『中二病乙WWW』なんて笑い飛ばす余裕なんてまるでなかったぜ！

これが自分の深層心理と知ったら本人は恥ずかしさのあまり憤死まったなしだよ！
これ以上ないドヤ顔なのが見ていて痛々しいし、

こーいうのが好きな白レンって・・・ま、まあ、好みは人それぞれだし。

「ハハハ・・・っ！

そんなに固くなるなよ、

俺とさつきで仲良く本音をぶつけ合って愛し合うだけだろ？」

「愛は愛でも殺し『愛』でしょ？」

「よく分かっているじゃないか！

眠っていた俺が偽の肉の檻を得て起きたことは、殺せってことだ。

さあ、殺し合おう！同級生同士で殺し合いをするなんてなかなかそるじやないか
！」

「あー、はいはいはい、知ってたし・・・」

型月ではもはやお約束となった概念「殺し愛」を正面からぶつけられ、

表情がチベットスナギツネみたく何とも言えない虚無の感情が出ていることは自分
でもよく分かった。

それは兎も角。

ここでこの七夜を倒さない限り先へと行けないことは確かである。
で、あるならやることは一つ。

最初はグー、じゃーんーけーん……。

「死ね——！」

公園の砂利を七夜へ向けて巻き上げるように蹴飛ばす。

吸血鬼の馬鹿力で飛ばされた砂利はさながら散弾銃から放たれた散弾のごとく高速かつ広範囲で散らばる。

常人ならばそのまま全身穴だらけ。

いや、潰れたトマトか挽肉になり「見せられないよ！」な状態になること待ったなしである。

「成程成程。」

点ではなく面で潰しに来たか、怖い怖い」

しかし相手はあの七夜。

この程度避けることなど彼にとっては造作ない。

「いい挨拶じゃないか、えええ？」

お陰様で腕を一本持つていかれたじゃないか」

とはいえ流石に全てを避け切ることはできなかつたようで、土煙から現れた時、左腕側の肘から先が無くなっていた。

「・・・だからと言って、

そつちは服だけを切り裂くとかどういう見だ！

このエロガツパ！絶倫眼鏡！すけこまし！天狼星の代役！」

で、こつちも腕の一本くらい取られると思っていたけど、

何故か服だけ切り裂かれて上半身ブラジャー姿であつた・・・痴女だよこれ！

「仕方ないだろ？」

「さつきは俺が腕を切つた瞬間のカウンターを狙っていただろ？」

「・・・否定できない」

真正面から戦えば必ず負ける。

よつて初手は面で制圧、それを突破してきたら相打ち覚悟のカウンターをする。

だが、この程度の考えなど戦闘民族な七夜には通用しなかつた。

「それにしては————欲情するなあ」

などと言いつつナイフを舐める事案案件な変態が目の前にいた。

「秋葉さんに言いつけるぞ、ここの変態」

ボクは元男なので七夜の視線や仕草からして、

本気なのが手に取るように分かる、分かりたくなかったけど。

「ああ、それなら問題ない。

むしろ互いに殺し合う都合が出来たと言える」

「同級生がラツキースケべしたので妹に言いつけると言つたが、妹と殺し合いする良い切っ掛け」と返された件について。

「……おつかしーなー、ここは「シールイ」の世界線か？」

「秋葉とオレは兄妹。

だから殺さなきゃ本当の関係じゃない。

そして秋葉なら確実にオレを殺しに来る！

一切の躊躇も、遠慮も、隠し事もしない最高の妹だ！」

そして「全力で殺しに来るであろう妹」を称賛する兄がいた。

というか七夜であった……薩摩のぼっけももんもビックリな倫理観だよ……。

しかも「主人公を殺すほど愛している」型月ヒロインの一人である秋葉さんなら、と確信できるのが余計に嫌だ……。

これが漫画とかアニメ越して一読者一ファンとして知るだけなら登場人物たちの個性に胸をときめかせたであろう。

が、ここは残念残酷無常無惨な現実。

当事者として関わっているボクとしてはもう頭が痛いどころでなく、帰って寝たい気分だ……。

「もつとも秋葉はさつきと違って服を剥いても面白くない体だがな」

言わなくてもよい一言を言ってしまう。

いや、言つてしまい逝つてしまうのは志貴とまったく同じである。

遠野であろうと七夜であろうと何だかんだで根は同じ「志貴」なのを知りえたのは少しホツとする。

とはいえ、この後発生するであろう残酷無惨残酷劇場の開幕についてはもう自業自得と切り捨てるしかない。

何せ今夜がタタリとの決戦だと気づいてボクは「屋敷の主と共に飛び出た」のだから……。

「ぎ、ぎやああああ、あああああああ!!!?」

突然七夜が絶叫する。

血とあらゆる体液が混ざった嫌な臭いが噴き出る。

七夜と言えども「全身から気化した体液が蒸気となって穴と言う穴から噴き出す」

という、ファアリスの雄牛のごとき責め苦に晒されては流石に痛みを表現するようだ。

屋敷を一緒に出る前に、

ボクが先行してタタリが使役する偽物と対峙し、

そつちはここぞというタイミングで介入すると話したけど・・・本当に容赦ない。

そしてこれを躊躇なくやつてのける人物をボクは知っている。

いや、改めて見ると本当よく生き残つたなあ、ボク・・・。

何の魔術的前兆もなく強制的に対象の体温を略奪することができる人物なんて一人だけしかない。

「あらあらあらあら、ミディウム程度で悲鳴を挙げるなんて情けないですわ——
兄さん」

いや、絶対初手からウエルダンしてきたでしょうーに。

と、突っ込みを入れないトコだが、空気が読める平均的日本人兼吸血鬼なボクは黙つておく。

何せ今の秋葉さんはかつてボクと対峙した時より絶好調———というか、ぶつ

ちゃけコワイ!?

「弓塚さん」

「は、はい!?!」

秋葉さんの呼びかけに対して思わず直立不動の体勢を取る。

「七夜については私にまかせてください。」

ああ、弓塚さんが心配なさらずとも大丈夫です、

兄さんは逃げ足が速いのはよく知っているので、先に足腰を念入りに潰しました…」
「逃げられないように兄の足腰を潰した」とのたまう妹がいた、鬼だ、鬼だよこれ。

本当、型月ヒロイン道は茨道どころか覚悟完了、修羅道上等なのが多すぎい…。

「じゃあ、お言葉に甘えて!!」

ビシッと挨拶を決めてその場から即座に離脱する。

ボクの気持ちは一分一秒でもこの場から離れることしか頭にない。

一瞬、七夜と眼が合って「タスケテ」なんて言ってたような気がするが多分気のせいだ、気のせい。

メイビー。

ACT. 15 「昔話」

「志貴、貴方にとって弓塚さつきはどのような存在ですか？」

「いよいよタタリと対峙する道中、シオンは突然そう切り出した。

視線は先ほど俺に自分とタタリの関わりを語った時と違い、刺々しい。

「どのような存在って……」

シオンにしては抽象的な問いかけに俺は戸惑った。

おまけに刺々しいけど気のせいかなシオンはどこかで怯え、

今までにない未知を知って感情の整理ができていない、ような……。

ここは、そうだな……緊張をほぐすために——。

- 1、遠野家の新人メイドだな、うん！
- 2、ただの友人だよ。
- 3、今のところ、全然わかんないのよねー。アハハハ！
- 4、強敵と書いて友と呼ぶ！

「遠野家の新人メイドだな、うん！」

「……………はい？」

渾身のキメ顔でそう言った。

計算外の回答を聞いてシオンは混乱している。

「こうかはばつぐんだ！」

「……だが、これは冗談ではなく本当の話であり、一応理由もある。

原因は吸血鬼になって太陽の下を歩けず、人としての日常生活を過ごせなくなったせいだ。

とてもじゃないが自宅に帰れないし、万が一の事を考えると遠野の屋敷にいた方が対応できる。

だから現在は「遠野家で保護、養われている魔」という立ち位置に落ち着き、

普段は屋敷で琥珀さん、翡翠と一緒に働く夜間限定の新人メイドとして働く日々を送っている。

なお表向きは、

「行方不明になった弓塚さつきは発見されるも、

家庭の事情で学校は一度休学し、遠野の屋敷にて住込みで働きつつ、夜間部へ編入した」

という形で必要書類の提出や暗示、アリバイ工作をしている最中だ。もう少しすれば夜間だが復学も夢ではない。

それで新人メイドとして働くさつきについて遠野家の反応だが、

まず秋葉は・・・ロア、もとい四季さえ殺せばさつきが吸血鬼ならず済んだから責任を感じている。

だけど、同じ「魔性」で表の世界には出せない悩みを抱えているから、秋葉とさつきの仲は悪くない。

一時期は互いに殺し合った仲だけど、それはそれで仕方がなかった事だと納得している。

翡翠は部外者が来たことで当初は警戒していたけど、

朝に俺を起こしに行く仕事を奪わないし、力仕事で頼りになる存在と認識してくれるようになった。

それと意外だけど翡翠がメイドとしての礼儀作法をさつきに教育する役割を自分から志願した。

言い出した時は俺や秋葉だけでなく、琥珀さんまで見たことがない顔で驚いたな、あれが素なのか？

琥珀さんは「し〇じろうゲットだぜ！」とさつきに対して好意的である。

さつきの方も『面白い人』と好意を抱いているけど時々距離の取り方を図っている気がする。

理由は分からないけど、それで仲が悪いところなんてないし、ゲームとか一緒によく遊んでいる。

それにしても同級生で中学以来の女友人が自宅でメイドさんとして働いている。

なんてシチュエーション、琥珀さんが『エッチなゲームみたいですね、志貴さん！』なんて煽った通りである。

制服や私服姿には見慣れていたけど、翡翠と同じメイド服姿はなんだか新鮮だし、仕事モードの時は翡翠とよく似た音色で『志貴様』と言われるからドキドキする。

基本活動時間は夜間だけど、

夜明けの直射日光対策に白の手袋とフードを装備してる上に、

夜にシエル先輩、アルクエイドと活動する時もあるから靴は頑丈な編み上げブーツ。などなど、と露出度がかかなり低いから翡翠より清楚感が1割程増している。

しかもメイド服を着用している時の髪型は、俺はわりと好きだけど最近みかけないポニーテール！

館の主人として、友人として渾身丁寧な土下座を以てお願いしたらさつきはドン引きしたな。

「だけど髪が伸びてたからポニーテールにしてくれたし、最後は写真撮影まで同意してくれた。」

メイド服！同級生！ポニーテール！

今、俺は声を大にして言いたい、性癖のバーゲンセールや！

答えは得た。

大丈夫だよ、先生。

俺もこれから頑張つて——。

「志、貴」

むらさきいろの、おにがいた。

めらめらと、ほのおをまとつている。

「怒つてないので、真面目に、考えた上で、答えて下さいね、ね？」

シオンが優しく微笑む。

うん、こうしてじっくり見るとなかなかの美人さんだ。

だけど米神に青筋を浮かべていなければ、

それと頭部に拳銃を押し付けられてなければ、よかつたんだけどな——。……。

「はははははは、

ごめん、ごめんシオン。

ちよつと緊張を解そうと思った冗談だよ、冗談」

「ほう、確かに緊張は解れましたが、

私の中で怒りという名の感情が上昇しているのを報告します」

「……………おうう、ゴット。どうやらお気に召さないようだ。

「そもそも——私は一度弓塚さつきに対して殺意を以て攻撃した。

弓塚さつきは貴方にとって大切な人間では？にも拘わらず、

何故貴方は私と共にタタリの討伐に同行しているのですか？理解できない」

「……………どうやら、さつきだけでなく、

俺もシオンからすれば理解できない存在だったらしい。

だけど、安心する。

シオンの悩みはこの程度の話だったのだから。

「や、シオン。

それを言い出したら俺はアルクエイドを17分割したし、

シエル先輩は対吸血鬼装備でさつきを殺そうとしたし、

秋葉なんかは全身から体温を奪って殺そうとしたりと、

両腕を切り落としたシオンよりもっと本気で、確実にさつきを殺しに来たぞ」

今は遊びに行ったり、デートするような関係だけど。

出会ったきっかけは常に殺し合いだ。

シエル先輩はさつきを吸血鬼として討伐しようとした。

さつきはシエル先輩の足をフライドチキンの感覚で食べた。

秋葉はさつきを即身仏にするつもりで殺そうとした。

俺は、たとえばアルクエイドを一度バラバラ死体にした。

それでいて、今は互いを信頼、信用している。

因果関係を思い返せば色々な意味で無茶苦茶な関係である。

俺たちの人物関係を『殺し愛な関係』とボヤいたさつきの理屈も領ける。

「………すみません、知れば知るほど意味が分かりません」

シオンが頭痛に堪えるように頭を抱えた。

まるで深淵でも覗き込んだみたいだ。

「もう、見ました。ええ、見ましたとも。」

自分の在り方、矛盾点をよもや弓塚さつきを介して知り、

知らない方が幸せだった事実、厄介な事実を知ることになるとは……本当に」

ハア、とため息をシオンが吐く。

「え、そんなに凄いのか？ さつきって？」

俺なんかよりも遥かに頭が良いシオンの口から、

よもやさつきが厄介な存在と評価するなんて予想外である。

魔女や代行者、魔術師、吸血鬼が蔓延るこの街のヒエラルキー的にまちがいなく最下位だと言うのに。

「規格外筆頭の貴方が言う台詞ですか！

第一・・・話がそれましたね、もう一度質問します。

志貴、貴方から見て弓塚さつきはどのような存在ですか？」
理性を伴った鋭利な視線でシオンが問う。

「別に、さつきは今でこそ吸血鬼、死徒だけど、

俺からすれば中学からの友人、腐れ縁な仲に変わらないけど・・・。

うん、俺は壊れた存在でお互い「普通」じゃなかったから、気づいたら一緒にいた感じかな？」

「壊れた存在・・・？」

我々魔術師の方がよっぽど壊れている。

と、言いたげで疑問を抱いていそうなシオンに対し、

目の前の相手に対してではなく、自分自身へ自分を語るように語る。

幼少期、俺は俺のルーツ。

七夜という名、それと四季とあの事件を忘却した事。

そして臨死体験をした挙げ句この「眼」を手にいれた事。

「先生」と出会つて、生き方を覚えた事。

しかも俺には本当の家族、血縁上の父親母親を知らない事。

まったく記憶にないし挙げ句、一度遠野の家から追い出された事。

分家の有馬の家で育つた事。

そして再度遠野家で暮らすことになつた事。

その全てをシオンに語つた上で綴る。

「そんな感じで俺は世間一般人の人とはあり方が少し特殊なんだ。

俺は死を理解しすぎているし、悟り過ぎている、壊れたヤツなんだよ」

しかも俺は人より体が弱い、脆い。

それを悪意を以て、または善意で以て指摘され、劣等感を覚えた事だつてある。

それに「眼」を手にいれてからは信じている世界はこんなに脆く。

容易く死ぬことを理解してしまつた。

だから俺は達観していた、俺自身を。

俺は傍観していた、この世界を。

そんな中、俺は同類である乾有彦と出会つた。

同じ壊れた者同士、アイツがいなかったら遠野志貴はかけがえのない幼年期を無駄に

した筈だ。

さらに中学に上がった時。

似たようなお仲間ともう1人巡り合えた。

「さつきは俺と同類、ああ見えて似た者同士なんだ。

今でこそ、自分の立ち位置や振る舞い方に妥協を見出したけど、

出会った当時のさつきは、心と肉体に折り合いがつかなくて苦労していたんだ」

中学時代、不機嫌そうにしていた彼女の顔はよく覚えている。

漏れ聞こえていた小学校時代の武勇伝やら迷勇伝で名前だけは知っていた。

女の子だけど男だと主張している変な奴がいる、という噂だけは耳にしていた。

そして、子供とは善悪の区別が未完成で、物語に出てくる妖精みたいな存在だ。

感情の制御ができていないから簡単に喧嘩になるし、「異物」に対して悪意なく暴力を

振るう。

だから苛めがあったし、さつきは苛めた相手に対しては割と同じ暴力で対応したよう
だ。

それでいて苛めの証拠をガツチリ押さえて裁判沙汰を目論んだのだ、

何というか・・・可愛い顔をしていて、小学生らしからぬ可愛げのない話ばかり聞こ

えていた。

「……魂と肉体の不一致、もしくは——」

「シオン？」

ボソツとシオンが呟いた。

「いえ、志貴。」

話を続けてください。

貴方が語る貴方自身の在り方。

それと弓塚さつきの人物像はとても興味深い、続けて下さい」

「うん、分かった続けよう」

シオンに催促されたので語りを再開する。

中学時代。

相変わらず体が弱い俺はよく保健室でお世話になった。

酷い時は自力で保健室へ行けないからそんな時はクラスの保健委員が付添人として、

保健室まで案内する事になっていけど——その担当が弓塚さつきだった。

『ふうん……三次元だとかこんな感じなんだ、遠野君は』

始めて会話した内容はたしかこんな感じだった。

失礼、というよりも不思議な物言いだった。

純粹な好奇心、そんな気がした。

『そういう弓塚さんだって、同じ三次元じゃないか』

『ボクは異次元からの来訪者なんだよ』

意味不明なやり取りだった。

まだ親しくなかったが一人称がボクと言い、噂通りの変人だと思った。

男子とは喧嘩し、女子とは話が合わず孤立。

その癖、しっかりと勉強していたから成績は上位をキープしてた自称心は男な問題児。だけど、小学生以来。

誰もが臨死体験を得て纏った俺の「死」の気配に怯え、

隣の席に座るのを嫌がられる中、彼女は平気な顔をしていた。

『ほら、手を出して。』

あるいはボクの肩に手を添えるんだ。

どうせ自分で歩くのも辛い、違うか?』

『うん、そうだけど……。』

弓塚さんは良いの? 噂になるよ?。

それに俺、遠野の家だけど今は有馬の家にいるんだよ?』

今でこそ馬鹿みたいな話だと言えるが、

中学校では男女が触れただけで付き合っているだの揶揄された。

加えて遠野家と言えば表向きは財閥の名士として三咲町では有名な家だ。

そこから表向き長男にも関わらず放り出された『訳あり』な俺と好んで関わろうとする同級生は稀だった。

『噂の伝播速度は音速並、

プライバシーなんて基本ない存在、地方あるあるだな。

そもそも、本当の意味で『訳あり』なら遠野君は今頃『有馬君』と呼ばれていたはずなのに、

未だ『遠野君』とボクから呼ばれている辺り、我々子供がそこまで心配する話じゃないと思うけどね?』

さつきはそう言うのと鼻で笑った。

思い返せばさつきは年齢と知性が一致していない頭の良さがあつた気がする。

うん、そうだ、シオンと話している内に思い出して来た。

さらに、さつきは言ったんだ。

『それに、ここで遠野君に胡麻を擦っておけば、

将来の就職的に有利になるだろうしね、源氏バンザイ!

遠野グループバンザイ! ビバ、親方遠野グループ! なんちやって・・・』

あははは、これには思わず嘖き出したな。

普通は玉の輿狙いだろ！と突っ込みそうになったよ。

それで俺は確信した。

弓塚さつきは俺や乾有彦と同じく「普通」じゃない仲間なんだと。

『変わっているね、弓塚さんは。』

いや、故障しているね、弓塚さんは』

『割と笑顔でキツイ事言うね、君。』

しかし、故障、故障かあ・・・まつ、そうかもね今後とも、ヨロシク』

それが俺と弓塚さつきの出会いだった。

「と、まあ。

そんな感じで有彦と3人でつるんできたんだ。

俺が言うのも何だけど・・・一般人の生活なんて、その・・・。

シオンみたいな頭が良い人間が聞いても面白い話じゃなかったと思うぞ？」

「そんな事はありません。

志貴の昔話を聞いて私は優越感を得てますし、

主観を介して語られる弓塚さつきの人物像はデータ収集の一環として貴重です」

ドヤ顔でシオンは胸を張った。

何で俺の昔話を聞けて優越感を得ているのか謎だけど、

悲壮な覚悟を抱いていたシオンの緊張が解れているので、それで良いか。

でも「データ収集の一環」と言うあたり、シオンらしくてうん、好きだな。

「……っ、ゴホン！」

私の計算によればまだ時間があります、続けて下さい」

「おいおい、大丈夫なのか？」

時間はある、と断言したけど。

シオンは何だか途中から目的と手段が逆転してしまうような、

そんな頭の良さがある気がするから——少し、ほんのちよつと不安だ。

「問・題・あ・り・ま・せ・ん！」

後はあのビルの中に入れていいだけではないですか！

何ですか？戦う前に私の緊張感をほぐすつもりではなかったのですか!？」

顔を赤らめつつ、目の前にそびえ立つビル。

「シユライン」を指さしながらシオンが吠えた。

「はいはい、分かりましたよ」

どう見てもムキになっている。

なんて事は口にせず、俺は要望を了承し、

かまって委員長気質のシオンの期待に応じるべく、

戦う前の短い時間だけど、俺は俺の物語と昔話をシオンに語り続けた。

令月余話

乾有彦ノ章

遠野志貴はオレと同類の「壊れた」奴だが、

アイツの壊れっぷりはそれ以上の筋金入りだ。

「命」の実感なんて羽毛以下の重みしかなく、死体が動いているような奴だ。

今はマシになったけど、大昔のガギの頃なんざ「死」の気配マシマシのヤベー空気を纏っていた。

どうしてそうなったかなんて分かんねーが、

確かに言えることはアイツは昔から体が極端に弱かった。

小学生のガギの頃なんて軽く運動しただけでも救急車で運ばれた時もあったくらいだ。

思えばいわゆる日常を過ごすだけでもアイツにとっては多分、命懸けだった。

常に死ぬかもしれない可能性が日常生活に潜んでいる・・・となれば、まあ「壊れて」当然だな。

で、そんな奴の一番ダチがこの乾有彦様であり、

オレも色々あつて同じく「壊れた」奴だけど、幸いと言うべきか身体は健康そのもの。お陰様で今日まで日々好きな事をしたり、愛を囁いたりと自由気ままなナンパ人生を謳歌していけている。

だが、どうも最近風向きが変わってきたようだ。

ナンパは失敗続きで、上手く行っていないし、悪い運ばつか引き寄せている。

対してダチの方は本家とやら戻ってから急に華やかになりやがった。

枯れ木も山の賑わい、どころかここ最近満開の桜が咲き誇つてやがる！

しかも、しかもだ——。

「弓塚、お前、マジで遠野のところでメイドしてたんだな……」

「……………」

メイドがいた。

弓塚さつきがメイドをしていた。

久々だけ何だが以前より女性の色気が増して美人になっていた。

いや、元々顔立ちには可愛い系だし、黙っていれば上玉だし、ビツクリだぜ。

現代の吸血鬼騒動とか言われている殺人事件で一時期行方不明になり、

無事保護されてるも、家庭の事情で遠野の屋敷で働くようになったと聞いたけど

さ……。

それよりも髪型が変わっていた、ポニーテールだ！

オレはストレートの方が結構好きだけど、メイド服とセットなポニーテールも悪くないなっ！

安直な「萌え〜」なメイド服ではなく、実用的かつ機能美と装飾美のバランスが取れているのが良い！

メイド服！同級生！ポニーテール・・・そしてボクっ娘！

今、オレは声を大にして言いたい、性癖のハッピーセットや！

って・・・落ち着け、オレ。

思考が馬鹿をしている志貴レベルに堕ちている。

文章で状況を纏めて落ち着くんだ・・・よしっ！

『同級生にして中学生からの腐れ縁である弓塚さつきが親友である遠野志貴の家でメイドをしていた』

・・・やべー、文章に変換するとますます意味が分かんなくなる。

常識とか良識に喧嘩を売り過ぎだろ、現実にあっちゃ駄目な奴だろ？

エロいゲームの世界だろ？18禁設定だろ？

なんでさ♪なんでさ♪なんでさ♪なんでさ♪

いや、なんでさ♪って何だよ。

嗚呼、ビツクリしすぎて脳みその理解が追い付いていない。

つーか、よもやオカルトよりも怖い現実がまさかあるなんて……。
くっそ、これが深淵って奴か。

だとしたら聞かなきゃならない事が一つあるな——。

「その。なんだ、えつと……。」

『志貴様』って事はそういうプレイなのか？

もしかして、まさか、もう既に調教済みなのか！夜の御奉仕的な——!!!

「んなわけあるか——!!!?」

「ちよ、おわあああああ!!!」

胸元を掴まれたけど……足が地面から浮いているううう!!

いくら女子の中でも体力がある方だとはいえ、ここまでの馬鹿力はなかったはずだ！

しかも、オレが足をバタつかせても弓塚の方はまったく影響を受けていない、どんな筋力してんだよ!?

「あ……ああああ——!……ごめん!大丈夫?」

顔を青くした弓塚がオレを慌てて下ろす。

「ゆ、弓塚——」

痛くはなかったけど、腰が抜けたぞ。

という言葉をおうとしたが弓塚の顔を見て撤回する。

——なんだって、そんな泣きそうな顔をしてんだよ、オイ？

「おいおい、服が伸びちまつたじゃないかよ、わははは！」

「……………」

弓塚は驚いた顔でこつちを見ている。

だけど、まだ心配そうに、怯えるようにオレを見ていた。

「心配すんなって、

オレは不良だけど筋を通す良い不良で、

弓塚がどんな事になってもダチだし、嫌う事なんてないぜ」

「……………あははは！」

『良』の字に否定の『不』を書き足した『不良』

だから良い不良なんて矛盾の極みじゃん、有彦！

でも、うん、有彦のそーい真っ直ぐな所、助かる……ありがとう」

オレの言葉を聞いた弓塚はひとしきり笑ってから、微笑んだ。

色気を帯びたその仕草にオレは一瞬、表現し難い違和感を覚えた。

「有彦？」

「いや、弓塚。」

なんでもねー。

へへへ、どーいたしまして」

己の馬鹿さ加減にオレは笑う。

あほ臭い、色気は色気でも、女性ではなく【美しい獣の色気】

なんて詩的でオカルトな言葉、どうしてオレの中で浮かんできたんだろう？

「2人ともじゃれ合いはさて置き、

久々に3人で集まれたんだから乾杯しよつか？」

「お、そうだなー。そうしようぜ！」

気を取り直してメイドっちゃんのコーヒーを飲もうか！」

「メイドっちゃん、って何やねん」という小言を受けつつ、

あの忌々しい連続猟奇殺人事件以来、ようやく揃った3人で久方ぶりの祝杯を挙げ

た。

「——うめえな！喫茶店の味じゃん！」

銅製のマグカップには氷が浮かんだアイス珈琲。

対してオレが知る珈琲とは「コーヒー」でしかない。

ファミレスとか、缶とか、インスタントの物しか知らない。

だから断言してもいい。

これは間違いなく喫茶店に出てくる本当に美味しい珈琲、って奴だ。

「早朝屋敷でボクが焙煎したばかりの、良い珈琲豆だからね、

紅茶は琥珀さん、翡翠さんには及ばないけど珈琲なら何とか勝負できるよ」

「屋敷で焙煎って……流石金持ち。

というか弓塚が焙煎したのか、すげえ！

そーいや、弓塚は小学生の頃から珈琲飲めたと云ってたな」

弓塚は昔から珈琲が飲めるし、好んで飲んで、自分で作っていた。

小遣いを貯めては珈琲の器具を揃え、わざわざ豆を買いに行っていた。

なんというか趣味嗜好、それと思考の全てが他の誰よりも一歩どころか三步以上進ん

でいた気がする。

「焙煎機材は今亡き親父のコレクション。」

……もとい、ガラクタとして放置してた奴をさつきが再利用したんだ。

顔なんて録に覚えてないけど、今こうして美味しい珈琲が飲めるんだから親父殿には

感謝だな」

わざとらしく黙祷する志貴。

ガキの頃から人畜無害な顔をして結構な毒舌を吐く奴である。

「ん、でも金網で焙煎するのと仕組みが違うし、

秋葉様・・・秋葉さんからは味についてアレコレ小言を言われているからまだまだ精進しないと」

「あははは、兄貴の俺が言うのもあれだけど、

秋葉は根っこからの女王様気質で言い方がキツイからな。

でも、なんだかんだで琥珀さん、翡翠も含めて皆で珈琲を美味しく飲んでるし」

2人にしか実感できない内輪の話。

だけど、弓塚がこの屋敷で居場所を作れたのと、穏やかに過ごしている事だけは理解できた。

「上手くやっているから安心したぜ。

でも弓塚はスゲーよな、住込みでメイドとして働いているだろ？

その上でもうすぐ夜間高校に通うなんてオレ、本気で尊敬するな」

弓塚は不良街道を爆走するオレと違って、

根っこの部分は勉強を頑張れるし、家族だつてちゃんとある。

にも拘らず何で「お〇ん」の真似事をする羽目になったんだが・・・本当、カミサマつて奴は。

「お褒めの言葉、感謝乙。

でも、まさかボクがメイドするなんて想像できなかつたよ。

描いていた未来なんて精々、高卒後地方公務員で就職。

あるいは大学進学のために上京して就職する程度だったし」

「就職かあ……あー、ヤダヤダ。

未来永劫、気楽な学生身分にいたいな——……」

もはや呪い、呪詛の概念と化した言霊だ。

しかも世の中に流れる評判によれば大卒でも就職は厳しいらしく、

今が楽しければ良い、そんなオレとは正反対な概念なんて耳にするだけでも鬱になり

そうだ。

「ふふん、俺には関係のない話だね。

なんだってこう見えても遠野財閥の長男だしな」

「ああん！働かずに食う飯はうまいか？

最近身の回りが華やかになってきているからって調子に乗るんじゃないか！」

ドヤ顔を浮かべるアイツに嘖みつく。

「もちろん美味しいさ！

毎朝翡翠が起こしに来てくれるし、

毎朝琥珀さんが美味しいご飯を作ってくれる！

いやー、御曹司として生まれて本当によかった、働かずに食う飯はうまいなあ！」

「くっそ！ブルジョワめ！滅びろ！滅びてしまえ！」

忘れがちだが、コイツは金持ちな家系生まれだ。

成金とかではなく、地元三咲町では代々名士な家柄だ。

だから不良なオレと志貴がつるむの件について昔は「忠告」してきた大人がいた。

ま、単にオレの反骨精神を滾らせただけに終わったけどな！

「あははははは!!」

そんな野郎2人の漫才を見ていた弓塚が心底おかしそうに笑い声をあげている。

女性的、というより男性的な笑い方で、どこも変わっていない事が確認できて安心する。

「本当にこの関係は良いね、うん。」

・・・やっと日常に戻った、帰ってこれたと実感できたよ」

笑いながら、安堵するように弓塚が呟いた。

「おう、だったら今日はトコトン馬鹿話しよーぜ！」

何つつたて、麗しき学生時代なんて一瞬に過ぎちまう！一秒一瞬が愛しいぜ！」

オレの言葉にどうしてか弓塚は虚をつかれた顔を浮かべ、

「——永遠なんて少しも欲しくはない、だったかな？」

そんな言葉をフレーズに乗せて口にした。

ここではないどこか遠く、懐かしそうに。

二度と戻れない場所を見るかのように、呟いた。

「——さつき」

「あつ・・・ごめん、変な雰囲気にしちゃって！」

じゃあ、話そう！今日はもう仕事がないし、とことん話そう！」

志貴の催促に弓塚が我に返る。

オレはなんとなく2人は共通の秘密を抱えているのを察した。

たぶん、あの連続殺人事件がきっかけだ。

きつと、オレが知らぬ間に何かがあつたんだろう。

おおかた、オレには関われない何かを経験したんだろう。

恐らく、オレには助ける手段もなかったのだろう。

「おうよ、望む所だけ、さつきちゃん！」

ま、それでもオレはオレだ。

オレが2人の友人であることに変わりないし、

2人もオレがそうであり続ける事を望んでいるに違いない。

オレは乾有彦。

遠野志貴と弓塚さつきの親友。

それ以上でもそれ以下の何者でない。
それだけさ。